

女性改造

五月號

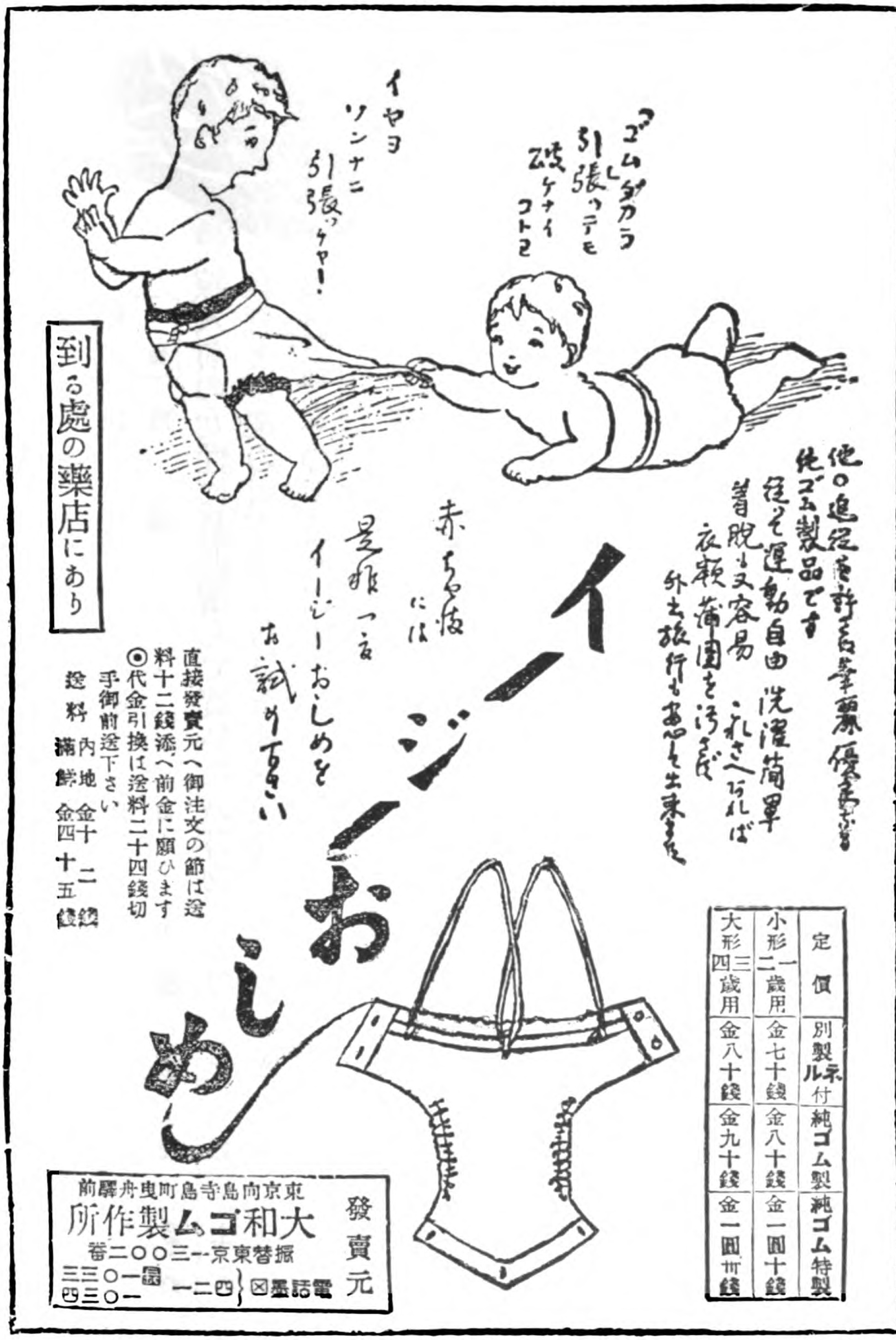
十一年九月三十日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
十三年五月一日發行　大正十三年四月十三日印刷納本


氣分よく映画を
御鑑賞遊ばすには
是非東キネへ
東キネへ
増築落成
東洋キネマ
經營者 徳川夢聲



女性改造五月號目次


ビクトリヤ
月經帶
純良ゴム製
罐容器附
屋外にても
家庭にても
懸念なき
心ゆくばかりの
活動は
ビクトリヤの御使用によりて
安全に保証されます
◎定價
一號品（純ゴム製）丸罐入五十五錢
二號品（ネル腰衣付）角罐入七十錢
◎特長
柔軟ゴム製、伸縮自在
洗濯容易、耐久力有
使用簡便、携帶便
直接發賣元へ御注文の節は送料十二錢添へ前金に願ひます◎代金引換は送料二十四錢切手御前送下さい
到る處の藥店小間物店
發賣元
東京向島寺島町曳舟驛前
大和ゴム製作所
振替東京一三〇〇二番
電話墨図
局一〇三三番
一〇三四番
四二一番


イヤヨ ソンナニ 引張ッチヤー!
ゴムダカラ 引張ッテモ 破ケナイ コトヨ
到る處の藥店にあり
他の追従を許さぬ華麗優美な
純ゴム製品です
従って運動自由 洗濯簡單
着脱も又容易 これさへあれば
衣類蒲団を汚さず
外出旅行も安心して出来ます
赤ちゃんには
是非一つ
イージーおしめを
お試め下さい
イージーおしめ
直接發賣元へ御注文の節は送料十二錢添へ前金に願ひます
◉代金引換は送料二十四錢切手御前送下さい
送料 内地 金十二錢
満鮮 金四十五錢
定價
小形一二歳用
大形三四歳用
別製ネル付純ゴム製 金七十錢 金八十錢
純ゴム製 金八十錢 金九十錢
純ゴム特製 金一圓十錢 金一圓卅錢
發賣元
東京向島寺島町曳舟驛前
大和ゴム製作所
振替東京一一三〇〇二〇番
電話墨田 四二一一 局一〇三三 一〇三四



童女舞姿　　　岸田劉生

時事雜感その他

武者小路實篤

○忠告者

この世に生きてゆく人にかけ値の多い生き方をする人と、かけ値のない生活をする人とある。僕は後者に屬するから、自分の行爲に對して他人の批評に左右される餘地がない。自分の信じる通りに生きてゆく。自分にいろ〳〵忠告してくれる人があるが、その忠告は多くかけ値のある生活をしてゐる人達で、反省の不足な人達である。よく反省して見て恥かしくないことだけを他人に忠告したいものである。

○水平社と德川公爵

水平社の大會で德川公爵の辭爵勸告の決議をしたのは、牛刀をもつて鷄肉をさくより愚である。問題が小さすぎるし、つまらなすぎる。水平社の一少部分でやるならまだいゝが大會で決議したのは少ししくぢりである。

先祖の功勞のために子孫が報いられる世の中だから、先祖の罪で子孫が罰せられるのも當然だと云ふ理屈は人類の意志に反してゐる。罪は三族におよぼすなぞと云ふ考へのまちがひなのは云ふまでもないが、先祖の罪を、それも一小家族に責めるのは大人氣ないと思

ふ。それよりは歴史的に徳川のやり方を非難するならわかつてゐる。大會で決議してそれがうやむやに終つては面白くないと思ふし、ことがことだからうやむやに終るにきまつてゐるし、よし徳川に辭任させた處がそれが水平社の名譽になるべきこと丶は思はない。一たい華族だつて平民だつてさう大した差があるわけはなく、平民の方が名譽な時代になりつ丶ある時代に一華族の百年前の罪をあげて平民にしやうと會全體でむきになるのは、華族と云ふもの丶價値を認めすぎてゐることになる。

そんな小さな問題はほつたらかしておいてそれよりも自分達の仲間から傑れた人物を生み出すために働くことにむきになる方が遙かに賢いと思ふ。僕は公卿華族と云ふ多くの人から低能あつかひされる仲間に生れたのを恥ぢはしない、低能呼ばはりするものに俺より賢い人間になつて見せてくれと笑つて云へばそれでい丶。公卿華族にだつていやな人間はゐるだらう。いやな人間はいやな人間である。いやな人間を辯護しようとは思はない。い丶人間も生れうることを示せばい丶。水平社の人達の内から尊敬すべき人が澤山生れることが、一番、水平社の傲りと思ふ。侮辱された仲間から偉大な人間として生れ出ることは大なるよろこびであり、傲りでなければならない。

昔の徳川ならいざ知らず、今の徳川が一平民になつたからと云つてそのために一人の人間の生命が貴くはならない。要するに人爵は赤裸々の人間として値打のあるものにとつては問題にすべき問題ではない。

○眞實

僕はどんな時でも眞實を愛する。嘘は嘘として見て面白い時はあり得るが、嘘と眞實とをごつちやにしてはいけない。人間の面白さを知るものは、眞實を見る力がなければならない。しかし多くの人は眞實を見ない、だから云ふことを何

處まで信用していゝかわからなくなる。

例へばロシヤの饑饉の慘狀をかいたあるものに、田畑には雜草一つ生へなかつたとかいつてあるあとに、雜草でつくつた餅を食つてゐることが書いてあつた。自分は正直ものだから田畑には一本の草も生へないと云ふ言葉を信じ切るとすると、あとの雜草の餅のことをかく時には、しかし森や、草原にはいくらかの雜草があつてそれで餅をつくつて食つたと云ふやうな說明をつけないと腑におちない。畑に雜草が一つもはへないなぞと云ふことを本當にさせるためには書くものは餘程注意しなければならない。

樺太に行つた人の話に、一時共產主義の實現された當初においては誰も野菜をつくるものはない。たまにつくるものがあつても、すぐ他の人に食はれてしまふ。之も本當か噓か知らない。話はとかく大げさになるから。

自分達は本當のことを本當だとわからすためにどう云ふ風なかき方をするのが一番いゝかについていく分研究してゐるものにとつては多くの人のかき方は粗雜すぎる。

たとへば堺枯川氏が十才の子供が自殺したことを未曾有なことのやうに云つてゐる。しかしストリンドベルヒは五才の子供が母に叱られて自殺したことをかいてゐる。僕自身も十才以後自殺したいなぞとは思はなかつたやうだが七八才の時、意地惡るの人がゐたので自殺しやうかと思つたことがあつた。十才の子供が自殺する原因をはつ切りかゝずに、いきなり未曾有の事件のやうに云はれても腑におちない。その原因の內にあらはれた眞實の恐ろしさを事實通りにかいてくれゝば自分はきつとおどろき、又本當に同情の淚をこぼすことが出來たらうと思ふ。

小作人の會議の時、ある女の人が、小作米をおさめることが出來ないので娘を賣つた事實を報告されてゐたが、それも事實の眞相を傳へることが粗であつたのは惜しいことである。なんだか父が酒のみだつたり、何か他の原因も加はつて娘を賣つたのではないのかと反對された場合、僕にはあの記事だけでは反對出來ないことを殘念に思つた。

階級鬪爭を主題にした作品、たとへば金子洋文の「地獄」でも資本家を惡人にしすぎてゐるために階級鬪爭の必然さがよはめられてゐる。あれが善人だつたら鬪爭せずにすめたかも知れないと思ふ人があるであらう。

階級鬪爭のさけられないことをかくには、兩方が愛しあい、理解しあい、それでゐてなほ和合出來ない感じがあつて、神經的に、生理的にかゝなければならない。その點モーリス・バレスのドイツ嫌ひの小說には、アルサス・ローレンに於てのフランス人とドイツ人との仲よく出來ない氣持が、先天的のやうにかけてゐた。しかしそれも習慣と人間性とがごつちやになつてゐて、事實は矢張り後天的の習慣から出たものと思つた。

事實の眞相をこまかくこまかく見て、そこにあるいろ〳〵の矛盾撞着の内にこそ、人間性の面白さがあらはれる。

山川菊榮氏のやうにブルジョアは皆惡人のやうに子供に無理に敎へこんで、少學校に入つてブルジョアの子供と仲よしになることを恐れるのは、主義に奴隷的忠實とは云へるかも知れないが、眞實に脊中をむける者の滑稽な悲哀がある。本當の勞働者の生活をしてゐるものゝ子弟はもつと自由にしてゐて、其處から反ブルジョア根性が自づと生れるであらう。それは衣食住の習慣、及び言語、動作、香ひなぞの習慣から自づと生れるものである。しかし之も先天的ではない。後天的である。

○金持の子供

自分は金持の子弟を多く知つてゐる。彼等の内には出來のいゝものも多くはゐるが、意志が強いとはゆかない。失はれる心配なものを多く持ちすぎてゐる。それは當然いつか奪はれるべきものと調和しすぎてゐる。彼等は女中なしには生活出來ない。又彼等の感覺や體力は温室において育つた木のやうに外界の空氣になれない。目覺めたものは温室からとび出

し得るが、破壊されるまでは温室の内に安樂をむさぼりたがる。

神經は發達してゐるが故に氣持はいゝが、餘程決心の強い人でないと、いざと云ふ時に安逸をのぞむ。文明人が野蠻人にやられるのは感じが鋭いが故に、早くあきらめたり、まいつたりするからである。

之からの世においてはある程度以上の金持の子弟は時代おくれになりやすい。そして事實を正視する力を發達する機會にぶつからない。金持の子弟は一大決心をしなければ、今後の世界には男らしく生ることは困難になるであらう。そして目が覺めた時は、とり返しのつかない時であらう。

今後は身體を鍛へ、精神を鍛へ、いざと云ふ時にも平氣で立つてゐられることが必要である。

○金持

自分達は金持をすべて惡人だとは思はない。むしろ金持に善良な人が多くゐると思ひすぎてゐる位いである。しかし金持は位置として面白くない位置である。自他共に人間らしく生かすことに不適當な位置である。自分は金はほしい時はあるが、金持になることは閉口である。金持になればどうしてもこの世界の進歩することを恐れることになる。新らしい世界のくることに恐怖を感じなければならない。そして自分の愛する子弟の獨立性をよはめることになる。

自分は個人が金をもうけることには反對しない、しかし金をもうけるために兄弟姉妹を益々人間らしくして金がもうかるならかまわないと思ふ。畫家や音樂者や役者たちが、金をもうけるのはある程度までは是認出來る。天才の作品が、下らない作品より何百倍、何千倍、何萬倍に賣れることがあつてもそれは當然なことゝ思ふ。しかしそのはらはれる金が他人の生命を無視して得られた金であれば、その金を得た人その得た方法については非難されるべきである。

兄弟姉妹を人間あつかいしないと云ふことはどんなことがあつても是認出來ない事實である。才能のないもの、役に立たないものが、才能のあるものや、働きのあるものや、役に立つものより金がとれないのはやむを得ない。しかしより金をもうけるために、他人の健康や意志をふみにぢることは許されない。

それは道徳的に許されない。新しい道徳はその人には不相當なことをしろとは云はない 他人に蟲のいゝ要求をしろとは云はない。しかし自己を人間らしく生かしたがる本能を是認する。この本能に支配されて自己を築きあげることを美徳とする。

自分の一寸知つてゐる女に、生れた以上は生る權利があると云つてなまけて生てゆけないことを不平に思つてゐるものがある。

實際今の世ではぶら〳〵して食てゆける人種が一方存在するのだから、そんな氣を起すのも無理はないが、そんな食客的な根性を持て生る權利を主張するものは人類から食客扱ひされるのは當然であり、蟲のいゝ罰をうけるのは當然である。

自分達はまだ人間らしく生るためには、それ相應の努力がいるのはやむを得ないのである。たゞその努力が相當で報いられず、不合理に上まへをはねられすぎる時、怒るのは當然である。勞働者の運動、小作人の運動はます〳〵機會あるごとに盛んになるのは當然であり、又人類のために歡迎すべきである。

たゞその要求が一時的であつたり、個人的であつたり、無目的であつてはならない。それはよき世界にたいする、自己を人間らしく生かす、つまり身心共に生かすことを目標にしてすゝまなければならない。

自分はその點、小作人爭議も、勞働者の運動、水平社の運動が、ます〳〵盛んになることを望んでゐる。又朝鮮人、臺灣の人の運動も同感する。しかし自分だつたら、先づ自分をうんと立派な人間に築きあげることを第一にする。それから周圍の人間を、どうしても人間の立派さ、才能、學識、仕事、實力で、殊に眞理で相手を屈服させることを本願にしたい。

僕は金持にたいする惡口は社會主義者に任せて安心してゐたが、社會主義者の人が沈默を强いられる時が來たら、僕は

金持を道徳的に非難することもそろ／＼始めやうと思ふ。

他人を人間らしく生かしては存在出來ないやうな金持はその點については何處までも非難されていゝ人間である。他人を兄弟として尊敬し、そして他人と自己の生命を尊重しつゝやつてゆける仕事のみ、正しい仕事であることを自分ははつ切りしたく思つてゐる。

○眠れる獅子

眠れる獅子は
兩足をのばし
大きな欠伸をした
今度こそ
目をさまし
起き上るかと思つたら
又　すや／＼と眠り出した。
しかしその内には
目をさますであらう。
人々が安心し切り
忘れてゐる時に。　（一四、三、三〇）



人間の欲望

土田杏村

一

月夜の美感は淡く、寂しい。古來幾多の詩人が其の月を眺めて哀切の情緒を歌つた、あをざめた本能の謙抑、さうらうたる幻影の漫步。其處には打ち籠つたる人間の思念があり、恥ぢらひなき眞情の群蟲がすだく。あの美しい月の世界も科學者の冷靜に觀測したところでは、蜂の巢のやうな大噴火口の死丘横はり、水蒸氣に乏しいため、全山の風景は硝子の如く固定し、鳥一羽、蟲一匹の動く影も見られないといふ。けれども其の噴火口の直徑が、とても地球では見られない大いさを持つことでも知られるやうに、まだ冷却しきらない時代には、地球の活動の比肩することも出來ない猛烈な活動を續けて居て、大爆發と大暴風と全球を取り卷き、破壞、慘落、激突のあらん限りを盡した結果、急速に其の活動力を失ひ、忽然として今のやうな沈靜に歸したのだといふ。

其處にあるものは月世界のうすじろい死屍だ。其の死後の世界をまで呪はれた蠻人の亡靈のごとく、月世界の死屍は大空にさらしものとなり、呪言の軌道をひかれて動く。瞬時の激情にかられ、身につゝむ堪忍を消耗して、永遠なる冷罵の

豫示に死屍をゆだね、魚腹にも入らず、岩角にも衝突せず、たゞまんまんたる大空の波浪に、あざけられ、流され、打ち沈められ、銀盤のやうになめらかなる皮膚となつて漂浪する月世界の呪ひをわたくしは傷ましく思ふ。

けれどもわたくし達は、其れと同じい激情の廢墟を地表の至るところに眺めて居る。やま櫻散る晩春の日、わたくしは大和めぐりの旅に出て、塔の峰越しにむかしの飛鳥京へ下つて、其處で多くの遺跡をたづね、更に當麻の後の山を越え、河内の古跡を望んだことがある。其處にある多くの墳墓と山陵、佛寺の御佛と昔の礎石など、何れ一つとして昔の盛時を忍ばせぬはなく、わたくしは夢のやうに其の時代の幻像を創つた。しかし我國の廢墟は廢墟としての神秘さを其れほど豐かに持つて居るとは言へない。といふ理由は、其れが荒れ果てた昔語りとなつてから今日まで、其れほど多くの歳月を過ごして居ないから。

ツタンカアメンの墓が見出された報道は、どれだけ多くの好奇心を世界の至るところに惹き起させたか知れない。廢墟として其の名の最もよく世界に聞えたものは、言ふまでもなく、埃及、希臘、羅馬の其れであるが、何れの文明の系統に屬するものか、其れさへ明瞭には知られず、しかも燦然たる文化の寶庫を持つ廢墟は、メキシコにも南米にも、また中央アジアにもある。最も神秘的な、けれどもまた甚だ藝術的な、我々の好奇心を喚んで已まない廢墟は、地中海の中の小さな島の上にもある。或は噴火堆積物の下に、或は沙漠の中に、また或は人跡の容易に至りがたき深山の中に、今は文明の死屍として横はる其等の廢墟は、何故忽然として彼等の生活を滅亡させたのであらうか。顧みれば人間の運命ほど深刻なものは又とあるまい。

二

わたくしは或る夜有樂座の廊下から東京市の夜景を眺めたときの感銘を忘れることが出來ない。勿論其れはまだ東京が

震火災に見舞はれない前の或る夜のことであつた。月は白くさえて居た。電氣のあかるさが、建築といふ建築の上をぼうつと明るくまをとつて居た。更けた夜は何一つ騒々しい物音を傳へない。今見て來た新劇の印象からまだ遁れ出ることが出來ないで、不思議に黒蔭へこびりつくメランコリアの捕り繩を、わたくしは振り拂ひ、振り拂ひした。其れはまことに珍らしい沈潜の夜であつたのだ。と、廊下の窓際に立つたわたくしの前に幻怪なる童話の國がある。繊細工のやうにして立つ此の大都市、其れは生きたるまゝに呪はれて此の大野の中に打ち捨てられた人間の空想だ。夜空をめがけて突き進む欲望の氣息、其れは空しき斷想となつて、さらぼひ、はふり捨てられ、電氣のサイフオン、噴水のごとくにメランコリアを生むが、たゞ斷然たる人間の創造意志をおぼれしめるのみだ。わたくしはさくばくたる情緒を持つた。さんさんたる涙がわたくしの叡智の上をつたつた。

都會は觸手を持つて居ると歌つた詩人がある。觸手とはまことは欲望だ。欲望の觸手、觸手の吸盤、其れはおよそ人間の生命の要求するいかなる事物をも創造し、また費消して餘さないであらう。欲望の觸手は田園を吸収した。神の創造した自然を破壊した。藝術の殿堂を顚覆せしめた。けれども其れはなほ飽くところを知らない。其處に彼の吸着するものとして殘されたは、たゞ創造の原泉たる生命力のみだ。欲望の觸手は其れに吸着することをも憚らなかつた。今はもはや彼に殘されたものとしては、――彼れ自らの觸手、其れより外に何物もない。咄、何といふ悲劇であらう。觸手は觸手を喰ひ、吸盤は吸盤を吸つて居るのだ。永遠なる呪ひの死滅、欲望の亡魂はみづから其の死屍を擁つて冷笑の谷間を彷徨する。何處に彼の墓標を求めるか。其の標木の上には「欲望の廢墟」とのみ記されて居るのだ。

望月のかけたることもない此世をば我世と思ふと歌つた昔の宰相がある。勿論其の望むところとは、彼自身の個人的の望みであり、社會的の其れではない。享樂を獨占することの道義的苦悶は彼の時代には求められなかつた。其れだから彼の歌つた感情が客觀的にも肯定の出來るものであるかどうかは大いなる疑問だ。其はともかくも、此の宰相の欲望の自足に

は一つの寂しさがたゞようて居る。意志への障礙に當面してこそ、わたくし達は自らの意志の創造的努力を意識することが出來るのだ。何一つ不足のない欲望滿足とは自らを泥池の執拗の中に投ずることだ。生きながらの「欲望の廢墟」を其處に見る。宰相は歎息した。彼は充つるがまゝにたゞ歎息した。

わたくし達の社會を彼の其れに較べれば、其處には比肩の出來ない物質的進步が見られる。望月のかけたることなしと自足飽滿した昔の欲望の、何といふ素貧なることか。今こそわたくし達は、自らの欲するがまゝを自然の上に振舞ふことが出來る。欲望は十分に擴大せられた。地球は槓桿を以て人間の意のまゝに動かされた。欲望と欲望との拋物線の衝擊、其の切點にあらゆる財貨が生産せられる。此の切點は工場であつた。電動機械であつた。銀行であつた。中央市場であつた。發電所であつた。鐵道であつた。大都市であつた。エレヴエータアであつた。其れはすべて人間の欲望の表現だ。欲望の勝利の戰利品だ。財貨の山にさらに堆積せられる財貨の山。其れはじつに驚くべく擴大せられた財貨の混迷だ。けれどもわたくしは其中に立つて嘆息する。堆貨と堆貨との間のラビリンス、わたくしは其處でかすかなる眩暈をすら感ずるであらう。

三

わたくし達の欲望とは、心理學的には一つの心的要素だ。其れはあらゆる觀念的のものと物質的のものとを對象とする。其れはわたくし達の想像と結びつき、いやしくも想像のめざすところ、欲望の此れに動き、此れを創らぬ事はない。欲望は其の基礎を本能の上に置く。素材のまゝの本能を直ちに表現した欲望は第一次的のものだ。新らたに想像により導かれて產み出された欲望は第二次的のものだ。第一次的の欲望を否定することは彼の生命を奪ふ所以となるであらう。だから其等の欲望の相互的なる衝擊は、土をも破らう。日をも碎かう。意識的なる人類にあつては、第二次的なる慾望と雖

も第一次的なる其れを突き破つて進む場合は珍らしくない。欲望の種類を心理學的に分つことは、殆ど不可能なるもののごとくに見える其れは凡そいかなる對象をも取ることが出來る。また其れはいかなる爲方でゞも働き出すことが出來る。さらに此後に創り出される欲望は今にして豫測の限りではない。欲望の數は想像の考へ得る限りの其れである。また想像し得られない其れをまで含めての其れである。

欲望は人格に取り、一つの心的要素である。欲望は單に自然的因果の法則に支配せられて發動する。よし其れが意識的なる現象であつたにせよ、一つの心理現象なる限りは、其れを支配する自然法則を求めることは不可能でない。其の欲望が眞に獨立の行動として發揮せられる時には、其等の心的要素を統一し、ワンネスとして實在する人格の許可を待たなければならない。行動を決斷するものは此の統一の主體たる人格だ。心的要素の全體を總計しても其れは人格ではない。人格は價値を目標とし、事物を評價する主體である。要素たる欲望は此の人格の創造的行動の素材にはなるが、創造的行動の方向其のものを決定する力を持たない。

其れ故にわたくし達にもつとも重要なものは要素としての欲望ではなく、其等の欲望を處理し、位序し、また選擇する人格其のものゝ行動傾向だ。其れは個人に隨ひ、其れ〴〵の典型を持つ。其れは此の個人が欲望を價値的行爲にまで實現せしめるときの個性典型である。欲望はわたくし達の生活の必然的要求に根ざしたものであるから、何れ一つにでも生きることの根據を持たないことはないけれども、此れを價値的行爲にまで高めるものは、つねにわたくし達の個性典型である。欲望と人生、特に其れと社會生活との關係をたづねる時には、欲望自身よりも此の欲望實現の個性典型を見ることがわたくし達には肝腎だ。

欲望を處理し、位序し、また選擇する人間の價値的個性典型には三つの區別があるとわたくしは考へる。

其の第一は、外面的擴張の典型である。欲望をあくまでも外方へ擴張して、いよいよ多くの資料を取り、いよいよ外延

を蠶食するは此の個性典型の實行する爲方だ。ヒロイズムは權力欲の發揮であるから、其れ自身要素としての欲望であるけれども、正しくは欲望選擇の價値的典型であり、この外面的擴張のそれを意味すると見なければならない。

次は內面的沈潛の典型である。欲望實現の資料に就き、其れの外延は擴張せられないけれども、與へられたる資料を飽くまでも醇化し、つゝましやかに享樂しようとする爲方が其れである。其の欲望の數は其れほど多くはない。また其の對象も千變萬化を極めはしない。けれども其の欲望の强さは常に必ず弱いものだとは言はれない。

最後に舉げるものは、外面的內面的否定の典型である欲望其のものを罪惡的だとし、物質的にも觀念的にも、此れを否定したところに價値を見る。欲望の意義は否定せられても存在としては全然の無に歸することが出來ない。否定ある限り其處にはなほ抵抗する强い欲望があるのだ。そして彼が生活をつゞけて居る間、欲望の或るものは事實に於て否定せられず、多少づつ實現せられて居るけれども、彼の價値視點は其れの否定におかれ、其れの否定の達せられたときに、人格は實現せられたとするのである。其れは特に外面的なる欲望否定に重點を置くこともあれば、また其れとは反對に、內面的なる欲望に罪惡的だと考へる場合もある。

四

地表の上に生活すの人類の、此の夥しき欲望を見よ。右するも左するも、人間はすべて欲望を以て動く。また其處につくられたるすべての文化の、欲望といふ刻印を押されて居ない場合は無い、しかるに其等の欲望の背景には、つねに此れを選擇する三種の個性典型が互に衝擊し合つて居る。

若し此等の典型を、人間の性別に就て見るならば、勿論男性は外面的擴張の典型を持ち、女性は內面的沈潛の典型を持つ。けれども其れは絕對的の區別ではない。のみならず其の典型の區別を、男女性が本來固有した素質であつたとさへ言ふ

ことは出來ない。わたくし達は本能を區別するに環境の標準を用ひ、環境を區別するに本能の標準を用ゐなければならぬ。其處に論理の循環あることは人のよく知るところである。結局わたくし達は人間の固有する能力のいかなるものであるかを知ることが出來ない。たゞ歷史的に、人間の知得られる限りなる過去を振り返つて、自ら歩いて來た道の特性を觀察するならば、男女性につき大體かゝる典型の相違を見るといふのだ。最後に老人は外面的内面的否定の典型を持つ。

わたくし達の知るを得る歷史的時代につき、此等の典型の好模範を擧げるとすれば、印度の文化は常に槪ね否定の典型を示す。そして此處では外面的内面的に、じつに多くの型の否定形式を見せて居る。ゆたかなる内容を持つ印度哲學は、其の否定形式の相違により諸分派をつくつたといふも過言ではない。次に西洋の中世紀は人間の欲望については内面的沈潛の時代であつた。中世紀の生活を暗黑時代と呼ぶは、じつは自ら近代の欲望實現の典型に立つて見た評價である。其處には經濟、藝術、宗敎、哲學など、すべての文化範圍について其れに特殊の形式の欲望生活を望んで居るのであつた。最後に外面的擴張の典型を最も強く發揮したものは、いふまでもなく產業革命後の近代である。

わたくしは此等の生活形式の各々に、固有の價値を認めて居る。そしてまた人間は、いろいろの欲望に當面した場合、其れを選擇するに必ずや此等の典型の何れか一つの立場を取つて居るとする。其等三つの典型が近代の生活の中でいかなる交渉をつゞけて來たかを分析し觀察して行くことは、現代の生活を理解する上について餘程重大なる意味を持つのだ。

（未完）

文豪の家庭生活を追懷して

病床の子規居士

高濱虛子

子規居士の家庭は淋しかつた。病床に居士を見舞ふた時の感じをいふと、暗く鬱陶しかつた。先づ表戸を開けるとリリリンと鈴がなつて、狹い玄關の障子が寒く締まつて居るのが眼にとまる。障子の紙も古びては居つたが、併し破れてはゐなかつた。破れたところには必ず張り替へられた。

「御免なさい」と障子を開けると母堂か令妹の顏が現はれる。母堂か令妹の顏が現はれる前に先づ居士の咳を聞く。私はすつと病室に通る。或は病室とは敷居一つを隔てた座敷に坐る。居士は病苦にしかめた顏を向けて其側眼に見るやうな長くきれた眼尻でぢろりと人を見る。其眼尻に涙をためてゐる時に「今日は御機嫌の惡い時だな。」と思ふ。さういふ時はぢろりと人の顏を見たばかりで默つてものをいはない。こちらから何かいふと、其に無愛想な返辭をする。せうことなしに暫く默つて居ると、其ぢつと考へぬいた頭の底からぢりぢりとしぼり出すやうな一言二言の話が出る。其話は癇癖を壓搾し凝結したやうな滴りであることもある。又左あらぬ浮世話であることもある。其浮世話の時などは偶ゝ須磨の話になると自然に油が乘つて來る。須磨の話といふのは居士が日清戰爭に從軍して途中で烈しく喀血してとてもむつかしいと思はれたのが、漸く神戸病院に入院して一命をとりとめ、久しい

入院の後、須磨の保養院に靜養した間のことである。此須磨の話は屢〻病床で出て、最早話に何等の新味はないのであるが、併し其話をくり返してゐるうちに、其再生の喜びにひたつて靜に松林の間の茅屋に起臥した日の心持が思ひ出されて來て、自然〳〵に病苦を忘れしめるのである。又其話をしてゐる私の心も何となくのんびりして來て、眼前に病苦に呻吟してゐる居士よりも、ヘルメット帽を被つて松林の間を散策してゐるにこやかな居士の方を想像して來るのである。居士はガラス障子越しに庭の面を見遣り乍ら、

「あの裏木戸を開けて（其裏木戸の傍には山吹が咲き亂れてゐて、山吹を推しのけるやうにしなければ裏木戸は開かないのである。）誰か人の姿が現はれはしないかな、と思ふことがある。春雨のしと〳〵と降つて居る日など森閑としてゐる庭の面に、靜にあの裏木戸を開けて這入つて來る人があればよからうと空想することがある。併し丁度よい具合に訪問して呉れる人も無い。其は藥（モルヒネ）を飲んで痛みを忘れてゐる時、丁度酒に醉ふた時のやうな心持でゐる時なので、一時間か二時間經つともう其酒の醉はさめて來て、そろ〳〵現實の阿鼻叫喚の世界に戻つて來るのだからやり切れない。」

などと話す。斯ういふ話が出て來るやうになつたのは餘程苦惱を忘れかけて來た時なのである。

「何か食べるものはないのかなもし。」と居士は突然高聲に呼ぶ。

「さう、よ生憎何もない。」と母君が答へられる。

「芋はないのかなもし。芋があれば芋でもお燒きなさいや。」と居士がいふ。

やがて令妹のお律さんが、芋を薄く切つて胡麻をつけて燒いたのを皿に入れて持つて來られる。

「お母さんも來て淸さんと一緒にお食りなさいとお言や。」

と居士はいふ。

熱い燒芋はおいしい。私は燒芋は餘り好きでないのであるが、斯の場合好き嫌ひを論ずる遑なしに、舌にのせて味つて居るうちにどうやらおいしい心持がする。

「一緒にものを食るといふやうな場合は殆どないからな。」

と居士はお律さんがお母さんを呼びに行つたあとで私に向つていふ。誠にお母さんやお律さんは暗い茶の間で音も立てずに食事を取つて居られることは屢〻私の見受けたところである。

「お律さんもいらつしやいませんか。」と私は襖越しにいふ。

× × × ×

居士の繃帯取かへはお律さんの毎日のつとめである。腰部に一錢銅貨の穴が三つか四つ開いて其處から膿が出るのを、毎日のやうに繃帯を取換へるのである。お律さんは看護婦以上の老練さを持つて丁寧に迅速に其取換を行はるゝのである。が、此時が居士の阿鼻叫喚の時で、指が傷口に近よつただけで、空氣の振動で、もう天地がひつくり返るやうに病むとの事である。お律さんも居士も戰場に臨むやうな覺悟で、居士の「アイタ、、、、、」といふ叫び聲の中で雄々しく取行はるゝのである。

「あんなに亂暴にするから。」と居士は堪へ難い不平を訴へる。

「斯んなにソーツとしてゐるのに。」とお律さんも遣瀨なさゝうに。

× × × ×

お母さんもお律さんも居士の病氣を看護する爲めに　十年の歳月を費された。（お律さんは其一生を居士の介抱の爲めに捧げられた。）上野の花の賑ひも唯何となくざはめかしい世間の物音で想像する許りで、此十年の歳月を過された。

鷗外先生の潔癖さ加減

鈴木春浦

長らく森先生に面接してゐたことのあつた自分に先生が家庭に於ける主なる事がどんな風であつたかとのお尋ねについて、わたしの知つてる限りを記憶から呼起して記すのですから、順序が旨く立てられる譯にも參りませんゆえ、どうかそのお積りで見て戴くことにいたしませう。

先生の男女のお子さん達は、先生を呼ばれるのに始終「パツパ」と申してゐられました。從つて亡くなられた御老母も、未亡人となられた奧さんも、同じく「パツパ〳〵」と仰

しやつてゐられました。

そこで先生はさうしたお子さん達に對して誰彼の差別なく可愛がつてゐられました。

此れは話は別ですが、可愛いといふ字は、可愛いではいけない、可哀いだと、よく聞かされました。

先生はどつちかと云へば、子煩惱の方で、どんな事があつたつて、お子さん達に怒つたやうなことは見たことが一度もありませんでした。

お嫁に參られたお孃さんが、佛蘭西語を稽古されるに就いては、先生自分で隨分熱心に下稽古をなされてゐられましたし、算術に於いては此又大いに熱心にお敎へなされたことを見受けました。

それからその下のお孃さん坊ちやんが追々と生長なされるに從つて、前のお孃さん同樣、いろ／＼な學課についても、それ相當に下稽古といふことには最も熱心に努められてゐました。

斯ういふ譯でしたから、わたしがあの澤山な先生の飜譯された脚本や、小說の筆記をする場合、さうした下稽古なされるのに出食はした折などは、一時間でも二時間でも、それが濟むまでは、決してわたしの方の爲事に取掛かつてはくれませんでした。

又或時は「けふは子供の下溫習があるから止さうよ」といつたこともありました。

奥さんも學校敎育といふことには、先生に負けない熱心さで、學校の先生を特別に賴んで參つて貰はれても、奥さんはパツパと同じく、それ／＼下稽古のお世話をなされてをられました。

先生が御歿後の今日では、猶更二人のお子さん達をお仕立の爲めには、餘念なくお見受け申されるのです。

それからわたしが例によつて筆記に出掛けると、けふは内の子の誰々が風を引いて熱があるから歸つて貰はうと斷はれたものでした。

それは先生が我子の熱をわたしの子達に萬一傳染してはならないといふわけ、そこで或時わたしの子供が風を引いて熱があると話したら、それではけふは爲事は止さう、すぐ歸り給へと云つた譯で、人にわるければ、自分にも同じといふ尊い温情は、ちよつと人さんに眞似の出來ないことと思はれました。

先生は御承知の如く醫學博士ではございましたが、御自分

の家内の人々が病氣に罹られたとき、脈などとられたことは、わたしとしては一度もお見受けしたことはありませんでした。

さういふ際には、同じ軍醫で部下の昵懇な人とか、近所の醫者を呼んで診察させたものでした。

夏向になると蚊を恐ろしがることが非常で、御役所から歸られるとすぐ軍服を脱ぐ、時には別段更まつて浴衣に着替へるでもなく、シャツとズボン下になつて足袋を穿き、大きい罐に詰込んである獨逸製の除蟲菊の粉を煙草盆の火入へ澤山蚊遣りに燻べて、お子さん達にも同樣足袋を穿かしたもので、わたし共にまで蚊に刺されないやうにと注意をしてくれたものです。

世界の戰爭が起らない前は、お孃さんの洋服や帽子は獨逸へ註文して取寄せたものでした。それを又日本の洋服屋へ見せて此通りに仕立ててくれと賴むと、同じやうには出來上つて來ても、どこかに行きとどかない所があると見えて、恰好が旨く行かないと言はれたことがありました。

又先生は獨逸から始終文學に關する書籍を購入してゐられましたが、その本が到着すると、すぐ自身で包紙を十文字に結へた麻の紐は鋏を用ゐず、どんなに固く結んであつても自然〳〵とほどいて丸め、包紙もちやんと皺を伸ばしてたたんだものでした。

さうして獨逸の麻は丈夫だといはれたことを聞きました。

それから名のある名士や文士達の書風を慕つて蒐めてゐられたらしく或る日、博文館に在つた石橋思案氏からわたしの許へ鷗外先生の飜譯小說を「文藝俱樂部」へ載せたいから、君から賴んで、君筆記してくれ給へといふ依賴狀が來たから、それを先生に示したら先生はそれを承引すると同時に、石橋君の手紙は僕の所にまだ一つもないから、此れは僕にくれ給へと言つて手箱へ納めたことがありました。

又先生は手紙を認めるのに隨分丁寧でした。

原稿などは、どんなものを書かれましてもペンなり鉛筆なりで書き放し、直すところは赤インキなり赤鉛筆を用ゐてゐたこともありました。

此れが手紙となると、なか〳〵さう手輕でなく、不斷はどうであつたか知りませんでしたが、あの武鑑を蒐められるとき武鑑通である沼田賴輔氏の許へ武鑑借用に就いて、わたしが手紙を持つて使に立ちましたが、その時の手紙はたしか二三度書き直したと覺えてゐます。

今に武鑑は森家の土藏に大概完成して納められてあり、生

前一代の武鑑通になられましたが、それが僅の間であつたから妙で、その先生の熱心さには敬服いたしました。わたしが敬服したことは、餘り世間の人さんが知らないことと思ひます。

先生が抑も武鑑に手を付けられたのは、わたしが畫伯河邊翁から傳へられた「大鹽萬記錄」を先生に示したのが元で先生が大鹽平八郎を書くことになつたのでした。

その時大鹽について武鑑が必要の所から、天保時代のを求めて役に立てゝ以來、武鑑に趣味を持たれ、西洋紙を小さく切つて、それへ年號を書き並べ、求めるに從つてそれを消し遂にあらゆる武鑑を蒐められ、二つとないものは寫させました。わたしもそれを少からず手傳つたことがありました。

そして虫の喰つたのは經師屋の手に掛けてすつかり裏打をさせ、製本を爲直させたものです。

今手紙を書き直すといふことを申しましたが、亡弟の森篤次郎さんの墓石を直すので、先生自ら「森篤次郎墓」といふ字を書かれるとき、弟の潤三郎さんとわたしとが傍にゐたのでしたが、いや書直すは〳〵十枚足らずも唐紙を無駄にして、やつと此れが好いと言つたこともありました。

書き物といへば、額なども大分諸方から頼まれてゐたやうでしたが、氣が向くときが少いと見え、滅多に筆を取ることがないやうでした。

大字の額では檜物町の料理店倉田屋のを書いたことがあり現に上野の揚出しの小糸源太郎氏から「あげだし」といふ看板を書いてくれと頼まれたよと、わたしに亡くなられる前話したことがありましたが、此れも書かず仕舞ひではないかと思はれます。

それから私が今でも奇體に思つてゐるのは先生が入浴したのを一度も見なければ、聞きもしないことです。

いつでも御役所から歸られると、軍服を脱いで三疊の化粧の間へ這入られて、かねてバケツに取つてある湯なり水なりで體をすつかり拭ひ、同時に髭も剃られたものでした。

此れは洋行中での習慣からさうなつたと思はれますが、わたしとして、先生は入浴したことがありませんね、どういふ譯ですと聞いて見たいと思はないこともありませんでしたが、お聞き申しもせずにお別れになつてしまひました。

床屋は公休日に近所から呼んで、軍人でもありますから始終一厘苅でした。

寫眞は撮るのが大嫌ひで、自分から求めて撮られたことは一度もなく、撮らなければならない場合より外撮つたことは

ないとのことでした。

食物に就いては大した好みもないやうで、酒も飲まず、ビールは少し位は飲まれました。

葡萄酒を飲んでゐられたことがあつて、君一つどうかと飲まされましたが、それは寺內將軍から貰つたのだと云はれた事を覺えてゐます。

天麩羅は先生も奧さんもお好きで、折々は銀座の天金へ出掛けたもので、わたしもお子さん達やなんかと大勢で、お供した事がありましたし、內へも取寄せてゐましたし、今日でも奧さんは天金が御贔負のやうです。

御食事は奧さんもお子さん達も一緒で、大きい卓子のときもあれば、一人〳〵御膳を並べるときもあつて、わたしなども皆さんと交つて御馳走になつたことも度々ありましたが、先生は御飯を上がるのに可なりゆつくりでして、仕舞ひには番茶をよく焙じたもので、お茶漬さら〳〵といふのがお好きなやうでした。

酒は今いつた通り飲りませんでしたが、煙草は大好物で、然も葉卷は始終銜へてゐるといふ方で、朝日、大和なども大分喫まれて火鉢の中へ吸殼が混雜すると、狀袋かなんかへまとめて捨てたものでした。

食物といへば或冬の夜、「昴」が出てゐた頃、編輯の江南文三さんが見えられた折、燒芋を取らして、「寒いときは此れが一番だ、とき〳〵遣るよ」と、旨がつて食べ、君もどうだいと勸められたのには少なからず閉口しましたが、江南さんもお好きのやうでした。

さて又先生のところへ、たしか脚本家の協會から仲間入をといふ話があつたとき先生は、それを斷つたとか、待つてくれとか云はれたあとで、わたしに話されるには、自分の飜譯脚本や創作脚本に就いては、上場を許した場合、五十圓包んで持つて來たときもあれば、反物一反、帶一本のときもあり、菓子一折のときもあり、手紙一本、葉書一枚で許可を願ふといふときもあつて、それに對して別段なんとも云つたことがないのだから、お仲間入をしたら、さう容易く出ぬ人々が困りやしないかと思つて、すぐ承知はしなかつたが、そのうち折があつたら這入つても好いと言はれたことがあつたのでした。

それから訪問者には在宅でしたら門前拂をしたことはない方で、どんな人にでも面會したものでした。

或時玄關へ名刺を通じたものがあつたので、女中が取次いで座敷へ通すと、まるで乞食同樣な風體、淺草の玉姬町邊の

木賃宿に身を投じてゐる何の某、かういふものを書いたから、先生一つ見て下さいといふわけで、置いて歸つてしまつたのです。

その男はそれきりでしたが、月日を立つて、北海道から、いつぞや差置いたものを見て戻してくれと、その手紙に添へてきた小包を、開けて見ると、アイヌ彫の茶托五枚、小豆色の平つたい小石、熊の牙と熊の肉一塊、この熊の肉一塊には先生一方ならず恐れをなし、君どうだいと云はれましたので わたしはその一塊と茶托とを貰つて歸りましたが、その一塊には家内も恐れたので、私は獨り酒をあたためて、その肉を賞味した事などもありました。

餘り長くなりますから、こゝらで擱筆いたしませう。

島村抱月といふ人

中村吉藏

故人島村抱月の日常生活を書けといふ事だが、日常生活といへば樂屋裏の生活とでも云つた風のもので、公人としての表向の舞臺生活とは、區切を附けて考へられない事もない。しかし抱月と云ふ人の生活には、樂屋がそのまゝ舞臺にされたり、又舞臺がそのまゝ樂屋とごつちやになつたり區切の附かないところもあるが、そんな事は介意ないで、思ひの斷片をこゝに書き附けて見やう。

抱月と云ふ人は、その前生涯と、後生涯とでハッキリ、二つに分列したやうな變つた生活をやつた人である。前生涯は云はゞ學究生活で、書齋に立籠つてコツ／＼勉強して、そして早稻田の講堂で學生相手に講義するとか、それからもつと花やかな活動としては新聞雜誌で、文藝美術の評論を公にするといふ風の仕事をやつたのだが、後生涯は、まるきり打つて變つて書齋から巷へ出た許りでなく、巷の中でも、最も喧騷の世界の中心とされてゐる劇場へまで乘り出して行つて、女優須磨子との戀を藝術に化合させつゝ所謂詩人生活の勇ま

し實行者として中道で斃れたのだ、「理論は灰色で生命の樹は常に緑である」といふゲーテの警句をそのまゝ一身に體現した人とも云へるであらう、何時の時代の人々にも、活きた刺戟を與へる事「魂」の苦悶と憧憬との生涯になり了せたのが、抱月の一生である。

前生涯の抱月は、質實な、寧ろくすんだやうな日常生活を送つてゐた人である。その家庭がいかにも暗かつたやうに云はれてゐるが、自分の學生時代訪ねて行つて、談し込んだりして、つい晝時になつたりすると、何時の間にか注文されたそばを、先生手づから運んで來て、勸められた事なども記憶に殘つてゐる。學者肌の無頓着のところから來てゐやうが何んだか下宿生活と云つた風の氣の毒な思ひもさせられたものである。少し長座をすると、先生があくびをするといふのは可也、有名なものであつた。何處か倦怠した氣分が瓦斯の發生するやうに體の内に溜まつてゐたものであらう。それが後生涯で爆發したのだ。

學校の教室での講義は、ノートの一章を讀みながら、解説して行くと云つた調子で、あまり雄辯ではなかつたが、明晰な理路の立つた說き方で、折々引き入れられるやうなところもあつた、文壇に立つては、燃えるやうなアンビツシヨンがあつた爲に、黨派心が強かつたとも云ふ人がある。さうした處もあつたか知らぬが、一面自分自身で苦學の體驗も持つてゐる人だけに相當に人の世話もしたり、面倒も見たものである。一體が寡默で、陽氣のところのない、哲學者風の思索頭に出來てゐたから世話に砕けた通俗ぶりはめつたに見られなかつたが、それでも學生間にいつも人氣のあつたのを見ると、さういふ中に自づと一種の魅力をもつてゐたものであらう。

後生涯のやがて始まらうとする頃であつた。「學校の講義なんか實につまらない、毎年同じノートを繰り返し〳〵てよくも良心に恥ないでゐられるものだ」と自分に向つて教師生活の不滿をしみ〳〵洩らされた事がある。いつも鋭い理智で自己の生活を批判し、分析しつゞけた果てが決然、前生涯を破壞し去つて、後生涯を新しく切り開いて行く動機の主なものであつたに違ひない。悲劇的な生活と、境遇とが、軋み合つて、火を發したのが、そこにあの一大回轉機を作つたのである。

後生涯の抱月は、もう書齋の人でなくて、巷に立ち續けて行つたのだから、その日常生活も、如何にして須磨子を生かし、藝術座の事業を活かすといふ營みの爲にのみ費されたと

云つても善い。しかしその質實な、性來の學者肌には別に大した變化は來なかつた、派手だとか贅澤だとかいふ事を衣服や食物の上にひけらさうとする浮ツ調子なところは少しも見えない。唯、傍から氣を附けて、元のまゝの書齋人でなく、一面の社交人としての相當の身裝をさせるのには、決して逆らはなかつた、その邊は素より聰明な、才氣のある人だから、世間相手に調子を合せる丈けの事は、凡てに於てぬけ目なくやれて行けたのである。

何んと云つてもその後生涯は、戀愛と事業とを一つに結び附けて、そこに全自己を表現せんとする必死の鬪ひであつたから、自然、須磨子が生活の興味の中心ともなり、又その生命の片われでもあつたのは事實である、それが爲めに、愛と性との軋み合ひの苦みがその日常生活にも執念く附き纏うて離れなかつたのは又止むを得ない一つの運命と云つても善いであらう。

別居はしてゐても、正式の妻がある爲めに、公然結婚が出來ないといふのが須磨子の普通の女らしい苦みであり、又それにいろんな疑心暗鬼を跳らせる一つの暗影ともなつた。それが折に觸れ、場合によつて屢々抱月の心身を厓げる械となつた。藝術座の内部が何時もゴタ〱して、俳優が出たり入つたりしつゞけたのも、大抵の動機は斯うした性の暗鬪が、いろんな形の波紋を描いて、擴ろがつて行つた處から生じてゐるのである。

それでも抱月は何處までも辛棒強く、忍苦をしつゞけたものである。そして大きな愛で須磨子を抱容して行つた態度の中には、涙のこぼれる程の至純さがあつた。地方巡業の折には、自分自身で筆を執つて、須磨子の爲めに廣告の看板を書いたり、須磨子の踊りの爲めの、舞臺が汚いといふので、自分自身で雜巾を取つて、その板の間を丁寧に拭き廻つたりした程である。

旅先の宿屋などでは、自分も大抵一つ部屋で寢泊りしたが、朝刊の新聞を自分はいつも床臥の中で仰けになつたまゝ讀んでゐた。抱月も次第にそうするやうになつて、「君の習慣にかぶれちやつた」など云つたものである。それから夕食の膳の上では、大抵お互に一酌する。酒はあまり行けなかつたが、しまひには相當、手が上つて行つた。心臟が弱い人なので、これはあまり善い事ではなかつたに違ひない。山上りなどは自身で避けてゐたし、坂路などにかゝつても餘程苦しさうであつた。流行感冒にかゝつて、あゝして脆く亡くなつたのも、やはり、心臟の故障があつたから、引ツ耐へなかつた

のである、つまりあそこが致命症になつた。

抱月はその前生涯と後生涯とを通じて、外面は温和さうな、はにかみやで、控へ目に見える質の人ではあつたが、底には一貫した意志の力と、聰明な材機が閃めきつゞけた非凡な性格の所有者であつた。殊に後生涯は、内が外を破つたのである。全人格がそこにむき出しにされて、社會の非難と、賞讃とが雨あられの如くたゝきつけ、吹きつける中を平氣で昂然と濶歩して行つたのである。そこに一個のヒーローの大きな影があつた。あまり朗かな笑ひを持たない、そして内心の淋しみがその眉宇の上に現はれた日常生活には、別に光彩を放つものとてはなかつたが、而もそれが舞臺の上の、須磨子の身の周には赫々たる光日の流れとなつて放射されてゐたのである、抱月の魂の力が、そこで始めて躍動しつゝあつたのである。

紅葉山人とその夫人

德田秋聲

故人紅葉山人の家庭生活について何か話すやうにとの事だが、大分古いことでもあるし、私は泉や小栗や柳川諸氏のやうに玄關にゐたわけでもなく、家庭生活の內部など知る機會が少なかつたので、生憎材料をもつてゐないが、少しばかり言つてみよう。無論間違もあるかも知れない。

私はこの間幾年ぶりかで、先生の芝のお宅を訪ねた。一體ならもつと時々お訪ねしなければならないのだけれど、又さうしたいとも思つてゐるのだけれど、しかし遺族の方は幸ひに皆んな幸福で、地下の先生に氣を揉ませるやうなこともないし、私も年々生活が復雜になるばかりで思ふやうに行かない。で、この二月かに一寸行つてみると、あの邊は火災もなくて、奥さんは實家の近くに相變らず平和に暮らしてゐられる。令孃達にも夫々子供さんがあつて、末の令息は四月には帝大へ來られるといふ譯である。「先生がいらしても此れ以上

はね」と、奥さんは何うにかかうにか故人を辱しめないだけのことはしたといふ意味で、三十年の長いあひだ張詰めて來た御自分の勞苦を仄めかされた。私もそれにはつひ頭が下つて、心から讃めておあげしたいやうな氣がしたのである。「紅葉全集」の收入と、夫人の實家の保護とで、それができたのだが、しかし夫人の氣持が少しでも浮ついてゐたり、我儘であつたり、贅澤であつたりしたなら迚もさうは行かなかつたらうと思はれる。

これは又先生存生の時分についても言へることだと思ふ。先生自身の藝術はあのやうに華やかなもので、生活なんかは何んなに派手で贅澤なものであつたらうと思ふ人もあるかも知れないけれど、事實は寧ろ反對で――勿論慘めでも吝臭いものでもなかつたけれど、家庭生活としては、可也善良な質素なものであつたのである。せい／＼堅氣な、ちよつと中流どころの官吏か何かの家庭と言つた工合で、餘分な衣食住や世間的な享樂に費やされる冗費などは殆んどなかつたのである。生活の上に先生が非常に責任感の强い人であつたからではあるが、かうした堅氣な家庭氣分はしかし重もに夫人の教養から來てゐるので、經濟の立て方などが、あの頃の若い奥さんとしては、實に行屆いたものであつたやうに思はれる。

それで「論叢」の月給と春陽堂あたりからの收入で、社交や人の世話などにも、それらは重もに先生の心持の問題であるのは勿論だが、物質的にも相當の犧牲を拂はれたことゝ信ぜられるが、それらのものも先生はいつでも用意しておくことを忘らないやうに、老人夫婦、書生などもあつて、しかも尚いくらかづゝの餘裕を生じてゐたのは、先生の心がけもよかつたには違ひないが、夫人が絶えず氣を散らさずに引締めてやつてゐられたからだと思ふ。それでその範圍内で、出來るだけ家庭生活の怡樂は豐富にされてゐたわけで、それは亦決して先生の趣味性を虐げるやうなことのないやうに、約やかに洗錬されてゐたのである。たとへば食物なんかがそれで、食膳に上るお惣菜の煮物などは贅澤ではないにしても、可也手のかゝつたものであつたと思ふ。好い意味の健全な都會人の家庭主婦としては、先生の奥さんなぞは理想的といつてもよかつたので、先生も人の想像するほど、その頃は料理屋などをさうのべつ漁つてあるくと云ふやうなことはなかつたわである。私はいつでもさう思ふのであるが、婦人として何んなに立派な學問教養があつても、漬けものゝ味がわからなかつたり、醬油や味醂や砂糖の使ひ方に、微妙な趣味感の働きがない細君と、長い生涯を共にしなければならないやうな良

人ほど慘めなものはないだらうと。先生はさう云ふ點では幸福人であつたのである。

夫人は芝居など觀ようと思はれたことは、一度もなかつたやうである。一緒に外出されたことも、私は一度も見たことがなかつた。それは少し何うかと思はれるけれど、夫人は家庭以外に、何を求めると云ふこともなかつたのである。着ものなぞも勿論さうで、嫁がれてから自分の着ものを作られたと云ふことも、ほんの偶のことだつたらうと思はれる。足袋なぞ、少しだぶ〳〵した方が持ちがいゝと言つて、皺の寄るのを平氣ではいてゐると言つて、先生が笑つてゐたことがあつたし、コオトなんかも、その頃氣のきいた人はみんな着てゐたが、奥さんは着られなかつたやうに思ふ。本來の家庭的教養がさうだつたのであらうが、藝術家の夫人としてはづゐぶん犠牲的な心持のあつた人だと言はなければならない。それだけに又早く先生に訣れたことが、痛々しいわけである。

樋口一葉女史の家庭

馬場孤蝶

(上)

樋口一葉女史は明治五年に生れたのだから、一番上の兄さんの泉太郎氏が亡くなつた時には、女史は數へ年十六であつた。次の兄さんの虎之助氏は他家を繼いでゐたので、女史が樋口家の相續人になつた。お父さんの則義氏の亡くなつたのは、それから二年後の明治二十二年であつたのだから、女史は數へ齡十八で樋口家の戸主になつたのだ。

今の男女は十八九ではまだ子どもだけれども、當時は十五六でもう大人として扱はれた封建時代を去ることさう遠くはなかつたのだから、そして、女だと十八では子ども一人位あるものは殆ど一般といつていゝ位の時代であつたのだから、

殊に女世帶の家のことであつたので、女史はもう唯一の娘さんといふのではなく、若いながらも、女戸主としての責任を感じてゐたことは確であつたらうと思はれる。

けれども、お母さんの瀧子刀自が居られて、女史をば若い娘として監督してゐたのだから、女史が全然女主といふのではなかつた。だから、女史は女主と娘さんとの間位の位地にゐた譯で、さういふ位地は女史の一生を通じて續いて、唯後年になる程、女主としての位地が自然に少しづつ重くなつて行きつゝあつたものと見るべきであらうと思ふ。

女史の日記は二十四年の四月十一日に始まつてゐる。女史自身の書いたところによると、中島歌子氏の門に入つたのは明治十九年の八月といふのだから、二十四年の四月にはもう中島刀自の歌塾では可なり重んぜられる位地になつてゐたらしく見える。日記の始まつてゐる頃には、女史の一家は本郷菊坂町六十番地へ引き移つてゐた。女史は其所から一週一度中島氏の家へ稽古に行くのであつたのと、同年の四月十五日入門した半井桃水氏のところへ通ふのとの外は、家にゐて、なみ〳〵の女らしい仕事をしてゐた。けれども、おつ母さんは居られたし、妹さんの邦子君も十八になつてゐたのだから、一葉女史自身が臺所の仕事をしなければならぬといふのではなかつたらうと思ふ。

日記の始め頃、即ち二十四年の四月から夏へかけてのところには、小説の起稿、讀書、圖書館通ひ等の勉學に關する記入が多いのだが、それでも、七月二十二日のところには、

『……午後一時頃師の君のもとより端書來る、縫物の依賴なれば、直に行く、單物を持來る。夕刻まで縫物をなす…』

とある又その翌二十三日と二十四日のところには、

『……午前の内に浴衣一枚縫終りぬ……』

『午前にかいまきの綿入を直す……日沒針仕事終る……』

とある。邦子君の方は蟬表を作る內職をやつてゐた。蟬表といふのは、駒下駄に貼る籐表のことである。

八月三日のところに、

『……國子當時蟬表職中一の手利に成たりとの風說あり…』

所で、二十五年の五月になると、一葉女史自身もその內職をやらうとしたらしく、次のやうな記入がある。

『十日　より蟬表內職にかゝる』

『十一日　おなじく』

『十二日　おなじく』

これは、生計がだん〳〵苦しくなつて來るに拘らず、作る小說が金になるやいなや疑はしく想はれだしたので、內職を

やつてみやうといふ考へもあつたことゝ思はれる。單に邦子君の手傳ひといふのみではなかつたやうに考へられる。

二十五年の六月には、半井氏との間に何か關係があるといふ浮説が立つたので、同氏と交際を絕つことになつて、當時はまだ三宅氏には嫁してゐなかつた田邊龍子（花圃）女史の紹介で、原稿を『都の花』（金港堂刊行の小說雜誌）へ送ることにした。さういふ積りで作つたものは『埋木』が最初であつた。

二十五年の秋頃の日記には、大分緣者知人などから、金を借りたことが書いてある。

要するに、樋口家の婦人ばかりの生活は、何といふ程の收入もなかつたので、家に持ち傳へたものや、衣服などを典物として金をこしらへたり、知人から時借りをしたりといふ風で、かつ〱暮しを立てゝゐたものと見れば宜しからうと思ふ。二十五年の冬あたりからは、一葉女史の作物がとにかく金になりだしたのではあるが、それも金港堂の『都の花』一か所きりであつて、しかも一枚安いのは二十五錢少し高くなつて三十錢か四十錢位の稿料にしきや過ぎなかつたのだから、何んぼ物價の安い時代にしたところで、そんなことぐらいでは、とても暮しの立ちやうはなかつたのであらう。さういふ有様であつたので、女史とおつ母さんとの間には大分考への相違があつたやうである。二十六年三月卅日のところに、左の如くある。

『……早朝國子と少し物がたりす、我家貧困日ましにせまつて今は何方より金かり出すべき道もなし、母君は只せまりにせまつて我が著作の速かならんことをの給ひ、いでやいかに力を盡すとも世に買人のなき時はいかゞはせん、こゝかしこよりも只もとめにもとむるを兎角引しろいて世に出さぬこそあやしけれ、誰もはじめより名文名作のあるべきならねば、よしいさゝか心にいらぬふしつ有ともそはしのばねばならぬかし、たとへ十年の後に高名の道ありともそれまでの衣食なきやに過す、かゝる詫しき目見んよりはよし十圓取りの少官吏にまれ、かた襷はなさぬ小商人にまれ身のよすが定まれば憂きことはあらじ、などの給ひなすことのいと多し、不孝の子にならじとは日夜におもへど、猶かゝる心にも入らずしてかくわずらはしげにの給ふこと常の様なり、あなもつたいなのことや』

（下）

二十六年の七月になると、樋口家の人々は、いよ〱小商

賣をしようと決心して、家に持ち傳へた諸道具は勿論、衣服までも賣り代となし、外にも知人のもとで、金策をして、少しの資本を作り、同じ月の十五日頃から、おもに一葉女史と邦子君と二人で、家をさがして歩いた。十七日になつて下谷龍泉寺町――大音寺前――に一軒表長屋を見付けて、それを借り入れた。番地は三百五十八番地であつたといふ。日記には『間口二間奥行六間斗……雜作はなけれど店は六疊にて、五疊と三疊の座敷もあり……三圓の敷金にて月壹圓五十錢……』とある。

商賣は、荒物、駄菓子、極く一寸した玩具といふやうなものであつて、鑑札を受けることや、商品の買ひ出しなどは、一葉女史自身がやつた。

『多町へ買ひ出しに行くと、何處でも姉さんと呼びかけられる。自分はそれまでは妹からの外は姉さんと呼ばれたことはなかつたのだから、何だか自分のことではないやうな氣がして、調子が合はなかつた……それに、最初の日は羽織を着て行つたのだが、人がじろ〳〵見て、何だか極りが悪るかつたので、次からは、羽織なしで行つて、商品の箱はしようことにした』

そんな話を女史から後になつて聞いたことがある。

女史も勿論店へ出て、客に接したには違ひなからうが、勉學を諦めては居なかつたので、雨の降る客の少い日などは、圖書館へ行つたらしかつた。それで、店は主として邦子君が引き受けて居たのだらうかと考へられる。邦子君は針がよく利いたので、何時とはなく、廓内の縫ひ物を引き受けるやうになつた。日記の二十六年の七月から、同年末に至るまでのところが、眞の生活記錄として殊に面白い部分だと思ふ。

二十七年の二月二日のところに左の如くある。

『年始に出づ、きるべきもの〻塵ほども殘らずよその藏にあづけたれば、假そめに出んとするものもなし、邦子のからうじて脊中と前袖とゑりさま〴〵にはぎ合せて、羽織をだにきたらましかば、ふとははぎ物とも覺えざるやうに小袖一かさねこしらへ出たり、これをきて出るに風ふくごとの心づかひものに似ず、寒風おもてをうちて寒さ堪がたき時ぞともなく冷汗のみ出るよ、此月やいふべき金の何方より入るべきあてもなきに、今日は我が友のうちにてもこしらへ來んとて家を出づ……』

此の着物の件は今日から見ると、一見悲慘を極めたことのやうではあるが、常時では今日のやうには、人々が着物を氣にしない時代であつたので、一葉女史などそんなにまで着物を

なくしてしまつたのであらうと思はれる。

所で、二十七年に入つてからは、一葉女史の創作熱が餘程昂進したと見えて、創作に關することが、日記にところ〲記されるやうになつて來て居るのであるが、二月の十八、十九、二十日のところには、

『執筆いそがし、少說花ぐもり二十枚ばかりなる』

『淸書、午後平田君にむけ出す』

とある。『花ぐもり』は『文學界』に出た『花ごもり』である。

四月の末ちかくなると、いよ〱商賣を止めることに決して、二十八日に丸山福山町四番地に家を見付けた。

『……いよ〱轉居のこと定まる、家は本鄕丸山福山町とて、阿部邸の山にそひて、さゝやかなる池の上にたてたるが有けり、守宮といひしうなぎやのはなれ座敷成しとて、さのみふるくもあらず、家賃は月三圓也、たかけれどもこゝとさだむ』

『五月一日、小雨成しかど轉宅……』

一葉女史がその家に引こしてからは、女史の生活は全く作家の生活になつたと云つていゝと思ふ。『闇夜』以後の諸作は皆その家で書かれたのだ。女史の仕事は、創作以外には、中島歌子刀自の歌塾へ行つて、助手のやうな務をなす事や、自宅で幾人かの人々に和歌、國文、習字などを敎へる事とであつた。安井哲子氏はその當時の門人の一人であつた。

二十七年の夏頃からは、文壇に女史の知人がだん〱できだした。二十八年になつては、それらの客が隨分多かつた。女史はいつも快よくさういふ客を迎へて、談笑した。日記を見ると、一寸と意外な記事を見出す。女史は表裏の多い人であつたであらうか。さうではなからう。如何に嫌ひな人に對しても、面と向へば、相當に應對して歸すだけの寬恕の德はあつたのであらう。それのみならず、女史はその苦心に於ては、他人の位地、境遇、心持をよく理解することができたらうと思ふ。女史は心からは人を憎みはしなかつたと信ずる。

さういふ風に、かなり忙がしかつたのだから、女史は、縫物をしたり、臺所のことをしたりする暇はとてもなかつたであらう。さういふ仕事はみな大抵邦子君が引受たのであらうと思はるゝ。邦子君はその外に、縫ひ張りの內職位はやはりやつて居られたのではなかつたらうか。

福山町での一葉女史姉妹の家庭生活といふのは、一言にしてこれを云へば、姉妹が睦まじくして、よく老親—おつ母さん—に仕へてゐたといふところが、如何にも明かであつた。

しかし、生計は二十七年から八年の夏位までは、やはり苦しかつたらしいので、女史の戸主としての心やりはます〳〵多くなつてゐたやうである。

福山町の家は奧へ引つ込んだ家であつたが、入り口の木戸の近くに井戸があつて、その傍の家があの邊では一番大きい銘酒屋で鈴木亭といふのであつた。多分その井戸を樋口家の人々も使つたのであらうと思ふが、鈴木亭の女どもとも心やすくなつたものと見えて、女史は鈴木亭の爲めに、柱掛やうの看板に『御料理仕出し仕候』と書いてやつた。二十八年の一月の始め頃のことであらうと思はれるが、『しのぶぐさ』のなかに、

『となりに酒うる家あり、女子あまた居て客のとぎをする事うたひめのごとく遊びめに似たり、つねに文かきて給はれとてわがもとにもて來る、ぬしはいつもかはりてそのかずはかりがたし。

まろびあふはちすの露のたまさかは誠にそまる色もありつや

うしろは丸山の岡にてものしづかなれど、前なるまちは物の音つねにたえず、あやしげなる家のみいと多かるを、かかるあたりに長くあらんは、まだ年などのいとわかき身にて、終にそまらぬやうあらじと、しるごと折々に聞ゆ。

つまごひのきゞすの鳴く音しかの聲こゝもうきよのさがの奧なり』

『にごりえ』は福山町の女史の住居のあたりの空氣をもとにして描寫した作品であつて、お力のモデルは、その文を書いてくれと云つて女史のところへ來た女であつたといふ。『うつ蟬』も、女史の隣の家へ移轉して來た若い狂女をモデルにして書いたものである。

もう今日になつたらば書いてもいゝだらうと思ふのだが、『われから』のお町のモデルは故島田三郎氏の最初の夫人であつた政子であらう。これは一葉女史と中島歌塾で同門であつた。けれども、事實が『われから』そのまゝといふのではなかつたであらうと思はるゝ。

福山町の四番地は一葉女史終焉の地であるが、家は明治四十三年に後の崖が崩れて潰れてしまつた。

課題は一葉女史の家庭生活といふのであつたが書いてみると、こんなものになつてしまつた。

書くべきことも、書きたいこともまだたくさんに殘つてをるのだが、課せられた枚數をもう餘程超過してゐるので、遺憾ながら、これで擱筆する。

禽獸論を喜んだ父

國木田虎雄

家庭に於ける父について何か思ひ出ばなしのやうなものをとのお話であつた。私もその時十枚ぐらいならばなにか書くこともあるだらうとお受けしてしまつた。

ところが締切りを明日に控へて、まだ私は、夕方にはなる、かくれんぼの相手は見つからないと云つたやうに、原稿紙を前にして、うろうろと忘却の暗がりの中に父の顔を求めてゐたのであつた。

實際「一つ二つ三つ……」私が眼を閉じて父の聲や身振りを感じることの出來る數はそれ以上ではないであらう。それも一枚一枚と寫眞を繰つて見るやうな短い思ひでばかりである。――笑ひ顔や、青筋を立てゝ怒つてゐる顔や、もつと恐ろしい怒鳴聲や、それすらも懐しいままに、何時であつたか已に書盡してしまつてゐた。

仕方なしに私は青果氏の編纂に成る父の病床錄を開いて、昔を思ひ起す何かの暗示もがなとあまり熱心ではない探求の眸を、その烈しい言葉のページの上に彷徨はせてゐた。

暫くして、私の眸はふと一つの斷章にぶつかつた。そして思はず頬笑んだ。私は一つの思ひ出を手にすることが出來た。

私をそれに導いた一聯の言葉よ、私は心から感謝する……が、見れば見る程お前は全く變つた風彩をしてゐる……

「女は禽獸なり、人間の眞似をして活く。女を人類に分類せるは淺き動物學者の謬見なり。」

これがそれである。然し私は決してこの亂暴至極な言葉が形造る觀念に賛成を表するものではない。私の思はず頬笑んだのは、この所謂禽獸論なるものを、しきりにやつてゐる父の顔を思ひ出したからである。

それは我々一家が東大久保に居た頃で、已に父は身體を惡

くしてゐた。

その顏……それは醉つて眞赤になつて、安らむぷのまんまるなほやの高さで、盛んに搖れてゐた。（父は背が低かつた五尺一寸そこそこであつた。が、正直で負惜みが强いので何時も背のことになると「小栗よりは高い」と言つて僅にいばつたが、風葉氏も「獨歩より高い」と、これは青果氏の話されたことである。そして「どつちにしても一分か二分の違ひだつた」さうである）。父は口角泡を飛ばして論じてゐた。食卓を距て〻それを謹聽してゐるのは母と姉と私とそれから女中と看護婦とであつた。

父は怒鳴る。

「女はけだものである。しつぽがある。だから可愛がつてやれば嬉しがつて尾を振るのである。そして怒鳴りつけると（盛んになぐりつけさへもした）どんどんと逃げ出して行くのである……」

が、これは私のいまの想像である。私はただ「けだものである。しつぽがある。しつぽを振る。」と云ふやうな言葉を幽かに記憶してゐるだけである。

君よ、その時私に、父の言葉が解つたかと問はれるのか。事實六歳の小供がどうしてその言葉を理解し得やう。然し私は感じた！私はここにその時の心の夢を持つてゐる。さうだ、私は君に答へるに「深く感じる爲に全き理解を必要とするのは小供の國の法則ではない。」と云ふ言葉を以てしやう。

その夢は二つに分裂する。それは二つの相異つた感銘の道を辿つたかのやうに見える。

一つは――私は心の何處かで、なるほどと思つた。何故ならば私は知つてゐた、當時八つであつた私の姉が、よく玩具のおねだりをして叱られて泣いてゐたのを、そして遂に買つて貰つてニコニコしてゐたのを。私は是等のことを考へた。ああ、彼女は私の三倍も玩具を持つてゐた。

一つは――その感動は深かつた。私は、女の人にしつぽがあると云ふことが不思議でならなかつた。私は何時も一緒に湯などに入つてゐたにも拘らずまつ白な身體に猿のやうなしつぽがある姉をふと想像した。私は恐ろしかつた「そんなことはない」私は心に叫んだ。それでも不安なので、そつと父に聞いてみた。

「姉ちやんもしつぽがあるの。」

父はいつまでも默つてゐた。が急に大笑をしながら私に答へた。

「此奴はまだ卵だ。」

私はそのとき、父がどんな顔をしてゐたか覺へてゐない。

私はただ思つた。

「そんなら姉ちゃんのしつぽは今に生へるのだ。」すると烈しい驚怖と氣の毒さでいつか涙ぐんでしまつた。どうしてこの時私は他の女に就て考へなかつたか？……そんことを今の私がどうして知らう……

それから後はどうなつたらう…私は思ひ出すことが出來ない。恐らくそれから後私はたぶん母の膝で睫毛を濡らしたまま眠つてしまつたであらう……

この二つの夢、私はその双方を信じる。小供等の感情や思案の、進行やぢやんぷは我々の時間と空間の法則の外にある何人か、ああ、泣ながら明るく聲立てて笑はなかつた小供があらうか……

家庭に於て極端に無邪氣な暴君であつた父は、何時か母の語つた言葉によれば、相手もなく獨り酒盃を手にする時、よく家中の女を前に集めて禽獸論を弄んでやつてゐたと云ふことである。其の話振りが實に面白いので人々は自分達がやつつけられてゐるのも忘れて熱心に聞いてゐたそうである。

今にして思へばこの父の、當の相手を怒らせもせず却てその亂暴な言葉によつて他を自分に引きつけ得たのは、やつつけはしても最後まで相手に憎しみの心を持つことを知らなかつた生れながらの性格によつたものなのであるのであらう……それは慥かに話振りの面白さのみからではない？私は一人の男が女性を前にして、ただ痛快淋漓として論じてゐる有樣を心に描いて幽かな頰笑を禁じ得ない。

最後に、私は父の書いたもので女性に對して彼の文字の使つてあるところを「渚」の中から舉げて見よう。

「愛嬌のある眼許をしてゐる。」可憐な田舍娘について――

「無論判然したことは言へないがお菊ちやんの相手は二人あるらしい。其の一人は漁船の若者で一人は或百姓の隱居と云ふことである。

行末は如何なるだらう。斯ういふ女は其場に臨んで行塞ると思ひ切つたことをするものである。若し二人の男に捨てられたら防波堤の鼻から飛び込み兼ねない。可哀そうに斯ういふ女は自殺の術を知つてゐる獸だ。それも優しい小羊だから猶ほみじめだ。――と僕は感ぜざるを得ない。」と――

書き創めから私は此の所謂自然主義的な「禽獸」と云ふ文

字に對して非常な厭はしさを感じた。それにも拘らずこうして書いて來たのは此の樣な「時代」の言葉を用ゐながらもその文字の影からそれを超えて何處となく滲み出す父の心情にそこはかとない愛着を感じたからである。

が、やはり人間に對して斯んな考察の形式を用ゐた「時代」が我々の過去にあつたといふことは假令に思つても慄然とすることである。

家庭に於ける漱石先生

森田草平

午前中二時間ばかりかゝつて「明暗」を新聞の一回分だけを書いてしまふと、今度は漢詩を一つ作られる。先生に云はせると、小説を書いてる間は、まだ泣いたり笑つたりする人情の世界を離れる譯には行かない。それで、人情を超越した世界に遊んで、魂の洗濯をするために、かうして詩を一つづつ作るんだと。これが先生の日課であつた。

木曜の面會日に、少し早く行くと、先生は日當りの好い縁側へ座蒲團を持ち出して、あの少し眼の縁の爛れた、充血した眼をしよぼ〱させながら、欄干の下にちよろ〱生えてゐるとくさに、じつと見入つてゐられた。詩の出來た後であらう。

客が來れば、よく座談をされた。寶新生氏などは、お稽古が濟んでからも、歸るのを忘れて、半日位話し込んでゐることも好くあつた。晩年瀧田樗蔭君が、木曜日と云へば屹度畫箋紙や絹を持ち込んで、頻りに字を書かせてゐたことは、誰でも知つてゐる事實である。先生も又汗水を垂らして、うん〱唸りながら書いてゐた。何うして瀧田君にばかり書いてやるんだと弟子の一人がたづねたら、先生の答へにいはく、瀧田は第一おれの字を賞めてくれる、それから畫箋紙や絹を持つて來る。然るに君等は何も持つて來ない。畫箋紙はこつ

ちの持ち出しである。さうして書いてやつた上、分りもしない癖に、何の彼のと貶しにかゝるから書いてやらないのだと。

伊豆の修善寺で大患に罹られない前は、弟子どもは木曜日といふと大抵夜の一時頃まで話し込んでゐた。座談の間には先生も弟子もなかつた。で、ついうか／＼と話し込んで晩くなり／＼した。それからてく／＼本郷まで歩いて歸ると、鷄が鳴いて、夜が明けたものだ。

弟子どもには存在な人であつたけれど――弟子ども丶先生に對して存在でないとは云へなかつた――他人に對しては鄭重な人であつた。殊に婦人の客に對しては鄭重であつた。

家庭に於ける先生の生活と云へば、まあこんなものであつた。學校を止めて新聞社へ入られてからの先生は、大抵家にばかり引つ込んでゐられたので、家庭の外に於ける先生を見ることは、極めて稀れであつた。家庭に於ける先生の外には、たまに病院に於ける先生を見た位のものである。が、「家庭に於ける漱石先生」といふ問題を課した「女性改造」の記者の求められる所は、恐らくこんな事ではあるまい。「家庭に於ける先生」とは、「妻子の間に包まれた先生」と解するのが、恐らく正當であらうと思ふ。雜誌の性質から見ても、さうである。が、私は木曜日の書齋に於ける先生なら知つてゐるが、茶の間に於ける先生は餘り知らない。從つて私は問題を課せられた人としては、あまり適任でないかも知れない。たゞ先生自身、あまり茶の間の人でなかつた。徹頭徹尾、書齋の人であつた。妻の夫、子どもの父であるよりも、より多く弟子どもの先生であつたやうにも考へられる。少なくとも、私どもからはさう考へられる。この事は考へ詰めて行くと恐ろしいことになる。で、たゞそれだけに留めて置きたい。

夫としての先生、父としての先生は、「吾輩は猫である」に最もよく出てゐる樣である。勿論、苦沙彌先生がとぼけて、カリカツールにされてゐると同じやうに、夫人もお孃さん方もとぼけて、カリカツールにされてゐる。が、「猫」の中に描かれた場景を通じて、先生の家庭生活を考へる時、私にはそれが最も美しく懷しいものに思はれる。鼻毛を拔いては、一本々々本の緣に立てゝゐた苦沙彌先生から、「こら、白髮の鼻毛だよ」と云つて、夫人が見せられる所も好いではないか。泥棒が這入つて山の芋を持つて行つた翌朝、巡査が歸つてからの夫人と苦沙彌先生との問答も面白い。猫を煮て喰ふと云ふ多々良三平と夫人との問答は更に面白い。それから「招魂社へお嫁に行きたいんだけれど、水道橋を渡るのがいやだから、どうせうかと思つてる」とん子さんやすん子さんも可愛

らしければ、何かと云ふと、すぐに「ばぶ」と云つて喰ひついて來る坊ばたんも可愛らしい。眞個「猫」を通じて見たる苦沙彌先生の家庭は、この世に於ける最も美しく懷しいものの一つである。殊に私どもはそこに描かれた事件を知つてゐるだけに、空想と事實と、二つのものが一つに結び着いてしか考へられないのである。結局、先生の家庭生活が知りたければ、「猫」をお讀みなさいとより外に私には云はれない。

が、一方にかう事實があることも、本當に先生を知る上には閑却する譯には行くまい。先生は倫敦在留中狂人になつたと、友人によつて文部省へ報告されたことがあるさうな。これはたゞそうなである。處が、先生の周圍の者の中で、先生を狂人だと、少なくとも或時は狂人じみた所があつたと、一番深く信じてゐられるのが夫人その人であるとしたら、隨分異なことではあるまいか。尤も、わが國では、最も好く夫を知る者は必ずしも妻であるとは限らないから、夫人が信じてゐられたからとて、私どもは決してそれを信じない。が、兎に角夫人は、先生の病中、先生の神經を鎭めるために鎭經劑を醫者の與へる以上にだん／＼殖して行かれたこともあるそうな。これも考へ樣によつては極めて自然のことである。が、考へ樣によつては、又北歐の文豪ストリンドベルクとその夫人との關係を想はせるやうな事實ではあるまいか。私はたゞ本當に先生のことを知りたいと思ふ後世の研究家のために思ひ切つてこの事を書いて置く。

しかも、同時に特筆大書して置かなければならないのは、先生と夫人との間柄は決してストリンドベルクとその夫人との間に見るやうな、あんな凄じいものでなかつたと云ふことである。永い間の病中、夫人は好く盡された。先生もそれは感謝してゐられた。先生の作には「こゝろ」の中の先生に見るやうな、孤獨の生活を思ふものはあるが、ストリンドベルクの「痴人の懺悔」に見るやうな悽慘な夫婦生活を描いたものは一つも見當らない。却て「猫」のやうな樂しい家庭生活を想はせるものが厳存してゐることを、私は心から喜ぶのである。

文人藝術家の家庭

魯庵生

一體家庭といふは歐化風が吹いてからの舶來語であつて、原語のホームといふ氣分を現はすに適當した言葉は日本の在來の節用には無いのだ。が、ホームの本場の西洋でも實際は詩に咏はれるやうなもので無いのは小說や戲曲が常に家庭の葛藤を材料とするのでも證される。

ドコの國でも家庭といふは因襲の塊まりであつて、餘り芳ばしいものでは無い。因襲で生きてる老人や、因襲の束縛に無感覺であるものでなければ絕對的に家庭を讚美するものでは無い。多くの人が家庭に安住するに滿足で無くてアキラメであり或は鈍痲である。猶更因襲を輕蔑し無視する文人や藝術家は兎角に家庭の叛逆者となり破壞者となる傾向を持つてをる。

元來家庭といふは無料宿泊所や公設食堂のやうな唯だ起臥し飲食する生活機關ぢや無い。が、同時に詩や歌で咏ふやうなフエヤリー・ランドでも無い。能く落語家が云ふが、恁うして高座へ上つて、お茶を頂戴してイヽ心持になつて親不孝聲を出したり踊つたり跳ねたりしてゐますと、噺家て奴は自分の家でも朝から晩までぺらぺら饒舌つて大きな口を開いで笑つてるかと思召す方がありますが、之でも家へ戻りますと閻魔樣が鹽辛を嘗めたやうな苦い顏をして四角張つてますと。人を笑はせるのが商賣でも女房子の前ぢやノベツに變な手つきをして額を叩いたり駄洒落を飛ばしたりしてゐられるもんぢや無い。之が家庭の空氣である。且藝人てものは酸いも甘いも心得た極めて捌けた面白い氣象のものかと思ふと、案外捌けない口やかましい氣むづかし屋で、女房子に對しては一日小言幸兵衞を實地にやつてるものが珍らしく無い。

文人が矢張アレだ。書いたものを讀んでゐると能く人情を噛分けて世事に通じ、氣が捌けてゐて思ひやりが深く、萬事

に行屆いてゐて何をするにもソツが無く、其上にハデで陽氣で毎日面白笑止しく暮してゐるらしいが、接近して見ると案外で豫想が裏切られる。自然を咏う詩人が鼻持ちならない俗物であつたり、戀愛至上の讃美家が以ての外の遊蕩兒であつたり紙の上の解放論者が家庭では飛んでもない暴君であつたり、筆の先きのプロレタリヤンが資本家氣取で家族を虐使したりする。文人や藝術家の皆が皆然うだといふのぢや無いが、筆舌と當の本人と丸で別人であるやうなのが餘り珍らしく無い。

且文人や藝術家は得て感覺が鋭敏だから極めて些細な問題にも神經を尖らせる。普通人なら容易に看過する針ほどの事を棒ほどに感じて問題を大きくする。之が文人や藝術家の通有である。其上に文人や藝術家は常に空想を追つてるから態んな現状にも滿足出來ず、何事に對しても反逆的傾向を持つてる。言換えれば文人や藝術家は些細な事件にも堪へられないが、丸きり事件の無いにも平板にも亦堪へられない。焦躁や煩悶に苦みながら焦躁や煩悶無しでは生きてゐられないので、勝手に焦躁や煩悶の種子を絶間なく製造してをる。精神的にモヒ中毒に罹つてるやうなものだ。

加ふるに文人や藝術家は新聞雜誌や書肆の編輯局へ日勤する文人藝術家中のビジネスマンを除いては大抵毎日籠居してをる。書齋やアトリエを嚴鎖して容易に家族の出入を許さなくとも一つの屋根の下に暮す時間が多い以上は自然家族と顏を合はす機會が他の官吏や教師や商工者よりも多くなる。一日家を明けて夕方歸るから晩餐の食卓も樂しく、隔々の休日も面白く遊べるが、毎日朝から晩まで鼻を突合はしてゐては家族の團欒も飽き〳〵するし、お互にアラを發見する機會が多くなつて興を淡ますやうになる。

時折洩れる消息を聞いて岡目から想像すると、文人や藝術家の家庭は朝から晩まで文學や藝術の話をしたり、蓄音機を鳴らしたり、芝居や音樂會や展覽會へ出掛けたり、紅い灯の町を散策してカフエやレストランに夜を更かしたり、然ういふ歡樂を追つてばかりゐるやうに見える。當の主人公の外的生活には然ういふ半面を持つものもあらうが、内部に入つて見ると渠等の家庭の實状は決してそんなにノンキぢやない。物質に惠まれない渠等の生活は蓄音機を聽くよりも月末のやり繰を聽かされ、畫を見るよりも小遣帳を見せられる場合の方が多い。如何に米鹽に無頓着でも然う〳〵ノンキだぞをられない。芝居や音樂會へ家族伴れで出掛けるなぞは或る少數者を除いては夢のやうな咄だ。カフエやレストランへ入浸る

のは獨身者のする戯で、家庭を持つてゐるものには思ひも寄らない。畢竟するに彼等の巧妙なる自己宣傳と面白づくめの風聞子の輪に輪を掛けた流傳が花々しい幻影を作り出したので、文人や藝術家の實際の生活は一部の憧憬者に想像されるほど花やかなものでは無い。

此の如きは單に文人や藝術家の平均經濟力が低いばかりではなく、封建の餘りに道學的な家庭の遺風が文人や藝術家の家庭にすら今だ殘つてゐて累をなすのである。隨つて經濟力が許しても家庭としては餘りに享樂的な生活を許さないのである。青柳有美だか誰だかゞ、女房は家庭株式會社の支配人で趣味や享樂の遊び仲間ぢやないと云つたは日本の家庭の實狀を穿つてゐる。

朝三暮四を唯一の生命とする普通人なら然ういふ家事營業的生活をも滿足するだらうが、精神食餌の飽滿を文人や藝術家が此の白湯を呑むやうな家庭に堪へられるものでは無い。加ふるに自己本位の高慢や放肆や放縱が渠等の通有である上に、封建の傳統の暴君的家長思想が伴ふから、堪へられないのを忍んでガマンするやうな事はない。所謂三角關係や四角關係は然ういふ家庭の缺陷から生じて破綻を來すのである。家庭は本來が道德的結合であるから放縱な三角關係や四角關係では破壞すべきものでは無いが、餘りに道學的な重苦しい空氣も亦禍ひしてをる。

此頃の郊外の文化村へ行くとソックリ漫畫の材料に生擒られさうな新人同士の新らしい家庭の情趣を屢々見掛ける。井戸端で若夫婦してセレナードやバルカロールを合唱しながら、オールバックのロイド眼鏡が水を汲んでやると耳敝しの若い妻が米を磨いだり襁褓の洗濯をしたりしてゐる。主人が眞四角にシャチコばつてると細君が惴々焉と頭を下げて三ツ指突いて御機嫌を伺つてるのを家庭の禮儀と信ずる老人から見たなら餘り馴れ過ぎて顰蹙せずにはゐられなからうが、之も亦新らしく生じた醇風美俗である。

昔しは妻の不貞に基づかない離別の口實が家風に合はないといふ理由であつたが、今の文人や藝術家で家庭を破壞したもの〻重なる辯明は趣味の不一致である。が趣味の一致は一致しないに勝るが、趣味ばかりが一致したからつて家庭は圓滿に納まるもんでは無い。前記の井戸端で家事に服しながら合唱するといふやうな事は蜜月の名殘で、此愛樂が永遠に繼く乎ドウ乎は疑問である。

ワッツとエレン・テリーとの關係の如き、一は畫界の明星、一は梨園の名媛、藝苑に光輝を爭ふ牽牛織女の契合として二

人の結婚はドレほど祝福されたらう。渠等の結婚の花々しかつたのは丸で芝居を見るやうであつたが、趣味を以て相一致した二人は同棲後一年經たぬ間に別れて了つた。カアライルとジエーン・ウエルシユとの間は不和合では無かつたが、二人とも論客であつて其の贈答集を見ると綢繆纏綿の消息は見えないで互ひに論鋒鋭どく火花を散らしてをる。同じく趣味の一致であらうが、恁ういふ夫婦は珍らしい。星巖と紅蘭とは琴瑟和合してゐたのであらうが、啀嘩も屢々して別れ咄を持出す危い瀬戸際まで瀕した事もあつたさうだ。ユーゴオとドルーエとは小說以上のローマンスを作つたが、どういふわけだか終生結婚しなかつた處に融和出來ない何物かゞ有つたのでは無からう乎。

文人や藝術家は概して自我の念が強く、驕慢で偏狹で他人の批評さへ自分に不利な事を快よく聽くものでは無い。況してや家庭の爐側で敎へられるを喜ぶものは無い。中には善惡共に妻から自作の批評を聽くを好まざるものである。趣味の一致の滿足といふは矢張夫唱婦隨で、良人の文學談や藝術論を解つたやうな顏して感服して聽く程度である。夫より以上造詣や識見があつて良人と議論を上下する如きはカアライルのやうな哲人でなければ禁物であらう。ソラの夫人は終に一回も良人の作を讀んだ事が無かつたさうだが、之が爲めにソラは趣味の不一致の不平を洩した事は無かつた。ドストエフスキーは最初の戀に破れて後、相愛でも無い平凡な女を娶つたが、終生平和な家庭を樂しんで文藝の理解の無い女を妻とした不幸を歎息した事は無かつた。

之と同時に文人や藝術家ぐらゐ良人として始末の惡いものは無い。我儘で手前勝手で、世事に疎くて世帶の思ひやりが無く、其上に神經質で何でも氣を廻し、些細な問題に焦々する。嫌はれゝば猶更だが、愛されゝば愛されるで益々心を緊めなければならない。文人や藝術家の愛に抱擁されるといふはケツプに包まれてるやうなものだ。柔らくて温か味はあるがチク〱する。ソクラテスの妻のキサンチツプは悍婦の標本として歷史家からは惡婆のやうに叩かれてゐるが、キサンチツプには亦良人の頭に水でもブツ掛けなければ腹の癒ない理由があるのだ。氏名は今逸したがソクラテスの家庭を顧みない無責任や放縱を列べ立てたキサンチツプ辯護說が獨逸にある。文人や藝術家を良人にするものは罷り間違へばキサンチツプとならなければならない覺悟を要する。

日本の現時の文人や美術家が恁んな家庭を作つてるか自分は知らない。自分の知れる限りでは皆美くしい家庭を持つてる。が、爾ういふ美くしい家庭を作つてるものは必ずしも孟光伯鸞であるからでは無い。大多數は良人に仕ふる天の如く唯々として認從するを女の最善の美徳とする女大學式庭訓が依然女の道徳を支配してゐるからである。日本では昔しから「負けるが勝」と弱者のモットオとして敎へてゐるが、家庭に於ける女の勝利も亦「負けるが勝」を極意としてをる。隨つて男の暴君的嬌慢を風に柳と受流しつゝ女は庭訓往來式賢女的氣分を放散し、男は自づからにヒブノタイズされて家庭の善良なる好々爺となつて了ふ。之が卽ち日本の家庭の醇風美俗たる所以である。

が、文人や藝術家は因襲の忠僕では無い。水の方圓に從ふやうに一定の型に嵌められるを欲するものでは無い。渠等は往々にして反逆者であり破壞者である。文人や藝術家の家庭は岡目からは天氣晴朗一點の塵が無いやうに見えても何時ドコから低氣壓が起つて來るか計られない陰晴定めなき變調を常に姙んでをる。誰が恁んな家庭を作つてるかを一々實例を話さないでも渠等の作品が屢々其機微を洩らしてをる。

だが、一體美くしい家庭といふのは恁んな家庭を指すのである乎。四角四面にかしこまる古武士的女大學的なのが美くしいのである乎。井戸端で合唱しつゝ洗濯するやうなのが美くしいのである乎。夫は別問題だから他日に讓る

（十三・三・三十）



桑木嚴翼（帝國大學）
松原寛（日本大學）
古川竹二（女子高師）
渡邊英一（日本女子大學）
石原謙（東京女子大學）
千葉龜雄

本年の卒業論文と男女學生の思想傾向

千葉　いつの會でも改造社の山本氏が來られて司會をするのでございますが、山本氏はこの二三日病氣で休んで居られますので、突然私に司會のやうな事をやつてくれと云ふ譯で、甚だ潛越ですが、私が代つてやります。改造社の考へでは三四月は男女學生の卒業期ですが、卒業生は卒業してからどうするか、また、卒業してからの社會をどう見るか。最もよく現代青年兩性の、色々な思想傾向が現はれるのは、この卒業期などであるから、その思想傾向の現はれ

を伺ひたいと云ふ風な意向でございます。併しそれではあまり漠として論點を何處から持つて行つたら宜いか分らぬやうなことになる。それで丁度皆さんが御覽になつたことと推察致しますが、御關係の諸大學における、若い兩性の方々の卒業論文と云ふやうなものに就て、御覽になりました範圍においての現代青年學生の思想傾向、延いて一般の思想傾向に就て御意見を伺ひたいと云ふ考へであるさうでございます。どうか其點をお含み置き下さつて腹藏なく御意見を伺はせて頂きたいのでございます……それでは、桑木先生から御感想を……。

桑木　むづかしい問題のやうでございますが、さう深く考へて居ませぬ。只一寸考へて來た事を申上げます。實は可成り長く教師生活をやつて居りますから、試驗をしたり論文を見ると云ふこともないぢやない。可成ある、論文となると餘りさう特別に面白いやうな話もないのでありますが、先づ第一に思ひ出したのは試驗の事です。二三年前にある米國の雜誌に出て居たのを讀み半分に私が譯したことがありますが、それは「大學教授の或一日」と云ふので丁西倫理に出した事があります。亞米利加の大學教授の俸給は、無論日本などに比ぶれば高いのですが、それでも勞働者に比べたら非常に少ないと云ふことを種にして、それからいろ／＼なことが出て居る。或朝友達が來て、勞働者の俸給が教授のよりも高い事などを聞いて聊か不平の心を起した。學校へ出て見ると教授會で相替らず詰らぬ問題が起つて居た。それでも形式的の處分を終つて倶樂部で食事でもして試驗の調べをしようと思ふ所へ昔の友人がやつて來た、それは實業界に入つて大變羽振の宜い人で「何だ試驗の答案を見てゐるのか」と云つて自分達が學生時代にあつた事を思出して話し出した。其時分の哲學の講義は、何だか少しも分らぬ。ヘブライ語でゝも話してゐるのではないかと思つたこともあつた。さうして其先生が非常に辛い點をつける。所が其次の學期に何年振かで其先生が子供を持つたので、學生が一同奔走してお祝ひをやつた。それから大變御機嫌がよくなつて、學生の成績も大變よくなつた。點も甘くつけてくれるやうになつた。「先生なんてものはあんなものだ」と言つて毒舌當るべからざるものがあつてその友人は今は忙しからうと言つて歸つて行つた。其頃又その大學教授が答案を見ると、アリストテレスがキリスト教を開いたとかソクラテスがプラトーの弟子だとか云ふやうなトンチンカンの答案が多い。まア自分の講義もまづ

いには違ひないが、さう間違つた講演はした事はないのに、又學生もさう低能でないのにどう云ふ譯だらう、斯うして見ると自分の數へ方が惡かつたのかとも思はれる。矢張り勞働者より俸給が安いのも無理はないと、初めて悟つて家路に就いた、と云ふやうなことが、非常に面白く書いてありますが、其話を思出して私の感じた事は、今の學生は、餘りに近頃日本で出版された物を讀過ぎる。其せいか西洋人の個有名詞のスペルの間違が非常に多い。是は昔からもあつたのですが、今年なんかは特に氣が附いた、悉く正確に書く人が寧ろ少ないかとも思はれた。それも無論餘り著名でない人なら兎も角も、例へばヘーゲルなどを Hegl と書いてある。ひどいのは Högel などとも書いてある。斯う云ふ人が先生になつて黑板に此通り書かれては大變である。兎に角RとIの區別などは殆どつかないでどちらでも自由自在に使つて宜いものと思つて居る人もある。デカルトなどを Decalt と書いてある。斯う云ふ人は必ず日本の本で勉強してゐるからで、是ではどうも困ると云ふやうな感じを持ちました。日本の文運が興隆して書物が澤山出來ると云ふことは、宜い事なのですが、それが爲めに西洋の物を研究する時に西洋の物を讀まないで、日本の物でやつて仕舞ふと云ふことがあるのは困ると思ひます。是は學問の研究の仕方に缺點があると云ふことを、つく〲感じました。

それから是は試驗の事でありますが、論文などの材料の選び方にも其の影響が見えます、日本の書物を參考にすると云ふことは無論い丶事ですが、相當專門學校なり大學を卒業する人は、自分の論文に就ては多少確信がなければならぬ。手取り早くやると云ふのは、是は考へ物だと思ふ。一體論文を書くと云ふことは、私共の學科には餘り必要としない。西洋の哲學とか、文學とか、歷史とか云ふものは、先づ本を餘計讀むと云ふことが必要であり、又それを讀むのが中々骨が折れる。中々論文所ではない。題目に於て、調べた事だけで論文を書くと智識が偏挾になつて仕舞ふ。尤も學科に依つては論文の方が最も必要になるでせう。又我々の學科の方でも中々立派なものを書いて居つて、我々が敬服してゐる事もある。今申すやうに惡い所もありますが、それ〲の方面に於て中々感心するやうなのも澤山にあります。それは論文の一般の感想であるが。最後に論文に現れて居る材料の取り方に就てちよつと附加へて置きたい。去年あたり見た論文の中には、題目の選び方が、主として現代の事に限られて居る。現代の哲學の問題、哲學者

を取扱ふとか、さうでなければ極く古い所に行く人もゐる。中間の近世哲學、カント前後の哲學と云ふやうなことは、相當に研究はして居るのでせうが、それを論文の題目にして居る人が極めて少ない。今年は違ひますが、去年は著しくそれが眼についた。學生の興味が極く新しい所か、極く古い所かに行くと云ふやうなことを感じた。文學などに於てもさう云ふ風な考へ方があつて、極く古い文學に興味を持つ人もある。是は論文ばかりでなく一般の社會に於て見る事だが、現代の事を理解するには其より少し古い所からやらなければならぬ。是等は現代から見れば畢竟踏み臺になつてゐるのですが、其は又極めて必要なものなので、其中からも非常によい材料が得られるものである。所が學生に言はせると其邊の所は論文に書いても目立たないと云ふことがあると思ふ。それが論文を作るに就ての弊だと思ふ。其等の點から論文制度も宜い事もあるが弊もあると學問上感じて居る。更に進んでそれが思想問題とか、職業問題とかに關係があるかと云ふことは、私のやつて居る所では特別に申上げるやうな事はありません。

渡邊　私の方にも卒業論文と云ふのはありますが、私の調べてゐるのは、一少部分ですから、全體の傾向と云ふやうなことはよく分りません。しかし思想方面については桑木さんが御存知でございます。

桑木　私は女子大學のは今年三つしか見ませぬから、全體の事は分りませぬが、題目は生命に關するとか、それからオイケンなどの宗教的意味に富んだ哲學などに關するものでありました。是は材料の取り方が限られて居ますが、殊に缺乏を感じて居るのは語學の力がないことで、どうも有も觸れた本が主な材料になつて居るやうに思はれます。それでよく參考書などを聞かれるけれども、それは日本語で書いたものと云ふので材料が狹くなる。尤も英語とか獨逸語とかで書いたものにしても、特に生命に關し、或は自我に關したものでどんな本を參考にしたら宜いかと云ふやうなことを聞かれると、私も實はちよつと出て來ない。西洋にも注文通りの參考書はないでせうが、殊に日本語で出來たものだけではないのですから、隨分論文を作るには骨が折れるだらうと思ふ。それにしちやよく出來て居るのもあります。尤も中には纒まつた本が中心の參考書になつて居るからでもありませう。全體に餘り理屈の混入つたものでなく、多少感情的な、センチメタルな、人生の深い問題に觸れたやうな感じを與へるやうなものが興味を惹くのでは

ないかと思ひます。此間或學生——それはオイケンや、ベルグソン、あゝ云ふ人に興味を持つて居る人であつたのですが、段々哲學の講義を聞いて居る中に自分の書いた論文だけでは不滿足を感じて來たと云つて居ましたが、さう云ふ風になつて來たのは進歩だらうと思ひます。

渡邊　私の見たのには、西洋の本を參考としたものはありませぬでした。それから氣の着いた事は、是は今年始つたことではありませぬが、此一兩年非常に自分と云ふものを深く見詰めて、自己の本質とか、自分の本當の要求は何處にあるかと云ふことを深く考へて行かうと云ふやうな傾向が大分多いのです。それと今年は題目などで社會問題的なものが多くなつて來た、或は私の見たものにそれが多いのかも知れませぬが。

千葉　それは各科を通じてですが、藝術の方に行く事はありませんか。

渡邊　社會問題、婦人職業問題、參政權、藝術と云ふやうな方面を、論文として書く者があります。それから宗教の方面も可成多いのです。

千葉　宗教は主にどんな風に解釋致しますか。

渡邊　宗教もいろ／＼な題目を取つたのがあり、中には佛教もあります。論文の中で秀いでたものは每年研究發表會で發表する事になつて居りますが、今年發表したものゝ一つに、マコ傳の研究などがありました。

石原　私も桑木先生や渡邊さんの言はれた事と大體同じやうな考へを持つて居ります。男子の學生の論文に就ては餘り多く知りませぬ。又私の見ました限りでは、學問的のものだけなので、其中から餘り思想の傾向などを知り得るやうなものが少ない。女子の方に就ても、餘り數多く論文を見た譯ではない。殊に卒業生の卒業論文などは一つも見ない。唯折々感想文のやうなものを書いて貰つたりした事が以前ありましたし、其他に平生教場で接したり、個人的に接した事から感じた事を申上げますと、問題の取り方が、男子の學生とは、五十歩百歩の違ひではありませうが、多少の違ひがあるやうに感ぜられました。それは教場で女子の質問する所を聞いて居りますと、先づ第一に質問する疑問が、一般に極く細かい點に於てゞあるやうです。例へば此字がどう云ふ意味であるかと云ふやうな字句に關する疑問で、其疑問から離れると直ぐに非常に一般的な廣い問題に移つて行く、たとへば一體人生と云ふものはどう云ふものであるか、自我が目醒めて來ると云ふものはどう云ふ風な

ものであるか、宗教はどうたと云ふやうな、簡單には答へる事の出來ないやうな大きな問題に移つて行く。無論男子でもさう云ふ傾向がないとは云はれませぬけれども、女子の方がそれが強いやうに思はれます。さうして中間と云つては誤弊がありますが、其間を行く疑問が女子の學生からは稀にしか聞かれない。例へば或書物を讀んで行つて、此等に於て論じて居る要點は何處にあるのであるか、これがどう云ふやうな問題を含んで居るか、此の問題に就てどう云ふ風に考へなければならぬのだと云ふやうな學問的意味を持つことに就ては、餘り疑問を起さない。小さい問題か、それでなければ殆ど其の著者の意志と離れて、直接に自分の内的な問題と結び附いて仕舞ふ大きい問題に持つて行く、さう云ふやうな大きい問題に注目するに到つたといふのは一つの進歩であるかも知れませんが、一方から云ふと、其の書物を讀んでも、十分に理解すると云ふことに、注意が向いて居ないことを示すやうに考へられる。是は矢張り質問の方法、疑問の起し方の上に於てまだ進歩する餘地があるのぢやないかと思ふ。つまり考へ方がインテレゲンチユアルでないと云つたら云ひ過ぎるか知れないが、さう云ふやうな傾向があるのぢやないかと思ふ。與へられた問題を、それ自身、客觀的に批判的に眺め研究し、それに就ての解決を望むと云ふやうな態度が乏しいやうに思ひます。

渡邊 女子には空漠な大きな問題を捉へて、内容の貧弱なものを書くと云ふ弊は確にありますね。

千葉 教育の缺陥が其處に來るのではないのでせうか。

石原 其もさうですが、自然教育法がそちらの方に引つ張られて來るやうになるのでせう。

松原 私の見ましたところではやはり男女の違ひもありますが、先づ今年現はれた論文のテーマの方から申しますと、私の方には社會科、藝術科、宗教科の三部に亘つて居りますが、社會科の方では主として社會現象の問題をやる人と、社會の本質殊に原理の方に行かうと云ふ二つの傾向があります。昨今著しく眼立ちますことは、民衆と云ふ風の言葉が盛んになつた結果か知りませぬが、物に對する民衆的のテーマが非常に多いのであります。民衆藝術例へば具體的に云へば活動寫眞なんかを藝術方面から見たり民衆娯樂と云ふ風な方面、寄席、活動寫眞なども社會現象的に見て行かうと云ふ傾向です。もう一つ藝術科の方面では露西亞文學が非常な興味を有つて讀まれ、それと藝術の本質

を論ずるか、然らされば露西亞文學に行かうと云ふ方に興味が非常にあるやうでございます。それは一つはデモクラシーに對する興味が一方にあるからでせうが、片方には哲學的に考へる態度と云ふものが濃厚になつて來て居るやうに思はれます。今お話の女子の問題でありますが、自己といふ問題に就いてよく考へると云ふやうな傾向が男子よりも女子の方に余計あることは私の方でも著しく現はれて居ります。それは最も具體的な影響としては個性の研究が女の方から現はれて來たと云ふことだらうと思ひます。それから私の學校は男女共學ですが、一體に云つて女子は男子よりも中途で止す率が多いやうであります。終りまで全うする女子になると大變勉強家でそれは男子よりも努力する傾向が余計にありますが。それからもう一つは去年までは左傾的の思想に興味を有つてゐる者が多かつたものですが、今年は學校の政策が徹底した譯でもありませうが、此左傾思想が余程少くなつたことです。今桑木先生が論文の制度に疑問を有つてゐると仰有いましたが私は寧ろ試驗制度に非常な疑問を有つて居ります。試驗と云ふものを何處まで信頼してよいものか、學生の方でも試驗勉強の爲めには非常に苦勞するやうであるし、答案を見る方でも試驗勉強以上の努力のやうに思はれる。もう少し本當の學生の力を見る方法はないか、それに就いては寧ろ私は論文の方がより適切ではないかと思はれます。試驗制度を根本的に變へる方法はないか、試驗の時に私の方針は暗記を成るべくさせないやうな方針を執つて居ります。學生のオリヂナリテイが成るべく答案の上に現はれて居るやうなのを採つて居ります。唯オリヂナリテイが現はれて居るやうなのは僅かに數へるばかりで、例へば教師の說に反駁を加へるとか、教師の說の不當なことを指摘すると云ふやうなのは一、二を數へるのみであります。高等師範部の試驗に就いて申しますと、特に眼につくのは、此部の生徒が教師の言ふことになるべく迎合しやうと云ふ態度が折々見えてゐることです。一面には大變試驗の答案は眞面目だと云へますが、成るべく先生の言つたことに合ふやうにと云ふ風な注意のあることは見遁されないことゝ思ひます。

渡邊　高等師範部の生徒の方は種が違ふのですか。

松原　私の方には小學校の先生が多い、其加減でもありませう。

渡邊　矢張り無試驗檢定をとる爲と云ふやうな影響が大分あるのでせう。

松原　さう云ふ目標が大いに影響するだらうと思ひます。

古川　私の方は論文がないのです。女學校の專攻科と英文科にはありますがそれは能く存じませぬ。女子高等師範の方は卒業試驗でやつて居ります。それで一般に通じた思想と云ふことは吾々の學校では認められないやうであります。文科、理科、家事科と分れて居りますが、それ〴〵特徴があり非常に異つた傾向があります。同じものを敎へましても——同じものを文科、理科、家事科を通じて敎へましても答案を見ると矢張り趣味が違うと見えて答案の書方が違つてゐますが、文科の方は一番新しい文化的思想などに關係して居ります。理科の方などはもう理科で固つて居るやうであります。毎日の宿題や何かで思想などを求める暇はないやうにも思はれます。又學校を出て東北大學あたりへ行くのは殆ど理科を出た人ばかりであります。家事科の方は矢張り一番溫順しい傾向がある。學科の性質がさう云ふ風に出來て居りますからそれは仕方がありませぬ。さうして今文學の方で一般の生徒が精神科學の方の空疎を愬へて居ります。哲學的方面の學科をやつて貰ひたいと云ふやうな希望が盛に出てゐます。哲學概論とか、哲學史と云ふ講座の組織が今のところ完全でないので、これはどうしてもやらなければいけないと云ふので早晩やることになるだらうと思ひます。さう云ふものを求めて其內容がどう云ふものだか判きり知りたい、さうして自分の人生觀をしつかり作つて置きたいと云ふやうな思想を有つて居ます。文科の生徒は大抵さう云ふことを申して居ります。特に優等な學生にはさう云ふ慾求が盛んだらうと思ひます。

千葉　それでは貴方の方では哲學の講義がおありぢやないのですか。

古川　これは毎年繰返すことで、文部省へも申出るのですが、なか〴〵文部省の學科規定がむづかしいやうです。學年は矢張り四ケ年でありますが、二年頃までは非常に迷つて思想的にそんな煩悶を持つてゐるやうです。私達は此儘あと二年やつてどうなるだらうかと云ふやうなことを言つて來る生徒があります。さう云ふ生徒は良い生徒に違ひないが、さう云ふ疑問を有つことが一般に通じて居るかと云ふことは判斷し兼ねますが、いろ〳〵結婚のことゝか云ふやうなことに對する考へも近頃では變つてきて機會があれば急いで結婚しようと云ふ考へが多く、獨身主義を云ふやうなことはないやうであります。義務年限が二年ばかりあるが、それが濟まないでも機會があれば結婚するやうな傾向であ

ります。四年などになると思想が堅實になつて、今まで隨分自由思想を有つて居つた人でも卒業頃になると矢張り自分のこれだけの教養では果して人の子を教へることが出來るかどうかと云ふやうなことを心配して居ります。それから又入學者までが大變元とは變つて來たやうで、元は教員になるのが目的で入つたのが近頃では學問をしたいと云ふとで入るものが增えてきたやうです。さう云ふものでも二年位は先生をしなければならぬので、自由的な考へからすると束縛を感じて居るやうで能くさう云ふ不平を聞くこともあります。それから一體に私の方の生徒は教員養成でありますから社會的の活動力と云ふやうな女子大學あたりの人がなさる方面の力がないやうであります。一人〳〵としての活動よりも團體としての活動が下手な譯であります。彼の震災の後で大分調査をいたしましたが、さう云ふ方面に私共の方はもつと修養した方が宜いと思つて居ります。

渡邊　松原さんのさつきのお話のやうに私の方でも一體に露西亞文學が一番喜ばれてゐるやうであります。

松原　一つは露西亞物の飜譯物が多いせいでもありませうが、一體に英文學よりも露西亞文學に向つて居るやうであります。

古川　私の方では語學が非常に少く、一週間に三時間しかありません。それでは卒業して何にもならないので、それも生徒は隨分要求して居ります。免許狀を六つ位貰つて出るやうな人もありますが、もう少し專門的の語學をやらねばいけないと思つて居ります。

渡邊　與謝野晶子さんの思想のやうに婦人が人格的に獨立を保つ爲めには經濟的の獨立を必要とすると云ふやうな主張を深く考へると見え、今年の論文などには特にそれが多かつたやうであります。經濟的の獨立を保たなくては婦人の人格は保てない、即ち職業を有つべきだと云ふやうな結論になつて居りますが。

千葉　家族制度に對してはどう云ふ風な考へを有つて居りますか。

渡邊　勿論從來の因襲的思想には反對の傾向が多いのであります。

松原　もと家族制度の研究をやつた人もありましたが、別にオリヂナルな考へが出てゐた譯でもありませんでしたが、從來の家族制度に對しては殆ど論理なく反抗してゐるやうです。

石原　思想としてはさうでありませうが、實際問題になると

隨分苦しんで居るものがあるやうであります。

千葉　桑木先生などにはさう云ふいろ〳〵な煩悶を愬へて來るでありませう。

桑木　いろ〳〵なものがあります。

千葉　結局どう云ふ風に解決が附くのでありませうか。

桑木　矢張實際生活に入ると負ける場合が多い。さうでない人は不幸になるのです。

千葉　どうしても最後に於て突き詰めた人生の信念を實際に屈從させることが出來なくなり、その矛盾になやんだ結果、自分を破壞して了ふまで行くといふものも現代では澤山あるではないでせうか。

桑木　それはさう云ふものもあります。

松原　それが本當なのでありませうか。自分の思想に終始する態度のものは少ないと思ひます。思想に負けると云ふ風な人が多い。

渡邊　それだけ意志を強く持つ人は少ないやうです。一つは自分の思想に徹底してこれが眞理だと云ふ確信を得るところまで思索を掘り下ていつてゐないからでもありませう。

桑木　理科の方の學生や英語などを勉強してをる人は、例へば科目の中に倫理があつても數學があつても、先生が餘り甘いことも云はないので、英語が出來れば英國の小說を讀むロシヤ語が出來ればロシヤ物を讀むと云ふ風に、先生よりは却つて甘いことが色々其方に書いてありますから、自然學校の科目を馬鹿にしてかゝるやうにもなります。又私の子供なども專攻科の英語をやりましたが、其方の樣子を見ても女子大學の英語科の人を見ると、英語の勉強に忙しいので、餘り哲學などの答案は骨を折つて書かない。女子大學などでは反つてその方の問題に興味を持つて居るやうであります。全體自我とか人生の問題を考へることは良いかも知れませんがさう云ふ人の中には餘り學問の方に向かない人も居ます。頭の良い人の中にはさう云ふ問題を茶化して了ふ傾向があります。

千葉　この頃まで帝大文科の講師か教授かであつた、英國のゴコルス氏が、アドバータイザーで日本の學生は負擔が重くつて可愛想だとか、大學教授が威張り過ぎるとか、その他日本の教育をめちやめちやに罵倒した、論文を二度までも書いて居ましたがこれは間違つてをりますか。

桑木　あれがもし大學のことを云ふのなれば大變な見當違ひであります、學生の負擔は決して多くはない、―これは一つの例ですが、大學で出來る人達には餘り學校に忠實でない

者があります。答案でも論文でも立派に書いて自由になつてをるのですから、……この間卒業後の學生が集つた所で或先生が自分が學生時分の態度と云つた樣なことを冗談半分に述べて、さて今の學生は何うか、しらんが、自分が入學した時には上を向いて通りを歩き二年目の時には眞直に三年目の時には首を下げて歩く、といふものが一般の言ひならしであつたが今は何うですか、と云ふことを言つたら、近頃の多數の人は卒業する時に横を向いて通ります、と仲々甘いことを言つたものです。横を向いて通る態度の多いのは學校の罪とも云はれるが、學校と生徒との間が甘く行かないのであります。良い學生は平凡な先生の講義よりも立派な學者の書いた書物を讀んだ方が良い、と云ふ風な感じがありませう。かうなると何んだか講義をする時に氣が引けてなりませんね。

千葉　ニコルス氏の意見では日本の教授は威張り過ぎる英國ではアンナ事はない。詰り教授は命令するものでなく相談するべきものだ。日本のやうな教育のやり方は、時とするとアメリカにはあるが英國などでは一寸見られない、尤も日本の政治のやり方が、大體そんな風な成り立ちで出來て居るのだから仕方がないといふのでした。

桑木　あの人は始終引込んでをつた人ですから日本の狀態を知る機會がなかつたと思ひます。非常に通じないひとです、大學などでは大抵なら及第が出來るから、負擔が多いといふとはない、高等學校や高等師範邊りでは可なりの負擔があるやうですが、これは先にいつてそれだけのことを敎へるから形式より內容は仲々重くやつてをると思ひます。

古川　形に現はれた學科が非常に多いですか學生の方でも自分だけの方をしつかりやつて後は第二としてをります。

松原　敎師に對する考へ方が少し變つて來た樣に思ひますが一體私達の學生時代に懷いて來た敎師觀と違つて今の學生の先生に對する考へ方が非常にルーズになつてゐはしないかと思ひます。所謂デモクラットになつてをります。

石原　先生を先生としない樣に見るのですか。

松原　矢張自分も人間だと云ふ樣な考へが擧止動作に少し現はれやしないかと思ひます。

渡邊　私の方では大學部よりは寧ろ高等女學校の方にその氣風が著しくなつて來た樣に思はれます。

桑木　矢張時勢ですかね。先生も技術に關するものだとか、技術に近い語學になると學生とは仲々距離があるが、我々の學科になると先生はたゞ自分より少し餘計に本を讀んで

をる位に思はれて仕舞ひます。或は中には先生よりも新しい本を知つて居ると思ふ學生もありませう。何にかの實驗をやることになると仲々先生には勝てないでしようが、議論だけなら頭の惡い先生は頭の良い生徒に內兜を見透かされる場合が多い。それで昔の樣に先生を尊ばなくなる、謠の師匠とかなんとかになると及ぶ可らざるものがあるのですが

松原 藝道においては師弟の關係が非常に親密である樣でありますね。

千葉 今までは、七尺去つて師の影を踏むべからずなどと、師であればどんな無理にでも忍從するやうに、押へ付けられてをつた。それが今はデモクラチツクになつてきた時勢の結果、幾らかその反動と云ふことがあり過度に反抗するといふ程でなくとも、何ほどかその氣味もあるのではないでせうか。

渡邊 大學部などでは、先生の意見はあれだが、私の意見は斯うだと云ふ風に批判的に對立して講義を聞く傾向が大分あります。

桑木 これは一般の教育文化が高くなつて來た爲でせう。學校の教科よりも幾分餘計に觸れて新しい思想を持つてをることは先生よりも學生の方が多からうと思ひます。

古川 昔の先生と生徒との關係は非常に離れてゐましたが今は自然さう云ふ思想になつたのでせう、さう云ふ風に思はれます。

千葉 今の先生は隨分苦しい樣ですなあ。

渡邊 それから一體に自分を發表することが大膽になつて來ました、私は今年の論文の中に混つてゐた小說を二つばかり見ましたが、一つは自分の生活の現實をそのまゝに書いてゐます、今一つは自分の自敍傳と云ふ樣なものを書いてゐましたが、これは一方から云つて自分の現實を見つめると云ふ態度の現れでありませうが、又一方に自分を發表することが大膽で、他を顧慮し迎合することがなくなつたよい傾向でもあらうと思ひます。私の見たのは一人は家政科、一人は師範科でしたが概して理智的に感じられました。

千葉 理智的と感情的とを見た時に今の女學生の傾向はどちらに入りますか。

石原 無論學生は其基調が感情的であり、情操的であり、センチメンタルな情緒と云ふことを非常に重んじてゐます。私は一般の考へがもつとインテレクチユアルの方面に發達することが必要だと思ひます。

千葉 教育全體の注意が偏して居りはしないのですか。

渡邊　教育全體から云へばインテレクチュアルです。

桑木　しかし、あんまり嚴密に云つてインテレクチュアルでもありませんね。

松原　敎へる側から云へばインテレクチュアルであるが、受ける側は、センチメンタルなので一緒くたになつてゐる傾向です。

石原　敎へる方では完成した智識を其儘與へようとするが、學生が其を本當に理解し、又判斷する力を養ふことに就いてはまだ甚だ缺けてゐるやうに思ひます。私はドイツにゐる時分に感じたのですが、向ふの學生は問題をハッキリと意識してゐるやうです。殊に現在はあゝいふ國情なので、政治的興味が強く、其に關聯して思想上にも特殊の問題があり、其に對して男女を問はず學生が問題の中心點をよく理解し又各々自分の解決を與へ、自分の取るべき態度をも考へてゐます。併し日本の學生は情調とか氣分とかに餘りに強くこだはつて、問題の中心點をハッキリと捉へることを努力しない。熱心な要求を持つてゐるが、自から其を理解せず、問題を根底から理解して之に解決を與へるよりは、ある氣分に浸らうとする。之は今日の日本の學生の特質の一でもあり缺點でもあるやうに思ひます。學生間に多く歡迎される文學などを見ても、例へば倉田氏の書などのやうに、善きにせよ惡きにせよ何等かの見解を主張したものではなく、漠然と内的生活を描寫したものであるやうです。之を例へばスペングラーとか、カイザーリンクとか、ルドルフ、スタイナーとかいふドイツの學生間に持てはやされるものと比すると隔たりがあるやうに思ひます。倉田氏の思索とか菊池氏の小説とかを勿論批難するのではなく、其價値を充分に認めますが、今日の學生が其傾向にのみ走るのは、一の特質とも認められるし、又缺陷でもないかと思ふ。之も矢張りインテレクチュアルの訓練が足りない一つの表はれぢやないかと考へます。

渡邊　インテレクチュアルの研究がまだ私共敎師の間に缺けてゐるのは事實ですね。一體に敎育の方法が注入的で智的解明の素養を根本から養つてゆく方法が缺けてをります。

千葉　判斷がある程度まで徹底しないので、批判が充分に行き屆かないと云ふ傾きが多くあるやうです。それには、情操が、理知とよく調和したら宜いかと思ひます。殊に綜合した人生批判の上に立つて物を見るといふやうな、全的な知識の用意が、兎角粗末にされがちなのはどうかと思ひます、見方が斷片的だから、どうも人生に關する實驗が偏す

るやうに思ひます。一つは廣い社會といふ世界の背景までに、學生自身を引きあてさせるといふ教育の仕方が、可なり缺かれて居ると思ひますがどうでせう。批判の不完全の一面はそこから來はしませんか知ら。

思想的に行詰ると云ふのも、自分がかくして行きたいと思ふ理知の眼が充分に冴え切らないために、つひ一寸した處で行詰つて了ひ、それを安價なセンチメンタルな自惚、或ひはあきらめで片付けて了ふのではないかと思ひます。

渡邊 さう云ふ風に詠嘆して諦めると云ふ風はたしかに女子の通弊ですが、私の方ではその傾向が少しづつ違つた方に向ひつゝあつて、以前に比べると幾分か思想的にも落着きが出てきたやうに思ひます。

千葉 ある大學の今年の卒業論文で、私の見たものについて考へたことは、若い婦人の創作を見ると、どうも描寫すると云ふよりも詠嘆すると云ふ方が發達して居る。物を捉へて的確に、その中に潜む意義を見つめると云ふことが割合に稀薄である。その代り細かい感情の曲折は可なり溌溂として居る。たゞ沈潜がどうも足りないと思はれるのです。それとも一つ強く感じた事は、あすこには、朝鮮や支那の學生が四五人居ります。其人々が小説を書いて居りますがなか／＼旨い所がある。日本の文章を使つて居るのだから文章は非常に整つて居るとは云はれないが其描寫は深刻である。詰り皆な日本人に對する或は東京の生活に對する反感を非常に有つて居ります。或る朝鮮人などは、朝鮮人が日本語を覺えるのは可成り困難である。だから日本式の藝術を朝鮮に發達させることはむつかしいと云ひましたが、どうして、どうして、もしあゝした深刻な思想で育てられて行つたら、日本よりも或はずつと深刻な藝術家がそこの青年男女の中に出るのではないかと思ひます、それは恰度露西亞の帝政時代の文學と同じやうにならないかと思ひます。たとへば或る二三篇などは、朝鮮人が一寸した心の中の惱みを書いたものですが、それは自分の實際經驗に持つ惱みを解剖して、その惱みを持ち來す外因と内因とを考へ、しかも、外に向つて強い反感を洩し得ないために、その反感を深く深く内の方へ掘り下げて行く、しかもそれが諦らめに落着かずに、どこまでも石炭のやうに心の中に燻ぶつて燃えて居る、日本人として政治的に考へては、あまりよい氣持もしませんが、しかし將來支那朝鮮の青年にはよい芽を持つた藝術家が出るだらうと思ひます。つまり眞劍に實生活を見つめて居るからです。

松原　その朝鮮人二人はどう云ふことを書いてをりますか。

千葉　それは朝鮮人が下宿を借りに行つて手附金を置いた。所が其處の人が住所氏名を聽たので朝鮮人だと云ふと斷られた。そんなことが二三度あつたことに就いて大分深刻に書いて居り、學校を卒業すれば日本などには斷じて足を踏込まぬと云ふやうなことが書いてあります。

渡邊　今年私の學校の卒業生に支那人で婦人參政權問題に就いて書いたものがあります。その女生徒は頭が良い方でありますが仲々研究的に物を言つて居ります。まア澤山の本を讀んで自分の說に合ふやうに仕組んだだけですが、餘程解放思想と云ふことが大膽に表白してありました。

古川　日本の女子は男子に追付いて行く爲めには卽ち一番早く追付くには理科方面、數學語學方面であると思ひます。今年も東北大學に理科の志願者が四五人ありますが他の志願者はないやうであります。それ等は男女と對等にやつて居りますが特に今年入つた人は非常に良い成績で、去年入學した人は數學が隨分むづかしかつたやうです。さうした方面は、大した年限も經たずに男子と並んで行けますが、哲學の方面には進まない人が少くないでせう。

石原　私もさう云ふ風に思ひます。

松原　黑田女史や何かに先鞭をつけられたせいではないでせうか。

石原　さう云ふこともあるかも知れませぬが寧ろ女子の特長とでも言ひますか。科學的方面の方が適して居るのではないかと思ひます。思索的なものよりも特殊な事項に就いて穿鑿的にやつて行くことには男子の力とさう多くの違ひはないのだと思ひます。純粹の哲學とか思索とか云ふ方面に對しては女子も非常に興味を多く有つて居りますがなかなかむづかしいと思ひます。

松原　興味を持つには持つて居りますが思想を生活すると云ふことになると男子より意志の要素が鈍いではないかと思ひます。

千葉　今までさうであつたからこれからも、さうであるといふのではなく、もしこれから進つた社會環境を惠まれたなら、生理上さう云ふ可能性が出來て來るといふやうな譯にはいかないものでせうか。

松原　婦人の本質として何うしても鈍くなるのではないかと思ひます。思想を生活すると云ふことは意思の要素が可なり要りますからなあ……

學生時代までは思索的哲學に興味を持つて居りますが、結

婚生活後は現實に追はれて終ふと云ふことが男子よりも餘計にありはしないかと思ひます、私は非常に狹い經驗ですけれども、智識階級で可なり思想を解する婦人であつても、その人格化と云ふことについては多くの婦人について失望を感じてをりますがあなたの方では如何ですか。

石原 現代の社會制度では男の方が便利を持つてゐるので、女子には特殊の困難があるのぢやないのですか。

千葉 さあそれが一番の問題でせう。

桑木 小說を作る場合などもさうですか。

千葉 今までのところは、男性に比べて槪してレベルが低い樣です。これは女性がこれまで與へられた環境のせいが一つはありませう。婦人の中には露西亞文學が好きな人と佛蘭西文學の良い人がありますがどつちにも理窟があります、佛蘭西文學の好きなのは、そのテンペラメントが氣に入るらしいのです。男子には露西亞文學が多い樣です。

桑木 大陸の小說戲曲を英譯したものは比較的やさしくて短いから讀めるだらうが英吉利の小說は餘程語學の力がないと讀めませんから。

私の所の子供などは小說などは好んで讀みますが、私が書いた書物などは全然見向もしない全く妙なものですなあ。

千葉 はゝあ、さうですか……

新聞に現はれた時事に關する解釋とか批判意見などをモツト數へることは出來ないものでせうか。

渡邊 學生でも女學校の上級生程度になるとさう云ふ要求を持ちますが、文部省の方ではそれを餘り好まぬ樣です。

松原 それもさうですなあ……併し近代科としてでなくとも國語科や歷史科でやれば出來ます。

石原 女學校などで例へば女子參政權などについて意見を聞きますと皆同一のことを答へるやうです。總ての問題について何にを書かしても同じことを書きます。新聞や小說で讀んだことがそのまゝ思想になるのでせう。

千葉 私共の作つてゐる今日の新聞は營業上或る點まで普通敎育を受けた人々程度位を目指してをるので、どうしても向上を沮まれますが、實際の現狀に於ての社會はモツト高い所にあるのですから學生にもその事を敎へて頂きたい。

桑木 新聞などで何か事件が起ると何にも豫備智識を持たないでよく馳け付けてくる人があります。酷いのになるとあなたは何を研究して何職業だなどと聞かれることがありますがこれでは至極敏活を缺くことになります。

千葉 餘り遲くなりますから今晩はこれ位に止めておきます、御忙がしい處を態々御出で下すつて、いろいろ御教示下すつたことに御禮申し上げます。

寧ろ性を禮拜せよ

(「女人の性禮拜」を讀みて河田嗣郎氏に)

平塚らいてう

河田嗣郎樣

あなたが婦人公論新年號にお書きになつた「女人の性禮拜」を拜見しました時、私はすぐにもあなたに申上げずにはゐれないやうないろ〳〵感想が頭の中から胸の奧から湧き上つて來ました。併しいよ〳〵筆をとり、紙に向つて書くといふことの氣輕に出來ない、妙に不精な私の生れ付きが健康をそこねてから一層ひどくなつたのと、家婦としての、又母としての私の煩鎖な日常生活とのために、あなたにまで書きたい衝動を絕えず一方に感じながらもたうとう三月たつてしまひました。ふとした機會に女性改造の記者にこの事を御話したのがもとで、それ以來しきりに催促を受けますし、實はもつと落付いて十分書きたいのが私の最初の願だつたのですけれど、さう言つてゐたら、今のやうな私は何も書かずじまいになりさうなのがあまり明なやうな氣もして來ましたので、寧ろ外部からこの壓迫を逆に利用して、何かしら追つかけられるやうな、押し出されるやうな氣持であわただしく筆をとることにしました。どの點まで書けるかあやしいものですが、ともかく與へられた最後の時まで書ける丈書いて行きます。

何時、何處で言はれたのか忘れましたが、山田わか子さんがあなたの婦人論を「婦人の生活を知らない男子の婦人論」と評されたことがありました、――あなたのお眼にふれたかどうかは存じませんが。私はあなたのあのお論文を拜見しながら、ふとその言葉を思ひ出して成程と大きく肯かずにはゐられませんでした。あなたが學者としての眞面目な態度で、可成り長い年月、私等女性の自由のため、解放のために熱心に論じて下さつたことにはいつも感謝の心をもつて居りますし、又あなたによつて私自身の蒙を啓いて頂いたことも多いに相違ありませんが、あなたの婦人論はまだ男性の遍見を（わけても性の區別の上で）脱してゐない上に、全體として徹頭徹尾概念に終始するもので、今日の日本婦人がその血と肉とをもつて創造しつつある。――少くとも創造しやうとしてゐる彼女等自身の生活の中から生れて來る、現實の生々しい問題に就いて理解を缺くといふ多くの不滿を私はどうしても抑へることが出來ません。そして私は――あなたの私生活に就いて何一つ知らない私は、これらの不滿の中で、（正直に申上げますが）前年京都ではじめてお目にかゝつた時のあなたの學者らしい神經質の、痩せた。蒼白いお顔を心に浮べ乍らあなたは、ことはよつたら獨身の方かも知れない、さうでないにしても、女性そのものの本然の生命から溢れ出てくる戀愛の力も母愛の力もまだご自分の心に感じられたことのない方に違いないなどと思つたりするのでした。

ではこれからあなたが「女性の殿堂」「性の偶像禮拜」「社會的差別觀と差別待遇」「殿堂を降れ」「主義の問題たるよりも事實の問題」の五つの項目のもとでお論じになつたところのその一つ〱に就いて思ふまゝを申上げます。

一、「女性といふ殿堂」に就いて

婦人が只女性であるといふそれ丈の理由で、劣等視され、社會的にさま〲の差別的待遇を受け、常に男子の支配下に服從を強要されて來たことは、あなたの言はれる通り、又言はれるまでもなく歴史を通じ、殆ど全世界に行はれた過去の一大事實であり、又今日文化の最も進歩したと言はれる國々に於てさへなほその風習の上に、道徳、法律の上になか〱多く殘存してゐるところの人類の自ら責めなければならない悲しい、そして恥かしい事實です。この事實を見、これを取去ることの目的の上に出發した婦人運動が先づその初期に於て、單純にもそれだから婦人が女であるからいけないのだ、

婦人一切の不運の根源はこの性にあると速斷して、極力性の區別を無視し、否定することに努め、かうして兩性の無差別を主張することによつて、はじめてその目的とするところの男女の同等が又は同權が達し得られるものと考へたのは無理もないことと言はねばなりますまいが、最早今日の婦人運動はそんな馬鹿々々しい理論の上に置かれては居りません。今日の婦人論者又婦人運動者はかういふ主張は、理論上から見ても、實際の上から考へても、あまり粗野な低級な感情論で、そこに多くの誤謬を含んでゐるのを知ると共に、これは又女性そのものに對する大きな侮辱であり、女性の自己冒瀆であるのに氣付きました。

すなはち今日の進歩した婦人論者又は婦人運動者は初期の幼稚なそれ等の人達のやうに、性の區別を取去らうなどとは決して思ひません。後者が全然否定することを望みながらもさすがに性の肉體的又は生理的差別までは否定しきるわけに行かず、あなたが「性の天然的區別」だけは「それを如何ともすることが出來ぬ」とおつしやつたと同じやうに、いやいやながらも已むを得ず認めると共に、この狹い限られた範圍内に一切の性的區別を追ひ込み、ここから一歩も外に出すまいと空しく苦心したに反し、前者はこの「天然的區別」の上に自からに生じ來る性の精神的又は心理的差別を、更に進んで、この精神的の、又は心理的の差別から又自からに生じ來る社會上の、或は生活上の性の差別を正しく認めると共に、ここに女性そのものの獨自の尊い價値があり、女性なる人間の權威も、その存在の意義もあるのだと考へます。ですから、彼等は婦人を解放することによつて、是等の性的特徴を社會生活の全領野にあまねく行渡らせることを願ひ、又かうすることによつて、初期の婦人運動者等が只男性が造つた現在の社會組織の中で男子と同じ座席を、男子から貰ふことで（しかも婦人を出來る丈男子のやうなものにして迄も）滿足したのに反し、この現在の暗黑と不正と罪惡を包む男性の社會を改革し、男女の相異なる二つの性の協調、統一である人類の社會を創造しやうとする抱負を只單に「婦人自身の自由と權利の要求」といふ個人的な目的以外にもつて居ます。

かうして婦人運動は今や新しい二重の意義をもつて來たのです。

こゝで私は特に誤解のないやうに、分りきつたことではありますが申添へて置きたいことがご座います。

それは私が今高調しました性の差別は決して今迄のやうに優劣や尊卑の觀念を伴ふものでもなく、又男性の飽くなき利

己心や便宜のためや、支配欲や優越感の滿足のために造り出されたもの、言ひ換へれば、奴隷的境涯にある婦人に見るところのものを直にさすのではありません。それは女性自身の本來の生命の中に秘められた獨自の世界の發見であり、その自由無碍なる開展であり、表現であります。ですからその內容の多くは今日のところなほ未知に屬してゐるので、今後の婦人の努力によつて發見され、表現されなければならないものです。

かう申しますと、この二つの區別はいかにも明白過ぎたことのやうですけれど、實際は屢々混同され、この混同から事實の觀察の上に、又は議論の上にいろ〳〵な誤解や、混亂が生じてゐることが少くありません。

そしてあなたもこの區別をなさらない方のお一人ではないでせうか。男性によつて勝手にこしらへられた性の人爲的差別ばかりを御覽になつて、それを否定することに急なために、女性獨自の生命の中に潜む本來の性的特徵に對して全く眼を蔽つていらつしやいますもの。

私は思ひます、あなたの婦人論がいつまでたつても結局初期の婦人論の範圍を出ないのも、又そのために　今日の進歩した婦人論や婦人運動に對して理解を缺くのも、そして婦人が性の牢獄をなほ殿堂と信じてゐるなどと杞憂されるのも主としてここから來てゐるのだ、と。

なほこれらのことは先へ行くに從つて一層明瞭にされるでせう。

二、「性の偶像禮拜」について

「現今一般の狀態を見よ。若くて敎育を受けてゐて現代を代表する地位にある女子までが、その性的特徵を飽迄形體の上にも示し、然かもその表現を出來る限り誇張せんとする樣子が、寧ろ却つて年と共に甚だしく最近の狀況は終に人をして嘔吐を催さしむるほど甚しきものあるを見る。卽ち此頃都會に於ける若き婦女子の有樣を見れば、一見役者にもまぎらうやうな濃厚な化粧をしてゐる。極端なるは娼婦にも似たやうな俗惡濃厚なる化粧をして自ら得々たる風がある。從つてその衣服を他一般の粧身の上に於ても出來得る限り性的特色を誇張し、性的誘惑力を强くするに努め、特にブルジョア階級に屬する夫人や娘達で、貴婦人とか令孃とかいはるゝ人々の如きは殆ど四六時中そのために浮身をやつして居るやうな有樣なりとする。」

あなたはかう言つて隨分慨嘆しておいでのやうですが、こ

れでは婦人の美やその魅力に對し、又は戀愛や藝術の問題に對し、何かしら常に一種の反感と侮蔑と甚しきは憎惡さへもつ女流教育家や婦人運動者の或もの（そしてその多くは獨身であつたり、處婦であつたりする）の口吻そつくりではありませんか。私はどうしても婦人を見る正しい眼だとは思ひません。

あなたが若くて教育を受けて現代を代表する地位にあると仰有る婦人達は、私から見れば先ず何よりも目立つて最近その肉體がのび／＼と發育して若さと健康からくる自然美を一般に具へて來たとです。從つて彼女達の動作も言語も活潑になり、快活になり　生氣あるものとなつて來ました。彼女達の服裝も以前から思ふと色も柄も著しく強く　明るく、派手なものになつて來ましたし、彼女達のお化粧の仕方も又それにつれて變つて來たのは確に事實です。併しこれは今迄の壓付けられてゐた暗い、濕つぽい、氣兼ねがちな弱々しい生活氣分から漸く自由な闊達な空氣の中に放たれた彼女達の若い女性としての華やかな、輝かしい心の自然の表現と見るべきで、あなたのおつしやるやうな狹い意味での性的特徴のことさらな誇張だなどとは私は思ひません。婦人美に對してもあなたは何か囚はれた、固定した見方をしてゐられるのではないでせうか。それともあなたは私達の周圍に時として見受ける矢張り今日の時代が生んだ畸形兒であるうるほひも、あたゝかみも、柔かさも、美しさも失ひ果てたあの殺風景な「中性婦人」を寧ろ人間としての婦人の理想に近いものとでも見ていらつしやるのでせうか。

婦人がお化粧をしたり、美しい衣服をまとつたりするのは、あなたに言はせると、必ず男性を對象してゐるもののやうに、（例へば「性的誘惑力を強くする」ためであるとか、「女性といふ性を看板にして、その陰にかくれて潛かに泣いて笑つて暮さんとするからである」とか、これによつて男子を誘ひ、その男子の支配と保護の下に安穩に活きて行かんが爲めのもの」であるとか、甚しきは「性的慾望の十分なる滿足を得てたゞ動物的に生存の意義を爲し遂げんがためなるに外ならぬ」とか）思はれますが、そして成程過去の婦人――男性の奴隷として生きるより外道のなかつた――に於ては實際さうでもあつたでせうが、今日の――わけてもあなたが問題にしていられる教育ある、現代を代表する、地位にある若い婦人達に對しては最早あまりに當らなすぎると思ひます。何故なら彼女達の努力はもうたゞ男たちや、その夫や主人に媚びるためではなく、彼女の自身美を好み、常に美しくありたい

で、否もつと適當に言ふなら彼女自身がもつ獨自の美を最もよく表現し、そこに新しい女性美と個性美とを創造しやうがためなのですから。

繰返して申し上げますが、女性美が只男子の賞翫用であつた時代は過ぎました。私は嘗て女性美が男子の賞翫用であつたからといつて女性美そのものまでも卑しんだり、呪つたりしようとは思ひません。かうして寧ろ誤られ、間違つた方向に發達して來た——言はゞ邪道に陷つてゐる婦人美をこの「男性社會の裝飾用、愛翫用」から解放してそれ自身美として獨立の價値ある新しき女性美を創造し、「男性の社會」ではなく、兩性による「人類の社會」を、もつと人間的な、もつと豐麗なものとすることは、あなたが言はれる「人格的自覺に生きる工夫を凝す」婦人の生活と少しも矛盾しないばかりか、これも亦是等の婦人がもつところの使命の一つでなければならないと私は考へてゐます。

私の夢想の中なる來らむとする社會は、あらゆる階級の女子が美を思ひ、美のために努力し得る丈の餘裕あるものでなければなりません。

次に申上げたいことは戀愛、結婚及び母となることなど卽ち直接性の上に築かれる婦人の生活に關するあなたの誤解又ためは偏見に就いてです。

「戀愛至上主義など稱へられるものにどれだけ深い哲理があり、人生味があるか知らぬけれど、若し一般の女子にして、その人格的自覺に立脚して活きる工夫を凝すことなく、たゞ天然的なる性的殿堂に立籠つて、たゞ女性としてのみ活ることに滿足するならば、鼻もちのならぬものになつてしまうであらう。」

あなたがおつしやるところは、初期の婦人運動が戀愛や結婚や母たることを「靈魂を有する者」の生活ではないかの如く卑下し、忌避し、卑怯にも是等を問題外に立つと片付けて仕舞つたのと全く同じ態度ではないでせうか。併し今日の私共は婦人の勞働の自由や、參政權の要求などと同時に、婦人の眞の解放にとつて同じく重要な一面として、婦人の戀愛の自由や母性の權利を主張し、男性が婦人を征服し、その奴隸とすることに最もよく成功したものである現在の男性社會に於ける家族制度、結婚制度の改革に向つて勇往しはじめたのです。

いかにもあなたのおつしやる通り、性としての婦人の生活は現在の家族制度、結婚制度の下に於ては申分なく牢獄で御座います。(併しそれは言ふまでもなく制度の罪であつて、そ

れをもつて婦人の性生活そのもの、人生價値を否定するのは間違つて居ます)。それだからこそ今日の婦人達は或は戀愛を或は母權を說き、制度の改革を唱へて、性の牢獄を破壞して、そこに新らしい性の殿堂を建立しやうとしてゐるのではありませんか。若しあなたが婦人達のこの努力を遠くの方から御覽になつて、牢獄そのものを直に殿堂と誤信し、いつまでもそこに立籠つて、性の偶像を禮拜することを願ふものだとお思ひになつたのでしたら、さうして「最も深く人生の意義に就いても思ひを凝らし、人生價値の批判に於て最も深刻に、最も眞劍なる態度を示すべき年齡にある女子に於て依然たる屈從的性的拘泥の甚しく、寧ろ益々その傾向の進み行かんとする風あるは何と考へても心細い次第である」とか、今時の女子にして女子に果して靈魂ありやの疑問を發せしめるやうな態度あるは何と氣の毒な有樣であるまいかとおつしやるのでしたら、幸にそれは甚しい誤解と言はねばなりません。

私は、今、性の牢獄を性の殿堂に建てなほすと申しました。併しこの意味をほんとうにあなたにお分り頂からがためには隨分多くの言葉が必要でせう。先づ第一に人間の中に深く植ゑ付けられてゐて、これを否定することも、絕滅させることも出來ない強い本能である性欲に就いて、又それの進化し、純化し、人格化したものである戀愛について、もつと正しいもつと深い見方をあなたに要求しなければなりますまい。又更に進んでは獨立せる一個の人間としての婦人を戀愛を通じて母愛へ、母愛を通じて人類愛へ更に人生の最高理想たる一切愛に到達せしめるその性的生活や、その各々階級に於ける意義や價値に就いてもつと眞面目に考へて頂かねばなるまいと思ひますが、併しそれらのことに就いてここで一々申上げてゐる暇のないのを殘念に思ひます。

まだ半分も書きませんうちにもう最後のしめ切りの時が來てしまひました。仕方がありませんからあとは次號で又申上げたいと思ひます。

女性解放と文明の將來

村松正俊

女性解放は現代に於て一の勢をなしてゐる。勢とは即ち流行である。流行の流れには何人もこれに逆ふことは出來ない。その善惡は措いて問はない。流行に反くものは一世に顰蹙せられ、流行に遲れるものは野暮漢として排斥せられる。その故に、軍備縮少が流行ならば尚武の國日本もこれに加はらんと欲し、普通選擧が世界の大勢ならば淸浦內閣もこれを實行しようといふ意氣込みである。女性解放も亦その流行の一たるを失はざるが故に、識者はこれを謂ひ、學者これに和するが如き有様である。然らばこの大勢は如何にして實現せられ、生活の事實となり、文明の景相に變化を及ぼすべきであらうか。從來の文明が男性中心であり、男性的色彩をもつてゐたとせられてゐたが爲に、女性解放によつて得らるる文明が新たなる道を開くに至らんことが期待されると稱せられてゐるのである。本論文はこれに對して何らかの暗示を與へやうとするのである。

一　文明と生活

文明とはその意義からすれば生活の裝飾に他ならない。それは恰も着物のやうなものである。人間にとつて着物は必要缺くべからざるものである。如何なる人間も生れるときは裸であるが、しかし生れるや否や必ず着物を着せられる。ある人の云つたやうに、着物が文明と野蠻とを分つ尺度になる位である。野蠻人から文明人になるに從つて、着物にいろ〳〵變化があるが、人間である以上何らかの意味で着物をつけてゐないものはない。着物は生活の必要から生じた實用品であるが、しかしその事は既に自明のものとして意識下に放下し去られて、現在では寧ろ裝飾の意味に用ひられてゐる。甚しいのになるとこれに依つて他人に對して威張る種を作つた

りしてゐる位である。制服の如きはこれである。さういふ種類の着物はしばらく除くとしても、着物が實用一點張りでいけないことは明かである。人はその身分や、環境や、趣味や、習慣に從つていろいろと着物を變へてゐる。それぞれの個性を表はしてゐるといつてもいゝであらう。即ち着物は實用品であると共にまた缺くべからざる裝飾品なのである。裝飾であるといつてこれを排斥し去ることが出來ないと同時に、實用品であるからといつて生地のまゝで押し通すわけにも行かないのである。

文明の意義も亦これと異るところがない。生活は人間が人間として營む生活に外ならないのであつて、それは純粹に生物的意味をもつてゐる。即ち個體維持と種族保存を目的とするものである。それは全生物界を通じての目的であり、それを中心として總ての生活が成立するのである。その他の所謂生活はさういふ本來の意味から見れば岐路に走つたものである。人間は種々なる生活を有してゐる。精神生活といふのもその一つである。藝術的生活といふのもその一つである。政治生活もその一つである。さういふ種々なる生活は、人間に於ける意義の觀點を變ずるとき、却つて所謂人間的生活と稱せられる。個體維持と種族保存の爲にする生活は動物でも植物でも同じことであり、それから人間の生活を區別するものは正しく所謂精神生活に外ならないからである。

然らばさういふ精神生活は如何にして生じたのであらうか。それは發生的に見れば意識生活である。理智の働きである。理智は人間に特有なものと考へられてゐるが、それが生活に於て爲してゐる作用は他の動物に於ける本能の作用と同じものである。人間の生活が段々複雜となり、單なる本能だけでこれを導くことが出來なくなつたとき、この本能の補助として理智の働きが生じたものである。從つて理知は究竟するに本能の代用に過ぎない。從つてそれは本來の生物的生活の從屬的意義しか持つてゐないのである。然るにあらゆる存在はそれ自身に於て一個の存在を保つが故に、全體的關係に於ては從屬的補助機關に過ぎざる理智も、それ自身に於ては一つの獨立の存在を形成するのである。一度獨立の存在を獲得したるとき、存在の内面的進化はそれの全體に對する關係を忘れるに至るものである。例へば陸軍は國家を守る爲に必要なものとして置かれたものであるが、一度置かれると陸軍の爲に國家や國民が存在するやうになるのと同じである。他の例で云へば癌の如きものである。癌自身は特別に細胞が增殖したものであつて、癌としては成長に違ひないのであるが、

人間全體としては有害なのである。この二つの例はその意義は異るが等しく存在の獨立性について何らか示すところがある。精神生活といふのは本來の本能的生活の爲に生じたものであるが、一旦生じた後はその獨立性が强調せられ、それから一切の所謂生物的生活の意味が排除される。さうして恰も人間の生活がその精神生活を完成する爲に存在してゐるかのやうに考へられるやうになる。宗教に身を捧げる人があるかと思へば、いい小說を書く爲に刻苦精勵する人がある。さういふものはすべて人間を特徵づける生活に違ひないのである。それと同時に生物の生活から云へば岐路に走つたものに違ひないのである。

文明とは正しくさういふ精神生活の產物に外ならない。それは人間が精神生活を保持する限り必然的に生れるものである。卽ち文明は生活を基礎としてその上に立つてゐるところの裝飾である。生物としての人間から云へば裝飾であるが、精神生活を營む人間から云へばある意味からの實用物なのである。故に生活に基かざる文明は無く、文明をもたない生活は無い。生活に基くが爲に、生活が異るに從つて異る文明が生ずる。その故にギリシヤの文明があり、ローマの文明があり、支那の文明があり、日本の文明があり、ヨーロッパの文明がある。また科學に依據する文明があると共に、宗教に依るところの文明があり、感情の上に築かれた文明があると共に、理性の上に芽生える文明がある。文明は多元であり複雜である。生活の景相が變ずるに從つてそれぞれの文明が生ずるが爲である。

二　文明の進化

極めて嚴密に云へば、文明は精神生活の發生以前に遡ることが出來るであらう。然しながら、人間の生活といふものが上述の如く本來の生物的生活と、意識の發生に基く精神生活の融合したものである限り、文明は精神生活の發生と共に初るといはなければならぬ。

人間生活の初期に於て文明を決定したものは常にまた如何なる國に於ても宗教であつた。宗教の起源は人間の意識の發生とその時を同じうしてゐる。古代の文明から宗教的要素をとり去つたら殘るところは無に等しいであらう。政治は常に神の祭事であつた。祭政の一致せざる國はなかつた。王は如何なる國に於ても或は神の代表であり、或は神の使であり、或は神に仕へるところの僧侶神官の類であつた。啻に政治のみではない。文學の源は神を稱へる詩歌である。敍事

詩は必ず神の事を記載する。日本に於て然り、インドに於て然り、ギリシヤに於て然り、ローマに於て然り、北方ゲルマン人に於て亦然りである。劇はギリシヤに於て明かなるが如く、またインドに於て知らるるが如く、いづれも神と關係せざるはない。斯くして遂に日常生活より風俗習慣の末に到るまで古代人を支配したのは常に宗教であつた。ローマ法、マヌー法典等に示されたる規定は正しく當時の生活が宗教によつて支配されてゐたことを示すのである。

斯の如き文明の特徴はこれを一言にして云へば意志的である。從つてそれの發展は必然的に倫理的にならざるを得ない。一つの行爲が善であるか惡であるかを決定するものは人間にあらず、また道徳意識にあらず、良心にあらず、單に神の意志であつた。即ちかかる古代人にあつては人間はその生活の全部を舉げて神に捧げてゐたのである。しかもその神たるや現代人の考ふるが如き深遠なる哲學的神ではなかつた。然らば人間が自ら主となつてその生活を制御するが如きは夢想だにされなかつたのである。即ち人間は未だその我を發見するに到らなかつたのである。

神の觀念は意識の進化と共に進化する、しかもその神の進化は單に意識の進化の一現象に過ぎざるが爲に、それが進化すると共にこれを否定するものの出づることも亦已を得ないであらう。理智は意識の進化と共に進化して新なる世界を構成する。それは批評の世界である。批評の主は何であるか。それは人間の我に外ならない。ここに於て生活は正しく神の代りに我々によつて支配されるやうになつたのである。生活は沒我的から主我的に進化した。文明の特徴は既に倫理的に非ずして科學的となり、意志的に非ずして智的となつた。これを歴史に求むれば、ルネサンスが丁度その境界を爲すのである。中世の生活は古代人の生活を完成したしかも完成は直ちにその世界の破滅である。ルネサンス及び宗教改革は古代の世界の完成の頂點から生じたのである。ここに文明は新なる景相を獲得した。神は他のあらゆるものと共に批評し去られた。一つの行爲が善であるか惡であるかを決定するものは神の意志にあらずして人間の良心であり、道徳意識であり、的言すれば人間の我である。ここに人間はその神に捧げたる生活を自分にとりかへしたのである。かくして古代の宗教的團體主義は個人主義となり、個の價値がここに承認せられた。これと共に理智の發達は更に科學を發達せしめ、その應用に伴つて人間の生活は商業工業を中心とする經濟的生活に這入つたのである。或る人は、現代はルネサンスの繼續で

あるといつたがまことにその通りである。かくして現代の問題は個人主義の完成にあると共に、それの崩壞に基くところの新しき團體主義の發生に存するのである。いづれも宗教的、哲學的、倫理的の意義を脱し、智的、科學的、經濟的の意味を持つてゐるのである。これを除いて現在文明の解決はつかないであらう。

三　文明と兩性

かくの如き文明の進化に與つた要素は表面的には男性のみであるやうに見える。社會學者が古代女性中心の生活を主張するにも拘らず、歴史的意味に於ては常に男性が中心であつた。支那に於ても、インドに於ても、ギリシヤに於てもローマに於いてもいづれも女性は常に輕蔑せられ、文明の表面に出とを禁ぜられた。女性が史的にその迹を止めてゐるのは古代ギリシヤのレスボス島であつた。しかも人類全體から見るとき、女性は決して文明の要素と成り得なかつたのである。しかしながら、それが果して本當であらうか。表面的にはさうであらう。しかしながら、文明の事實を探究するとき、必ずしもさうでないことが判る。女性は何故に文明要素から排除せられたか。云ふまでもなく古代文明が宗教的であつたが爲にその必然的結果として生じたのである。宗教はいつまでも女性を排斥する。如何なる宗教もそれの起源に性慾的要素のないものはない。佛教に於て然り、基督教に於て然り、マホメット教に於て然り、その他の所謂淫祀邪教でも亦悉く然りと云はざるを得ない。自らの持つところのものを排斥して、持たざるところのものを取ることは多くの例に於て見らるる如きものである。宗教が性慾的起源を有するが故に、これを嫌惡し或は嫌惡するが如く見せかけるが如くなつたのも當然であらう。しかしながらこれ等の嫌惡は常に觀念的であつて事實でない。性慾は兩性に關するにも拘らず、宗教が男性の手にあつたが爲に、性慾的とは女性に關するものと解された。さうして性慾の嫌惡をそのまま女性に結びつけたのである。女性が文明の表面に立つことが出來なかつたのは宗教を中心とする古代の生活にあつては蓋し當然のことである。

しかしながら、文明の本質は決して性に關つてはゐない。文明は生活の裝飾であり指標であるが故に、それに本來性別はない。宗教は單に女性とのみ云はず男性をも壓服してゐた。我が認められないといふことは兩性を通じて平等の事實である。文明は我の承認に於て進化する。人間たる點に於て男性も女性も變りはない。胎兒は姙娠の初期に於ては蓋し中

性である。これが性を決定するものは、近代の醫學に從へば營養並びに或る種のホルモンに依るのである。成人に於て全く異れるが如き性の差別は、小兒に於て少いのみならず、胎兒のある時期に於ては全く認められないのである。文明は一度び分れた兩性の再結合とも云ふべきである。眞理に二つはない如く、文明はあくまでも一つである　女性が參加したが爲にそれに變化を及ぼすであらうと考へるのはやゝ間違つてゐるであらう　科學の體系にあつては男女の差別はない。經濟の社會にあつても亦然り。藝術に於て、析學に於て、法律に於ても亦然りである。人間の有する性特徵が比較的皮相的であるが如く、文明に及ぼす性の影響も比較的少い。生活は兩性の協力からなる。文明の表面に於て女性が表れてゐなくても生活の基礎に於て兩者は平等である。ゲルマン人は女性を崇拜した。しかも女性を輕蔑したるギリシヤ、ローマ文明を引き繼いで殆ど何等の變化もあらはしてゐない。變化は僅かである。風俗の一部に於て、習慣の少部分に於て見られるばかりである。文學の系統は中性である。サツフオの詩を味ふことに於て性の差別はほとんど關係しない。ジヨージ・エリオツトの小說はイギリス文壇の一部に於て他の男性作家と平等にとり扱はれてゐる。紫式部が女性であつたことは特に源氏物語の文學的價値を增大しはしない。

表面に表れたる二三の女性について觀察してもかくの如きである。表面に表れると表れざるとを問はず、文明が生活に依據する限り、また生活が兩性の協力から成る限り、文明には特別な男性文明とか女性文明とかの區別はない。强ひて區別をつけるならば、前に云つた如く風俗や習慣の小部に過ぎないのである。それは文明が我の承認に進むとき直ちに撤廢されるのである。現在の文明は決して古代の宗敎中心の文明ではない。現在に於て女性が文明の表面から除外されてゐるが如く見える部分は嘗て總ての人間が神によつて壓迫されてゐた時代の痕跡なのである。女性はかくあらざるべからずといふ觀念をきめて、これに依つて事實を定めるのは現代の事ではない。女性の我が認められる時、かゝる固定觀念は消滅する。現に斷髮する女性もあれば男裝する女性もある。風俗に於ける兩性の差も蓋平等に近づきつゝある。一般的に女性が文明の表面に參加し得なかつたのは我が承認されないからである。それが承認されたとき、兩性の偶然たる具體的事實を除いて、その文明には敢て甚しい差はなくなるであらう、

四　女性解放の意義

かく論じ來るとき、文明の進化とは即ち我の發見であることに歸着する。宗教的世界に於て偶々文明の表面に立ち得なかつたが爲に、我の發見に於て女性の男性に遲れたのである。その故に現代の女性の大部分は宗教的、倫理的、意志的であつて、未だ科學的、經濟的、智的の世界に這入り得ない。女性解放とはその題目の示すが如く、消極的である。それは積極的に現代の文明を進化せしめるといふよりは、現在の文明に到らんことを慾するのみである。換言すれば女性は男性の跡を追つてゐるのみである。女性解放とは女性の我の承認である。而も承認は觀念の事であつて事實ではない。事實が現れて、承認は後に從ふ。文學藝術の類は人間としての發達段階の比較的低いもの丶爲す業である。心理的に、生理的に、幾他の證據が擧つてゐる。段階の高い人間は直接に生活の業に從ふ。商業や工業はその業である。その故に實業に從ふ女性は未だ鮮いが、文學藝術にいそしむ婦人は多い。これ女性の發達が一歩男性に遲れてゐる一證であらう。キユーリー夫人の如きは寧ろ例外とすべきであらう。現代の女性が求める解放は第一に文學技藝の業であつた。その故にアメリカ人は文學技藝を女性に任すると共に男性は金儲けに夢中なのである。それがいゝか惡いかは別として、男女性の發達の段階はこれによつて多少暗示されるのである。

斯の如き狀態に於ては女性の解放は殆ど文明の景相を變じ得まいであらう。もとより文明は全體的である。男性が單に金儲けに夢中になる事に加へて、女性の文學技藝にいそしむことによつて、實利一點張りの文明に色が添へられるのである。しかしながら、この場合に於て、女性が單に過去の男性の踏んだ文學技藝をそのまゝ追つて行くならば、文明に對する貢獻はほとんどないといつてよろしい。況や文明が全體的であつて、現代の男性が尙、文學技藝の業をとるものもあるかぎり、尙のことである。女性解放が單にさういふ程度で止つてゐる限り、文明の將來は何等それに期待する所がないであらう、しかしながら現在の女性解放の事實は正しくその邊に止つてゐるのである。

五　女性解放の事實

女性の我は如何にして承認されるのであるか。それは女性が事實を以て示すの外はない。單に男性の模倣に止つてはならない。しかも今日に於ける女性解放の事實は何を示してゐるであらうか。

我が國に於ては女性解放の聲の聞かれたのはつい最近であ

る。それは元より當然の事である。世界文明の進化と比較するとき、我が國並びに一般東洋の文明は甚だ遲れてゐるといはなければならない。古代に於ては東洋文明、ギリシヤ、ローマの文明と等しく同一の宗教的段階に在つた。西洋に於てかかる宗教的基礎の上に立てる文明がルネサンスを經て遂に人間の我の發見となるに及んだとき、東洋に於ては未だ嘗てルネサンスを經驗しなかつたのである。從つて日本にしても支那にしても、またインドにしても、文明の段階は依然として舊時代に存してゐる。故に東洋文明はその宗教的、倫理的、意志的文明を内に發展せしめ得ることが出來たと共に、遂に科學的な、論理的な、經濟的文明に這入らなかつたのである。これ人の東洋文明を稱して精神的といひ、西洋のそれを物質的といふ所以である。しかしながらそれは決して東洋文明の誇とはならない。現在に於ける物質文明は所謂宗教的か精神文明を凌駕してゐる。その差は進歩の差である。所謂精神的といふものはことごとく所謂物質的といふものの内に含まれてゐる。事實はこれを明かにする。事實に於て、精神文明を誇る東洋人はことごとく物質文明であるところの西洋文明の前に跪いてこれが恩澤を受けやうとしてゐる。ルネサンスは内から來らずして外から來た。つひにそれは借り物である。借り物の文明はあくまでも輸入品である。經濟的を特徴とする文明が今に及んで漸く完成しやうとしてゐるのは正に右の如き理由によらなければならない。ここに種々なる難問題が湧くのである。勞働問題の如き、國語國字問題の如き、道德の觀念の如き、風俗の變化の如き、比々みな然らざるはない。さうして、さういふ難問題は生活のあらゆる分野に於て見出されるのである。生活が依然として東洋的であるのにも拘らず、その外衣である所の文明だけを西洋風にするが爲に、必然的にその二者の間に干格が生ずることは云ふまでもない。必然的關係のあるべきものが偶然的に結合したからである。この問題を解決することは非常に困難であるといはなければならない。

女性解放の事實も亦その内に生じたる問題である。我が國に於て解放されざるものは啻に女性のみではない。男性も亦さうである。宗教的、倫理的世界に住するが爲に、前に述べた如く、男尊女卑はその運命であつた。女性もこれを當然とし、男性も敢てこれを怪しまない。ルネサンスが外から來たが爲に、男性が先づ解放されるが如き有樣を呈したのであつて、ここに西洋文明の外觀だけが模倣された。從つて女性解放が最近の出來事である事は元より當り前であらう。それは一面には模倣から來る偶然さを持つてはゐるが、而も日本の他の文明現象と等しく他の一面には半ばの必然さを持つてゐ

る。即ち日本文明が模倣から出發して西洋文明の大系に這入りかけ、そこに根據が出來たからである。

その故に女性解放の事實は近代文明の一特徴である所の個人主義の完成、またそれの崩壞から生ずる新しき意味の團體主義の發生など〻等しく、文明全體即ちそれの基礎となる所の生活の問題を解決した後でなければその正當なる解釋を得ることは出來ないのである。これを單に皮相的に觀て、性の解放とか、戀愛の自由とか云つた所で始まらない。や〻進んだ所で現在の法律に於ける男女の不平等を改訂するとか、乃至は參政權を得やうとするが如きものにしても亦同じである。即ち女性解放の事實を正當に見ようとするには現代文明の特徴を第一に摑み、特に日本がこの文明に位置する所を察して後、初めて出來るのである。

現代の女性解放の最大の問題は云ふまでもなく職業の男女平等に外ならない。現在の日本は東洋風の倫理的、宗教的意識に加ふるに、西洋風の科學的、經濟的事實を含んで居る。故に職業に於ける女性解放もすこぶるデリケートなる問題を藏してゐる。この意味に於て、職業婦人は正にその位置を自覺しなければならない。第一に東洋風の倫理的、宗教的の意識から脱せんが爲に、個人主義に顧みる所あり、西洋風の科學的、經濟的事實に合せんが爲に新しき意味に於ける團體主義について留意する所がなければならない。徒らにセンチメンタルな戀愛の解放の如きを云ふが如きは日本に於ても既に時代遲れとなつて居るのである。

六 結論

以上の如き論據からすれば、女性解放が文明の將來に如何に作用するかは明白であらう。文明は結局生活の外衣であり、生活男女個性の平等なる協力によつて成されるとすればその文明は究局するに全人間的なものでなければならない。さうして從來、宗教的にも亦倫理的にも抑壓されたる女性がその解放の道程に當つて單に男性の模倣を事としてはならない。文明の流れは依然として進んで行く。女性の參加はその流れの勢ひを強めるだけのことである。決してその本質を變へはしないのである。故に現在の淺薄な女性解放論者が云ふが如き解放は文明の將來に對して何等貢獻する所がないばかりではなく、反つて人間全體の爲に害がある。彼等の云ふが如き解放は眞の女性解放の前に面して忽ち解決されるのである。文明は依然として進化しつ〻ある。この大勢を觀ることが眞の女性解放者である。

女性解放は現代に於ける一つの流れである。その流行をして文明の大勢に加はらしめよ。

應募二篇

新らしき地

―ヤコブとエサウの話―

那須照子

なだらかに起伏した高原が、一様に紫色の霧につゝまれてしまふと、しめり氣をもつた灯火があちこちの天幕から洩れて來る。パタンアラムから故鄕への旅に出て以來、寛大な主人の指揮の下に、一度も無理な勞役を强いられたことのない牧者等は、この長い旅をも、惠まれた一つの生活のやうに考へて居た。夜霧の中を、群落の呻きと混つて、若い牧者や女達の陽氣な笑聲が聞えて來る。今日は殊にも早く宿泊の命令をうけた彼等は、家畜の世話を終ると、集つて旅の間に起つた事柄の話に耽つて居るのである。

椰子の葉末に、細い月が光を消す頃になると、天幕から忍び出たヤコブは、亡靈のやうに高原の夜に佇んだ。樂しい旅の疲れと、完き信頼の安らかさに、海のやうに靜に眠つてゐる妻や子供を殘して、この深更、又も彼をかうしてさまよひ出させたのは、彼の心に一日一日深くなつて行く不安であつた。幼かつた日、ふとした母の入智惠から、兄を欺いた、そして兄をして一生涯取りかへしのつかぬ不遇に導いたその罪が、今恐しく彼の胸を塞ぐのであつた。自ら犯した罪に對して、自分がその報を受けることは、たとひその報が七倍にならうと、否まうとは思はなかつたけれど、自分を信頼し切つて居る妻や子供に、やがて目のあたり憂き日を見せねばならぬ時が、不可抗的に近づいて來るのを、彼は、恐しく緊張した、しかも心細い氣持で見つめねばならなかつた。その日が來る前に、彼は妻子や、僕等にその事を告げよう〳〵と、斷えず考へて居た、しかし、愛する者等のいたましい驚や、又自分に對する完き信頼の裏切られる悲しい幻滅やを思ふと、その苦を一刻でも遲くしようとする、卑怯な自分を見

出さねばならなかつた。止むを得ない事實が、あまりに急激に飛び出して、罪ない者を傷ましめる前に、彼はどんなに自ら男らしく解決しようと焦つた事であらう。然し、生れつきの內氣と、母によつて養はれた温和さとが、思切つた解決にと急ぐ彼を、幾度か女々しく引きとめるのであつた。彼は、慈悲深い主人として僕等から慕はれる自分を、意氣地ない者と思つて淋しくなつた。けれど今はもう、すべてを時が解決するのを待つ外はなかつた。せめて彼は落着いてその恐しい事實に出會し得る沈着さが欲しかつた。けれど、又しても湧いて來る不安と、相對してたぢ〳〵とよろめいて居た。切れ切れな呻吟が、歎息の間に洩れて來る。

「あゝ美しいラケルよ、いとしい子供らよ、その豊かな眠を、せめて今宵一夜つゞけて呉れ」といつても、どうせ一度は遂はねばならぬ運命なのか。あゝ、俺は、何といふ事をしたのだ。この數知れぬ黄金と、群畜と、それ等を得た俺は、どうして平和が得られぬのだ。幼くして得た罪が、どうすればこの苦しい俺を解いて呉れるのだ。」

ヤコブの眼には、刃をふりかざして、愛する者を屠りつくさうと猛り狂ふ兄エサウの姿がちらついた。かき消してもかき消しても、暗の中を幻は馳せまはる。ふと、彼の心には、平和だつた少年の日が甦つて來た。それは、其なつかしさの爲に、おのづと身震ひの起る程魅力にみちたものであつた。彼は自分を中心に、信仰の厚い父や母が、祈に跪いてゐた明るい家を思つた。空を仰ぎつゝ、彼は草叢に跪いた。

「あゝ神樣。あのベテルでの御約束はたゞ私の夢でございましたらうか。あなた樣をかりにも疑らうとする罪深い私をお許し下さいませ。けれど神樣、あの父母の許を離れましてから、二十年の勞苦は、まだ私の過去の罪を償ふに足りませんか。父をも、祖父をも、あれ程迄に祝し給うたあなた樣のお恵を、この私のみが受けるに足りないのでございますか。」

ヤコブはかうした恐しい幻影に苦しみつゝも、一日一刻と近づいて來る餘儀ない恐怖の前に、戰きつゝひれ伏す外はなかつた。再び故國の山河に抱かるゝ喜びの來る前に、その足は血の滴を踏まねばならないのだらうか、否、それのみか、その足自らさへも、再び起つことも出來ない迄に打ち砕かれるのではあるまいか。

日は昇つた。紫の雲は再び天幕の上に輝いた、けれどヤコブには、また今日一日この恐ろしい日を迎へたのだと思ふ

と堪へられなかつた。エドムの野は近づいた。それを、何も知らない僕等は、それが喜への道でもあるかのやうに、朝露をふみしだきつゝ、勇しく進んで行く。彼にとつて善かれ惡かれ、餘儀ない運命に打つ突からなければならない時は來た。選まれて、彼の前に跪いた一人の僕に、嚴かに言ひ渡した。

「お前は先に走つてエドムに行け。彼處に俺の兄のエサウが居る。お前は私の言葉を、詳しく兄に傳へて呉れ、間の者を立てず、お前自ら兄に逢はなければならない。さうして言へ、尊き我主エサウ、我が兄よ。私は、あなたの謙遜なる僕ヤコブでございます。僕は二十年パタンアラムなる伯父の家に留まつて居りました。只今は、主なる神の御惠により、牛、驢馬、羊、僕婢その他の財を蓄へて居ります。あなたの僕ヤコブは、人を遣はして、わが主わが兄なる尊きエサウに御挨拶を申し上げます。何卒、私及私の家族の上に御憐憫の眼をお向け下さいます樣、ヤコブが心よりのお願でございます。と。よいか、謙遜を忘れてはならない。たとひ兄エサウが、獵人の貧しい服裝をして見やうとも、俺が尊敬する兄であることを忘れてはならぬ。お前の知つて居る禮儀の限りをつくして、俺の誠意を傳へて呉れ。俺はお前を信じて居るぞ。」

己の弱點を、この自分を神の樣に信じて居る僕に示すまいとする努力は、ヤコブには生やさしい事ではなかつたが、幾千の家畜と僕婢とを有つといふ言葉によつて、萬一エサウが、利慾の方面からでも、心を和げては呉れまいか、又は憐をでも感じては呉れないかといふやゝ、投機的な心から、自分の所有物のことを僕をして傳へしめたのであつた。而も彼が天性のやさしさの裡にも、自負に傷けられる無念さが切齒して居た。さうして彼は、この使者に更に一言を添へて、エサウの有つ僕の數、陣營の堅さを見て來いと、口まで出やうとしたのを、やつと唇にかみしめ得たのであつた。

敬虔な使者は主命を奉じて天幕を出た。ヤコブは天幕の外の無花果の葉蔭に佇んで、空を仰いだ。ベテルで、天の使が往來したあの梯子の末は、あの高い空に届いたと思つた。雲が天を閉じたのだ、梯子が折れたのだ、天の使が彼を見棄てたのだ、財寶を蓄へて、故國に歸らうといふ、若かつた日の希望が、いつの間にか、失せて、獨り取り殘されたといふ恐ろしい心細さがたゞ感ぜられた。血肉も、愛する者も、結局彼を慰めるものではなく、むしろ彼等に對する愛着が、彼を、より淋しく、より獨りにするものであると思へた。かつての

日の追憶は、樂しかつたものも、美しかつたものも、ごつちやな一團の灰色の塊となつて、自分の腦の上に積み重ねられた樣に思はれ、この豐かな群畜や財寶に圍まれて居る我が身が、世の中の最も不幸なものではないかと怪まれた。子供達が朝の陽を浴びつゝ向ふの流れの岸で歌つたり踊つたりして居るのを見ては、涙ぐましい氣持が咽喉の奥に塊になつて來て、自分が彼等の父である事が、何か彼等の運命に、暗い痕を殘すのではないかと思はれた。

たとひ恐ろしい最後のたよりを齎すにしても、ヤコブはその使者の歸りが待たれた。けれど、健脚のその使者が、黄昏の道を辿りついた時、その齎したたよりは、あまりにもヤコブにとつて悲しい致命的のものであつた。彼は心の動搖を抑ししづめ〳〵その僕の復命を聞いた。

「主よ、御兄エサウ殿に、御言葉を洩れなく傳へ上げました。エサウ殿には、主が御立身を此上なく御喜の樣に拜せられました。」

「そして兄は……兄はそれから何を言はれた？」

「久々振の弟の歸郷を迎へる爲に、四百人を率ゐて迎へに出ようと仰せられました。」

「何？四百人を率ゐて、四百人の兵士を率ゐて。ふむ、兄はどうしても……。いや、さうか？もうよい、彼處で休め。」

ヤコブは、萬一の望の滅茶々々にうち碎かれるのを見た。僕は、兄が喜んでゐるといふ、併し、喜んでゐる兄が、四百人の兵を率ゐて何しに來ようぞ。彼はあまりにもよく兄の氣象を知つて居た。この二十年、爪牙を磨いて自分を待つて居た兄の、恐しい復讐は、今一歩の前に近づいて來た。二十年前、父の祝福を盜んだ自分が、母の助けで兄の眼を逃れ去つた後の、兄の狂亂は母から細かく聞かされてあつた、その日から兄は、荒野の砂に伏して報復の日を待つて居たのだ。豫期はしてゐたものゝ、今更に彼を捉へ盡した恐怖の中に彼は戰き、慟哭した。たとひ四百の兵は恐るゝに足りないとしても、この二十年の年月の間に、幸にして兄の怒が少しでも解かれたらといふ、一縷の望が絕たれて、己を信じ切つて居る妻子や僕婢にまで、兄との不和を發露しなければならないと思へば、身を投げ出して歎いても足りなかつた。殊に、つい先刻、エサウに送る使者に對して、自分が示した態度——兄を尊敬せよといふ——を自ら裏切る事から、この自分が賴にしてゐた一人の僕が、エホバを恐るゝイスラエル人にあるまじき自分の行を、輕蔑しはしまいかといふ不安は、遂に

彼の信用を地にまで墜す豫覺を以て彼を責め立てた。

けれども今は一刻も躊躇してゐる時ではない。彼は死物狂ひの大膽を以て、この不可避な事實に面する準備にとりかゝつた。牧者達と、女子供とは二隊に分たれた。羊も、牛も、そして駱駝も。二十年の荒野の生活の鍛錬に、戰には馴れ切つたエサウの爲に、たとひ一隊が討ち果されようとも、その間に一隊を逃れしめようといふ彼の計畫であつた。數から言へば、四百の兵を幾十倍した僕等を有しては居ても、エサウの剛勇と、大膽と、そして年來蓄へられた復讐心との前に、何の甲斐もあらうとは思はれなかつたけれども、この、細かい心づかひは、せめても綿密なヤコブ自らの心に、手段を盡したといふ微かな安心を與へるものであつた。

準備は整うた。高原の尾を限つてゐる湖の上を、忍びやかに流れて來る夜の歩が天幕を訪れると、不安を超えた靜寂な沈痛にヤコブは歸つた。淡紫の煙が、あちこちの天幕から昇り始める頃、彼は悲痛な最後の決意の後に、恭しく跪いた。

「時は參りました。あなた樣の聖旨が遂げられる時が參りました。幸、不幸、何れにもたゞ聖旨のまに〳〵御導き下さいませ。祖父アブラハムの神、父イサクの神、我が生れさる先も、生れて後も守りつゞけ給うた神、かつて私になし給ひました御約束を、僕は偏に信じて居ります。私がベエルシバに歸ります時、私の親族は私に善く致しますといふ御約束でございました。只今までの御惠は、この僕の身に餘るほどのものでございました。何の績があれば、主はかくまでにこの卑しき者を祝し給ひましたか。只今與へられて居ります私の愛する者、私の持物に對しての感謝を、何と申せば表はされませう。かつて杖一本を持つた痩軀を映しましたヨルダンの流を、今は蔽ふほどの群羊を連れて渡ります。あゝ御惠は滿ち足つて居ります。この上に愚な願を心に有ちますのは、恐れ多いことでございます。併し神樣。何と申せばよろしうございませう、お願でございます。エサウは私を屠らうとして劍を磨いでゐるのではございますまいか。神樣、お救へ下さいませ、お救へ下さいませ、あなたの御約束が眞であることを。どうかあなた樣の廣大な御恩惠を、ふしぎな御わざを、僕の愛する者の上に御あらはし下さいませ。」

祈り終つた彼の瞼にも、野の草にも露は光つて居た。高原の草花の香が、ほのかに傳はつて來る。ヤコブは天幕に入ると、僕等に命じて群畜を數へさせた。山羊、羊、駱駝、驢馬

の一群一群は、各一人づゝの牧者に守られた。せん術もない兄の怒を、せめてこの數多い贈物によつてでも寛めたいといふ、ヤコブの苦しい心の贈物であつた。

「明朝、黎明の頃にヤボクの渡を渡らう。群を守るものは、俺達の先に進んで行け、群と群との間には、よい程の隔を殘して置け。」

　ヤコブは一事々々に深い思慮を加へつゝ命じた。次に、眞先に進むべき一人の僕を呼んだ。

「兄エサウは四百人を率ゐて俺を迎へに來るであらう。もし兄が、お前に、誰かと訊き、又この群は誰の所有かと聞いたならば、お前は跪いて言ふがよい。わが主の卑しき僕ヤコブが、尊いあなたに奉らうとする贈物でございますと。そして、僕ヤコブは、只今すぐにこの後から近づいて參りますと言へ。」

　第一の僕の次に、第二、第三の僕等が順次同樣な事を命ぜられた。たとひエサウが怒を以て近づいたにしても、エサウとヤコブとの間には幾多の群が、挽回の供物として置かれてあつたのである。

　エドムに幕を張つて居たエサウは、はるかなパタンアラムから弟の歸ることを聞いた。彼はも一度、あの二十年前の、弟と母とに欺かれて父の前に哭泣した絶望の日を思ひ出した。ヤコブが彼に犯した、一度ならぬ大罪を、どんなに憤つたであらう。弟は彼の希望のあらゆるものを奪ひ去つたのであつた。母からの愛、父の臨終の祝福、そしてそれが與へたであらう家督の權、父から傳はるべき財寶、それが生む所の前途の光明、美しい妻、靜かな喜に滿ちた家庭、それ等を大膽にも弟は陋劣な手段を以て、彼から奪ひ取つた。一族間の祭司としてあらゆる敬愛と權力とを有つ筈であつた自分を、曠野に流浪する獵人となし果てた、その弟に對する激怒は、彼を更に、より强暴にし、自棄的な猛惡さを彼の裡に刻みつけた。彼はあらゆる苦艱を排して報復しようと決心した。そして、體を鍛へ心を荒ませるこの荒原の生活に、むしろ進んで入り、自らのみじめな生活によつて、復讐心を自ら鼓舞しようとしたのであつた。

　然し、荒野の涯にさまよひ續けた長い年月の後、無謀で以て滿されて居た彼の胸に、天來の沈思が忍び込んだ。朝の山腹にきらめく露の玉、曉の川岸にうなだれる谷間の百合、紫から金色に變りゆく黎明の帷、その中に濃く染め出されるレバノンの森、飛びかふ班鳩、獐、彼が觸れ、彼が抱かるゝすべての自然は、ありとある靜寂と嚴な愛とを以て彼を

取り圍んだ。彼は陽に育つ草の芽を見、湧き出づる泉を見、又雛を羽ぐゝむ鵠を見た。そこには靜かな光があつた、細なぎ歌があつた。陽の光は、草にも木にも小鳥にも又彼の胸にも流れ込んだ。曉のやうに彼の裡に忍び入つた天の啓示は、暴力を靜謐さに、怒を愛に變へた。今、ヤコブが歸ると聞いたエサウの瞼には、再びかの美しかつた故國の野が、畠が、流が甦つて來た。弟の美しい面ざしも、そして只一人しかない己の血肉を迎ふるに、己の出來る限りの壯嚴と、熱愛とを以てしようと、四百人の僕を從へ、自らその先頭に立つて出發したのであつた。

幾千の群落を先驅にしたヤコブの隊は、謹嚴な緊張のうちに進んで來た。エサウの姿をちらと見た彼は、直に道にひれ伏して、七度の懇な禮をした。たゞ兄の怒を如何にもして解きたい一念から。さうして彼の心には、さすがに血肉の言ひしれぬ思慕と、極めての慚愧と、そして血の様な歎願とが渦卷いて居た。ヤコブは靜に兄に近づいた。

エサウの胸に電の如く閃いた血肉の情、それは火の如く熱く、血の如く強いものであつた。荒々しく光つた彼の眼の中に、ヤコブはかつて見たことのない、神のやうなやさしさを見た。そしてその瞼に見た微かな雫は、更にも彼にとつて驚くべきものであつた。エサウは走つた。趨つて、ヤコブの首を抱いて接吻した。さうだ、彼は二十年來の怨を、この一つの接吻によつて晴らしたのであつた。

二十年の生活は淋しかつた。悲慘にも寂しいものであつた。怒と、怨と、自暴と、それがたゞエサウの伴侶であつたけれどそれらは彼に伴侶であり乍ら、又彼を孤獨にさせるものであつた、怒るが故に淋しく、怨むが故に孤であつた彼は、淋しさの故に、孤獨の故に、更に怒り更に怨むのであつた。そこにはすべての苦惱と慘憺とがあつた。が、今、彼はその血肉を見た瞬間、現在までのその慘苦と別れる時が來たのを見た。彼の涙は單に弟に對する愛着のそれのみではなく、この二十年、己が經來つた道の、あらゆる荊棘いたましさの追憶と、今、それらから遁れ出ることの出來た歡から來る涙であつた。彼は今、この悲壯な刹那、全く別な意味で、泣き乍ら弟に訴へたかつた、彼は、心に咽びながら繰りかへして居た。

「弟よ、ヤコブよ。なぜ早く歸つて呉れなかつたのだ。なぜこの悲しい兄を苦みから早く救つて呉れなかつたのだ。一日お前が早く歸れば、一日早く俺は救はれたであらうものを。俺は、お前が俺にどんなに必要なものであつたかが初めて解

つた。」と、

二人は泣いた。悲しみと、歡びとの頂點に、涙のみが、獨り二人の愛を叙し得るものであつた。

群畜は新しい土の草を食み、子供等は、新しい地に、その疲れた足を投げ出して歌つた。新らしい境地と、新しい心性とは、新な神の恩惠を敎ふる曙の光と、懶かしくも安らかに相映じて居た。

田園の一日

横瀨たき

ひつきりなしに用があとからあとからと出て來る。それが何一つとしてまとまつた用でなく多くは雜用で一日が過ぎて仕舞ふ。

こゝらで一つ仕舞つてあの用をしなくちやと思ふ時、手は別な仕事に向つて動いてをるのである。思ひ切り惡るく其用を片付けて座敷へ上つて來ると長火鉢の鐵瓶がチンチン重いふたをもたげてをる。坐りかけたのをまた立つて下のへつゝいから茶釜の湯をさして來る。

「さあこれからお針を」とおもつて坐ると、あけはなしてあつた硝子戸から雞が上つて來たのであらう。板の間でブルブルと身ぶるひをしてそこら一面ほこりだらけにしてしまつた。はら立ちまぎれに、いきなり追ひ立てると、一方きりあいてない、廣い土間の中を、面喰つて、バサ〱バサ〱逃げ廻つて中々出口を見つけない、やつと南の口の方へ追ひやつて戸を締めて上つて來ると板の間のほこりがイマイマしい。仕方がないから箒をとつて掃き出してみたが、矢張其處ら一面一たいに白つぽくよごれてる。冷たい雜巾を取り上げるとカチ〱にこほつてる。バケツへひたしてもみ出すとイヤにつめたい、ゴソゴソ雜巾をかける。

「あゝあゝいやになつちまふ、こんな事で日を暮してしまふなんて、ほんとに馬鹿らしいなあ」きゝ手のない愚痴が出る。

お針のところへやつと坐ると、手がつめたい、火鉢が欲しいけれど自分用では立つのもおつくうで仕樣がない。ふところ手して指先をあたゝめて、硝子ごしにポカンと外をみてると、新聞屋の安さんがとつとつと門からやつて來た。

「寒からうなあ」と安さんの頭が同情をひく、うす黒いフラ

ンネルの切れが、安さんの頬かぶりと胴卷とをいつしよに束ねてつとめてをる、珍らしく白の手袋が目に立つと思つてると、ドサツト一握り新聞を通り緣へなげて行つた。

「瀧子、新聞を呉れ」

と、うしろの衝立のかげから良人の聲がする。

「さあまた用のきつかけが出來た」とおもひながら、横着に坐つたまゝ障子をあけて新聞をとらうとしたが手が屆かぬ、三尺ざしでやつとこきよせるやうにとつて、衝立てのわきへ出すと、

「行火に火がないや」といふ、

「チヨツ、仕樣ないなあ」良人にきこえないやうにこぼす、

「お茶を一杯くれないか」とまた用が出た、

「いまね、さしたところで少うしぬるいんですの」

「ぢや火を呉れ」

どうしても立たなくてはならない、行火をとりに良人のそばへよると良人もぬるい行火の穴に兩手を突込んで、いま私がしてゐたやうに外の方を所在なしに見てゐたらしい、出してあげた新聞も、向う向きになつてゐたから、後の方にある、新聞をまた取つて机の上にのせて上げる。

「さあ新聞を、こん度は廣げてあげないと見ないんですか、ほんとに仕樣ありませんね、手ぐらいのべてとつたらいゝでせう。」

「うしろに目はないよ」

「だつて私が居なかつたらどうするの」

「イヤ奥さんが居つたから頼んだんだよ」

「だからさ、居らなかつたらつてんですよ」

「來るまで待つてをります」

「なんてイヤな父さんでせう。私のことばかり待つてて、そしてこんな火もない行火なんぞ」

「火がないから取つて下さいつてお頼みまうすんですよ」

「イヤだよあなたは、馬鹿にしてるんだもの、私今朝からまだなんにもしないんですよ、もう十時ですよ」

「いゝから火をとつてお茶を一杯くれ、あとはたのまないよ急いで手紙を書かなくちやならないなあ、暮の金が間にあはないと大變だぞ」

ポカンとして居たくせに、忙がしさうな事をいつてせき立てる。長火鉢で火をいれながら、金といへば今日は幾日だらう、カレンダーを見ると廿四日の十九日、いま十日ばかりで舊のお正月が來る。新の暮の支拂が濟んだばかりでまた舊の暮の支拂と全くやり切れない、一日の日を二樣に數へること

も隨分わづらはしい。二重生活も中々念入りな私達だ。

表の方でカラコロ小供の足音がして來る、聞き耳を立てゝゐると門を這入つてくる、にはとりを追ひ出した硝子障子をあけて糸子が來た。

「母ちやん、十時をちようだい、今日はね、するめがいゝ」

「いま上げるよ」

「母ちやん、するめはね、私、足も、頭もいらないよ、からだゞけちようだい」

「いまね、父さんの行火へお火を取つたから、おこしてやいて上げるよ」

「燒かなくてもいゝよ、おかねちやんは燒かないのをたべてるよ、たべられるんだから、やかなくてもいゝよ」

糸子はさういひ待ち遠しいかして、上がらずに土間に立つてゐる。

「こつちへ上りな、駄目、するめつて燒いてたべるものだよ」

秋の頃北海道の方からの便りに今年は烏賊の大魚だといふことを聞いた。そのせいかして十勝の國の方へ嫁いで行つた親類の家の娘からもするめを澤山貰つた、その他三四ケ所からもおくられた。そのするめを、いそがしいまゝに、一寸した處へ置き〳〵して二匹の飼猫に十枚近く御馳走してしまつて良人にほめられた。それから氣をつけて猫も鼠もかゝれぬ、私さへ一寸手のとゞかぬ高い戸棚へしまつた。お菓子類はこれまでお納戸の戸棚へお客用のお茶道具類と一緒にしまつて置いたが、これは糸子にかゝられるので、どうかすると兩方の元祿袖をふくらましてお納戸から出て來ることもあるので、このごろは高いお納戸の棚へ折箱ごとおくことにしてゐる。

するめを燒いてやつたり、お茶を煎れて上げたりしてをると、おんぶしてゐるゆり子もお乳を欲しがつて遊びから歸つて來た。

ねいやがスツト障子を引いて土間へ片足いれた、脊中のゆり子が白い顔へ頰だけ紅くしてチヤンと母ちやんのをる方へ目をつけてゐる。あがりがまちあたりまで、ねいやがよつて來ると、もう、火鉢の前の私を見つけて下りたがつて泣き出した。

イライラしかけてゐた私の心がすこしやはらいだ。

「ゆりちやんか、どれ、おゝつめたい頰をしてね、よし〳〵父さん〳〵チヨツトこつち」

良人のうしろへ立つて見せようとする。

良人がペンをおいて行火へ手をさし込んで見上げた。

「おゝ、ゆりか、ゆりか、あゝ、あゝつてあゝ」

と舌をいつものやうに長々と出しておどけてみせる。

でもゆり子は眞似ない、母ちやんの胸へ顔をすりつけて、おつぱい頂戴をしてをる、すつかり私の心がやはらいだ。

「此處でおつぱいを上げやうね」

行火のそばへ坐つて胸をあけてやる。

「父さん郵便が來ますよ、早く書かないと、いま十日しか大晦日までありませんよ、間に合ふかな、私もお金の心配さへないといいけれどね」

「贅澤だ、米の心配さへさせる亭主もあらあ」

「だつてほんとうの話しですよ、ちつとも贅澤ぢやありませんよ、此頃のやうにあくせくして暮してみると、お金に差支へないのが一番たのしみだとつく〲おもふから」

「後藤新平の葉卷は一本七圓五十錢だと」

またからかひ初まつた、うす笑ひして高い鼻をちよつとつまんだ。

「あと三百圓いたゞいても萬七の給金は まるきり足りません、さういつて上げて下さい。

それでね父さんどうしても舊正月中に屋根替を初めたいが兄さんの都合はどんなですか、庭に出てみるともう壓木の竹が出てしまつてるんですから、この夏の雨期は屹度雨もりしますからとよく兄さんがのみ込めるやうに委しく書き添へて下さい」

「書くことはそれだけか」

「それだけかつて、あとは――ほんとに冗談ぢやありませんよ、それでね萬七をまた來年も置くとしてもですね、どうしても給金と仕着せ下駄から足袋、一年中の小づかひ、それに米一人扶食四俵半としてよほどになりますよ、まあザツト二百圓ですね、それぢやあチトね手が出ませんよ、それでね、向ふで親父が百圓も百十圓もといふ給料を望めば、私は斷然置かぬことにしますからね、その邊のことも書いて上げて下さい。それでも、兄さんがわたしが大變だらうから用があつても無くても損得にかゝはらず置けと仰言つて下さるなら置きたいのくらゐぢやあないんですがね」

「百圓だつて世間の振合を見ると安いぞ」

「えゝ、私だつてそれは充分分つてますよ、萬七のやうにいゝ男を百圓下で使はうつてのが無理な位ですよ、だけど親父だつても給金とつて書生に置かうつてんですから、其邊

から割出して百圓以下といふんですよ、萬七を置くのにね、私だちや向ふの親父が世間一體の振合で給金をきめやうつていふのは無理ですよ」

「それは無理かも知れないがね、湯屋の鶴公の息子が十八だつていふから萬七とおなじ歳だらう、それが比毛へきまつて百六十圓だといふぢやあないか。萬七を百圓以下位でといふのもつまり、一方になんか標準を置かなくては價のつけやうがないぢやあない、だから僕は安いつていふんだよ」

話しがそれてきた少しぢれつたくなつて來た。抱かれてる百合子がお乳をはなして問答するたびに動く私の口元に目をつけてをる、ほんとうに百合子の臓はいゝ——無意識に乳房を與へるとまた吸ひつく。

「それぢやあ、あなたはなんとでもお好きに書いて下さいな、あつ、郵便が來てしまつた。またあしたの事だ、どうせ間にあはない、それぢや書けたら一寸私によまして下さい」

「亭主の手紙を一々檢閲する奴もないもんだ生意氣に」

不得要領に話しはなりかけた、父さんなんぞにわかりはしない、いつでも話しといふと茶々を入れていけない人だ。

萬七と次郎が向山からお晝に來た、萬七が居てはどうせ話しが不味い。百合子をねいやに渡してお茶わかしに土間へおりてへつゝいをもす。

「今日は風がないね」

次郎が先きに這入つて來て板の間へ腰をおろして話しかける。

「今お茶がわくぞ、咽喉がかわくべ」

「かわくわ」

庭では萬七がころにからかつてゐる。百合子が通り椽で抱かれながら喜んで見てゐる。

「粗朶はもう何把ほど伐れた」

「さうさねまだまるつてみないからわかんねいが八十把位かね、去年は何把きつたつけね」

「さうよなあ、忘れつちやまつたなあ、なんでも二百把位だとおもふた」

「今年もその位でいゝかね」

「まあいつぺいなあ、どつちみち去年位伐んなくつちやあたりめいな」

「新道あたりの粗朶の相場はどう」

「さうだね、松粗朶が十把け、榛の木粗朶が八把とかゆつて

たつけね」
「さうすると松粗朶の價にして二十圓ちもんだ、燃しものも容易ぢやないな、その外薪に炭」
炭燒きも年內にはじめないと正月の炭がなくなるのだつた。ころが萬七の胸あたりまで飛びついてさわいでをる。
「萬七お茶がわいたぞ」
と呼ぶと萬七よりころの方が先きに土間へ飛び込んで來て私のかゞんでをる背中へ飛びついた、いくら追つても追ふとよけいにはずんで飛びついて來る。背中といはず腰の邊から兩方の袂まで土だらけになつてしまう、あたまを輕く一つ打つてやると、おどろいて、いつも食物を貰ふところへ逃げて行つて、おあづけをしてをる。
大變だ、ころの頭が動くと垂れてる耳までフラフラ動く、丸い瞳を廻す、ちよつと立ちかけてはまた思ひ返しておあづけをする。尾を土間の上へ左右にすりつける、そして次郎と萬七がお箸を運んだりお椀をもつたりする手先を見てゐる。私が土間を往き來すると、見上げて、貰へるか貰へるかとおもふ樣子をする。知らぬふりをしてをるとたまらなくなつてクンクン喉を鳴らしはじめた。
御飯へお汁をかけて目ざしの頭をのせてやると、息もつかずに容器の中へ首を突込んで食べはじめた。
鷄の雄が土間へ這入つて來た。いつもコロのいれ器の飯粒をきれいに始末するのはこの雄鳥の役目のやうなものである、コロのたべてをる中から恐る恐るその樣子を遠まきにめぐつてたべ終るのを待つてるやうな時もある。雄雞の二羽居た頃はこの鷄はいつも雌のそばへ寄りつけないで一日中、そのくせ雌の姿を追ひつゝ淋しさうに屋敷の中を漂浪してゐるのだつた。此頃一羽の天下になつてから憎らしい程いやらしくなつて流しもとや勝手の板の間までおし上つて來て、子供達のエプロンから白い粒の一粒でも落ちようものならのがしつこなく先に立つてやつてくるのだ。
大戶からさし込む日ざしがよほど斜になつて土間の上を明るく照してをる。今日も今からなにをする暇もない。どうせお針にかゝつても半端だ
「父さん今から向山の方を見廻つて來ますよ」
食卓の上を手早くまとめ乍ら話しかけると
「うん、行つたらね、僕この間から行つて見たいと思つてたんだからね、よくよく見て來て呉れないか千歳野良とシラジ淵の挿木した處を」
「私それよりもね、あげられた桑畑を見たいんですよ」

「中々また行けないからね挿木の工合を見て來いよ」
お末に百合子のお襁褓を取かへさせておんぶした。霜どけで道がぬかりはしないかと門を出ながらおもひついて杖に手ごろな竹棒を見つけてもらつた。下河の土橋まで來るともう道がぬかりはじめた、土橋からはまた道がせまくなつてあまり人通りがないからよけいぬかる。

　酒屋の鷄だらう霜降のが何羽も出てをる。村の人が放し飼にしておくので麥の芽を喰はれてしまつて困るとこぼしてゐるのを聞いた事がある。私が棒をもつてるのに驚いたか、いつせいに今私の渡つて來た土橋をつたつて村の方へ逃げ込んだ。雌が一匹逃げおくれマゴマゴしてをる。杖を振上げて追ふ眞似をすると、コケーッと飛び出した。土橋の方へ行かないでがさやぶだらけの中をまごついてをる。面白半分にまたシーツと追ふと今度は河向うめがけて飛び上つたが向う岸へ飛びつけないで薄氷の上へおちた、そのはずみに氷がわれて足が水へ沈みかけた。細い野良道から新道へ出た、下駄の土を落して、村の人が新道橋といつてをる筑波橋を渡ると、小貝川の堤へ出る、堤の上は矢張り新道といつてをる。榛の木林と櫟林の向うに筑波山が見える、見えるといふよりもあるといつた方がいゝかも知れない。百合子がいつの間にかウトウトしかけて肩がだるくなつてきた、ねんねこがあつくるしい。堤の上の道はやゝ筑波山の方向へ向つてつゞいてをる。少し行つて右へ堤をおりると向山だ、道の上から川向うで木を伐つてる次郎と萬七の姿が見える、小さく。

　これまで土手の兩わきには野篠が茂つてゐたがいつの間にかきれいになつてゐる。ところどころ子供らがいたづらに芝燒きをしたあとがある、黑くやけた土の上にほんのかすかに草が芽ぐんでをる。（一月廿四日）

嫁入前の現代女性に是非讀んで貰ひたい書籍

書籍は固より私共の終生の友でありますが、一般的に云つて高等女學校を出てから結婚する迄の間が、時間の上から環境の點から最も讀書の自由が得られ、十分に味讀して貰はねばならぬ時期ですのに、適當な書籍を知らずに、却つて濫讀の弊に陷つてゐる若い女性もさぞ多いことだらうと思つて、本誌は特に嫁入前の女性の爲に是非讀んで貰ひたい書籍を、現代の思想家、文藝家にお願ひしましたところ、澤山の有益な御回答を頂くことが出來ましたから、讀者諸姉の御參考に供します。

□　島崎藤村

嫁入前ではすこし遲い。もつとずつと前からなら、エレン・ケエ女史の『子供の世紀』や、『愛と結婚』なぞを讀ませたいと思ひます。

□　安倍能成

若し其人が理解し得る程度にあるならば、阿部次郎の譯したリツプスの『倫理學の根本問題』の第八章の結婚に關する所を熟讀して頂きたい。

□　藤森成吉

特に嫁入り前によむべき本を知らず。あらゆる方面の本を讀むに如かず、就中クロポトキンの自叙傳の如き、その必たるものか。

□　與謝野晶子

トルストイの小說と論文、ドストイエフスキーの小說、リツプスの倫理學の基礎、イプセンの戯曲、ルウソオの懺悔錄、河田嗣郞、長谷川如是閑、山川菊榮三氏の婦人問題に關する論文。桑木嚴翼、左右田喜一郎、河上肇氏の論著。島崎藤村、有島武郞、木下杢太郞、菊地寛、芥川龍之介、志賀直哉、佐藤春夫諸氏の文藝諸作。

□　上司小劍

エミイル・ゾラの Fécondité（蕃殖）はいかゞ。四福音書に擬したゾラの四部作の第一で、堺利彦氏の英譯から重譯した日本譯があります。フランスの人口問題に基礎をおいた一種の人道小

説。社會小説又は家庭小説ですが、ゾラだけに、あまいものではありません。お嫁入りなんぞする女性には丁度いゝものでせう。

□ 沖野岩三郎

少くとも二三種の新聞紙と四五種の雜誌を精讀して常識を養成させて置きたし。

□ 出隆

所謂婦人雜誌を讀むひまがあれば、大きなまとまつた、そして六ケしい本を少讀するがよいと思ひます。子供が出來て添乳してゐては、雜誌を讀む位が關の山となるのが普通ですから。

□ 小川未明

特に、さういふ書物は思ひあたりません。法律に關して、衞生、料理等に關して、それ等は、必要とは思ひますが、私自身作家の立場として、トルストイの書物は、是非讀ましたいと思つてゐます。戀愛に關するもの、宗教に關するもの、それ等には家庭をつくる上に深い教訓があります。

□ 吉田絃二郎

聖書、歎異抄、萬葉、芭蕉の文と俳句、近松巣林の作、マアカスアウレリウスの瞑想録。

□ 荻原井泉水

歎異抄。ニコル基督傳。

□ 中條百合子

常識を働かせ、實際的な立場から考へると、性、育兒教育等に關するよい書物も必要でせう。私には一々指名出來ません。心の上から行くと頭に浮ぶだけでも、夏目漱石の「行人」「それから」「門」ツルゲーネフの「その前夜」「處女地」ロマンローランの「ジヤンクリストフ」名を一寸思ひ出せませんが、同じ人が女性を主人公として描いた最近の長篇。ガルスワージーの〝Saints progress〟パッチンスの〝—is freedom〟その他、深く讀むべきものが多いと思ひます。ゲーテの「親和力」アンリー・フアブルの昆蟲記のやうなものもよい本です。

□ 堺利彦

質問外のことですが、此等を書きながら私の心に起つたことを言はせて下さい。結婚が最も冒險であり一大事であるのは、運命的な要點が（其人等によつて）他人の書いたどの本にも載つてゐないといふ事です。

□ ベーベル婦人論（山川菊榮氏譯）

□ 岸邊福雄

論語。

□ 村松梢風

私には嫁入り前の妹が一人ありますが、書物は手當り次第に何んでも讀ませて居ります。實務の書物以外では、どんないゝ事が書いてある本でも一冊や二冊讀んだのでは藥になりません。書物の數を讀まなければ、批判力が附かないから駄目です。批判力さへ附いて來れば何を讀ませても大丈夫です、愚劣な本は自分からしりぞけるやうになる――さういふ主義で私は妹を敎育してゐるのですが、幸ひ不良少女にもならぬところから見ると、それでもいゝかと思ふのです。强いて質問に答へやうとすれば、一般文學書類を廣く讀ませることが、理解を深め、殊に女子の情操を豐富ならしむる點に於て、一番有益であらうと信じて居ります。

□ 鶴見祐輔

日本の婦人の方々に嫁入前に讀んで頂きたい本は澤山ありますけれ共、日本のやうに束縛せられた社會に於ては申しても無駄だと思ひますから、私は次の一卷のみを申上げます。

英國女流詩人プロクター詩集。

□ 小牧近江

小說なら豐島氏譯ロマン・ロオランの「ジヤン・クリストフ」、山內義雄氏譯アンドレ・ジイドの「狹き門」等。

雜誌なら「女性改造」などゝいひませう。

□ 室生犀星

讀書といふものは本人の選ぶものです。是非讀ませたきものなど勝手なことです。女の人は女の人で好きな物を讀んだらいいでせう。

□ 土田杏村

ゲエテの諸作、(特に「ウイルヘルム、マイステル」の樣な)。トルストイの諸作「レミゼラブル」「基督の模倣」「エミイル」「愛の學校」など、其外いくらもある。好き嫌いはあるが、メエテルリンクのものも女性には讀んで貰つてよいものだと思ふ。以上の飜譯にはよいものといけないものとがある。その選擇が肝要。日本のものでは有島氏の諸作。「死線を越えて」「懺悔の生活」などは、やはり此の時代の女性がよんでおいてよいものだ。

□ 生方敏郎

嫁入り前、婚約が出來てからは娘さんの心が落付かず、仲々讀書どころの話ではない、そんな事より先づ第一に研究すべき問題は夫の君をあなたと呼ぶか、敏さんと名前で呼ぶか、こちの人と舊式に呼ぶかといふやうな事、第二に御飯の焚き方料理法、室内掃除法一般、酒呑みや夜遲く訪れる客、主人の道樂仲間を如何にして撃退す可きかに就いて、又主人の親族操縦法に就いて、それより何より主人その人の操縦術の研究を怠つてはならぬ、右の如き問題を解決する書物を選び讀む可し。之れ女性六韜三略なり。

□ 高島米峰

嫁入前の女性は先づ「六方禮經」「玉耶女經」を拜讀して、女性として母として妻としての本務に徹底し、別に「歎異抄」を味讀して人間生活の根本要義たる佛教の信仰に歸入し、尚新らしき人生觀に確立せんがために小生著作の「現代世相批判の蟲」「横目で睨んだ人生」などを精讀すべし。

□ 宮田修

文藝に關する書籍も擧げたいが、御發問の趣旨のあるところが殊に嫁入前と限定されて居る邊から推察すると、もつと適切なものとの意にもとられ、且つ其種のものは擧ぐるに枚擧がないから、今は左の二書だけを擧げて御返事とする、前者は理論の上から、後者は實際の上から共に推薦したいと考へて居る。

(一) Ellen Key: "Love and Wa-ninge"

因に此書は原田實氏の親切な邦譯がある。舊には天佑社から出版されて居たが、今度は叢英閣から出る。

(二) W. Rolins n: Woman, her Sex and Love Life"

此書も先頃高橋毅一郎氏が譯して白水社から出して居る。

□ 内田魯庵

嫁入前に讀ませたいといふのはドウいふ事をいふのですか。文金の高髷を耳隱しに直し藤谷紅兒の絵封筒にペン書きの手紙でも書けば直ぐ新らしいお嫁さんになるやうに思ふ何とかの友だの何とか倶樂部だのといふ女の雜誌の質問なら聞えるが『女性改造』とも有らう雜誌の問題としては腑に落ち兼ねる。

嫁入前に特に讀ませたいといふと嫁入後の準備の爲めらしく聞えるが、嫁入後の準備といふは何を指すのです。飯の炊き方か漬物の鹽加減か、夫とも

良人や舅姑に對する心得方か。臺所の雜事なら本を讀むよりはおさんどんに聞いた方がまし。若し良人や舅姑に對する心得方なら、夫は女を一家の從屬視した昔しの女大學時代にこそ特別の道徳が有つたらうが、今日は女にも男にも親にも子にも老にも道徳は一つしか無い。人としての道丈けが女にも男にも最も大切であつて、其以外に特に嫁入前に是非とも讀まねばならぬ敎へねばならぬといふ道徳も敎訓も無い。强ていふなら男に對する女の位置を自覺する爲めに考へもし讀みもしなければならぬものはあらうが、夫は嫁入前に限つたことでなく、嫁入の準備の爲めの讀書よりはお祭りの性になる牛のやうに五色のキレで着飾る花嫁姿を誇りとする嫁入氣分其物が若い女の憧憬とすべきものか否かが先決問題である。

（但し一家を構へると一つのビジネスとして考へねば、夫は事務員となる前、商店員となる前、業務上の知識を幾分なりとも修得する必要があるやうに、家庭といふビジネスに入る爲めの多少の準備も入用だらうが、此質問とは恐らく別問題であらう。）

□ 高須芳次郎

嫁入前には第一に科學（理化、博物の類）に關する通俗書を一讀する必要がありますが、この點では、科學專門家が適當な書を推薦されるでせうから略します。次ぎにクラシツクの知識が必要ですそれには『古事記』『萬葉集』『源氏物語』『枕草紙などを讀むが宜いでせう坪内博士の『沙翁全集』なども一應よく讀まれんことを希望します。鷗外氏譯、ゲエテの『フアウスト』も見てほしいです。歷史知識は女性にも必要ですから早大出版部の『國民日本史』『通俗世界全史』や本庄博士の『日本社會史』なども是非讀まれたいものです。

□ 帆足理一郎

自己推薦で甚だ失禮ですが小生の近著、博文館出版、婦人問題評論集を讀んでいただきたいと存じます。

□ 林 癸未夫

嫁入前の若い女には平易な自然科學に關する書籍、それから餘りセンチメンタルでない小説戯曲の類を讀ませたい。宗敎や道徳や政治や社會などに關する書籍は、本人が特に要望しない限りは、勸めて讀ませたいとは思はない。併しこれは自分の娘に對してだけの話だ。世間一般の女性に適合するやうな返辭は私にはできない。それので

きる人は、恐らく厭世の達人か、さなくばある殼を脊負つてゐる職業的思想家だけであらう。

□　中村吉藏

イプセンの社會劇。ストリンドベルグの兩性問題劇。ヘヴロック・エリスの「性」の研究書。モウパッサン「女の一生」特種參考書として「女大學」

□　新居格

色々考へてみましたが、別にこれといふ好い書物も思ひ當らず、まあイブセンの「人形の家」一卷を熟讀玩味すべきか。

□　川路柳虹

嫁入前に特に讀ませると限れば、さしづめSexual Hygieneに關するやうな本を第一に想起しますが、今の若い方々は相當拔目なくその方のものも目を通されてるやうです。第一今日の婦人雜誌の告白物とか、衛生問答とかを熟讀すれば、その方の常識にはそんなに困りもしますまい。たゞ私は餘り感情的空想的な戀愛小説風のものを讀まれるより、まだしもこの程の科學的な正當な知識を與へるもので、良い健全な本を讀まれることは必要と思ひます。そのほかは淑女としての資格さへあれば足りませう。

□　安部磯雄

私は自分で未だ讀んで居ませんが近頃飜譯になつたストープスの「結婚愛」がよくはないかと思ひます。若し家庭に關する方面の事であるならば、私の著述「子供本位の家庭（實業之日本社發行）を是非讀んでいたゞきたいと思ひます。

□　村松正俊

嫁入前の女性でも先づ普通の人間として趣味はあく迄も廣く知識はいよいよ深いのが望ましい事です其の中、特に讀ませ度いのは生物學、心理學、精神病學に關する書物ですそれから嫁入後のためにはガストロノミーに關する書物を是非讀ましたいものだと思ひます、以上の書物は手頃なのが日本語でも外國語でもありますから特に個々の名をあげる必要もないと思ひます。

□　鷹野つぎ

特に書名を擧げておすゝめするのは、私だけの好みもありますので遠慮致しますが、これから世の中へ進まふとする若い兩女性の方には、修養書一方の讀みものだけでは、物足らないと思ひます。實生活の上に根強い力を養

つて行くには、どうしてもその半面のものも讀む必要があると思ひますが、しかしこれには若い女性方の讀書に對する態度と云ふ事の方が重な問題になつてきますので、此處では御答へにもならないと存じますからほんのこれだけを。

□　西宮藤朝

讀ませるに適當なものあれば、讀ませなければならぬしといふ必要は痛切に感じて居ます。然し私の知つてる範圍では、未だ見當らないのを非常に遺憾に思ひます。外國にはよくさういふ爲めの本がありますが、迚も現在の日本の女性には向きさうもありません。私は特に現在の日本の女性の境遇と知識の程度と能力とに適當した本を誰か見識のある人に書いて貰つて一般に讀ませ度いものと、以前から考へて居ます。今も希望して居ます。此の問題については餘りに細說を要するので、他日もつと委しく書かうと思つて居ます。

□　瀧井孝作

むかし母や祖母などが讀んだ物かと思ふ、和綴の厚味のある百人一首や三世相などと言ふ本に、色々趣味本位の眺めを世間の有樣――年中行事や紋盡しや熨斗結び紐の圖や――左う云ふ物のあつたのを記憶します。時代が違ふので百人一首や三世相の本でもあるまいけれど、前にあげた感じの物で、時代に適合する本があればと思ひます。

さしあたつて之と云ふ本が思ひ當らぬので、先づ斯樣な答と希望を申上げました。

□　野口米次郎

私は私の住む領土の書物だけを知つて、まだ嘗て一步も嫁入前の女性に適當な書物のことを考へたことがありません。隨分以前に讀んだことがある原名 Dora Thorn 日本で末松氏が『谷間の姫百合』として和譯された小說などは女性に讀ましたい書物の一冊であらうと思ひます。

□　森田草平

一、男の氣持ちを尊重し、その神經をいたはるだけの智慧と手練を養成せしむる書。かゝる書今の世になし。

□　本間久雄

拜復一寸具體的な書名は擧げかねますが、敎育に關したものと、婦人問題に對して、基礎的知識を與へるものとだけは是非讀ませたいと思ひます。

□ 馬場恒吾

トルストイの、アンナ・カレニナ、トマス・ハーデーの、チユド、オブスキユーア。

□ 五來素川

古いけれど手近い所でIrvingのSketch Bookの中"The Wife"が是非嫁入前の女性に讀んでいたゞきたいと思ひます。

□ 高橋清吾

左の二書を通俗的に譯述して讀ませたし。

1. ミルの婦人の隷從（The subjection of women.）
2. メーリー・ウオルストンクラフトの婦人の主張（Vindication of the Rights of Women）

□ 平林初之輔

平易な自然科學、經濟學、日本歷史、世界歷史等。たとへば貴社近刊の「日本社會史」の如し。

□ 土岐善麿

日本の古典（古事記、萬葉集をはじめ竹取、枕草紙など）西洋の古典（ドンキホーテ、フアウスト、シエクスピア等）グリム、アンデルゼン等の童話、チエエホフの戯曲小說。アンリフアブルの自然科學の諸著。生物學の初步。ベエベルの「女」。田丸博士の「ローマ字國字論」及び「ローマ字文の研究」。僕の「女子ローマ字讀本」——これは文學科學に親しむ一つの手段としても推薦したいと思ふ。寺田博士の「冬彥集」も一讀させておきたい。擧げはじめたら、いくらもあると思ひます。

□ 生田長江

一『女大學』

私は大抵の婦人解放的な考へ方に正面から反對して來てゐるのです。從つて今、右の書名を擧げたのを、たゞの、せうだんや反語だと思つて頂いては困ります。

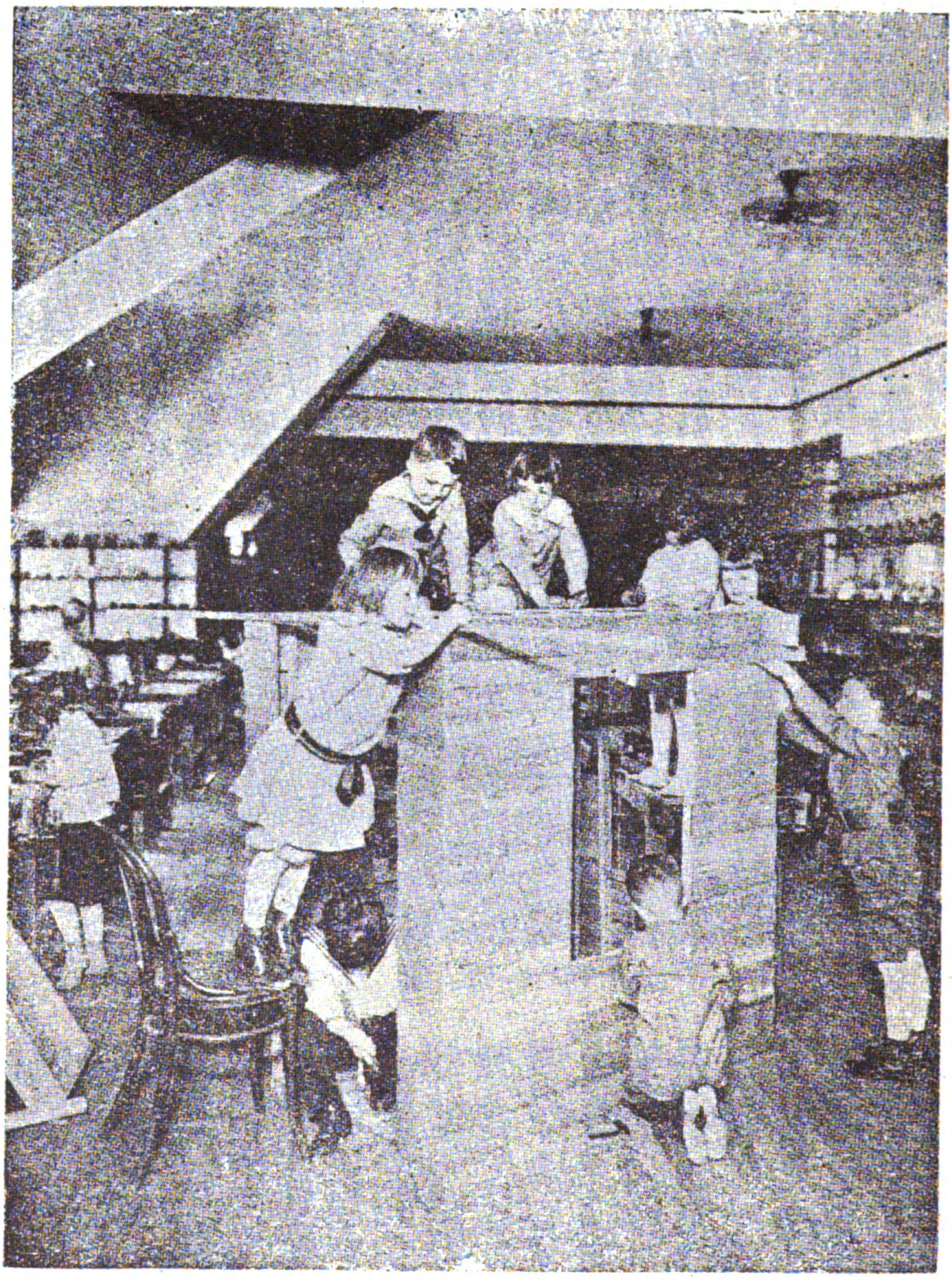
教育と産業の兩方面より見たる世界の玩具

木檜恕一

(一) 教育上より見たる玩具の價値

凡そ一國の文明は其の玩具の如何に依つても其の一端を識ることが出來ると言はれて居る。げに獨逸の如き或は米國の如き良く之を作り且つ多く之を用ふる國は著しく進歩し、支那の如き或は印度の如きその之を作ることも尠なく、且つ用ふることも尠き國は其の進歩遲々として振はざることは吾々の明かに首肯し得らるゝことである。更に之を我が國内に就て見るも、遠き昔は暫く措き、近く明治維新の前後に於て或は又明治初年の玩具と現今のものとを比較對照しても、同じ道理を當て篏めることが出來る。獨り時代の推移のみではなく、同じ時代に於ても都會と田舍とを對照して之を見ても、以上述べた玩具の進歩が一國文野の消長に至大の影響あることは、自ら之を識ることが出來るのである。

一體に我が國人は玩具に就て其の價値を十分に認むることが割合に乏しい樣に思はれる。玩具と言へば單に子供の遊戲品とのみ之を考へて、其處に更に教育上重大の効果をもたらすものたることに意を止めざるが如きは甚だ遺憾なことである。歐米の國人は假令一個の玩具を與へるにしても、先づ其の教育上の目的から考へて、兒童の年齡に應じ其の趣味に應じ其の趣好に適するものを研究して之を選擇する。我が國人中果して斯かる思慮の下に玩具を吟味して與ふるものが幾人

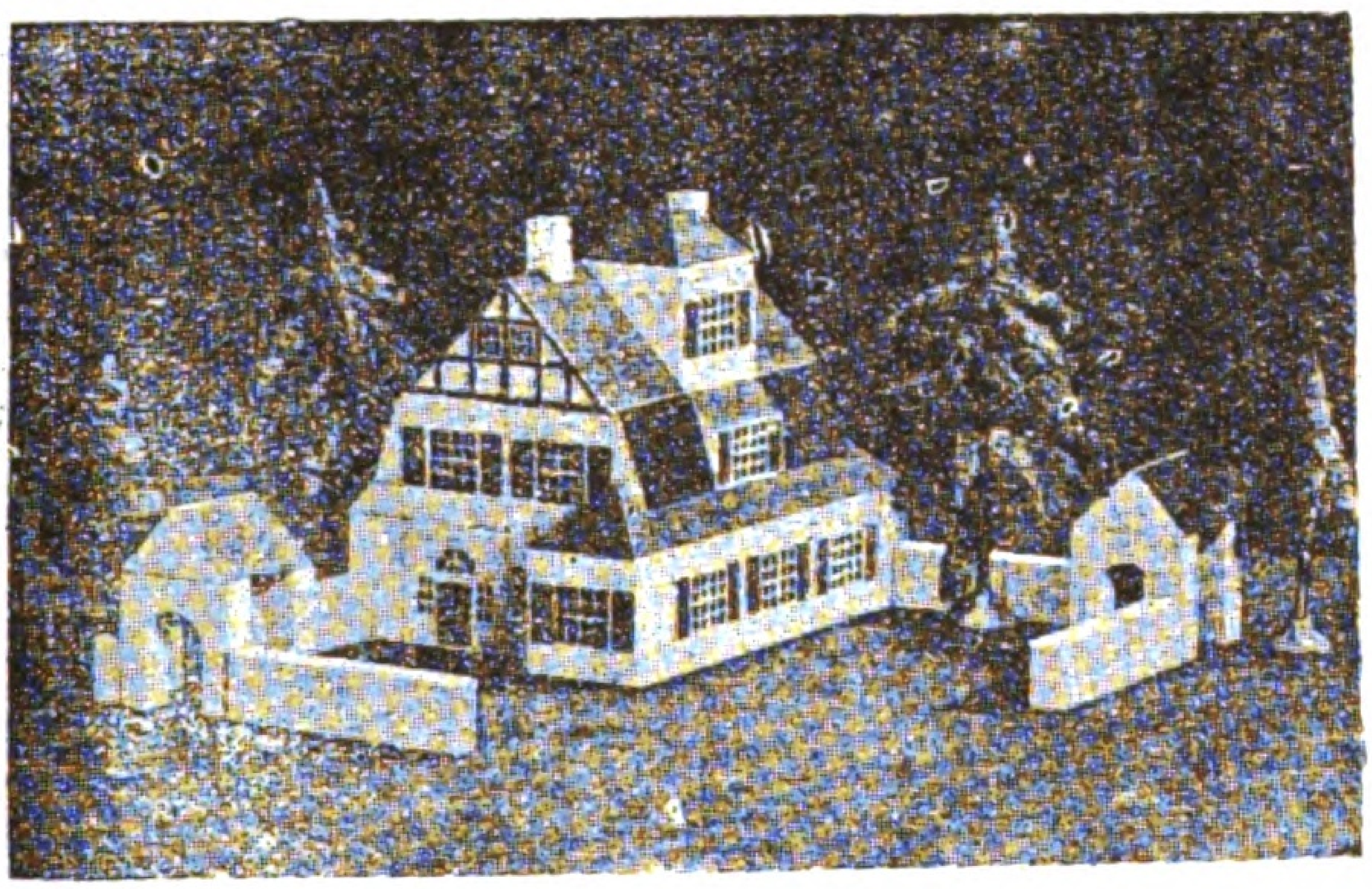


（模型の家を作る兒童の作業振）

あらうか、甚だしきは子供の自發的に希望する要求を遮つて、徒らに不徹底な想像を巡らし、自分の趣好を標準として之を選んで與ふるものすらある。兒童の教育に對する不注意も此に至つては極まれりと言ふべきである。歐米の教育家が常に深き注意と研究を之に傾

けつつあるに鑑みても、我が教育家又は家庭の父母たるものは大に顧みる所がなくてはならぬ。

獨逸國人が科學に長ずることは、世界周知のことである。而も彼等はその科學を啻に學問として研究するのみでなく、飽くまで之を實地に應用せんとして努力して居る。學理と實際とは決して相離るべからざるものなることを深く自覺し、實踐なき學理は何等の權威無きものとして之が實地に益々重きを加へて居る。試みに此の國の初等教育の一端を見るに、理化學の智識は圖畫、手工、體操、遊戲の如き實科と巧みに結び付けられ、不知の間に非常な趣味を以て兒童に迎へられ、爲めに玩具は教育上缺くべからざるものとして益々研究せられて居る。故に電車、自働車、汽車、汽船又は飛行機、飛行船等、凡そ文明の利器に新しき發明が試みられたる時は、先づ第一に玩具に現はるゝが通例である。或は時に、玩具に最初現はれて次に之より實際を産み出すとも往々ありと聞いて居る。此くの如くして玩具は科學の進歩を最も早く普及すると同時に、一面科學の進歩を導くに亦必要なる手段であるとも言ふことが出來る。英吉利の歴史に關する玩具、佛蘭西の理化學に關する玩具、獨逸の實用經濟に關する玩具、米國運動遊戲に關する玩具、墺太利の工藝圖案に關する玩具の最も多きは、夫々其の國狀又は國民性に顧みて爭ふべからざる著しき現象である。

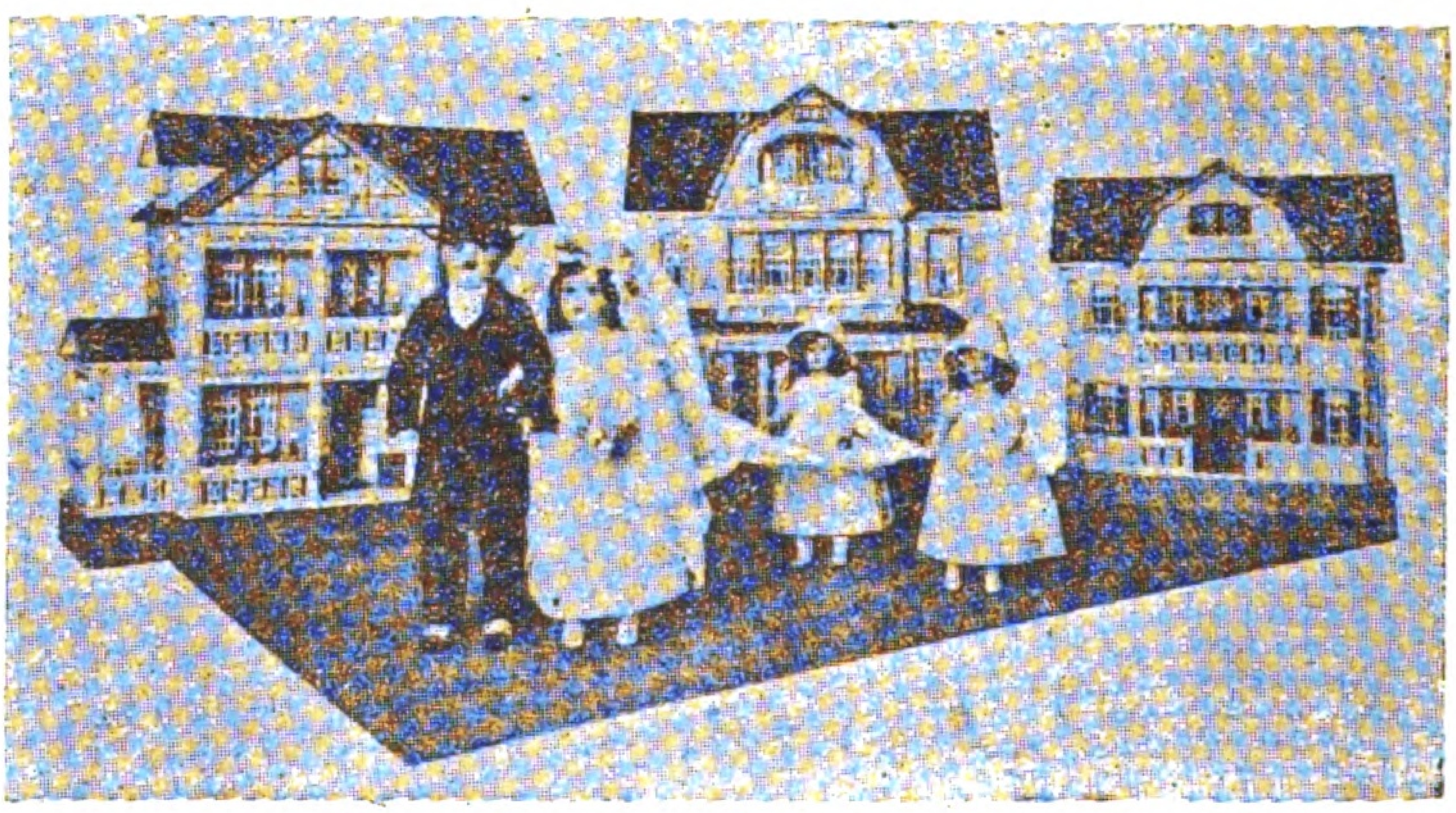


（積木玩具の住家）

然らば我が日本に特徴ある玩具は何であるか、神社佛閣に因んだ土俗の玩具か、それともお節句の雛人形か、犬張子か、之等は昔から子供に愛玩せられたもので、所謂敬神禮節を尊ぶのは我國玩具の特徴と見ても宜しからう。然し玩具の使命を考ふる時は、更に多くの期待を之に求めて已むべからざるものがある、更に具體的に説明すれば科學智識の普及を要する現代に於ては、之に關する玩具の必要なるは申迄も無く、經濟思想の乏しきを補ふ手段

としても亦此の種の玩具が必要である。美術工藝に關しても亦然り、而も我が現代に特に要すべくして尙ほ殆ど顧みられざるものは家屋家具庭園等家庭生活の方面に關する玩具の未だ十分に世に現はれざることである。

近時生活を改善せよ、住宅を改良せねばならぬと盛に叫ばれて居る。だが畢竟國民の智識を更に普及しその思想を向上せしめざれば之が實現は頗る困難のことである。實際椅子式の生活が文化生活に最もふさわしいものとしても、在來の疊の上の座式生活に慣れ切つて居る老人に、今更之を說いても容易に理解されるものでは無い。縱し假令理解されたにしても、いざ實行となると必ず躊躇するものが多いに違ひ無い。今日吾人が家庭生活の改善を唱へて最も困難を感ずるのは此點である、斯く考ふる時は結局子供の時代から良く之に慣れしむることが最も徹底的で且つ目的を達する捷徑であると信じて

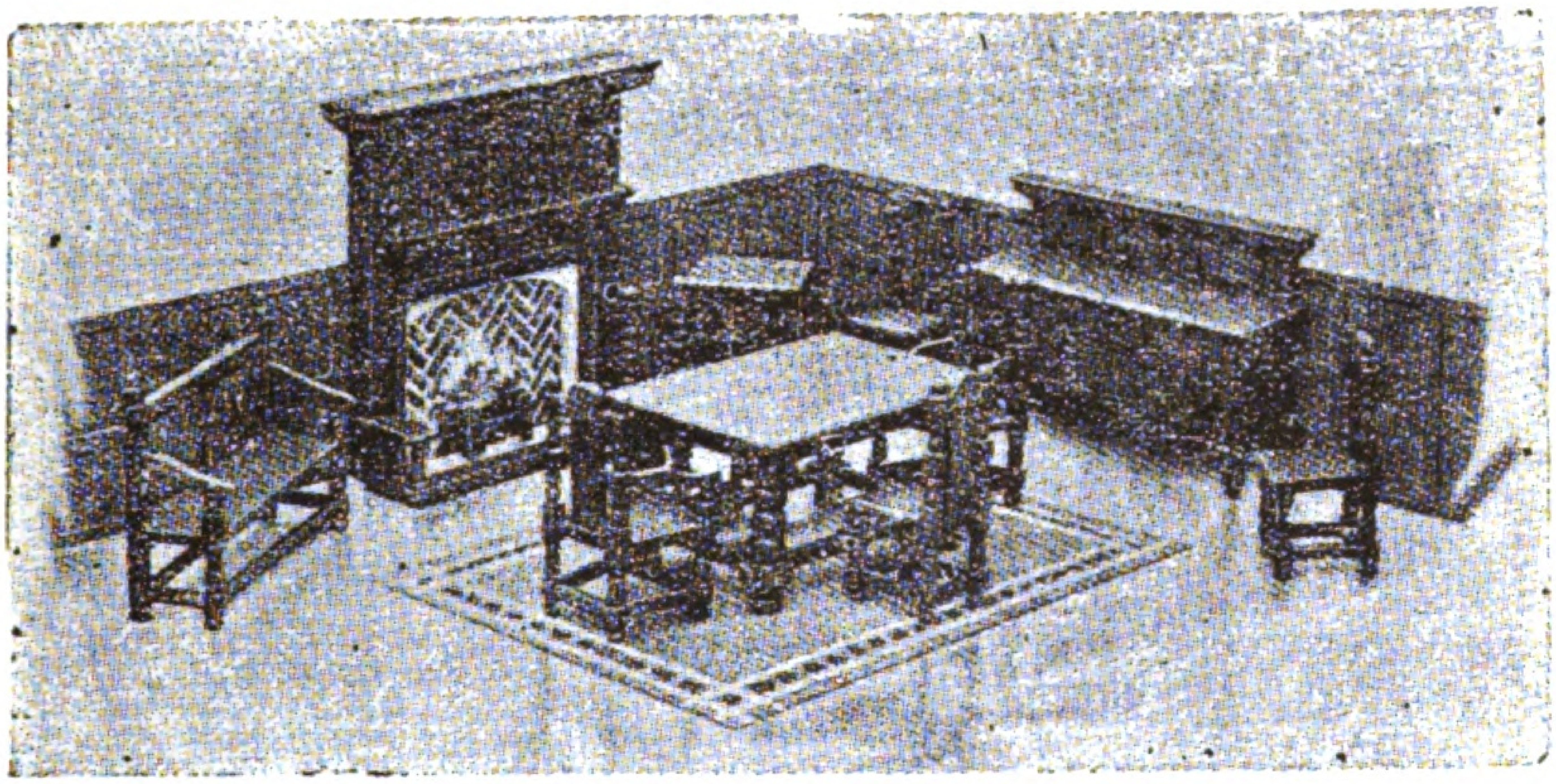

（玩具の組立家屋）

居る、斯くして子供の時代から其の目的を以て家庭に於ても學校に於ても充分に教育して置けば、彼等が成人した後、我が國に新しき生活樣式を建設するに至ることは眞に明白の理である。

此に於て私は此の教育の出發として先づ玩具から改良してかゝりたいと思ふ。改善せらるべき住宅は何んな家であるか、椅子式の家具とは何んな家具を言ふか、恐らく大人と雖も明らかで無いものもあらう、子供の運動を本位とした庭園に於ても亦同樣である。之等は悉く玩具に作つて巧みに之を敎ゆることも出來る、歐米の文明國には常に此の種の玩具が流行して居る。人間生活の意義を最も良く理解しようとしてゐる彼等は、常に之を向上進步せしめんとし不絕孜々として研究して居るからである。

學校教育に於ても圖畫手工に於ては

専ら之を主題として取扱ひ、家屋の模型家具の玩具は男女を問はず最も兒童の興味を喚起して居る。挿圖(第二圖)に示したる模型の家を作る兒童の作業振は紐育の Horace Mann School の實況で、作り上げられた。家は直ぐ子供の遊び場に供せられて、この中に又手製の家具を配したり、敷物や窓掛を取付けたり、其他玩具の食器又は什器の一切を並べて此の中で摸擬の家庭生活が營まれ、愉快の間にその生活の實際が練習せらるゝのである。又一般に市場に於て販賣せられて居るものは、挿圖に示した如き高さ二尺乃至三尺位のもので家の全體を纒めたものと一部分を切斷したものとがあり、何れも内部に家具什器を初め敷物窓掛を取附け、時には挿圖(第三圖)の如く人形迄も配したものがある。此の玩具の最も發達せるは獨逸で家の種類も多種



(玩具の食事室家具)

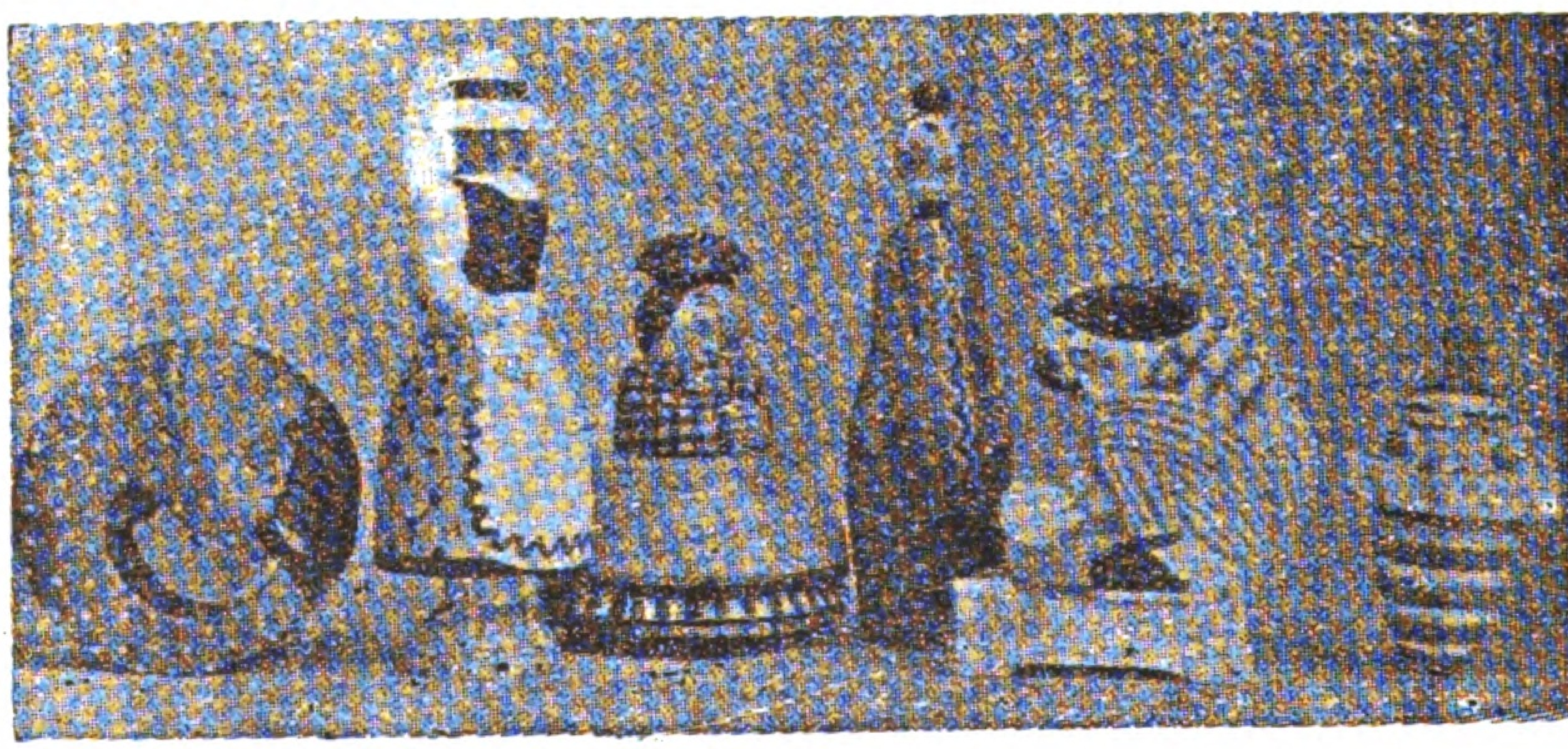
に亘り、又一室を特に離して大きく作られたものもある。何れも子供の自由に翫ぶもので、決して飾品で無いことを特に申添へたい。

以上の教育は啻に幼稚園や小學校許りで無く、中等學校殊に女學校に於ては一層徹底的に行はれて居る。自分の参觀した英國の或る女學校の如きは生徒に家庭に於ける作業の實際を練習させる爲めに、臺所から配膳室、食事室、居間、客間、書齋、子供室、寢室並に病室に至る迄悉く實際的の部屋を作り、夫々家具を配し什器を備へ、之に就て室内の掃除から家具の手入れ又は配置、窓掛の取附方額縁の釣り方飾品の置き方迄一々取扱に立入って實際的に指導して居られた。我國には料理、裁縫、禮式等の教育は行はるゝも、住宅殊に改良さるべき家とその家具等に對する實際的の教導が未だ試みられ

て居らぬ様に考へる。初等教育に於ける玩具の利用と共に速かに改善されたきものであると希望して已まぬ。

(二) 産業上より見たる玩具の價値

我國に於ける玩具の海外輸出は明治初年に出立し、稍々其の製品を認めらるゝに至つたのは十五六年頃からのことである。當時の輸出額は僅かに十數萬圓に過ぎざりしが、超えて三十七八年の戰役後には約百萬圓に進展し、殊に歐洲大戰の開かるゝと同時に、長く斯界の覇權を掌握して居つた獨逸玩具の輸出が俄かに杜絶せられた爲に、我國の玩具界は至大の影響を蒙つて、東京を初め各地方に玩具の製作工場は相次いで蜂起し、其の輸出額は大正四年に於て四百五十萬圓餘に達し、七年には千三百萬圓餘・九年には實に二千一



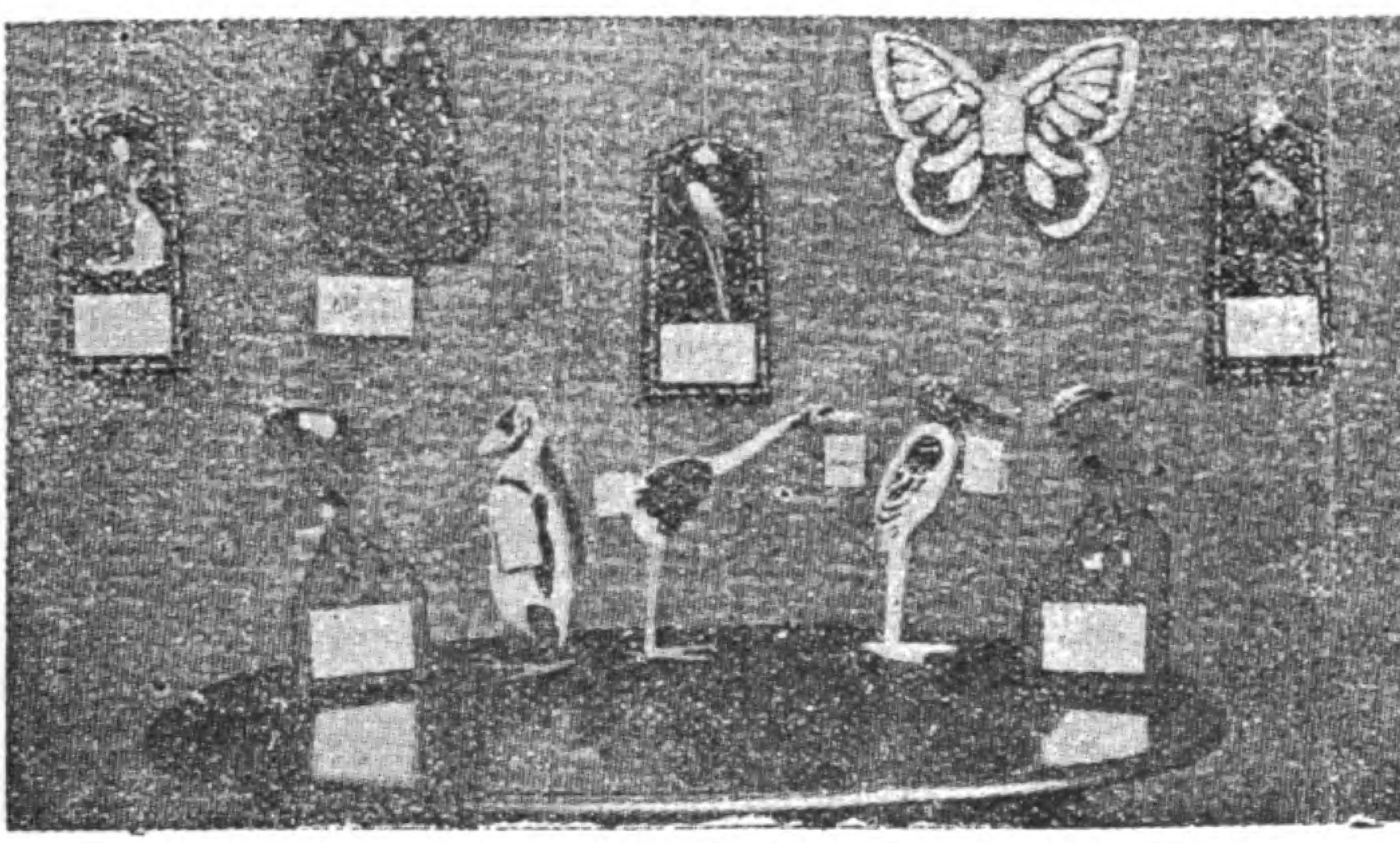
(オーストリアの新らしき挽物玩具)

百萬圓を突破し、我國の重要輸出品中第十三位を占むる盛況に立至つたのである。

然るに此の好況は大正九年を絶頂として戰後俄かに不況に陷り、十年には七百萬圓に激減し、益々衰退の悲運に向ひ、工場を閉塞するもの相續いて起り、益々其の悲慘の度を高むるに至つたのである。加ふるに昨年の大震火災は東京に於ける玩具製作の巣窟と、横濱に於ける輸出機關とを悉く烏有に歸せしめ、斯界の前途をして甚だ憂ふべき狀態に至らしめたことは、我が産業の發展上惜しみても尚ほ餘りあることである。大正十年即ち千九百二十一年余は紐育に於て日本玩具の商況を取調べたことがある。當時恰も獨逸玩具の復活に伴ひ、之に壓倒せられて絶對絶命の悲況に陷りつゝあつた。蓋し斬新奇拔の意匠に缺けて歐米兒童の

心理に合致せざることゝ、製作する材料並に構造の脆弱にして目的の使用に耐えざることの二點が其の主なる原因である。此等のことは事必ずしも新らしき問題では無い。過去屢々諫められたることとなるに、今日に至りて尚ほ未だ改むる所無きは、既に圖案と製作の單なる問題を通り越して、實に根本的精神革命の時機に遭遇して居ることを自覺せねばならぬ。是れは單に製作者又は販賣者のみの問題でなく、實に敎育家も實業家も政治家も經濟家も宗敎家も、共に立ちて大に研究すべき國家產業上の一大問題である。

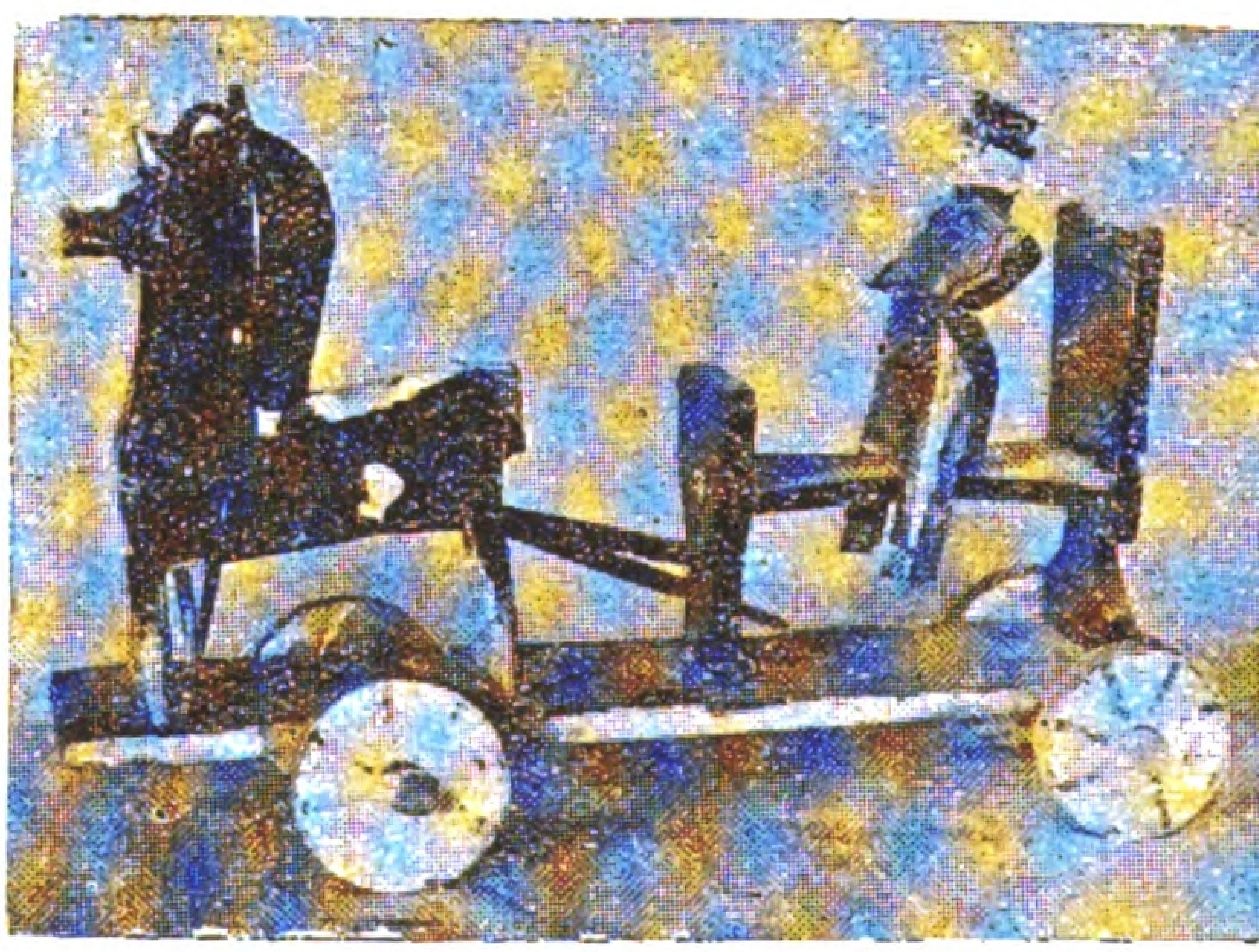
獨逸の玩具は斬新奇拔の意匠に富み且つ時々刻々之を變化して、常に兒童の心理に巧みに適合せしむる點に於て著しき特徴を有して居る。其の製作は材料として凡らゆる廢物を巧みに利用し、構造は使用の目的に對して肝腎の部分は最も堅牢に意を用ひ其他の部分は出來うる限り手數を省いて簡易に作るの用意が現はれて居る。奇想天外の意匠を試むるは獨逸を以て第一とし、之に次ぐを佛蘭西とす、佛の玩具は意匠に於て、時々獨を淩ぐ點も無きにあらざるも、唯だ此の國人の常として創意の性に富むも之を工業化することの乏しき所に大なる缺點が存して居る。優秀の意匠に就て沒却すべからざるは墺太利の玩具である。獨逸品の如き滑稽趣味は之れ無きにしても、眞に美化されたるものは多くは此の國から出てゐることに注意せねばならぬ。伊太利のナポリーは戰前は墺太利の木製玩具の主產地として名の聞えた處である。要するに歐米の玩具は一般に子供の心理を穿ち、滑稽味に富む點に於て一つの特徵を有するに對し、我國の玩具は時に子供の心理嗜好を忘却し徒らに眞面目に過ぐる點に於て著しき相違があると考へる。



（カレンダーに應用したる新らしき玩具）

此に於て、一般工藝品の意匠に就て特に一言せねばならぬ事がある。由來歐米に於ては各國共に其の輸出品は又一面自國の需要品として役立つものなるに我國に於ける輸出品の狀態は如何であるか、日常の生活を著しく異にせるが爲めに外國輸出品として特に圖案し製作せねばならぬ困難を生じ、從つて之が圖案と製作に頗る苦心を重ねて、而かも先方の趣好や用途に合致せしむることの出來ぬ場合が頗る多い。それのみならず常に消長常ならぬ輸出品の常として、之が輸出の杜絕した場合には、全く手を空しうして工場の作業を休止せねばならぬ經營上の苦心が存することである。是れ我が輸出業者の最も深く惱まさるゝ所の問題にして、之が解決は一に生活の樣式を改めて、世界の大勢に順應せしむることに歸結する、生活の改善は國家產業の發展上から考へても、亦此の如く重要な問題である。

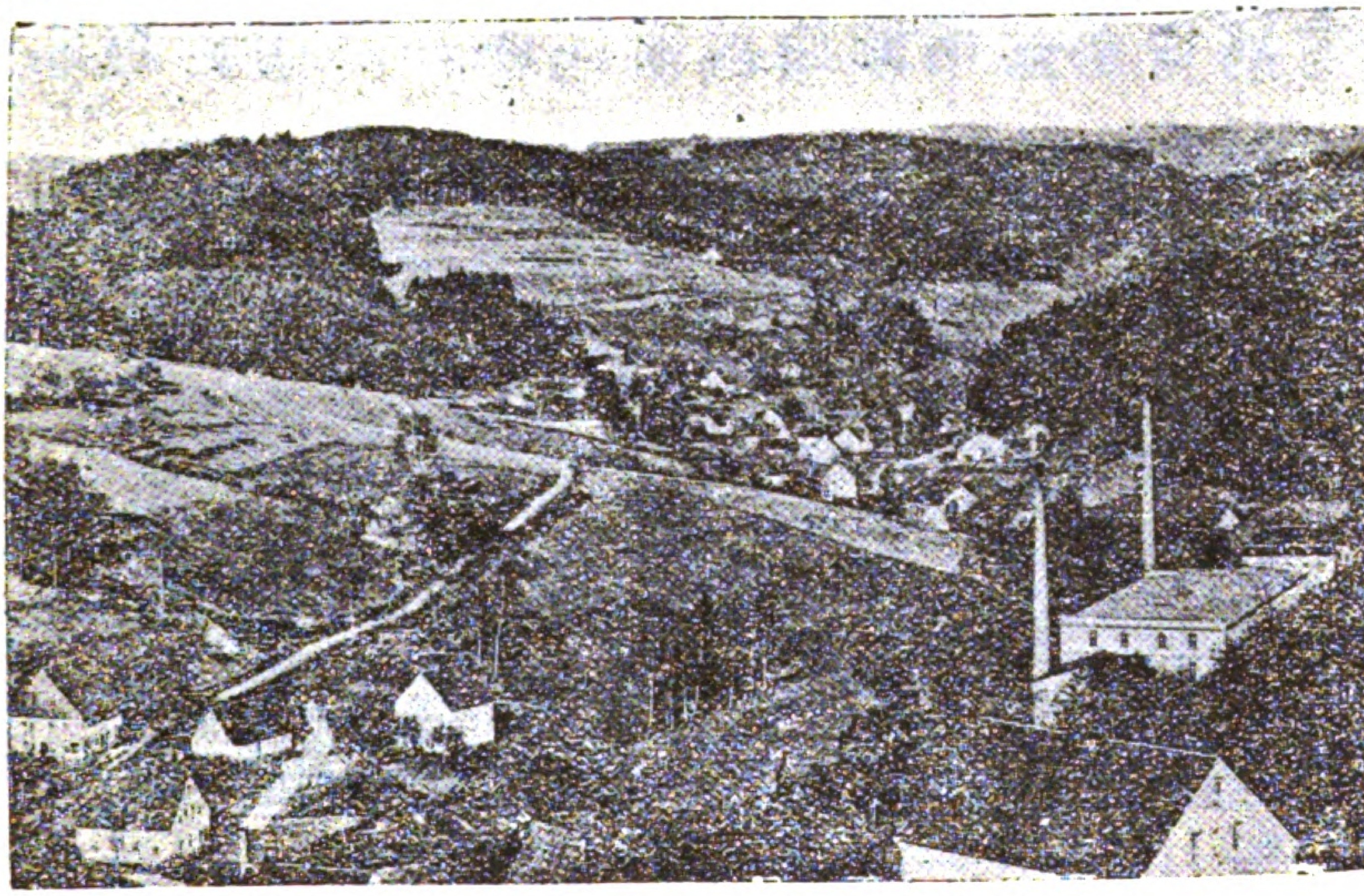
我國玩具の狀況は大略以上述べたるが如く、未だ頗る未熟の域に止ると雖も、翻つて考ふれば、其の需要國にあらずして供給國たることは戰後の今日と雖も變りは無い。否な將來も亦此の方針を以て進まねばならぬことは申迄も無い。見よ英國は由來他國の供給に依つてその需要を充たし、戰時中獨逸玩具の杜絕に遇ふて初めて自給の策を立てバーミンガム又はノッチンガムに之が工業の振興を見るに至つたのも、尙ほ他國の供給に待たねばならぬ情況にあるではないか、米國は由來機械的大工業を尊ぶ國にして、玩具の如き煩雜なる小工業は之を顧みるに遑なく、多くは運動遊戯を主としたる機械的のものに止まつてゐた。然るに近時海外より輸入する玩具を防壓する手段として、之が獎勵に着手し、漸次發展の途に進みつゝあるも、日本は尙ほ依然として他國の供給を仰ぎつゝあるの狀況である、共に是れ我が產業に志すものの深く注意すべき點である。



(最近獨逸に流行する彫刻玩具)

然らば我が玩具工業の將來に顧みて

其の工業は資本的大工業組織となすべきか、又現在の如く家內的小工業の組織に止むべきか、之に就て考ふることが先決問題である。獨逸の工業は此の兩者を並行し、互に相聯結せしめて今日の發達を導いて居る、而るに戰後國民思想の激變又は勞働問題の複雜なるに連れて、大工場組織は次第に分裂して益々小工場組織に變化しつゝある現象に深く考慮を費さねばならぬ。此の國に於ける玩具の生產は專らドレスデン、ニユーンベルク及ミユンヘンの郊外に蒐められてゐる。玩具を以て世界に聞ゆるサイフエンはドレスデンの近在にある山谷の一小村で、全村擧げて玩具の工業に從事せるが、近時大工場に通勤したる職工が漸く退いて自ら小數の機械を設備し、一家一族を擧げて之に從ふものが益々



(獨逸玩具の名産地サイフエンの景)

多くなりつゝあるの一事は、尠なからず私の興味を喚起した。

國土に比して人口の多きことゝ工業材料の僅少なること等その國狀を同じうし、而かも資本に於て一層缺乏せる我國の玩具工業は、其の大部分を家內的工業とし、之に小數の大工場を交へて之が組織をなすことは、蓋し最も適當と考へる。

近時我國に高唱せらるゝ地方農村振興策の一助として、余は家內的玩具の製作を農家の副業として授くることを以て最も適切と考へて居る。蓋し薪炭の外今尚ほ使用の途を識らざる幾多雜木を利用する途を開き、且つ農閑に於て余裕ある多數の勞力を之に利用し、作業の簡易にして專ら多數の手を要せぬ玩具製作に當らしむることは一面地方農村を振興せしめて、我

が產業を發展せしむる一擧兩得の策といふべきである。とはいへ凡そ新事業の振興には假令その作業は簡易なるものにもせよ、必ず何等かの指導をなさねばならぬことは當然である。前に述べたる獨逸のサイフエンには玩具の圖案や製作を敎ゆる工業學校がある、時々意匠の競技會や新作品の展覽會をも開いて旁々當業者を指導して居る。其の南方のニユーンベルグ又はミユンヘンの近邊にも此の種の小工業が多く發達せるが、必ず先づ敎育を起して人を作ることから初めて居る。特に此の敎育は必要に應じて之を改廢し、決して之を無意義に存立せしめぬ所に一層味ふべきところがある。獨逸工業の今日あるは全く此の敎育の効果に基礎を有すと云ふも過言では無い。最近瑞典其他歐洲の各地にも亦地方工業を開發せしむべき辟と



（サイフエンに於ける玩具の製作實況）

共に益々此の種の敎育を奬勵する傾向がある。悉く範を獨逸に取つたものである。

最後に玩具の販賣に對し獨逸の取れる方策に關し一言を費したい先づ圖案に關しては自國の流行を大々的に世界に宣傳して自ら流行の中心を形作ることに常に最大の努力をして居る。又各國の隅々に至る迄專門の視察員を派遣してその人情、風俗、趣味、嗜好等を十分に研究せしめ、之を基礎として其の國々に最も適する製品を作り、一勢に之を賣り出して居る。其の販賣の中樞機關としてライプチヒに於ける每年春秋二期に開かるゝ商品の見本市場は極めて大規模のもので、殆ど各國人を之に吸收し、巧みに之を紹介して居るが、產業振興の手段として正に範とすべきものがある。

私は彼女のどこに戀したか

彼女のヒステリイ氣質にこそ

宇野浩二

男は女のどこに心を引かれるかといふと、それは私の考へに依ると、女のヒステーリイ氣質に魅せられるのである。幸ひと、どんな女にも多少ともその氣質のあることは、家に鼠がゐるのと同じ割合であらう。この譬をもう一つ逆に延長して、家に困る鼠がゐなくなると、その家は滅びるやうに、女もヒステリイがなくなると滅びるといへるかも知れない。

近松の「心中天網島」に「心中よし、意氣方よし、床よしの小春ぜの」といふ文句がある。心中よいのも、意氣方よいのも、床よいのも、ことごとくヒステリイの作用に依るのであらうか。

メエテルリンク等の說によると、女は男の思ひも寄らない鋭い直覺力を持つてゐるといふが、確にさういふところがあると私も認める。そしてこれは女のヒステリイの力であると私は思ふ。女がヒステリイ狀態にある時は、確に男の思ひも及ばない天才的な直覺力を發揮する。逆に諸々の天才は女のヒステリイの氣質と相似の氣質を持ち、それに依りて彼等の天才を發揮する。などといふ說は追つて又書いて見やう。何にしても、それはドストイエフスキイの聖癲癇病などと同じく、聖ヒステリイ病などといふことが出來るであらう。

女は下らない、生半の系統だつた學問や理屈を旗に立てゝ進んだところが、今迄のところも、そして恐らくこれから何千年後でも、男に對抗するほど成功する譯には行かないだらうと思ふ。それよりも、このえたいの知れない、今迄彼女等

をも、又數多の男性をも惱ましてゐたところの、ヒステリイといふ天賦の病氣を積極的に利用し、研究して、花咲かせたらどんなものであらう。但どんな花が咲くか、どんな實が出來るか、それは神樣でなければ分らない。斯ういふ一見無茶な理屈も、確に一理屈だらうと思ふ。

その外に、女にどんないゝものがあるだらうとは、私には思はれない。永遠の女性とか、女性こそ人類を救ふものだとかいふ考へは、あれは女性のことではなくて、即ち女性には何の關係もないことで、男性が彼の理想を空想した言葉なり考へなりに過ぎない。それは女性といふものゝ形を借りただけのことである。さういふと、私も女性といふものゝ形を借りて、プラトン的な戀をする男を主人公にした小說を幾つか書いたことがある。

この文章に課された題目は「私は彼女のどこに戀したか」といふのであるが、私はそんなことはいへない。だつて、昨日は顏の長い女に戀しても、明日は丸顏の女に戀するかも知れないし、今日は惡に近い善良なる女に心を引かれるかも知れないし、明日は惡に近い悧口な女に戀するかも知れない。が、それ等の形や氣質はどうあるにしても、考へて見ると私の戀するのは、女のヒステリイに戀するのだと云へるやうに思ふ。すると、先にもいつたやうに、ヒステリイ氣のない女はこの世にいない。して見ると、私はどんな女にも戀するといふことになる。さうかも知れない。呵々。

妻のどの點に牽かれて結婚したかの答へ

岡本一平

美術學校の四年の時分、同窓のNといふものが信州追分へ寫生に逗留して居た。自分は東京に居た。Nが手紙を寄越していふには同じ宿屋に多摩川附近の豪家の父娘が泊つて居る。娘は美しくて歌を詠む女だ。それと親しくなつて今は一しよに淺間の裾野へ花を摘みに行くやうにもなつた」とNの性分として表向きにはいはぬが底意には充分自分に對して羨しがらせがある。自分は確に羨しくなつた。それよりも寧ろ昂奮した。平凡な性質で月並な繪を描くNでさへその女の友達になれる。いはんや自分のやうな奇嬌で天才的な繪を描く藝術家ならその女はたちまちに崇拜するだらう――自分は常時濟上にも自分の價打ちをそういふ天稟のものであると

妄想して居たーーどうかして自分も追分へ行きNを打負かして自分がその女の友達になり度いと思つた。若くて美しくて歌を讀む女！ それだけで充分當時美術學生氣質の自分のロマンチシズムの對象とするには足りた。旅費を調達しかけても酒を飲んで仕舞ふので思ふように纒らぬ。そのうち娘に鑑識眼が無くてひよつとNを友達の位置より戀人の位置に昇進させたらどうしよう。實ははらはらした。そのうち自分のNに送つた手紙の封筒の上書が大ざつぱな書方をしてあつたので手紙は迷つて數縣渉り歩いたその話を娘が聞き、それは面白い方である。よろしく傳へて呉れといつたとNが報じ越して來た。自分は鬼の首でも取つたように思つた。

これも若氣の早斷だからぢき忘れて仕舞つて居た。

一年程經て自分も學校は卒業期に入つたある日Nの下宿を訪ねると隣室はその娘の兄の部屋であり、偶然その時その娘も來て居た。そして始めて紹介された。強い情熱を湛へ乍ら草の芽のような初々しさがそれを恥かしく隱さすものにして居る性質。夕霧に光をベールさした灯のような女だとそう思つた。黒く凝つた瞳、原始色の唇、それに確かりした構への胸、肉附きのいゝ腰であり乍ら飽くまでも女の優しさを持つてる。これ等が自分の好みを強く牽きつけた。但、好みだけである。まだ魂までは摑まれては居ない。だからあはよくばこの女と趣ある戀の一場面を演じ出してやれ位の不逞の料簡でかゝつた。

娘の東京の假寓を二度程訪れた。自分は少しうつら〳〵として來た。始め多少嫉妬氣味の苦笑を洩して居たNもそのうち病氣になり己れの身體に氣を取られるようになり遂に死んで仕舞つた。

娘は田舍へ歸つた。自分は娘の實家へ押かけるようになつた。兩親は別段疑はず、娘の男友達として好遇し酒なぞ飲ませて呉れた。

交際して居るうち、一つ娘の心持ちに解せぬ點が出て來た。娘は情熱と初々しさとの矛盾から自分の心身を人並外れの不具者のように誤解して居る。そして一生寂しく獨身で琴でも彈いて果すのだといつてる。兩親までもそう思ひ込ましその爲めの計劃まで出來てる。

こんなべらぼうな誤解から獨りで暮す積りで居る女の世間知らずーー自分は男としてのいとしさが猛然と起つた。いとしさとなればもう好みより魂の問題に移つて居る。自分は身命を抛つて結婚に奔走し出した。結婚の原因として以上の外、自分に閨秀歌人を妻とし得る虛榮心、豪家を妻の實家に

持つ事の安心等の功利的打算が全然無かつたとは言ひ切れぬ。恥入る次第である。

失敬なことを尋ねるものではない

佐藤春夫

かういふことは訊はれて語るべきことではない。それを敢てさせるのは失敬といふものである。——尤も時あつて、問はれざるに語ることはあるだらう。もしほんとうにかういふことを知りたいと思ふ人は、小生と十年つき合つて見るがいい。さうすれや、時たまにそんなことをこちらから言ひだす折りがないとは限らない。

また、實際、そんなことを問はれてみたところで、小生自身もそんなことは知らない。知つてゐるのは小生の蟲だけだ。——「蓼食ふ蟲」といふ蟲。蟲の居どころ」といふその蟲だが。

敢てかういふ失敬な質問をする人は、去つてこれを小生の蟲に聞け。

こんないゝ事をうかうか誰に數へてやれるものか。

七世までも變らぬ主義

佐々木味津三

一説によるとトルストイは同時に七人の戀人を持つてゐたそうである。トルストイでさへ七人であるから、まだ三十にもならぬ私ならば、尠く共平生十二人位の戀人は持つてゐても差支へなからう。

だが、殘念なことには七人は夢おろか、これ迄私は人に自慢の出來る戀物語を三つと持つたことのないのは甚だ赤面の至りである。また人前へ出しても自慢の出來るやうないわゆる「彼女」を七人と持つたことのないのはいかにも殘念な話である。

しかし若し質問の「私は彼女の何に惹きつけられたか」が、電車の中で偶然隣り合つた「彼女」とか、或は銀座の四ツ角でぱつたりすれ違つた「彼女」とか言つた風に、ほんの通り一遍の路傍の女である「彼女」であつても差支へないとすれば、おそらく私は九百九十九人迄の「彼女」たちを數へ

あげることが出來るに違ひなからう。

と言ふ意味は、私はいわゆる「彼女」を擇ぶ場合に、美貌をもつてその第一條件にすると言ふことである。と言つたらおそらく世のいやちこなる青年男女は、血相變へて私を難詰するに相違なからう。なぜならばこれ迄私は彼女の美貌にひきつけられたと言ふことを正直に告白したものよりも、私は彼女の心に惹きつけられたとか、或は私達の戀は本當の意味でのプラトニツクラブであつたとか、そう言ふ種類のまことしやかな嘘と虚飾を上手につきうるものの方が、多くの場合、より世間から及第點をつけられ勝ちだからである。

しかし私はどれ程の難詰と輕蔑をうけても、つねに美貌第一主義である。心立てが素直だとか、立居振舞が女らしいとか、なんとなく性格が好ましいとか、そう言ふ樣々の目標もないではないが、それとて美貌第一主義があつてからの、素直な心立てであり、女らしい立居振舞であり、また好ましい性格である。

だが、しからばどう言ふ女を美貌とするか、と言ふ問題になつたならば、それは自ら別問題である。なぜならばでな食ふ蟲に好き不好きがあるやうに、人間は不幸にもあばたをえくぼと見まちがふ不正確な審美眼を與へられてゐるからである。

私一個の好みから言へば、七三に髮を結つて、黑襟のついた着物をまとつてゐると言つた風な感じのする女は悉く落第である。又洗濯するがいやさにコールテンやビロードなぞの不精足袋をはいてゐるやうなだらしない感じのする女は悉く落第である。

とにかく私は極端に言へば、美しくない女はこの世に生存する資格がないと迄言ひ切りたい程、徹頭徹尾美人第一主義である。

しかし私は前にも言つたごとく、不幸にして人に自慢の出來る程な美貌第一主義の「彼女」を、これ迄私一人のものとして所有した經驗を一つももつてゐない。

從つてそう言ふ點では明かに私はこの質問に對してお答へする資格のない一人であらう。

だが來世は先づ私自身美貌第一の人間に生れ變つて來る考へである。そしてまた七たびこの世に生れ變つては、私は始終美貌第一を主張する考へである。

象徵

內容

第三 一 豫言者としての詩人 二 理想主義と現實主義 三 短篇「頭さがり」 四 白日の夢 五 文藝と道德 六 酒と女と歌

第四 文藝の起源

一 祈禱と勞働 二 原始人の夢

我國で唯一と云つてよい文學概論です。人の家庭にも、何れの學校にも此書はなくてはなりませぬ。本書は論文集ではありませぬ。此書なくして家庭で文學は讀れませぬ

出版界の新覇王

定價壹圓八拾錢
送料拾五錢

改造社

東京芝區愛宕下町
振替東京八四〇二

空想する少女

伊藤貴麿

私が僅かばかり、各國の文學を覗いた經驗から云つても、作品の中で女性が取扱はれて居る場合、年齡も十八九を過ぎて、もう思春期に達した少女とか、それ以上の女とか、又はほんの少女を少女として取扱つたものは、數も多くあり、傑作もあるやうだが、其の中間の十五六の少女を內面的に描いて、完璧に達した作品は極く少いやうだ。

其の頃の少女の心理は、決して他の時期より深刻だとは云へないかも知れないが、色んなものが混つて居て、あらゆる感情の萠芽が芽ざさうとして居る時代であるから、却つて一種の複雜さを有して居る。それは淡く蕩搖したものであるが、やはり複雜なことは複雜である。はつきり戀でも感ずるやうな時代になれば、感情の流れが統一されて來るが、十五六の頃は其の感情が夢のやうにとりとめがない。十八九以上の女の感情の流れを、網の目に譬ふれば、十五六の少女のそれは、鳥さへ瞞される絹糸の霞網の如きものである。隨つて其の時代の少女の心理を取上げてほぐす事は、より困難な事である。

次に、年頃の少女から一種の好意を受けて、ひどく感動した經驗を書いて見よう。

私がまだ二十二三の頃、或る夏鎌倉で送つた事があつたが、十五夜の晩、私が置いてもらつてゐた家の、十八と十五の姉妹を連れて、材木座の海岸に月見に行つた事があつた。三人は連つて、月光に照り返つた海岸を、あちこちと步いた。私は其の時、姉の方の少女に對して、別に戀を感じても居なかつたし、戀すべき女だとも思つては居なかつた。私は何しろ馴染も淺かつたのである。然し、誰しも若い女性に接した時に感ずる程度の魅力と、漠然とした戀心とに囚はれて居た事は事實であつた。殊にふと相手の身體をすぐ側に感じた時や、會話が妙にぎこちなく切れた時など、一種の苦しい、もどかしい瞬間をさへ持つた事もあつた。私はこんな月夜の海岸で、少女に戀を打明けるやうな事が叶つたら、何といふロマンチツクな事であらうと思つたり、又そんな事は芝居だなと思つたり、未だはつきり戀も感じて居ないのに、そんな事をすれば、罪惡だなと思つたりした。相手の少女の事はこゝで詳しく述べる必要もないが、私に對する會話も、足なみも

力めて調子を合せ、切りに氣のきいた質問を、私に對してこころみようとして居る樣子が見えた。妹の方は私達と始終離れて、波打際を快活に飛廻つたりして居た。

やがて私達は、休む事にした。幸ひ、前に波打際に引上げられた船が一艘あつたので、其の上に上つて休む事にした。と妹の方が急に

「恐いわよ、〳〵。」と云つて、其の上に上らうとしない。其の船は可成水際近く、時には、波のしぶきがかゝる程であつたが、今迄波に戯れて飛歩いて居た妹がそんなことを云ふのは鳥渡不思議であつた。兎に角姉の方と私とは、其の船の上で暫く休んだ。二人切りで對して坐つた時、前にも増して私が息苦しいやうな思をしたのは勿論であつた。妹の方はやゝ遠い砂の上に、ぺつたり彼方を向いて坐つて居た。私が船から下りた時、或るいたづらを思ひ附いて、妹の方を驚かさうと、そつと近附いて行つた。私は相手が餘りしよんぼり坐つて居るので、驚かさないで、そつと其の顏を覗き込んだ。と、妹の顏には或る複雜な微笑が刻まれて居た。彼女は、姉と私との間に戀を空想して居たのだ。彼女が船にわざと上らなかつたのも其の爲であつたらしかつた。私は此の時、はつと愛情以上の感動を受けて、彼女を滅茶苦茶に接吻した程であつた。

言ふまでもなく

久米正雄

勿論、祖先傳來、洗濯してゐた彼女の白い脛に。……

右平凡ながらお答へまで。百萬言を費すの要なし、と存ぜられ候。

彼女達と云つて貰ひたい

生方敏郎

君は彼女の何處に引き入れられたか？と仰るか？

えへへ、實はその、この質問はよろしく「彼女たちの」と訂正して頂きたいね。

何となれば僕は博愛主義者だ。いや決して主義者ではない。主義者なんて七めんだうなものは警視廳で矢釜しく壓迫しないたつて、素より僕はきらひなんだ。僕は僕自身の考へ

たいと思ふことを勝手に考へ、僕自身の言ひたいと思ふことを勝手に言ひ、僕のやりたいと思ふところを勝手放題にやりたいんだ。と云ふと如何にも豪さうだが、豪いより何より斯う注文どうりに行きや此上もない幸福に存ずる次第だが、何しろ何うして何一つ自分の自由なんかに行きあしない。右を歩かうと思つてゐても左を歩かなければならず、眞中のいゝ道を歩かうとしても向ふから命取りの自動車が飛んで來れば何地かのぬかるみ道へよけなければならず、よけずにゐて轢かれるにしても近頃流行の汚い市街自動車や一噸半の荷物の下にゃあ敷かれたくないからね。

ああ　何も彼も思ふやうにはなりやあしない。自分の勝手に考へるどころの話かへ。考へるにも言ふにも行ふにも、我我に一つの自由も勝手もありやしない。勝手に振舞うは偖ておいて、主義に束縛されることですら、うつかり束縛されやしない。忽ち變チキな汚名を負はされて食ひ込むか、時にバカ者に會ふと殺されるとも限らない。

僕は博愛主義である。なんて出鱈目を言つてカフヱーの女給を口説いてゐるところを何とか大尉に聞きかぢられでもすれや、個人としてか、何とかいふ名目の下に或お役所へ連れて行かれて殺されるかも知れぬ。そして古井戸へぶち込まれて幽靈となつて出て見ると驚いたね、殺した大尉は危ふく表彰されかゝつてやがる。でも世間の手前金鵄勳章もくれないが大方直き牢を出されることだらう。これぢや餘りバカ〳〵しくつて幽靈にだつて出られやしない。

だから僕は主義者はいやさ、まんべんなく女性に博愛しても、決して博愛主義者にはならない。家庭へ歸るとお前一人と定めておいて、外へ出りや浮氣やその日の出來心と決心した。惡い決心をしたものだ。

こつちはいくら浮氣であつて、從つて引き入れられるのは彼女一人とかぎらないで、彼女たちといふ事であつても、若し彼女たちの方で引き入れて下さらなければ止むを得ず憚りながら僕は終始一貫して品行方正といふことになり八十の老翁江木文相とその高徳を爭うことになる。彼女たちの、或は目元に、或は口元に、或は戯言の面白さに引き入れられるの幸福を擔ひそこねたところで、其高徳を江木文相と爭うことが出來れば可也幸福だと言はれやう。だから男子は何地へ轉んでも幸福なものだ。

ついでにさういふ高徳家に對し、金鵄勳章でも下さることにしたら何うだらう。さうだと世間の氣の利かない奴らと老人たちは大いに浮べることだらう。

だが、近代の青年たちよ、八十の老翁を見て憐むを休めよ。古來八十の老翁にして下女に子供を生ませた君子人は少ない。先年も或る老教育家と甲州の御嶽に遊んだ時、彼のいふには、我々の年に成つてもまだお膳をすえる若い娘たちはいくらでも有る。ただ我々の位置と名聲が害をとることを許さないだけだと。

私はその時その話を聞いて、呆然として開いた口が塞がらなかつたが、今やその話を思ひ出して、却つて女性たちの口から、女性は男の何んなところに引き入れられるかに就いて、正直ばなしがうかがひ度いのである。

ツンと尖つた高い鼻

上司小劍

クレオパトラの鼻が、もう一分低かつたら、ヨーロッパの歴史は、よほどちがつたものになつてゐたであらう、と言はるゝ如く、男はまづ女の鼻に吸ひ寄せられ、惹き付けらるゝものであらう。私の十年ばかり前の舊作に『水曜日の女』といふのがある。こゝに其の三四節を少しづつなほして抜き書きする。（清水といふ男を私自身と思つてもらつても差し支へはない）。

* * * *

水曜日には、毎週かならずフランス語の稽古に行く。――清水の現在は、たゞ「水曜日の語學の稽古」といふことにだまされて生きてゐた。

* * * *

郵便を出すことを思ひ出して、ステーションの筋向ふの三等局のガラス戸を押しあけ、狭くるしい土間に立つと、切手を賣る若い男の、にきびだらけの顔が、金網の窓口に近く、嵌め込まれた彫刻のやうに、窓臺へ頬杖をついて、じつと動かずに、眼の玉だけをぎよろりとさして清水を見た。

清水が封書を出して、外國行きの書留を頼むと、彫刻のやうな、にきびだらけの四角な顔に、忽ち魂魄が入つて、ピンピンと元氣よく動き出した。黒い謄寫版の上に載せられた書留原簿の側へ清水の出した封書は置かれて、にきびの顔は、白い封筒に赤く書かれたRecommandé の字と其の下に引かれた二條の赤い線とを見詰めてゐたが、首を傾けて、急に鐵筆を動かさうともしなかつた。

狭い土間を左に右に、足を動かしつゝ、清水は「貯金即時

掛規則改正と書いた貼り紙の字を、一つ殘らず讀んでしまつた。「郵便局吏員に不都合の行爲ありたる時は……」といふ貼り紙を讀みかけた時、入口のガラス戶に鮮かな色がパツと映つて、土間から金網潑りに影が差したと思ふと、ガラス戶が音もなく開いて、身長のスラリとした、肉つきの好い、色の白い女が靜かに入つて、ニコリと品を作つた笑ひ顏を見せると、斷りもなく電話室へ入つて行つた。淸らかな花園に咲いた花の精を絞つたやうな芳ばしい香ひが、小ひさい手遊戲みたいな郵便局を溶解してしまひさうであつた。

にぎびだらけの四角の顏は、ウンと決心したらしいさまで、背後の電話室に氣をおきつゝ、不器用な字で書留の受取票を書きかけた。

＊　＊　＊　＊

「浪花の、ふた千三百……番。……モシ〳〵、……えゝ、さうですよ。」

白銀の鈴でも振るやうな、修飾を加へた聲が、薄暗い電話室から漏れて來た。其處の硝子窓を透いて見える白い橫顏の、ツンと尖つた高い鼻と、髱を低く取つた黑い束髮とに淸水は見入つてゐた。

「モシ〳〵、浪花のふた千三百……番、まだ出ませんよ。」といふ聲のした時、淸水は書留の受取票を取つてガラス戶の外へ出た。新たに取り擴げられた道路の、まだセメントの固まらぬ溝の兩側に席を掩うてある上を踏み越えて、靑いペンキ塗りのステーションへ入ると、煤や油の染み込んだ小倉服の驛夫は、高い脚榻をかけて、正面の大時計の針を直してゐた。其の下へ四五人の乘客が集つて、首を擡げつゝノン氣さうに驛夫のすることを眺めた。淸水も其の中に混つた。

＊　＊　＊　＊

『おい、何をしてるんだ。七十六がすぐ來るぢやないか。』

頭髮を綺麗に分けて、額をテカ〳〵と光らした出札係は、小荷物扱ひ口に金釦の光る半身を出して、次に來る上り電車の番號にだけ殊に力を入れて叫んだ。驛夫は周章てゝ脚榻から下り、鋏をポケツトに探つて、パチ〳〵と改札を始めた。乘客は次々にゾロ〳〵とプラツトフオームに出た。

薄紫色の蝙蝠傘が、大輪の花の開いたやうに明るく停車場の入口に現はれて、それを窄めた身長のスラリとした色の白い束髮の人の耀く姿は、急ぎ足に改札口からプラツトフオームへ、ゴム草履の輕い音を土和土の上に立てた。

「切符をね、直ぐ持つて來て頂戴な。……烏森。」と、臺詞のやうな聲の下に、驛夫は畏こまつて出札口へと走つた。

清水は郵便局で見た美しい人の姿を、又このプラットフォームで見るのが嬉しかつた。

＊　＊　＊　＊

間もなくやつて來た七十六の電車の一番前の車臺の前にゐた美しい人は、薄紫色のパラソルの窄めたのを振り／＼、わざ／＼清水の乘らうとした二番目の車臺に乘らうとして、入口で清水と鉢合せをしさうになつた。清水は胸でも突かれたやうになつて足をとめたが、美しい人も同じやうに足をとめて、ニコリとしつゝ、「早くお乘りなさい」といふやうな親し氣な眼をした。清水はうろたへて、眼をそむけつゝ、飛び上るやうに車室へ入つた。

＊　＊　＊　＊

美しい人は、清水の隣りへ寄り添ふやうにして腰をおろした。手には切符もないのに、落ちついたものであつた。郵便局の電話はだまつてかけるし、ステーションの改札口は無札で通る。えらいものだと私は感心してゐた。發車の笛が鳴つた時、驛夫が忙がしく驅け込んで來て、美しい人に切符を渡し、あたふたと出て行つた。車が動き出してから、美しい人はプラットフオームの老いた驛長と顔を見合はして、ニッコリと目禮した。

美しい人の左隣りには、印袢纏の勞働者が乘つて、清水と二人で美しい人を挾んでゐた。勞働者の日に燒けた澁紙色の首筋には、だらしなく伸びた髮の毛が、垢染みた冬の鳥打帽をハミ出して垂れ下がり、全身から厭やな臭ひを放ちさうであつた。美しい人は膝を摺り送つて、一層清水の方へ寄り添ふた。

郵便局を溶かして了ひさうに思はれた芳ばしい香ひは、電車の中に充ちて、汚い勞働者の身體にも花の精が吹きかけられるやうであつた。美しい人は時々横を向いて清水の顔を見た。清水はまた横を向いて、ニスを塗つた鏡のやうな戸に映る自分の顔を眺め、それから手に持つてゐる切符の表の日本文字から、裏のローマ字や英字までを殘らず讀んでしまつた。

郊外の停車場に立つて居る時は、餘程美しい人に見えても、電車が丘陵を越え海岸を走つて、都の中央に近づくほど、美しい人の美しさは減つて行つて、アスファルトの高い路臺からこの都のブウルヴアルともいふべき大通りへ下りる頃には、十人並みくらゐに落ちてしまふといふ。人と土地との戰を見るやうな經驗を、清水はこれまで幾度も嘗めてゐたが、今この美しい人ばかりは、都の中央に近づいても、光

の少しも剝げぬのを感じた。偸み見に窃と横を見ると、ツンと尖つた高い鼻は海の方を向いて、白い襟足が眩しかつた。

＊　＊　＊

水曜日毎に、清水はまるでしめし合はしたやうに、この七十六の電車で、時刻をたがへずに乗り合しては、並んで腰をかけてゝ、烏森までの時間を樂んでゐた。ツンと尖つた高い鼻が、清水を惹き付けたのであつた。

貴郎のを眞似て見たんですわ

村松梢風

初めて會つた時、彼女は濃い水色の絹の服を着て、ピカピカ光る飾りの附いた小さな靴をはいてゐた。そして私が其の部屋へ這入つて行つた時、ストーブの側で、黑づくめの洋裝をした一人の婦人と對き合つてゐた彼女は、更紗のきれを張つた大きな安樂椅子に深々と身をのせた儘、ドアの方を見遣り乍ら、紙卷煙草をふかしてゐたやうだつた。てうど幕明きの舞臺面を見るやうな、統一と整、さう云つた氣分が、其の瞬間の光景から感じられた。

私は初對面の挨拶をしてから、二人の婦人と等分に對き合ふ場所へ席を取つて、さて色んなお喋りをしたやうだ。

彼女は、それこそ漆のやうなまつ黑な髮の毛を短かく斬つて、額の眞ん中から分けてゐた。こまかく縮れたり、大きく渦卷いたりしてゐる其の髮の毛が、すきとほるやうに白い細面の顏とよく調和してゐた。女優風のほそい眉、睫毛を染めてゐるので餘計大きく見える美しい眼、少し高過ぎる位のいい形をした鼻――さういふ一つ〳〵が直ぐに私の心をとらへてしまつた。彼女は談話も上手だつた。けれども其の談しの調子や内容よりも、彼女の聲がほんたうに人をひき付けるやうな優しい響きをもつてゐた。

其の部屋はおそろしく廣くてさうして古色蒼然としてゐた三階の部屋だつたから、窓の外にはせいの高いアカシヤ並木の青葉を附けた梢が覗いてゐるだけだつた。其の物古りた廣い部屋の一隅には小型のベットが据ゑてあつて、其の側に支那風の二枚屛風が立てゝあつた。

日に幾度びとなく彼女と逢ふやうになつた。矢張り其の部屋で逢つたり、つい近所へ彼女の世話で間借りを始めた私の旅の新らしい住居で逢つたりした。小雨のふる午前中に彼女

を訪ねると、裾の長い黒服を着けた彼女は其の廣い陰氣な部屋にたつた獨りぼつちでストーブの中の火を見詰めてゐたりした。私が行くと喜んで、自分もまだ朝飯まへだからと云つて、茶を入れて、ロシア人の主婦がこしらへて呉れるまずい料理を一つのテーブルで食べたりした。私が外から歸つて見ると、私の留守の間に、部屋一面に美しい花だの、いゝ匂ひのする花だのが挿されてしまつてゐて、其のあとから彼女が遊びにやつて來て、其處は彼女の住居と違つて明るくて、壁が紅い美しい色に塗られてゐる其の部屋の窓際で、永い春の日の暮れるのも知らず話しに耽つてゐたこともあつた。彼女は初めて會つた日には髮の毛をまん中から分けてゐたのに、何時の間にか横から分けるやうになつて、額の上でうねくと縮らせて、左の眉を半分ばかし髮の毛の端で隱すやうな形にしてゐた。其の髮の風は餘計齢を若く見せて、娘々したしほらしい感じを與へてゐた。

「貴女の前髮の形が大變いゝ」と私が言ふと、

「貴郎のを眞似て見たんですわ」と彼女は答へた。

私は紅くなつた。

或る晩、私は彼女の來るのを待つてゐた。すると十時頃、ドアを輕く叩いて彼女が這入つて來た。其の時ほど彼女が美しく見えたことはなかつた。彼女は厚い羅紗の外套を着て、帽子無しで、網のヴエールで顏を包んで來た。急いで歩いて來たと云つて少し息を切らしてゐた。戀人の所へ忍んで來るには適はしい形だつた。

或る旅路にて

南部修太郎

或る初夏の大和への旅路だつた。もう黄昏近く名古屋で東海道線の汽車を降りた私は、反對側のホオムに止まつてゐた山田行の汽車にすぐ乘り換へた。化粧室の扉で隣の三等室と仕切られた二等室だつたが、伊勢詣でらしい三人の老人連れ、一組の若夫婦、陸軍武官、それに商人風の三四人で、車内は割に空いてゐた。一隅にゆつくり腰を降した私はほつと落ち着いた氣持で、靜に煙草を吸つてゐた。と、發車間近くだつた。仕切りの扉ががらりとあいて、片手に中型の行李、片手に大きな風呂敷包をさげた、田舍者風の二十二三の女がせかせかとはいつて來て、私の斜向うの空席にすかりと腰を降した。

「車室を間違へたな。」

引きつめた束髪の額際の縮れた、頬の赤い唇の厚い、ふとつた指先の無骨な、そして、仕立て降しらしくはあつたが、粗末なガス縞の着物を重ねた、如何にも無教育者らしいその女の姿をひと眼見ると、私は一種の憐憫の氣持を感じながらすぐかう思つた。車内の客の表情が同じ氣持を現したのは云ふまでもない。大阪風の、多少厭味とも思へるいきがつた身成をした商人風の若い一人は輕蔑的な、不快らしい視線さへ投げかけた。

程なく汽車は動き出した。紫鼻緒の安下駄をきちんと揃へてぬいだ女は腰掛の上に坐りこんで、ぐるぐる車室を見廻したり、それが如何にも樂しさうに窓外の景色を眺めたりしてゐたが、やがて南京豆の袋を袂から取り出すと、殼をまはりへ散らかしながら、盛にぼりつき始めた。無智な、人のよささうな顏附物ごしで、初めは苦笑や憐憫の氣持でそれに對してゐたらしい乘客達の眼色には、その無作法さに對する嫌惡の影が差して來た。今は女が赤切符の持主らしい事は明かだつた。が、流石に注意を與へようとする者もなかつた。間もなく南京豆を盡したらしい女は、今度は風呂敷包から壽司折を取り出して、うまさうに忽ち平げてしまつた。女は車窓に凭つたまますぐ居眠りを始めた。その無樣な恰好や、豆殼や折箱をきたなく床に散らかしたのが眼につくと、私も何となく不快な氣持を抑へる事は出來なかつた。

「むさい奴ぢやな。」若い商人風は聞えよがしに呟いた。

二三の小驛を過ぎて木曾川の鐵橋を渡る頃には、車室に明りがついた。女は氣持よささうに寢こんでゐる。と、或る驛を發車したあと、若い車掌がふと車室へはいつて來た。女の寢姿に眼を留めた彼はつかつかとその側に近寄つて、やや手荒く女を搖り起した。

「ここは二等ですよ。切符を拜見します。」

車掌は詰るやうに云つた。

「切符かね?」女は落ち着いた聲で鸚鵡返すと、帶の間の赤い財布から青切符を取り出して、車掌の前に出した。車掌はちよつと意外らしい顏附で切符を調べ、てれた調子で云つた。

「柘植までおいでですね?」

頷いて、女は暫く車掌の顏を見詰めた。

「あんた方はわしを見くびつてるだね。」

女はむきな調子で不意に口を開いた。

「わし、小山から乘つただが、あつちの汽車でも二度も三度も切符を調べられただ。けんど、わし、かうやつてちやんと二等の切符買うて來ただよ。聞かつせえ、わしな、十七ん時から足掛け六年小山の紡績工場で働いて、金溜めただ。そして、今度國さ歸つて嫁御に行くだあ……」乘客達の顏には微笑が浮んだ。女は幾分興奮の語調で、率直詞にを續けた。

「そんで、一生に一度の話の種だ思うて、かうやつて二等の箱に乘つてるぞよ。ほんとに、あんた方、わし、見くびつて貰ふめえよ。」

女は彈んだ聲で車掌に云ひ返して、自分の詞の承認を求めるやうに車内をぐるりと見廻した。

「なあ御隱居さあ、わしかうやつて、一生に一度の話の種にするだもん……」

女は和かな微笑を浮べながら一部始終に耳を傾けてゐた右隣の上品な老人を振り返ると、訴へるやうにかう云つた。その刹那、女はちよつとべそかいたやうな表情になつた。

車掌初め、今まで不快な表情を浮べてゐた車内の客達は、この詞を聞くと、一時に笑ひ出した。その笑ひは明るいものだつたが、やつぱりどこかに嘲りの影があつた。然し、私は女の氣持にすつかり同感しない譯には行かなかつた。そして、思はず氣持の好い微笑を唇に感じながら、淳朴な女の顏をぢつと見詰めてゐた。　——十三年四月——

引力問答

吉井勇

——彼の女の何處に引きつけられたか——と云ふんですね。彼の女の何處に引きつけられたかと——困りましたね、そいつは少し。先づ「彼の女」と云ふのからして極めなくてはならないんだが、誰にしたものでせうな。

——さあ、それはどなたでも結構です。

——それぢやあ假りにここではKと云ふ女として置きませう。私が「彼の女」に始めて會つたのは、「彼の女」がまだ十六の時だつたと覺えてゐます。「彼の女」はさう美人と云ふ方ではありませんでしたけれども、しかしちよつと淸楚な感じを與へる、才氣の勝つた女でした。「彼の女」はあんまりよくない境遇にゐて、その年になるまでに可なり世の辛酸を嘗めて來たらしいのです。——とこんな風に話してゐたんではきりがありませんね。

——えゝ、まあ、結構です。

——「まあ」と云ふ程度の結構さなら、兎に角もう少し話を急ぎませう。それでですね、私が「彼の女」の何處に引きつけられたかと云ふと、それは少し變なんですがね——つまり「彼の女」の髮の毛の薄いところに、妙にほろりとされたんです。髮の毛の薄いと云ふことは、可なりその人に取つて寂しいことだらうと思はれたものですから、まづそれに私の心は惹かれました。

——成程。

——成程なんて云つて感心しちやあいけませんよ。間違つ

てゐるかも知れませんが「女の髪の毛は大象も引く」と云ふやうな言葉がありますね。つまりあれだつたんですよ、僕と「彼の女」との關係は。しかしその女はもう疾うに亡くなつてしまひましたから、象も今では野放しです。

――はゝゝゝゝ――それよりもう外に「心をひかれた女」はありませんか。

――そりやありますよ。かうして話をしてゐるうちにずゐぶんいろいろの「彼の女」の顔が見えて來ますね、たしか西鶴の「好色一代女」の最後のところに主人公の「一代女」がもう年寄になつたから、京の大雲寺と云ふ寺の五百羅漢の堂に參詣して、そこに並んでゐる羅漢の中から、いろいろ昔馴染んだ男に似てゐる顔を見付け出して、自分の一生を振り返つて考へて見るところがありますが、こんなことを訊かれると、男と女との違ひこそあれ、ちよつとあすこのところが思ひ出されて心細くなりますよ。

――いや、まだそんなお年でもないでせう。

――年で云ふんぢやありませんが、如何もこんな話は私をひどく寂しい心持にしてしまふんです。それと云ふもまだ「多情佛心」の心境に入らないせいかも知れませんね。――おや、話が少し傍路へ外れたやうですね。ところで第二の「彼の女」はと――さあ、今度は「彼の女」は誰にしませう。

――どなたでも結構です。

――ええと、それぢやある女優と云ふことにして、假にここではYと云ふ名にして置きませう。「彼の女に私がひきつけられた譯は、まあ、露骨に云へば「彼の女」の「多情」だつたことがよかつたんでせうね。多くの人を愛すると云ふことは、かなり女を美しく見せるものですからね。

――さうですかな。

――さうですかなは心細いな。しかしあなたは私にこんな馬鹿氣たことを喋らせて置いてどうするつもりなんです。

――ええ、何です。「女性改造」の原稿にするのです。

――「女性改造」の原稿に――やあ、それぢやこんなことを喋るんぢやあなかつた。今のはみんな取り消しますよ。

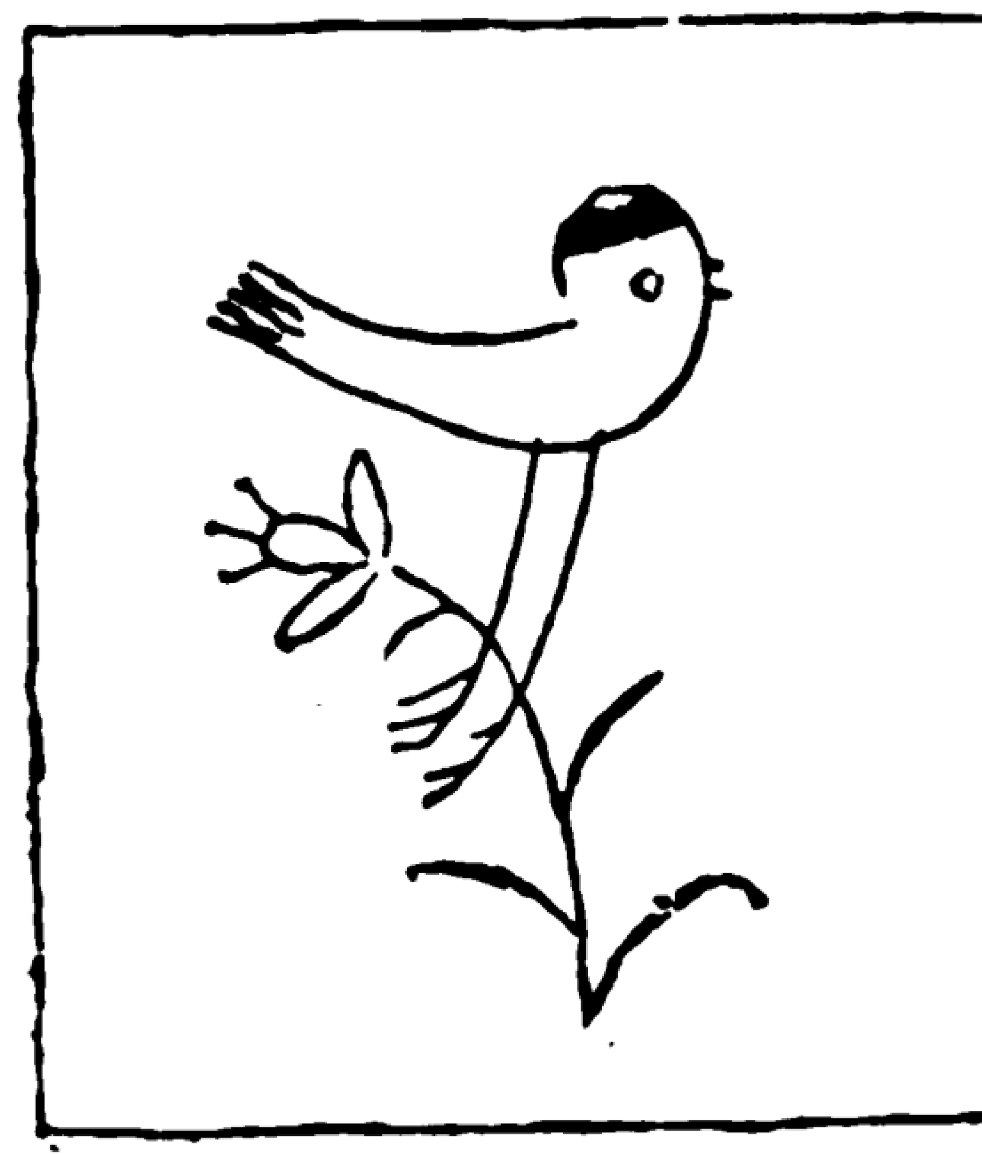
――いや、もう駄目です。

――さうですか。困りましたなあ。

――それぢやまた――

――おや、おや、もう歸るんですか。今度はもうこんな馬鹿氣たことは喋りませんよ。

――ええ、今度はもうこんな馬鹿氣たことを訊きには上りません。



山の手電車

九條武子

鳩

車は山の手のとある處を走つてゐた。春もまだ淺い雜木林の丘がゆるやかなスロープをあらはに見せて、所謂文化式といつた風な西洋館の新しい屋根が灰色の少し鈍つたさむい空に只ひとつめざましく鮮かに、今日の天地の色にひとりそむいてゐるかの樣に見えた。車の中は千姿萬態いつもの樣なこみ合方でとなりの人の心臟の響きも聞こえさうに人いきれでむつとしてゐる。

「オイどこへ行くんだ」

と云ふ聲がうしろに聞ゑたかと思ふと重さうなヅツクの仕事袋をドツカリ下して職人肌の人が割込んで來た。私の前にかけてゐた娘はどうやら知り人らしい。頑丈さうな茶色のスヱターの背中は小山の樣に私と窓外の景色を絶緣してしまつた。

「吉祥寺まで――」

と女は小さな聲で答へた。

「矢張り惡いかね―」

「エヽ―」

「こまつてゐるだらう――――可愛さうに十九になつた斗りだのに」

と言葉のあとは獨り言のやうに消えていつた。

「父ちやんは歸らないのかね―」

「エヽあれつきり」
娘は顏もよう上げないで大勢の人の前で聞かれる自分の身の上話をはづかしさうにうつむいたまゝであつた。
「奇體だなあ——だがやられたのかもしれないよ、火の廻りが早かつたから」
　小山の陰で私は思はずこれだけ聞いて地震の生んだ哀話であらうとしらずしらず耳をかたむけた。どこであつたか車が大きうゆれてとまつた。その女のとなりの人が立つた。職人は大きな體を斜にして、
「おかけなさい」と私をかけさせてくれた。惠まれた樣に女のとなりに私は座した。乘つた時には氣にもつかなかつたが聞くともなしにきこえてきたさつきからの話につい引きこまれてすまない樣な心持ちでありながら樣子を見つゝこんな想像も浮んでくる。
　ほこりにまみれてボヤ／＼になつた髮はいつからか櫛目も通さぬのであらう、輪のはづれかけた鴨脚返しのまげの上に三寸ばかり黑い糸のこつたまゝ縫針が忘れてさゝつてゐた
　病氣の兄らしい人になにかやつと一枚の袷でもぬい上げて、それをもつて見舞にゆくのかしらむと。まだかうらうす寒いものを肩掛もしない襟のかど／＼のかすり目がきれかゝつてゐる。紺がすりの袷にこれも垢じんだ浴衣が重ねられて、少し短かい首にはだけた樣に見えた。自分のなりふりもかまつてゐられない程生活につかれてゐるのではあるまいか、膝の上にはかなり大きな風呂敷包みをかゝへてゐる。若いのに似合はず脂肪氣のないゴリ／＼した手もいじらしい。
「母ちやんは？——隨分こまつてゐるだらうなあ」
「エヽあれからがつかりして始終心配ばかり——でもこの頃は毎朝御信心まいりをしてます」
「どこへ？」
「觀音樣へ」
「さうかい、それあいゝ——觀音樣へお詣りするなら鳩に信心してたのんでみなね鳩よ——」
「エツ鳩に？……」
　娘は怪驗さうな顏をしてはじめて、まともに首を上げて相手を見上げた。その顏立ちはわるくもなかつたが私はその刹那そつと見た彼女の小さな淋しい小鼻と淡い眉毛とになんだか暗影を感じて、もしや運命がこの人をもつと／＼生活に怯やかして暗い世界に引きずりこむとしたら……と思ふとたまらなくなつた。
「さうよ、鳩になあ、毎朝おまゐりしたときにたのんでみ

な、奇體にきいてくれるのだから」

「そをう――」

と女は信じられぬ樣な信じたい樣な心持らしい。

「うそと思つてまあ行つてみな、知つてるだらう辰公なあ、あれが煩らつた時におふくろが毎朝〳〵豆をもつてたのみにいつたんだとよ、それが見ろ、今ぢやあんなにぴん〳〵なのだから」

「あたし、そんならお母ちやんにさういつてみる、そしてあしたから――」

「ウン俺にだまされるとおもつてたのんでみる事よ」

娘の眼はだん〳〵正直さうにうけ入れた。

彼女の頭のなかにはもうその時には母と病む人とより他になんにもない。自分が今電車にのつてゐることも大勢の人がなかば興味とひやかしたやうな眼で見てゐることも、問題で無いのにちがひない。始めははづかしさうにしてゐたのがはつきりとその瞳さへ明るう頭を上げた。傍に立つてゐた二三人の人が無智をあさ笑ふ樣にフヽンといつた調子で顏を見合せた。それには氣づかぬらしく彼女の魂は鳩と神秘の帷に入つていつたのであらう。平氣で注目を受けてゐるのが私はなんだか勇者の樣に思へた。暗い淋しいと思うた影が今は見えない。車が新宿についた。

女は降りた。私は窓ごしにうしろ姿を見えなくなるまで見やつたが男ものらしいすりきれた下駄と、ほこりでうす黒うなつた足くびに幅の合はない浴衣がベラ〳〵まとひついた。

子供

ある驛から乘つた時其箱は一番前の車であつた。そして丁度時間が、學校の歸りらしい人達と一所になつたのである。クツションはみんなこの可愛いゝお客樣でおもひ〳〵に占領されてゐたが、めづらしくすいてゐるのと不思議に大人が少ないのでまるで人形の國に入つたやうな心持がするのみでなく、元氣な動作を見てゐると自分の腦裡から苦しいこだはりはだん〳〵消えていつて、樂なものばかりがのこされてしまつた樣になつてゆく。つい時々ほゝ笑まずにはをれなくなる。つり皮に手のとゞきつこが始まるし、小鳥のやうに並んで小さな口でよくしやべること。笑ふこと。

「君二の宮のおうちつぶれた？――」

「アゝつぶれた。姉さんが死んじやつた」

「地震から僕――とてもいゝおうち考へたんだよ」

「どんな」
「あの、それはね、僕が大きくなつたらよ」と大きくなつたらに力を入れてもう一度、
「大きくなつたら生えたまんまの木でおうちつくるの、いゝだらう――」
「そしたら屋根、どうする?」
「屋根か、屋根はね枝がこんな風に両方から出てくるだらう、それをうまくくんで造るんだ」
小さな建築家は奇想天外なことを云ひだした。すると
「それはいゝね、火事でも生えてる木は中々焼けないのだつてね、そして地震にだつてつぶれないしいゝね」
「いゝだらう、大きくなつたら僕造つて見せる」
なんて可愛いゝ人達であらう。小さな頭には常にかうした新らしい創造の世界がある。

＊　＊　＊

紅の勝つたローズのスエター――さだめて若いお母さまの御丹精であらう――におなじ毛糸の大黒さまの様な帽子。となりは空色のスエターに二人ともみじかな断髪のかげから柔かな小さな耳が見えてゐる。をどり子の様なすんなりした細い足が四つふら〳〵活動してゐる。お荷物のなかから赤い毛糸の玉を出して可愛いゝ――でもいたづらさうな手で、器用に小さな輪が編みはじめられた。空色はローズの脊に腕をまわして熱心にのぞきこんで見てゐる。午後の陽がガラス越しに柔から細いうなじに流れ入る。むかうの方ではもり上つたものがくづれた様な笑ひ聲がした。郊外の静かなおうちでかれこれ三時だと、お母さまがおやつのお支度して只今!の聲をまつてをられるであらう。安全にそして速かに走る電車と可愛いゝ二つのおつむりの上で私はそうした美しい場を考へさせられたりしてをつた。するとだしぬけにローズの方が、
「あの今日のおはなしわかつた?……」
「あたし、すこしわからなかつたの、神様のあのおはなしでせう」
「さう、むつかしいわね、でもおしまひに先生から仰有つてよ、いゝ事をしたときには人に云ふのですつて、神様がおよろこびになるのよ」
「さう?……」といつたが空色の方はかはいゝ瞳を心もちふせて……
「じやあなかつてよ――いゝことを聞いた時には――ねー、さうでせうちがふ?……」

赤い玉が小さい御主人の手のすきをまつてたやうに、お荷物のかげから出て こしかけの下へ、 又すきな方へころがつてる。

「ア、、さうよ〳〵いゝ事を聞いたらだつたのね、いゝ事を聞いたら一人でも多くの人にそのよろこびをわけるのがいゝのですつて――さうすると神樣がおよろこびになるのよ」

「さう仰有つた！」

「さう仰有つたことよ！」

二人は同時に正しく思ひ出したことのさもうれしいやうに顔をみ合せた。

私は柔草のやうな美しいつむりを撫でゝ上げ度い樣な心もちが湧き上つたが、同時に胸の底へなんともいへないあつい涙のやうなものが滲み込んだ。をさない人の純なあたまにいつまでも世の中がうらぎらずにあつたなら、にがい涙、甘い僞。オ、それは女がみんな越えなければならない川であり山である。

怪我

此頃は郊外住宅者の御多分にもれず都會の中央に出るにも入るにも一度は省線にどうしても御厄介にならねばならぬ。都會に出るのを東京に行つてきますなどわざと田舍住居らしい氣もちに浸つて見たいといつた風に皆がことさらめいた言をいつて出てゆく、丁度自分のうちから東京驛に降るまで約一時間と見なければならぬ。その時間と比較して見ると京都から大坂に出るのに大差がない、東京の町がいかに尨大な發展をしたものか電車そのものがどこでどう手間どるのかしらぬ。とにかくそれだけかゝる。それでこゝに來た當座はいつもその一時間の間を、身うごきもならぬ滿員の狹間におしこめられてやつとの思で歸つた。歸るときまつた樣に頭痛がする。車にのるといふことだけでから疲れてしまつてはしかたがないと思ふけれども、何をするにもものうくなつてしまふのが常であつた。

此頃は馴れた爲かさのみ苦しいとも思はないで車のなかでいろ〳〵のことを呑氣に考へてゐる。その日もいつものやうななかにのりこんだ。毛糸編みの肩掛のかざりをとなりの人の羽織のカンに引かけて、お互にどつちが惡いともいへず妙な挨拶をしたとが思ひ出されてせい〳〵小さく胸のところにたゝみこんで袖でおさへてをつた。私の前にはお彼岸詣りらしいお婆さんが三人おんなじやうな袋をもつて二人は腰をか

けて一ぱん肥えた人が立つてゐた。どんな顔をしてゐたか聲高な話が何んであつたか、私の眼や耳はその時その人達には生命の働きをしかけてをらなかつた。そして身體の全責任を手と兩足にまかせて耳も眼も心のなかに遊びにきてをつた。

先つき並木のそばで行きちがつた女――こゝへらの畫家の家へゆくモデルであつたかもしれぬ――かなりとゝのつてゐたその恰好について私の眼と心がしきりに論議しだした。ムツツリして胸の開いたあたり。正しく歩いてゐた足の上部の線もポーズとしてわるくはあるまい、と眼が云ふ。だがまて、假にあれでもすべての衣服をとりさつて素描して見たらどうなる、あの線がかうなつて、あゝなつて、――やつぱり足の中ほどからすこしなほしたいところが見える一體にもうすこし下部の釣合がいゝと申分ないのだが――首の線から胸にかけてそこまでをいゝ畫にしてほしいと心がいつた…………。フト電車が緩くなつたと思ふと同時に眼も耳ももち場〳〵にはね返されて働きだした。すると新宿といふ板文字が見えた。聲がきこえた。車のなかでは乘換の人たちがひしめきだしてわれも〳〵と一足先きに出口へとうごめく。前にかけてをつた婆さんたちも降りるらしく立ち上つて年相應の努力でやつぱり先にゆかうとする。そこへ一ゆれガタンと大きく逆にゆれて車がとまつた。刹那私はあやふく婆さんの足をふみさうになつたのをむつかしい恰好でヤツト身體をさゝへはしたがそのかはり本をもつてをつた右の臂が肥えた婆さんの胸のあたりにふれたとおもうた。

「ひどい女だよ、この人は胸をついて、オ、痛い！」と目ざす仇にめぐり會つたかの様な相形をして突拍子に大聲を上げられたのにはびつくりさせられた。足をふむまいとした注意もなんにもならぬ。私の臂には針もないものを。

「御免下さいね、」

と云ひすてゝ心のせくまゝに云ひわけもなんにもせずもう一度婆さんの表情を見たかつたのにあとから後からと人の雪崩におされて降りてしまつた。

（一三、三、二九、）

十六歳にして人の妻となり、一ヶ年ならず自ら望んでこれを破婚した本篇のヒロイン(彼女)は爾來都に流浪して子守女、女中、廓町の仲居、監獄の女看守、小學教師などの境涯を經た後、日本女子大學の設立せらるゝに及び第一回生として直ちに入學、國文學を專攻し、卒業後は愛國婦人會宣傳、婦人辯士、女學校寄宿舍の舍監、女學校教師、雜誌及び新聞の婦人記者などをも務め、而して、今は靜かなる宗教的信仰を抱きながら洛東高臺寺の月眞院に有髮の尼僧の如き生活を送りつつある。本篇は一婦の虚飾なきその間の生活記録であると共に、數奇な運命の弄ぶ所となつた一女性の魂の秘史である　—記者—

人間巡禮（二）

深澤邦子

六　博徒淫賣の住家　（第一の仲居奉公）

仲居に出るとすれば、身裝も多少は飾らねばなるまい。彼女は女中奉公してゐた間にためた給金で、古着屋から、脊に一つ紋のついた薄紫地縮緬の羽織を一枚買つて來た。

それを着込んで口入屋へ出掛けてゆく途中、相生橋の西詰に不知不識足を止めた彼女は、過去を偲び、將來を考へ、紫縮緬の一つ紋などを着た現在の自分の樣子を顧ると、しかずがに胸に迫る一脈の感慨があつた。書物を讀んで物事が知りたい、そして少女の頃から自分の心に萠してきた空疏を滿して早く幸福を得たい。心に何一つの蓄へも持たない無意義な家庭生活に辛抱しきれないで、十七の時自ら求めて夫に別れ、親や、同胞に別れ、家も財産も捨てゝ一思ひに目當もない世

間へ流れ出た程の自分が、一體今何を考へて相生橋の袂まで歩いてきたのであらうか——料理屋の仲居といへば世間では猫か猿のやうに蔑んでゐる輪落の女の落込む巣ではないか。何時の間にか自分も臭い物の臭味が分らなくなつたのではあるまいか。

彼女は薄紫の羽織の肩を薄黄ろい午後の陽の光りがさしてゐるのも、絶間のない人足が時々、じつと立止つてゆくのも氣がつかないで、道路の眞中を往きつ戻りつしてゐた。しかし生れつき物事に屈托の少い蓮葉な性質であるから、何、仲居をしたところで、心掛け一つで墮落するものではない。心さへ確りしてをれば、客に給仕をするだけで、親切に取扱ふ好意に對してくれる纏頭を、給料以外に貯へてそれで學資をつくるだけのことだ。何も彼も經驗だ、構つたことではない……。

彼女はさつさと足早に口入屋の方へ歩き出したが、その日の中に山の手のある小さな料亭へ住込むことになつた。料亭では亭主夫婦に、十六才の養女が一人、仲居は新入の彼女一人きりで、來客の度に養女と二人で給仕に出ることになつた。ところが愈々となつてみれば、肴の盛り方、すきの焼方、銚子の持ちかたも知らず、お客に接しても、體のこなしも固く、愛嬌の一つも言へるでなし初めの中は自分ながら隨分と可笑しくなることもあつた。

彼女は晝間の中は、淺黒い素顔のまゝで白粉もつけず、赤いメリンスの帶をひき結びにしたまゝお客の相手に出てゐたが客が段々酔拂つてきて、そのまゝ日暮にでもなると、「やあ飲み直しだ。」「どれ一杯飲み直すんや」と言ひながら、酒氣のまわりかけた赤黒い額にギラギラ脂肪を浮かせた男が、胡坐をかいた儘いつまでも動かないことがある。そんな時は彼女は女將に勸められて、養女と代る〲にお風呂へ入り、厚化粧をして、素人騙しのきく着物の一枚も着替へて出るとお客連は、さも〲吃驚したといふやうにわざと仰山な魂消方をしながら、

「やあ、晝間と同じねえやんか。えらい別嬪になつたもんやな、ちや熱いのを持つてきてんか。ねえやんは此處に居れ、おい下の小母はん銚がはりや——」など管巻きながら、十二時近くまでも飲み通す者もあつた。時折はまた料亭の入口に怪しい墨染の法衣がちらついて、二三人の僧侶が牛肉を食べに上つて來ることもあつた。彼等は散々飲み食ひしてから、俺は何町の何屋といふ旅館に泊つてゐるから、其處まで送つてきてくれ、金は何程でも出すからなどと、彼女に對し

い秋波を送りながら、夜陰に紛れ出る者もあつたが、そのあとで、亭主夫婦は、金になるから泊りにゆくやうにと言葉を極めて勸めることもあつたが、彼女はその度に涙を流さんばかりに憤慨した。仲居はしても淫賣はしないと跳ねつけながら、さつさと客間の後片附にかゝつた。

ある日のことである。彼女がこの料亭へ住込んでからも始終出入りしてゐた博徒らしい一人の男が、腕に刺靑のある連れと一緒に訪ねて來た。その日は亭主夫婦が留守だつたので、火鉢を中に坐り込んだ二人は、しきりにこの家の夫婦の噂をはじめた。夫婦は小料理屋を始める前にはもと湯屋家業をしてゐたので、其時分から暗い界隈では評判のある博奕打ちであつたこと、養女が十四歳になつたとき、莫大な枕金を取つて一夜の夢を賣つたのを手初めに、十六歳の今年まで數十人の男から處女を裝うては莫大な枕金を取上げさせたこと、女將は、博奕の最中、自分の形勢が危くなると立膝をして、眞紅な腰卷の下から肥つた脛をチラ〳〵見せて敵手の心を亂すやうにすることなど、聞いてゐるうちに彼女は、脊筋に冷水が流れる思ひがした。博徒、淫賣の家には一日の辛抱も恐ろしくなつて、その日の中にさつさと風呂敷一個をかゝへて飛び出してしまつた。

七　朱に染み易い朋輩（第二の仲居奉公）

彼女が傭はれていつた第二の料理屋は福原遊廓に近い小瀟洒した家で、此處には仲居が五人に、料理人が一人、亭主夫婦の外に十か十一位になる色の白い悧口さうな實娘が一人ゐた。亭主といふのはある大きな靑樓の帳場に勤めてゐたし、仲居もこの界隈で一番派手で美しいと言はれるお峰やんといふ十八になる娘をはじめ「小松、小松」といつて女將が可愛がつてゐる十七になつたばかりの愛嬌のある丸顏の娘や、諏訪山の女學校を三年級まで通つたといふ二十になるお君、半月程前まである官吏の家に小間使ひをしてゐたのだといつて、束髪に結つたお絹といふ娘も交つてゐた。彼女もこの料亭へ住み込んだ頃は、もう仲居といふ者の呼吸も大抵は吞込んでゐたし、田舍臭い土の匂ひも大方はぬけて、福原や兵庫の柳原あたりから聘ばれてくる藝妓連から「姉やん今晩は」と挨拶されても、どうやらその場を取り持つだけのことは出來るやうになつてゐた。

半開の牡丹の花のやうにぱつと婀娜つぽいところのあるお峯やんは、兵庫の生れといふだけで、どういふ家柄に育つた娘かは知らなかつたが、彼女が料亭へ來てから間もなく、兄

の家へ引きとられて嫁入をすることになつたが、それから一年經つて、お峰やんが可愛らしい赤ん坊を抱いて、昔のやうに艶々した頰をしながら料亭へ遊びに來てゐるのに出逢つたことがあつた。

小松は初心で愛嬌のある娘であつたから、女將はこの娘に三味線を敎へて藝妓に仕立て見たいと言つてゐたが、諏訪山の女學校を中途で出たといふお君が「女將さんは知らないで可愛がつてゐるけんど、小松やんはあんた穢多の娘よ」と言ひ出した。小松の生れた村といふのは彼女とは同郡であつた關係から、その邊りの村が水平社に屬してゐることは彼女も知つてゐたが、二里ばかり離れてゐたし、鄉里にゐる頃は一里の外に出たことがないので確な證人にはなれない譯であつた。女將は子にしたいとまで可愛がつてゐただけに、酷く憤慨して、お君の家へ談判に行く役目を彼女に言ひつけた。彼女も同郡と聞いてゐたのでつい同輩の情誼にひかれて出かけてゆくことにした。

お君の家は料亭から程近い二階借りで、母親が一人で焦茶色の六疊で賃仕事らしい縫物をしてゐた。女學校の三年まで通はせた娘に、仲居奉公をさせておく程の母親だけに、見るから邪慳らしい五十五六のお婆さんで、彼女が口を利くか利かないうちにあべこべに喰つてかかられて、散々の體で逃げ歸つたこともあつた。

彼女より半月程先にこの料亭に目見えをしたといふお絹はその頃まだ束髮に結つて、友禪の腹合帶を高いお太鼓に結んでゐたが輪廓の大きい平顏で、何時も青白い顏をしてゐたが目鼻立のよく整つた品のある娘であつた。それが彼女が來て一ケ月も經つと、鬢をゆるく出した島田髷に、三つ紋入の黑縮緬の羽織をシャナリシャナリ着流して、歩く樣子はどう見ても福原三十軒あたりの娼妓としか見られなくなつた。

軍艦が神戸に港入りすると長い間の海上生活に荒んで、酒や女に飢えてゐる船員達がどや〳〵と神戸の街に上陸する。中にも若い水兵達は、陸に上るや否、解かれた獸のやうな勢ひで遊廓に走り、料亭に飲むのである。ある夜は怒濤の叫び、ある朝は青海波の上で偶に小鳥の歌を聞き、海藻の花を見ることがあつても、男ばかりの海上生活では事々に魂が荒立つばかりである。それが久しぶりで物柔かな異性との雰圍氣に浸る喜びもあらうが、彼等は一體に快活で、無邪氣で、仲居に對しても優しくて親切であつた。お絹はそれらの水兵の一人と關係を結ぶやうになつてから軍艦が港に見え

ない間は、まるで戀ひのやうに浮かぬ顔をして、ブラ〳〵暮すやうになつた。水兵が支那海を廻つて歸つてきた時など、南京繻子の丸帯などを土産に買つてくると男が歸つたあとでお絹はそれを抱いて「早く丸帯が持ちたい」と言つては、大方は床に臥してゐた。料亭でも二人の間の眞面目な戀を見ては、酷く小言も言はなかつた。

間もなくその水兵は横濱に家を持つたのだと言つて嬉しがつてゐるお絹を連れて神戸の街を去つた。

彼女は其間に熟々と考へた。お粂やんは牡丹の花の笑ひかけたやうに可憐な娘であつたが、はねつ返りのおきやんで、とても一人前に家庭などは持つてゆけさうに思へなかつたが、いつのまにか紅い手柄のよく似合ふお母さんになつてゐるし、お絹は良家に仕へて、戀とか愛とかいふやうなことは見聞もしない初心な淑やかな娘であつたのに、戀にかけては恐ろしい程意地張りになるし、女は境遇次第でかうまで易々と變るものであらうか――してみると、自分は確りしなければならないと、彼女は秘に自分の心を警めてゐた。

そのうちに年が暮れて新年が來た。紋日には足袋のはきかへや着物の着替へを幾枚でも準備をしておくやうに女將から注意を受けた。その日は藝妓を連れた幾組もの客が、入れかはり立かはり浮かれこむのであつたが、仲居に祝儀を出さぬやうなのは滅多になかつた。俗人らしいのが妻女を連れて、食事をとるために上つてくるやうなのは一番貧乏籤であつたが、ちよい〳〵顔を見せるだけで、淡泊と飲んで食べ、厭味一つ言つたことのない所謂體のいい番頭さんなどは一番金離れが綺麗で、一圓以下の釣錢を財布にいれるやうなことはしなかつたし、幼い時から人中に流はれて辛酸を嘗めつくしてゐるせいか、仲居に對しても横柄な物言ひをしないので朋輩の間では一番受けがよかつた。

彼女は正月一月の間に五十圓ばかりの纏頭を貯へ、二月にかゝつて働いてゐるうちに愈々決心を固めて或日主人夫婦に、學問をしたい宿望を打明けて暇をとることになつた。主人夫婦は商賣柄にも似合ぬ眞面目な人柄で、殊に女將は、どこか良家のお家さんらしい品位があり、相當の教育も受けてゐるらしく、十一になる一人實娘も瞳子の黒い悧巧な子に生れついてゐた。仲居の小松を藝妓に仕立てみたい希望を持つてゐた女將さんも、自分の娘には三味線も舞踊も教へずに、身をいれて學校へ通はせてゐる程譯の分つたところがあつたから、彼女は快く暇をとることが出來た。

料亭を出る時百圓ばかりの金を女將の手に預けて、五圓十

圓宛入用の時受取りに行くことを約束して出た。

八　三疊間の新生活（希望の緒）

裏長屋の煤けた軒先にも、遠くからみるとぬめのやうに白く光る梅の花が薫香をたいて、早春らしい風が時々道行く人の裾にからまる頃になつた。彼女が新生活を初めるために引越してきたのは、とある裏長屋の汚い三疊間であつた。家には六十恰好の老婆が一人住んでゐるきりだつたが、このお婆さんはもと彼女の郷里の近村の者で、彼女の母から若干の債務があるといふ話だつた。何でもお婆さんの夫が、家屋敷を食ひ盡して死んでから間もなく、二人の伜を連れて神戸へ出稼ぎに出てゐたさうであつたが、兄の方は夫の血を受けた放蕩者で、其後行方が不明であるし、眞面目な孝行者の弟の兼松が職工になつて細々とその日の糊口を支へてゐたのださうである。兼松は何か立身の端緒を見つけたい、暫く身一つの自由が欲しいと願つてみたが、老母の扶養をする者がないので深い嘆息をついて、昔は我子の立身の妨げになると云ふので、自殺をした親もあるのにと、自分を思ひ親を思ふ心のジレンマに立つて、青年らしい煩悶を續けてゐる間に丁年に達して入營したが、間もなく脚氣にかゝつて死んでしまつたのだと、老婆は流石に黑い布子の筒袖で眼をぬぐつてゐた。しかし、そのあとから直ぐ大きな聲で郷里にゐた頃の貧乏話などを持出して、彼女を笑はせる陽氣な婆さんであつた。彼女の家からの借金もどうすることも出來ないから間代は不用だなどと云つてゐた。

間數といつても三疊二間が並んでゐるきりで、その中の奥の間に彼女は古道具屋から買つてきた机を据ゑて、改まつた氣持で坐つてみた。煤けた障子の外に、掌ほどの庭があつてその周りを、節穴の多い杉の板塀が圍んでゐた。兼松がまだ生きてゐた時分に、母親を慰めるために夜店で買つてきたのだといふ小さな盆栽が三つ四つ、板塀にとりつけた棚に載つけてあつた。全財産といへば半間の押入が一つあつて、婆さんの持物が少しはいつてゐるきりで、彼女の柳行李一個と、貸蒲團屋から借りてきた夜具も其中へ積むだけの餘裕はいくらもあつた。

彼女は其夜婆さんと一緒に久しぶりで故郷の話などをしながら、寢床を延べて横にならうとして、又婆さんに話かけた。

「ねえお婆さん、人間といふ者は我儘者ですね。故里にゐた頃は他人の着た夜具程厭なものはなかつたのに、旅に出てからはまるで神經が死んでしまつたのよ。」婆さんがへへゝゝと

か何とか云つてゐる間にも彼女はさすがに感慨無量で人間は我儘なものだとつく〴〵考へてゐた。

次の朝は久しぶりで束髪に結つて、キチンと衿をかき合せて裏長屋から程近い私塾の先生の家を訪ねてみた。紫色の風呂敷を抱へて「國語漢文教授」と看板のかゝつた入口に手をかけた時の胸の動悸は彼女が生涯忘れえぬ思ひ出の一つである。

私塾といふのは、彼女が山の手通りの寺院で、女中奉公をしてゐた頃、三の宮停車場の附近に挿しておいたところで、湊川堤に面してゐた。

初めて私塾の先生に逢つた時、これが自分の將來の手ほどきをしてくれる人かと、一種の尊敬と好感を持つて痩せすぎて鼻の秀ひでた近眼らしい先生に挨拶すると、先生は隨分勿體ぶつた御辭儀を返したのをおぼえてゐる。家族は先生の外に多少ヒステリーじみた奥様と、六十餘りになる奥樣の母親と、何でも先生の親類つゞきだといふ十五六の娘が、師範入學の準備に來てゐるのと四人きりだつたが、小學教師の給料だけでは不足をするので、内職に私塾を開いてゐたのだつた。時々は袂の書なども頼まれてゐるのを見た。そればかりでなく夏になると、奥さんと、年寄つたお母さんとは、茶の製造所へ稼ぎに出かけるのだと聞かされた

教授場にあてられた二階の六疊間の壁には、新聞紙がベタベタ貼りつけてあつて、上を向くと天井板のない煤けた屋根裏が無氣味な程黒かつた。

弟子は彼女のほかに、商店の店員らしい若者が五六人通つてゐて、日本外史や十八史略を習つてゐた。彼女も時々返り點のある漢書を教へて貰つたが、先生は仲居の彼女が、難しい漢書を讀むことの早いのに驚いてゐた。

思ひ出せばもう十年も前のことであるが、小さい頃から學問の好きな彼女は、その時分よく妹の市子を守しながら、近所の若者が夜學で教はる日本外史の復習をしてゐるのを、何時までも傍を離れず聞きながら、難しさうだが讀んで見たくて仕樣がなかつたものである。そして揚句の果には、鉤鼻の繼父が殘していつた蟲食ひの漢書を押入の奥から引出してきて、小學校を卒業する時賞與に貰つた小學辭典をひつくり返しながら、頻りに返り點の工夫讀みをしてゐたので、幾分其頃の記憶もあつたと見えて、自分でも面白い程進んでいつた。

彼女が私塾に通つて勉學に精を出してゐる間に、一方裏長屋の三疊間にも、下層階級らしい出來事が再三ならず起つて

ゐた。お婆さんは大抵晝の中は近所隣の使ひ歩きをしてゐるのでその間に忍び込んだのであらうか。柳行李の中の金目の着物を二三枚奪はれてゐたこともあつたが、それは察するところ、お婆さんの長男の放蕩息子が何處からか偲びこんだものらしかつた。

彼是するうち月日は春から夏へ流れて　漢書を包んで通つた紫の風呂敷もそろ〳〵毛むくれだつ頃、小學校教員の檢定試驗の日が迫つてきた。私塾の先生からは何くれの注意を受けて、彼女の受驗手續きも滯りなく運ばれていつた。

その日の朝の空氣は彼女の膚に特別の感觸を傳へた。念入に梳つた束髮に、縱縞の銘仙の單衣を着て、繻珍紛ひの帶をしめて受驗場の入口に立つた時、彼女は生れてはじめて泌々と胸を打つ嚴肅さと、一種の神々しさとを感じた。二百人計りの受驗者の中には少年、中年、老年の男子が百九十九人迄で、彼女の外に今一人質素な白絣を着た二十餘りの女が來てゐた。が、氣のさくい彼女とは直ぐ十年の知己のやうに話あつた。軈て髭の生えた試驗員が入つて來て、ボールドに問題を書き始めると、滿場は息の根をとめたやうに森閑として問題を凝視めてゐる。彼女も懸命になつて、答案を書き出したが、半ばは書き終へてこれから數學にとりかゝらうとした時、折惡くも月經のわざはひを見なければならなかつた。それが氣になつて仕樣がなかつた。場慣れぬ彼女は暫く席を外すことを試驗官に申し出ることが出來なくつて愚圖々々した。合格の通知は遂々來なかつた。

九　蛇に食はれる花（第三の仲居奉公）

學資も盡きたので、私塾に近いところの忙しくない家に雇はれたいと考へて、三の宮停車場附近を搜し廻つて、さゝやかではあるが小綺麗なある料亭に、三度仲居奉公に住み込むことになつた。私塾の先生もつい近くであつたためか、それとも彼女の樣子を見に來たものか、二三度ヘルメット帽をかぶつて、食事をとりに來たことがあつた。彼女は「先生だ」と思ふとすつかり恐縮して一錢の釣錢も貰はぬやうに勤めると、その頑な樣子が可笑しいと云つて先生も料亭の者も苦笑するのであつた。此家の亭主は痘痕の一ぱい出來た大きな面構をした五十六七の男で、頭がつんつるてんに禿げてゐた。女將は四十六七で色の白い細面てのきやしやな女であつた。女將の母親と云ふ人も何處か品のいゝ老婆であつた。女將と老婆が美しいばかりではなく。「お孃さん、お孃さん」と皆から呼ばれて居る一人娘の勝子と云ふのは、その頃十七才で

あつたが、これが又眼のさめるやうな美人で、高貴な家柄の令孃だと云つても恥かしくない氣高い顔立ちをしてゐた。

ところがこの料亭へ毎日のやうにのつそり通つてくる軀の大きい西洋人が一人ゐた。この西洋人の通される部屋は何時もきまつてゐた。普通の客席ではなく、裏の離れ座敷へ案内して、女將や女將の母が、美しい勝子を伴つては、給仕をさせるのが例であつた。

勝子の母と祖母の後には、疱瘡の養父がいつもついてゐて、勝子を西洋人の意に從はせて巨額の金にしようと計てゐるのが見え透いた。勝子はどうしても厭だと云つてきかないのを見て、流石に血を分けた母や祖母の方は、娘の機嫌を損ねる程强いてはゐなかつたが、家のための因果は始終含めてゐた。祖母はまるで十八番のやうに料理人や彼女を捕へて、勝子の母がまだ某縣知事の妾であつた頃のことを話してきかせた。その頃は老婆も勝子の母と一緒に知事の邸に住んでゐて、來客の度に茶などすゝめてゐると、老婆が妾の母であるとさ知らない人々は、よい妾を手にいれたものだと知事を羨ましがつてゐたことや、生れた勝子を貰ひ受けて暇をとつたこと、知事の娘だから勝子に品のあることなどを、自慢さうに話してゐた。さうかと思ふと、時には火鉢に翳してゐる勝子の手を握つてみては、「お前の手にはどうしたんだらう、握つてみてゾーッとするやうな柔かさがないね。皷を打つせいだらうか」などと傍に見てゐる彼女が思はず眉をひそめるやうなことを露骨に云つてゐた。

勝子はその白い織手で盛に皷を打つてゐた舞子の時分から土地の富豪の若主人に落籍されてゐるのだつた。ところが若主人の正妻がそのことを知つて、喧しい嫉妬騷ぎをするので、近頃は滅多に料亭の軒をくゞらなくなつたので、親達は却つてそれを幸ひに、西洋人に賣つて金にしようか、更に藝妓に出さうかと工面の皺を寄せてゐた。

疱瘡の親爺はどういふものか蘭の花を好んで、屋根上の物干臺に蘭の鉢が幾つとなく並べてあつた。暇さへあれば物干臺に上つて蘭の鉢を樂しむといふ風であつた。强慾な親爺にも似合ない閑日月だと思つてゐると、或日奉公人を警戒するやうな邪推深い眼つきをして「俺はいつかお客が話してゐたのを聞いたんやが、蘭の一株で數百圓もするのがあるんだとよ。もと俺の家にゐた奉公人で大事なその蘭の葉を鋏で切取つて、自分の荷物と一緒に行李の底に隱してゐた泥棒がゐたもんだ」と威嚇しておいて奉公人の顔色を片つ端から見廻す樣

性の汚い厭な亭主であつた。この取柄のなさゝうな醜い爺さんが、どうして美しい女將や勝子を自分の手にいれたものだらうと、彼女はその奇緣らしい奇緣につく／＼頭をひねつてみることがあつた。

　朝になると彼女は襷をかけて、料亭の長い緣側に雜巾がけをするのであつたが、時々腕を休めてハーッと吐く呼氣が何時の間にか白く見えるやうになつた。十一月の頃、彼女が二階から見下した料亭の前に、小學校の生徒が、女教師に引率されて、さる皇族の奉迎とか奉送とかで、ズラリと正列をしてゐるのを見出してあかず眺めながら、腹の底から羨望に堪へられなくなつてすつかり滅入りこんでしまつたことがあつた。

　ところがその翌日のこと、何處かの店員らしい若者が四五人連で、酒肴をとりにきたが、彼女が膳を運ぶ後から、何事かヒソ／＼と叫いたり、クスリと忍び笑ひをする樣子が何だか可笑しいと思つてゐると、其の翌日意外な一通の手紙が舞ひこんできた。差出人の姓名を見ると、それはたしかに記憶のある彼女の鄕里の若者の名で、彼女がまだ尋常小學の一年の頃、五つになるかならぬ子供であつたが、誰に敎へられたものか、その頃よく「僕、僕」と云つてゐたのを、彼女がからかひ半分に「かれぼくか」と云つたりしたものだつたが、一人前の若者になつても昔の腹立は忘れなかつたものと見える。彼女は今まで知らぬ他鄕の人からは、何を言はれようが、仕向けられようが、超然としてゐたものであつたが、若者の手紙を見た時ばかりは、丸い頰がひとりでに熱くなつて、身の置處もない羞恥に堪へられなくなつて面を伏せてしまつた。間もなく彼女はこの不過な料亭とも暇をとつて、愈々運命の數奇を極めたどん底生活を放膽に卒直にくゞり歩くことになつた。

時事解説

國際勞働代表とは何か

鈴木文治

大正八年以來、年中行事の一つとして、年々我國の社會を騒がしつゝあつた國際勞働代表の選出は漸く終結した。國際勞働代表とは、いふまでもなく、年々西瑞ゼネバに（第一回は米國ワシントンに、第二回は伊太利ゼノアに、第三回以來はゼネバと決した）開催さるゝ國際勞働會議に、國際聯盟加入各國の勞働者を代表するものであるが、抑も國際勞働會議とは何か、それに勞働者を代表するとは、如何なる意義を有するかといふ疑問が起る。本文は卽ちこれ等の疑問に答へんとするものである。

思ふに、世界大戰中、聯合諸國の勞働者の貢献は絶大なるものがあつた。それと同時に勞働者の苦痛と犧牲とも亦絶大なるものがあつた。そこで既に戰時中よりして、諸國の勞働團體の間には戰後の勞働問題として、勞働者の權利の伸張、勞働團體の協力による國際平和の永久保障等の問題が盛んに唱導せられて居た。中にも英米兩國の勞働組合に於て、其主張の熾烈なるものがあつた。卽ち彼等は相糾合して、戰後平和會議の開かるゝ同じ場所、同じ時日に於て、勞働者の世界平和會議を開催し、此私立平和會議の力によつて、政府の主催の公立平和會議を壓迫しやうといふ計畫が進められた。早くも此形勢を見て取つたのは、英のロイド ジョージ氏、米のウヰルソン氏である。さてこそ各國の政治家等は最早躊躇すべきにあらずとなし、千九百十九年一月十八日、巴里に於ける英米佛伊日五大國の豫備會議に於て平和會議の事務的進涉を吟味し、結局五大國會議の下の五大國委員會の一として、國際勞働法制委員會なるものを認め、各國は同廿七日を以てそれ〳〵其委員を任命するに到つた。而して此國際勞働

法制委員會なるものは、同年二月一日より活動を開始し、爾後二ケ月に亘る努力を以て、爾來年々開催される國際勞働會議の基礎法制を作成したのである。

國際勞働條約は其前文の劈頭に於て曰く『國際聯盟は世界平和の確立を目的とし、此の如き平和は社會的公正を基礎とするに於てのみ之を樹立することを得るに當り、世界の平和と協調とを危殆ならしむるに足る大不安を惹起すべき多數人民に對する不正、殘酷、窮乏を包容する勞働條件が現存し（中略）此等條件の改良を行ふを以て刻下の急務となするにあり』と。即ち國際勞働會議の趣旨は、此一句を以て明瞭であると信ずる。

要するに、國際勞働會議は『若し一國が勞働に關する人道的條件を採用せざるときは、他の諸國が其國內に於て條件の改善を行ふの障害となるべきを以て』國際聯盟加盟の諸國は、飽くまでも『公正人道の觀念に動かされ、世界の永久的平和を設定する目的を以て』互に相會同し、各國內に於ける勞働條件を改善し、勞働生活に安定を與へんことを目的とするものなのである。

國際勞働會議の組織は、各國共に政府代表二名、資本代表一名、勞働代表一名即ち各國四名の委員より成り、外に數人の顧問を帶同することが認められて居る。而して以上の代表は、政府代表に就ては、固より政府自身の權限を以て、何人でも隨意に任命することが出來るが、資本、勞働の二代表に就ては、夫れ〲資本代表は資本家團體に、勞働代表は勞働團體に政府より協議し、各其推薦を俟つて之を任命すべき旨が、勞働條約に明示されてある。資本家代表の選定に就ては、我國の政府は從來勞働條約の規定を重んじて、年々商業會議所聯合會に相談し、事實六大商業會議所の推薦を受けて之を任命しつゝあつた。然るに問題は勞働代表である。これは從來我國の政府が勞働對策を過つて來た必然の結果として起つた事と言はねばならない。

從來政府の勞働對策は、勞働組合の發達を喜ばず、寧ろ極力之に干涉壓迫を加へて、出來得べくんば撲滅せんとするにあつた。併し乍ら勞働問題は近代的工業の產兒であつて、近代工業の存在は直ちに勞働問題の發生を豫想せしむる底のものである。然るに近年我國に於ける工業發達の趨勢は、汽笛の聲は雞犬を驚かし、大煙突の黑煙は農家の軒端を染むるといふ有樣である。近代工業の產兒であり又その影である勞働問題のみを撲滅することが出來る筈がない。勞働問題の發生するところ、其解決の手段として、勞働組合の發達するは、必然の事である。況んや帝國憲法は國民に對して普ねく集合結社の自由を認めて居る。法律の力に依らずしてはよく

之を制限禁止することが出來ない。そこで政府は手を代へ品を變へて或はこれを除外し、或は之を無視し、若くば勞働者懐柔の代用機關を設けて、巧みに勞働者の團體的發達を阻止して來た。勞働代表の選出に就ても亦同樣である。

政府の言明するところを聞けば、政府は我國には未だ勞働條約にいふところの代表的勞働組合を認むることを得ないとのことである。そこで一般工場勞働者（何等の組織なき）を同樣の權利者と見て、此間より、代表を選出せんとするの態度を取つて來た。これは明かに國際勞働條約の精神を蹂躙するものである。元來國際勞働會議を設置するに至つた動機は、前にも既に述べたるが如く、各國勞働團體の協力によつて、公正なる勞働條件を樹立し、以て勞動生活の安定を計り、やがて國際平和の基礎を築かんとするにある。從つてその意味に於て、各國共に（殊に後進國に對して）勞働組合の發達を助成せんことを含んであることはいふまでもない。現に千九百十九年二月七日巴里國際法制委員會に於て、我國の代表岡實氏が、原案提出者たる英國代表バーンス氏に對して若しかゝる勞働組合のなき國に於ては代表の選出を如何にすべきかといふ問を發したるに對し、バーンス氏は『今日は世界いづれの國に於ても、如何なる幼稚なる形かに於て勞働組合の存在せざるところなし、かゝる團體あらば其團體と協議すべし、萬一かゝる團體すらもなき時に於ては、政府はその任意の方法によつて之を選出すべきなり』と答へて居る。故に政府が我國に代表的勞働組合なしとの口實の下に、殊更に勞働組合を無視し、何等組織なき勞働者の選擧によつて代表を決定し來れる從來の態度は、正しく國際勞働條約本來の精神を蹂躙したものなりといはざるを得ない。

然るに今年に至つて、漸く政府も甲を脫いだ。一は年々我國の勞働組合より勞働會議に對する猛烈なる抗議と、一は官僚社會に於ける進步的意見の勝利とにより、結局勞働組合を認め、これより代表者を選定するの方法を採るに至つた。且つ昨年第五回の會議に於ては、『今後勞働組合より苦情の起らない方法によつて代表を選出するやう』にとの警告を受けたのである。今年は否が應でもかゝる手段を採用せざるを得なかつたのである。併し乍ら今年にしても、選擧方法の發表より決定までの日取を長くし過ぎたこと、殊に從來何の形をも備へなかつた勞働者の急造團體の組織を認め、これに多年建鬪の歷史を有する勞働團體と、同一權利を賦與したことは所謂大失態と言はざるを得ないのであつて、結局勞働組合否認の從來の保守的政策を全然脫け切れない結果と評せざるを得ないのである。併し乍ら、勞働代表の選定が曲りなりにも勞働條約の精神に添ふの形式を備ふるに至つたことは、日本の勞働運動の上にとつて慶賀すべき事柄には相違ない。政府の不純な態度も、もうこれが最後であらう。唯此上は我國の勞働組合が建全な發達を遂げて、十分なる實力の充實と、機能の發揮とを希ふのみである。

第五回國際勞働會議の模樣と所感

石原清子

おことはり

近頃非常に多くなつた『インターナショナル』の會議について私は甚だ迂遠な知識しか持ちませんでした。此度初めて若輩の身をも顧みず、さうした會合に列席致しまして、如何にこの『インターナショナル』の會合が意義深く、重大な効果を齎すかをしみ〴〵考へさせられたのであります。

更に私はこのインタナショナルの會合について研究をすゝめ考慮をめぐらしたいと思つて居るのであります。せめては會議のほんの大體だけでも私が申上げることによつて、幾分の御參考になるかとも思つて、思ひ出すままを書くことに致しました。

國際勞働會議の目的は何であるかから申述べるのがほんとうだらうと思ひますが、これは此處では止めまして、とりあへず、五回の國際勞働會議それもただかくの如くに行はれたといふ極く〳〵のあらましを申述べることにします。

一　議題

今度の會議の議題となつた事柄は、工場監督制度の一般原則を協定しようといふのでありました。ヴエルサイユ平和條約第四百二十七條にある勞働條件の原則中に、『各國は被傭者の保護目的とする法令を勵行する爲め監督の制度を設け、婦人をして之に參加せしむべき事』とあり同條末文に、この原則が國際聯盟の政策を指導しその上「若し國際聯盟の各產業國で之を採用し、又適當な監督の制度で、其の實行を保障すれば世界の勞働者の上に永久の福利を齎すに最も宜しいものであらう」いふ意味の宣言があります。

つまり監督制度は勞働法規の實行をする上にどうしても必

要であることが、各國に強く感ぜられたことに基くのであります。さうした監督制度といふことについては單に五回の會議にのみ事新たになつたのでなく、一九一九年の十月の初めての國際勞働會議が、華盛頓に開かれました時から、この會議に出席した工場監督官等によりて問題にされ、その後も殆んど每回に亘つて工場監督に關係のある多くの問題を研究する爲め、監督官だけの非公式ではありますが、會合があつたのであります。それらから第十七回理事會議でいよ〳〵この事を第五回の國際勞働會議の議題とすることに定つたのであります。

以上はほんの今度の會議の議題がどうして定められたかについて一寸申ただけですが、確りと解つて頂く爲めには何故勞働會議といふものが起つたかを一應考へてみる必要があるだらうと思ひます。然しそれはいづれ後に何かのをりにまはして、とに角、私が參列した會議の模樣の大體を申述べませう。

二　本會議の模樣

會議は十月二十二日から同月廿九日まで、丁度一週間でありました。參加國が四十二ケ國で、大凡二百人程の人でした。會場はクールザールといふ社交場とでも申す樣な建物です。

最初の日の會場の騷々しさ、席順すらも確に定められてゐないところで、理事會代表者、フオンテーヌ氏（佛）の司會の下に始められ、英、佛、等の代表者からの推薦で、安達峰一郞博士（ベルジユーム大使）が議長に、次でジユーオー氏（佛國勞働代表）フイスター氏（瑞西政府代表）などが副議長に、資格審査委員としてはアハイム氏（白耳義政府代表）オエールステツト氏（丁抹資本代表）ジユ！オー氏、又銓衡委員としては政府側からは日本の前田多門氏、加奈陀のカルサース夫人（この人はつい先頃までミスマーカムで居られた人です）其他白耳義、獨逸、西班牙、佛蘭西、英吉利、印度、伊太利、智利、芬蘭、波蘭、等の各代表、資本側としては白耳義、佛蘭西、英吉利、印度、伊太利、等の各代表、補缺委員として日本の山崎龜吉氏、其他、獨逸、芬蘭、瑞典、和蘭、等の各代表、勞働者側としては丁抹、瑞西、エストニア、獨逸、西班牙、英吉利、チエツコスロバキヤ、濠太利、等の各代表、委員長として佛國のアーサーフオンテーヌ氏（政府代表）、副委員長は白耳義のカーリエル氏（資本代表）同國のメルテンス氏（勞働代表）等が決定されました。

次で、議題について如何なる方法をとつて審議すべきかの問題が起りました。こゝでは各國代表からさまぐな意見が出たのでありますが、詮衡委員の手を經て結局は、勸告草案（工場監督制度の共通原則と申しましても各國々によつて餘程事情が違つて居りますから、前もつて、議題が定つた時に、國際勞働事務局では各國政府に對して質問書を出して回答をさせ、それによりて各國の工場監督制度の實情を參酌して、勸告草案を作成するのです。而して總會の審議を經て後決定されるのでありますが、決定はされてもこれは決して、すべしとの條約形式でなしにする方がよろしいといふ勸告なのであります。つまり、國情の相異から之を條約として一切平等に各聯盟國に行はせるとは隨分困難なことであり、且つ實際は各大產業國では、これら勸告案とさまで異らないところの監督制度をもつて居り、勞働總會でいろくと討議した結果もつまりはそれ等の國々にとつては、大體に於て現行の制度を確認せしめるだけに止まるものであります。ですから、よい勞働立法をもつ此等の大產業國が、長年經驗してきた點から何れの國にも有益な共通の原則を作成して、後進國を更に有利に進ませる爲、斯くする方がよろしいから勸告草案として總會に提出するのであります。）によつて審議すること、右勸告草案順序により、一、監督の範圍、二、監督官の職能及權限の性質、三、安全（災害防止）四、監督の組織、五、監督官の報告、以上の五つの委員會で、審議されることになつたのであります。以上については大體異議なく決定したのですが、委員數のことが又問題になりました。即ち委員數が少く決定される時は單に政府側だけの代表者だけ出て來た樣な國に於ては、委員會に出席が出來ないことになつたりする等のことであるからで、これも結局は、第三と第五の割合に重要でない問題のところのみを最初の決定通りで後の第一第二、第四は各側から二名づゝの增員を出すことになりました。

以上は總會第一日及二日午前中に亘つての大體であります。

三　委員會

その後は各委員會へ移りましたから、次には私の出席した第四の委員會「監督の組織」についてのあらましを申述べませう。（御承知でもありませうが、顧問には發言權は御座いません。たゞ代表から委任された時のみあるものです。）

顔ぶれは、政府側としてミス、カーミカエル（加奈陀）この

人の代理として前記の、カルサース夫人。マーコルム、デレヴイン氏（英吉利）ブーラン氏（佛蘭西）ロベズヌネズ氏（西班牙）フアーグスレ氏（愛蘭）ローランゲ氏（那諾）ポコルニー氏（チエッコスロバキヤ）竹下豐治氏、石原清子（日本）資本側からは、ピノー氏（佛蘭西）スタイマン氏（瑞西）ヘワット氏（愛蘭）オエルステット氏（丁抹）ストーク氏（和蘭）ホダツチ氏（チエッコスロバキヤ）チユールチン氏（セルブクローツ、スロヴエン）。

勞働者側は、ミス、ボンドフイールド（英吉利）、（この人は今度勞働省政務次官になりました）スタトユー氏（チユッコスロバキヤ）サヴオア氏（佛蘭西）龜井司氏（日本）カバレル氏（西班牙）ソラウ氏（白耳義）ホロウエイ氏（濠洲利）ウイスナ氏（ラトヴイア）等でありました。

委員長は英吉利の政府代表マコルム、デレウイン氏で元氣なお爺さんです。少し細かくなりすぎますが、工場監督組織についての勸告草案を申述べてみませう。（外務省假飜譯です）

『總會は經濟活動の各種の態樣に適應する監督制の特殊の性質を考慮せざる可しとの本勸告前文に掲げたる決定に從ひ、監督は單一なる包括制度に依るべきか、又は各態應に對する各別の制度に依るべきかの問題につきては、其の解決は各國の廣狹又は其の産業の程度に依るものであるが故に、何等爲さざる可きことを思ひ勞働取締及勞働者保護に關する法令規則の實施の劃一を一層善く確保する爲めに監督の組織につき左の一般原則を勸告す。』

とこう前置があつて、

『一、本件に關して行政の實際上如何なる差異存するも一切の監督官は其の經驗をお互ひに利用し得しむべく、且最有用なりと認めらるゝ共通の原則に從ひ監督の方法及手續を規律すること。

二、法令中の特殊の技術上の規定の實施を督勵するが爲めに特殊監督官（監督電氣技師、監督醫官）の存在する場合に於ては右監督官は、行政上、中央監督機關の管轄に屬すべきこと。

三、特種の設備又は企業の特殊の分科（鑛山、商船、鐵道等に於ける勞働條件を規律する法令の實施が當該設備又は企業の一般監督の責に任ずる官吏により執行せらるゝ場合に於ては右官吏は行政實際に抵觸せざる限り一般監督事務を管轄する中央官廳と聯絡を保つこと。

四、行政上實際抵觸せざる限り各種の設備又は企業に於ける勞働取締及勞働者保護に關する法令規則の督視の責に任ず

る職員は單一の中央官廳の指揮を受くべきこと。

五、（監督機關が完全なる獨立を有し其の職務執行上之に障害を來すことあるべき政治上其の他の外部の何らの勢力に影響せられざるの必要を認め）と特に前置があつて、

（イ）監督機關は政治的職務を有せざる省に所屬せしめらるべきこと。

（ロ）地方監督職員は上級官廳と地方監督官との間に直接仲介者として行動する洲監督官の指揮監督を受くべき地方行政官廳より獨立たるべきこと。

六（監督官の採用及教習に付、執るべき細目の措置は之を措き）とこれも前置があつて、右の通り勸告す、

（イ）他の一切の考慮に先ち、作業手續及機械の益々複雜を加ふるに顧み監督職員の採用に關しては技術上及一般の資格程度を漸次高むべきこと。

（ロ）使用者及被用者の關係に顧み採用せらるる者は右兩者の信任を得べきものたるべく其性格は右に必要なる地歩を占めしむるが如きものたるべきこと。

（ハ）監督官たるの資格を考査し其の職務を修習する爲採用せらるる者には一定の試補期間を設くべきこと、

七、平和條約第四百二十七條中に定むる原則に基き總會は監督職員中には婦人を加ふべきことを勸告す、尤も婦人監督官が婦人及兒童の保護又は勞働者の福利增進に付き特別の注意を拂ひ得べきものなることを認むると共に總會は實際上の理由に基き、又監督職員中漸次地位を昇進することを確保せしむる爲め女子監督官が男子監督官と階級に應じ同一の職務を有し且同一の責任を負ひ的確に同一の條件に於て使用せらるべく女子監督官がその昇進に値する限り高き地位に昇進する上に付き均等の機會を有すべきことを勸告す。

八（一切の關係者の協力に依りてのみ勞働者保護の爲め措置につき、現實の成功を濟し得べきこと、從つて勞働者の監督事務に於ける干與を容易ならしむるの可なる事を信じ且或國に於て、又は或種の設備に於て、勞働者を副監督官、看視取締として任用し滿足なる成績を收めたる事を思ひ總會は左の通り勸告す。）

（イ）僚友たる勞働者の選任したる勞働者、又は勞働團體の正式代表者をして監督官に對し内密に違反又は濫用、報告する爲之と自由に交涉することに付並に望ましき經濟又は改善を提撕し得しむる爲あらゆる便宜を之に供すべきこと、

（ロ）工場代表者又は工場委員會の設けある國に於ては右本件につき法規上之に附與せられたる職務を充分行使せしむるこ

と、

九、總會は勞働取締及勞働者保護に關する法令規則の執行に付き監督機關と地方官廳との間に於ける恒常の協力あるべきを勸告す。』

一般原則としての勸告ですから、細かく項目を分けてはありますもの丶各項目みな非常に密接な關係を有して居りますことは御覧の通りであります。

初めに先づ先進の産業國からしてその經驗と實際を述べ、その上一般原則を規定することになつたのであります。英吉利の如きは以上の勸告案に對しては殆んど考慮の餘地を要せぬ迄になつてをる樣であります。いづれの國にしても大體に於て原案に賛成ではありましたが、殊に第五の各項について各國が誠に苦しい經驗をして居りますので、どうしても政治的に關係なく地方官廳の支配から獨立して中央官廳の下に所屬せしめなければならぬとの論が特にやかましかつたのであます。六、監督官の採用の點に於ては勸告案の上にはつきり出ては居りませんが、事實上勞働者を監督官として採用してをる諸國がありましたので、大部盛んに成績良好なことを述べて論ぜられたのでした。然し之は委員會では採用されませんでした。

（此の問題についての委員長の報告が再び總會で議論を生み盛んに論ぜられたのですが遂にこれはデレヴィン氏の自國に於ける經驗から熱心に何等の効果がなかつたと述べられた上に決をとり結局否定となつたのであります）七の問題は非常に賑かでした。大體に賛成でありましたが、仕事の性質上差別をつけるが當然とか當然でないとか隨分討論に花が咲き、英國のボン、フイールド女子などは卓をたゝいて差別なしとまでなか〳〵に氣焰をあげました。戰時に於ける婦人の活動を例にしてかくの如く立派な効果を上げてゐるのではないかと。

その元氣のよさ、赤裸々な態度が思はず誰をも微笑ませずにはおかぬ樣でした。其他の婦人代表もみなそれ〴〵婦人の爲めに、盛んに氣焰をあげて問題は少々枝葉に亘りかけましたが、結局原案に不賛成はなくて決定いたしました。但し日本は現在事實がそこまでまゐりませんので、漸次それに進むであらうし現在なほ婦人監督官を置く計劃ある旨を述べましたところ、床をならし拍手する等の有樣でありました。其他については特別論議される等のこともなく、通過いたしましたが、とかくチエツコスロバキヤは新しい國であるだけになか〳〵議論が多い樣に思はれました。

以上は第四委員會工場監督の組織についての勸告草案に對する審議の極く大體でありますが、其他の委員會もそれ〲審議を重ねてその結果を更に總會に報告して討議するのであります。が、第二委員會報告にはかなり烈しい反對論が出たりして、二時間以上にも亘つて盛んに論戰されたのでありますが、結局程よく妥當案が出來て一段落ついたのであります。其他の委員會の報告には今回はさまでむづかしい論戰は起らなかつたのであります。そうして修正される點はされて、勸告案起草委員の手によつて勸告正文が作成されて更に最後の本會議にかけられて、殆んど滿場一致で決定されたのであります。いよ〱是が國際勞働會議の名に於て「共通一般原則」として正式に現はれるのです。

以上甚だ不充分ではありますが、勞働會議の如何なるものかゞほゞお解りになつたと思ひます。尚前記「工場監督の組織」についての勸告草案の主旨は、大體異議なく通過しましたが、文言は餘程、書き改められて居ります。

四　會議所感

會議は決して整齊とは申されませんが、これは結局非常に議論が多いせいであら と思ひます。さすがは國際會議で、野次氣分などは感じたくてもなく、あの短時間にきちんと決定を見、諸國代表は手鞄一つ提げてどん〱と歸つてゆく、論ずるのでも、それは自分達の主張なり主義なりだから特別に製造するのでない、普通の話のやうに彼等の態度には餘裕があります。勿論言葉の關係もありませうが、その上彼の國々の人達は毎年の顏馴みなので、いきなり『御機嫌ようお變りもなくて』と親しげに話しあふ。場馴れはしてゐるし馴みは深いしお互ひ同志の理解があるだけでも彼等はどの位お互ひの國々の利益をえてゐるかわかりません。まだかうした問題には日の淺いしかも離れ島の日本人としての不利は無理からぬことではあつても、そのみちの人々が懸命になれば近き將來に希望の實現を望まれぬこともないでありませう。

言葉の不自由！これは申すまでもありません、英吉利とか佛蘭西とか又は獨逸にしてもその他の國にしてもお互ひに隣同志の私共からみれば、習慣も隨分似通つてはゐるし知らぬとは申せ、言源の同じ樣な言葉のどうやら用事を便ずるにはたる樣なお互の有樣。隨分達者な人々でもこちらから參りましてはなか〱に言葉の上ではどうしても敗け目がある樣であります。公用語としては佛蘭西語、英語でありますが、本國の言葉を用ゐても通譯さへすれば宜しいことになつて居り

ますが、彼地の習慣や事情に委しい馴れた人でない限りは隨分損をする場合が多いであらうと思ひます。然しこうした場所に肝要なのは日本人としての態度の如何であらうと思ひます。柄の小い黄色い、從つて風采の貧弱な私共は、いくら力むでもやはりそれだけにしか見えません。多少誰しも大きな彼等に柄こそ敗け目はあつてもどうか腹に確りとした底力を貯へてゐてほしいと思ひます。語學の勉強も大切ですが人間が落着くといふことは一層大切です。餘裕があると前記いたしましたが、その例にいゝ惡いは別として、總會の議事最中に我勞働代表、宇野利衛門氏の顔をしきりに寫生する一婦人顧問がありました。單に申せば、茶目氣が多すぎて眞面目でないと云ふそしりもあるでせうが、その心持のゆつたりして遽てぬ樣は一寸私共の及ばぬところでありませう。

會議中最も厭な事だと思ひましたのは、日本の勞動代表の資格云々の事であります。これは日本のみでなく伊太利、印度の勞働代表にもあつたのでありますが、日本はこれ迄殆んど毎回繰りかへされる有樣でした。その度に資格審査委員の手を經、且つ總會にもち出されるのであります。その選出法に多少の不完全があることも事實ではありませうが、どう思つてもこれを國際的の場所に毎年の如く繰りかへされることは、日本國といふその對面からも隨分面白くない事です。(第六回の國際勞働會議からは勞働代表についての資格問題はなくなると思ひますが。)私はまた會議の席に代表では勿論なく、又顧問でも隨員でもなしの婦人達が、多勢居るのに、初めは婦人記者でもあるのかと思つてゐたのですが、その人達はみな會議に列するところの代表や顧問の人達の夫人連であることが後から解りました。そうしてこの人達はちやんと傍聽席に來て聽いて居ります。一週間ばかりの會議にわざ〳〵遠いところから出て來なくともよささうなものと初めの中は思つたのですが、考へてみれば夫君をほんとうに助けるといふことの上から、夫君の仕事を出來るだけ理解して置くといふ點からばかりでなく、自分としても隨分智識を啓發される事でありませし、決して無意義なことではないと思ひました。

初夏に多い小兒の病氣と母親の要心

慶大教授 鎭目專之助

新緑萌えて、燕が飛んで、快い風が袂に薫る初夏の候、衣更へると共に身も心も輕くなつて一年中での生き甲斐ある時分ですが、斯様なよい季節にも子供を持たれる母人達には心配が無い譯には參りません。

一體小兒の身體は成人に比べると、殊に季候に對する抵抗力の弱いもので、從つて悪い時候の夏や冬には病氣が多く、春秋就中、秋の一番よい季節には非常に少ないものですが、殊に夏には色々な危險な病氣がありまして、其の爲めには可愛い子供を失ふことは年年大變な數に上ります。それで各國政府共に色々之が豫防に苦心して居るのですが、特に是等の疾患は各家庭に於ける平素の注意によつて避け得る場合が餘程多いと思はれますので、轉ばぬ先の杖と存じて茲に二三の病氣に就て申上げる事にいたしました。その中でも一番多く又最も怖ろしい牛乳營養兒の消化不良症から先づ申述べませう。

第一 消化不良症

之は學問的に申すと廣く榮養障碍と申す方が本當で、消化不良症と申すのは其の一部分なのですが、私が茲に申上げることは主に其の部分ですから、むづかしい理屈は一切拔きにして、やはり一般に通りのよい消化不良の名で申上げます。一體此の病氣は母乳に育てられる子供には極く尠く、牛乳其他コンデンスミルクの様なもので養つてた赤ん坊に多い病氣で、勿論暑くなる程多い病氣ですが、もうそろ〳〵五月初めから相當に見られます、而かも此五月頃のものは却て死亡率が多いのですから中々馬鹿になりません。何處の病院でも左様ですが例へば私共の慶大病院小兒科で此の數年間の統計を見ましても、入院した消化不良症の數は申すまでもなく七月八月の暑い盛りに一番多いが、其の死亡した割合によると五月六月のものが一番多い事は見逃されぬ事實であります。是には色々理由

のある事ですが、極く解り易く平たく申しますと、つまり夏にかゝる早々、牛乳兒の中でも平素から弱かつた體質の惡い樣なお子さんが、最先にやられて仕舞つたと言ふ樣な譯になるのですから、虚弱な子供を持たれる世のお母樣方は特に此際御注意を願ひ度いと思ひます。

此の病氣の原因は色々複雜して居りますが、要するに暑い時候になると一般に消化器の力も弱くなります。そこへまた黴菌の發生が盛になつて牛乳も腐り易くなる。また一方には暑さで渴くために、兎角飮み過ぎになる場合が多い、つまり食物が惡いか、多過ぎるか、或は消化の能力が不足してるかにより胃腸を壞し易い、それにまた感冒とか氣管支炎肺炎中耳炎、膀胱炎とか云ふ樣な他の病氣で身體が弱るとそれから誘發される事があります。

それでも生來體質の丈夫な乳兒は、何の障りもなく結構牛乳で丈夫に育つて行くものが澤山あるのですが、茲に生れつき體質の虚弱な子供になりますと、僅かの事が障りまして大變な事になる、それで近來此の體質異常と言ふ事は最も醫學上重要視されて來たのですが、兎に角そんな譯ですから體質の惡い子供や、或は又何かの病氣の後で體の弱つてる御子さん方に消化不良症が起り易いのです。

病氣の症候を申しますと、發病は徐徐に來るものと急性なのとがあるが、先づ第一に氣の付く事は、便が惡くなることです。牛乳で養はれた兒の便は、普通淡黃色で、一般に少し硬い位な粒々や粘液の無い便ですが、それが、靑綠色になり、或は白い顆粒や粘液が混じて來たり泡出つたりする。一般に水分が多くなつて、少し進むと全く水の樣なものを下痢して襁褓に皆吸ひ取られて仕舞ふ樣なものになる、或は酸い臭か厭な臭氣を發したりします。

子供は顏色が惡く大變不機嫌で夜も晝も泣いて許り居る。乳も餘り飮まなくなり、或はまた飮んでも本當の食慾でなく渴くために飮むのが多い、それで凝つた乳を吐いたり輕度の熱（三十八度位）が出たりします。腹部は屢々膨滿して、瓦斯が盛に出ます。

重いのになると僅の間に瘦衰へて、腦症を起して來て、仕舞には珈琲殘滓か煤の樣なものを吐く樣になりますと之は食餌性中毒症と申していくら病院で骨を折つても助すからぬ場合が多いのです。其の他病氣が永びくと非常に瘦せてあの可愛らしかつた圓々した子供の姿は失せて、皺だらけなまるで老人の樣な顏貌になる、之は消耗症と申して一段と療治が難しく兎角中毒症に

陷り易いのです。

しかし餘り詳しく病氣の事を申した處で、素人の方にはお役にも立ちませんから醫者のやるべき難しい治療法などは一切拔きにして、只斯樣な事になつたらば一日も早く專門の小兒科醫にお委せになる事を御勸め申して置きまして、これからは斯樣な場合病氣の始めに母親の採るべき處置、並びにそれよりも一歩進んで病氣に罹らぬための豫防法に就て申述べる事にいたしませう。

今迄丈夫であつた子供が、乳を吐いたり下痢をしたりしたならば、第一番にこれまでの牛乳をやめる事です。一切牛乳をやめて絕食にせぬまでも、少なくとも牛乳の量を半分以下に減らし、しかも其の濃度も半減する。此の際忘れてならぬ事は、乳が行かぬと渇きますから淡いお香茶や白湯の樣なものを與へる事です。之は生物に取つて最も大切な水分の不足せぬ樣にするためで治療上からも重要な事です。斯うして置いて成るべく早く專門の醫師を訪ね其の意見を聞く樣になさるがよろしい。

少し手重くなりますと自宅では治療の出來ぬ場合が多いですから病院に入れる事を躊躇せぬ樣にして欲しいです。

何の病氣でも左樣ですが醫學の最終の目的は病氣を未然に防ぐ事です。殊に牛乳兒の消化不良症の樣に治療の困難なものは特に此の點に注意を要すると思ひます。

病氣の豫防には申すまでもなく原因に向つて備へねばなりません。處で牛乳兒の消化不良症の原因は大體に於て前に述べました樣に(一)牛乳が惡いか(二)牛乳の飲ませ方が惡いか(三)生來體質が虛弱なためか或は何かの病後で身體が弱つてゐた爲か(四)感冒其他の病氣から誘發されるか、であります。從つてそれに對して順を逐ふて申します。

第二　牛乳に對する注意

其の子供に一番適した母乳を何かの事由で斷めて、牛乳で養ふ以上、牛乳に對する注意は第一に大切な事です、乳兒の唯一の食物である牛乳が惡くては仕方がありません。處が未だ現今の日本では牛乳の配給に就ては、甚だ不完全で一般に臺所で用ゐる料理用牛乳と、母乳の代りに赤ん坊にやるべき牛乳の區別すらもない、小兒牛乳などと申して居るものでも遺憾ながら安心して用ゐる譯には行きません。甚しいのになるとクリームを取り去つた脫脂乳

を小兒牛乳として賣りつけるものさへある。成程脱脂乳は時には病氣の子供に限り治療食として用ゐる場合が無いではないが、バタを作つた殘渣の脱脂乳を高價な小兒乳として賣る商人の奸策に至つては唯あきれるより外ありません。

斯樣な譯で、どうしても採取法、消毒法共に完全と申されぬ現今の牛乳を以て子供を育てる以上は常に其の覺悟を以て出來得る限りの注意を以てするより外はありません。

第一注意は出來る限り新鮮な内に用ゐる事と、家庭で完全に——消毒を行ふ事です。腐らぬ牛乳などと申すものがあればそれは以ての外です。食物は一般に新鮮でなければなりません。また田舍などで牛乳の得られぬ樣な場合には一層の事よい粉末牛乳の樣なものを用ゐた方がよろしからうと思ひます。

消毒法は完全にすればソクスレット氏牛乳消毒器を用ゐ、且冷藏庫に貯へればそれに越した事は無いですが、どの家庭でも出來る消毒法としては、牛乳が配達されたら成るべく早くに、瓶ごと御飯蒸しか、鍋の樣なものに入れて、煮ることです。大抵栓をした儘でも瓶と栓との間に多少の隙間があるから、大丈夫破裂する樣な事はありません。そして沸騰してから五分——十分位煮ますと中の牛乳は消毒出來ます。それからそれを冷い處に貯へて置くのですがそれも成るべく早く用ゐて、朝のものは夕方の配達のある前に處分して仕舞ふ樣にする。殘つたら料理の方にでもまはして赤ん坊には飲ませぬがよい。

牛乳を冷して置くには冷藏庫が一番よいが其他冷水中に入れて置く等の方法の外に次の樣な事も簡單で割合に効果があると思ひます。それは圖の樣に（本文末に挿圖あり）乳牛の瓶に一ぱいに被さる樣な細長い袋（木綿）を作り、それを被せた儘淺い水をいれた容器の上に牛乳瓶を立てゝ、それを風通しのよい日陰の場所に置きます。すると布は水を吸ひ上げて絶えず濡れて居るが、それがまた絶えず蒸發して行くので、其の際に水が水蒸氣になる時に要る蒸發熱を奪つて行くから牛乳瓶は常に冷却される。それが忽ち生ぬるくなる水の中に入れて置いて水換へを無精にするよりは遙に效果があります。

尚牛乳を用ゐる時には、しばらく時を經たものは一度さつと鍋で煮ますと、酸敗したものは凝固しますからわかります。重湯などを混ぜたものは腐り易い故貯藏出來ませんから用ゐる前に混ぜる方がよろしい。また夜中は此

る可く乳を飲ませぬ樣に習慣をつけて已むを得なければ甘味をつけた香茶位でだます樣にして欲しい。

第二に牛乳の飲み過ぎを注意しなければいけません。誰でも大人や少し大きな子供ならば暑い時に渇けば水を飮むことを知つてゐるが、赤ん坊に水をやる事を心懸ける人は少ない。之が母乳兒ならば少し位飮み過ぎても障らぬが、牛乳兒には一日五合（稀釋したものも同樣）以上の分量をやる事は危險です。それで一度に百八十瓦宛一日六回やるとすれば、其の間に欲しがつたら白湯か、或は香茶の淡いものを冷たくしてやる樣にします。

第三　體質の弱い子供

前述の樣にいくら注意をしても、性來虛弱な體質の子供は、中々この位の事では安全でない場合が多い。斯樣な子供を無事に夏を過させるには如何しても人乳による外はありません牛乳で育てゝ居て寒い間にも兎角下痢を起し易かつたり、瘦せて肥らぬ樣なお子さんには怖るべき消化不良症に罹らぬ間に乳母をつける方がよろしい。尤も乳母と言ふものは常分中々求め難いものではありますが、病氣にしてから病院に入れて非常な心配をする苦勞を思へば、乳母を探す方がまだ樂でせう。

よく子供の生み月が合はぬなどと申しますが、そんな事は大して心配ない事で、子供を生んでから拾月或は一年以内のものならば差支ない。年齡も餘り若くない方が子供の扱ひ方を知つてゐると言ふ位の事で格別大した差異はありません。それよりも其の乳母の子供が丈夫で居るか否かの方を注意し度い。乳母の子供が丈夫で育つてゐる事は其の乳の惡くない證據です、人乳の良否は他に見分ける方法がない、今の處では顯微鏡や化學的の檢査をしても殆ど意味がないと言つてもよろしい位です。

乳母の是非欲しい期間は四五月から八月一ぱい乃至九月まで位の處ですから事情によつては其の乳母の子供ごと賴む方が宜しいでせう。

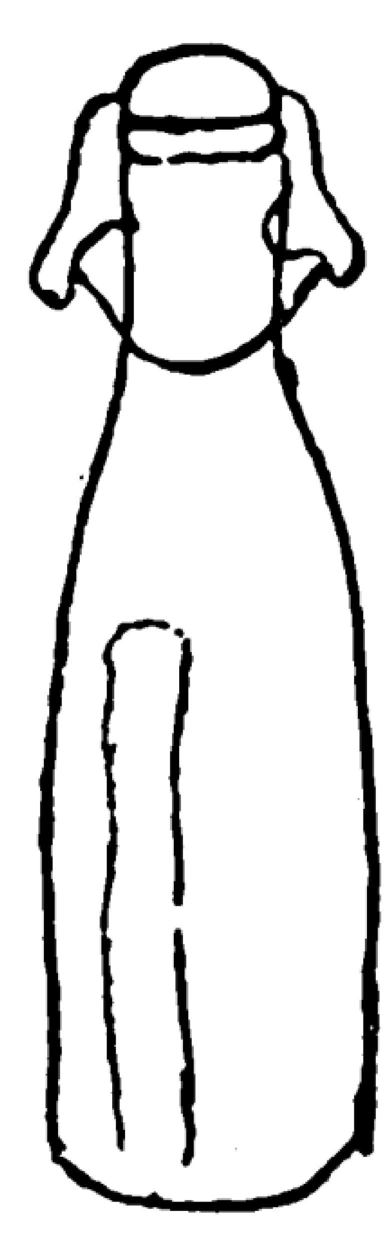
そこで申上げたい方法は混合榮養即ち人乳と牛乳と双方で育てる方法です。牛乳ばかりで弱い子供を育てる事は非常な困難ですが、この混合榮養の方になると著しく容易であります。と申すのは斯うしてあれば萬一消化不良症を起して來た場合に、先づ牛乳の方だけを全くやめて、人乳だけにする、不

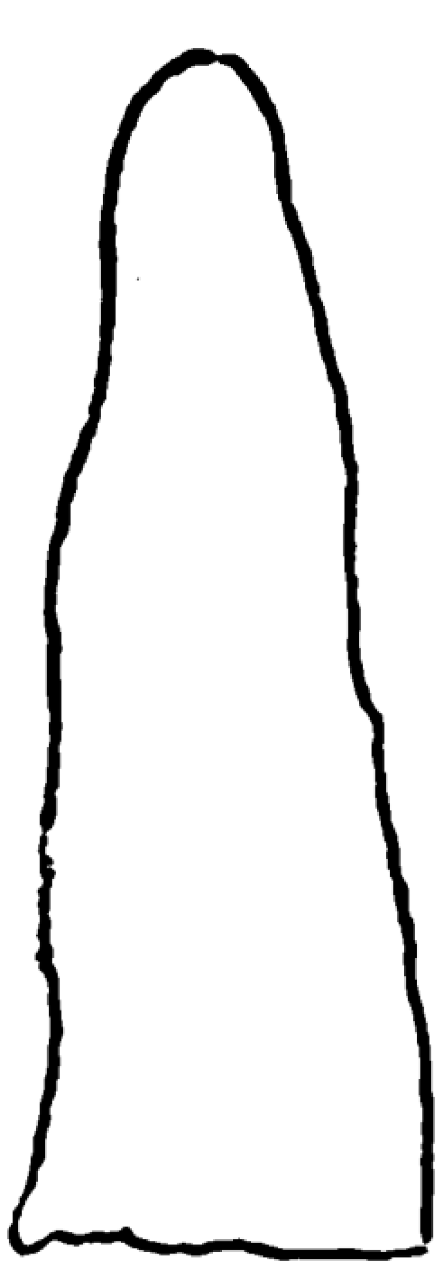
足な處は香茶でも飲まして置きます。左樣しますと牛乳と違つて消化のよい人乳のみを攝る事になりますのと、又一つには牛乳が減るので、即ち減食療法が行はれるので一寸位の下痢は忽ちやんで大事にならずに濟みます。

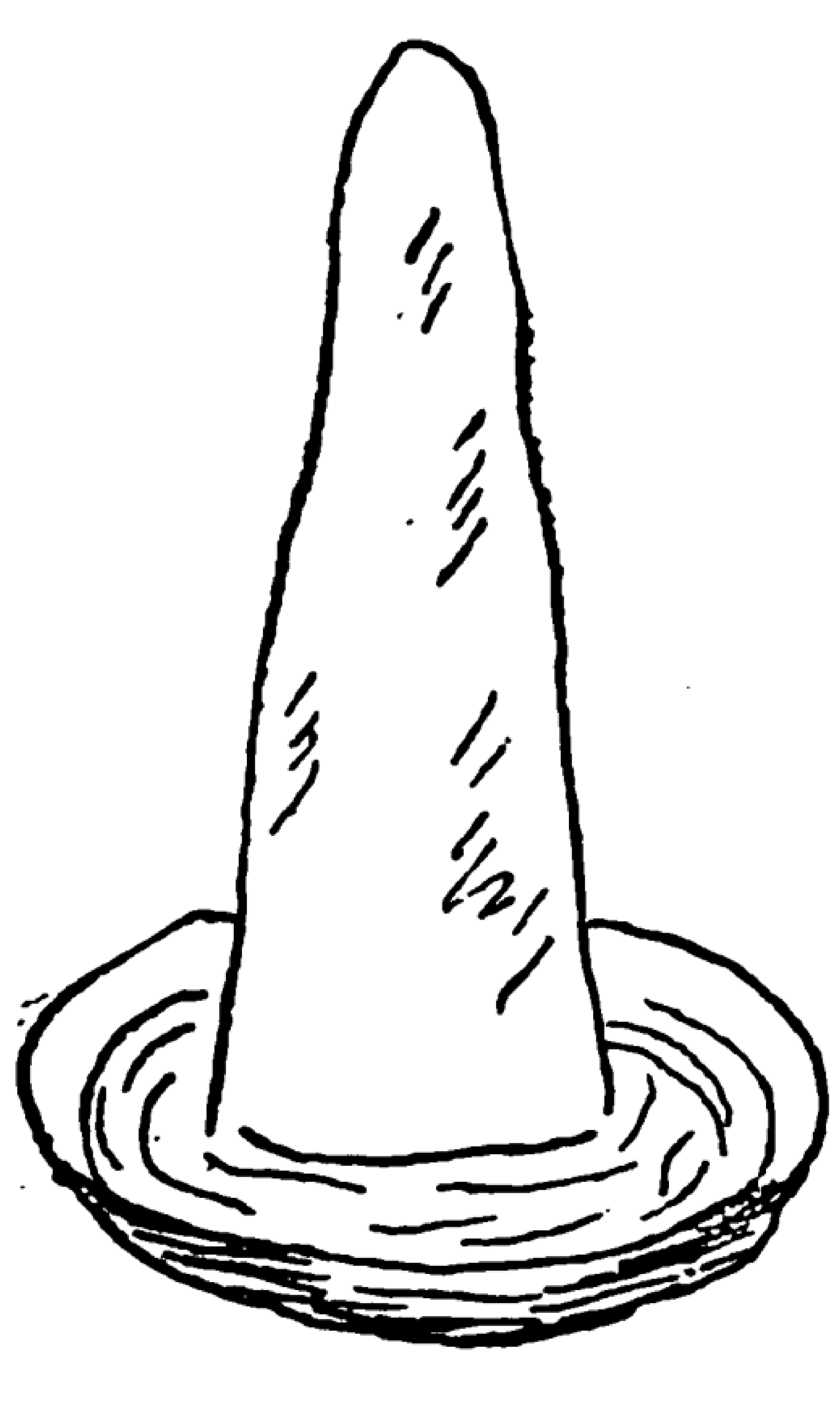
それで世の母樣方に御勸め申し度い事は萬一母乳が不足な時にも、決して面倒だから一層の事牛乳ばかりにしてなどと言ふ不量見を起さずに、出來得る限り母乳をやり、其の不足の分丈け牛乳をやる樣にして頂き度い。斯うして僅かでも母乳の出ると言ふ事は怖るべき消化不良症の脅威に對して千萬の味方になるものであるからです。尚又此の混合榮養の問題は將來益々增加する職業婦人の母となられた場合に頗る大切な事と考へますので、特に御注意を願ひ度いと存じます。

第四の消化不良症誘因となる色々の病氣に就ては夫々平素注意して、罹らぬ樣にし、また不幸にして罹患した場合には醫師と相談して消化不良を起さぬ樣豫め牛乳を減ずる等の注意を希望します。

以上は牛乳榮養兒に就てゞありますが、次には母乳の充分にある幸な赤さんの方を脅かす乳兒脚氣症と、幼年兒童に取つて一番怖れられてる赤痢疫痢に就ての御注意をいたしたいと思ひます。


牛乳瓶


木綿で作つた袋


牛乳瓶に袋をかぶせて、水を盛つた皿の上に立てた圖

此頃英國で流行する 面白い家庭遊戯色々

白井規矩郎

一口に家庭遊戯といふ中にも、全く小供許りで遊ぶものと、大供や、兩親まで伴侶になつて遊ぶことの出來るものとがあります。これはザット分類して見ますと、

　ゲーム、に屬するもの、
　鬼ごと及び謎の遊び、
　智慧くらべ、(數學や理化學等に屬するもの)

となりますが、其中でゲームに屬しますものは、多少運動にもなりますし、若いものでも老人でも出來ますので、偶には小供の友達となつて一家團欒無邪氣に遊ぶのも、若い氣分を保つ上に極めて良からうと思ひます。

昨年末龍動でペルシウハル氏が出版された室内遊戯の中から我が家庭でも出來る珍らしさうなゲームを少々御目に掛けませう。

ピン、ゲーム

活潑にやれば中々面白い遊びで、六七歳の小供でも五六十歳の大供でも差支ない。又相手は幾人でも出來る。ピン、ゲームといつても別にピンが入用といふのではないので、事は至極簡單です。

幾人でも宜しい。先づ爐の周圍に坐つて(何も爐が必要ではないので、全體が圓い形に坐ればよい)誰でもよい其中の一人が一と數へる。次の人は二と數へ其次は三と數へる樣にして、順々にぐる／＼數へ送つて始めの人へ戻つたら、又次につづけて百を數へるまでつゞける。是れだけでは別に何の事もないのですが、それを次の通りに行ふので興味が出て來るのです。

　それは一二三四五六と數へ送つて、次の七の數を云ふ人は、七といはないでピンといふのです。其次は八九十と普通に數へるので、又十四に中つたものは、數を云はないでピンの二と云ふ樣にして、何んでも七や七の倍數には凡てピンといふのです。二十一はピンの三、二十八はピンの四、四十九はピンのピン、七十はピンの十で、是を誤つたものは伴侶から省く樣にして、終りまで省かれないものが勝となる。數

へるには成るべく速くして一秒間でも考へない様にする、一つ行つて御覧なさると、どんなに間違ひ易い遊戯だかゞ能く分ります。

盲の羽根つき

此は少し廣い室でないと出來ない遊びですが、食後の運動や雨天つゞきで退屈の時などには宜しいです。盲といつても目を隠す譯ではなく、室の中央へ敷布か大きな紙の様なものを吊して、其兩方に居て追羽根をするので、對手は見えないが羽根は氣儘に敷布を越えて飛んで來るのを衝き返すので、始めて見ると中々面白い遊びです。

眞直な線

是は男の子に適したゲームです。其方法は至極簡單一本の白墨さへあればよい。之れを右手で取り、起て前へ屈んで右手を右足の後へ廻し、兩足の間へ入れる、此の位置で白墨で左から右へと一線を畫くので、最も長く最も眞直に線を畫いたものが勝となるのです。

甘い調子

是は容易い様で一寸六ケ敷い遊びである。先づ手拭を紐の様に細く巻いて（細い紐でもよい）平かに疊の上へ一線に置く、其線の上に兩足をそろへて起つのであるが、體は左なり右なりの片足で支へて居る様にする、線から二尺五六寸先きに、マッチ箱なりゴム毬なりを置く。技者は一方の浮してある足で其箱なり毬なり蹴つて直ちに線上に兩足をそろへて起つのである。

此は箱なり毬なりを遠くへ蹴り投るのが勝なのではなく、成るべく線より遠くへ置いた物を蹴つて元の通りに兩足をそろへて起つのが勝なのである。

此は大人が行つても中々面白い遊戯です。

胡桃と山査子

此は日本の兒捕ろ遊びに似て居るか、少し違つた處がある。先づ多數の小供を兩側に分けて、何れの側も手を繋ぎ合ひ、兩側は向ひ合つて立つ。兩側の人數なり年齢なりが平均する様に分けて置く、向ひ合つた兩方の列は先づ次の歌を歌ひます。

（一）胡桃と山査子とりにきた
胡桃と山査子さんさしくるみ
胡桃と山査子とりにきた
取ればあげよとれますか。

（二）誰に胡桃をとらせよか
胡桃と山査子さんさしくるみ
誰に山査子とらせよか

とればあげよとれますか。歌ひ終つたら一方の側で、他の側の一人を撰んで、Aチヤンに胡桃を上げようかと問ふと、Aチヤンは胡桃側に向つて、それではBチヤンを下さいといふ。さうすると此のAとBと二人兩側の眞中に出て互に引張りこをして、負けたものは勝つた人の側に這入るので、一勝敗終れば又前の歌を歌つて、今度は他の側からCチヤンに山査子を上げやうかと云ふ様にして前の通り二人で引張りこをする、勿論最後に人數の減つた方が負となります。

僕の小犬

小供達は幾人でも圓形になつてお坐りなさい。それから一人の子供は手に手巾を振りながら其圓の周圍を廻つて「僕は小犬を持つて居る、犬は君達に噛み付かない、A君にもB君にも噛み付かない」と云つてゐて突然ソラ君に噛付くと云つて一人の仲間の膝の上へ其手巾を落す、二人とも圓の周圍を廻つて（それは兩人が同じ方向へ廻つても亦た反對の方向でも差支へない）落したものに自分の居た席を奪れない中に、戻らなければ、其人が代つて手巾振りとなり又た始めの様に行ふのである。

盆廻はし

是れは多人數ほど面白い。幾人でも遊び手は圓く坐つて其の中の一人は盆なり木皿なりを以て圓の中に起つ。周圍のものは何れも帽子とか手袋とか、茶碗とか花瓶とか、品物の名前をつけて置く、ソコデ中の一人が持つて居る盆なり木皿なりを廻しながら（此の廻し方はドンナ仕方でもよい）帽子君とか花瓶君とか呼ぶと、其呼ばれたものは廻つて居る盆の落ちない中に席から起つて行つて其盆を捕へる、甘く捕へたときは交代して盆廻しとなれる（前の盆廻しは代つて圓の一人となり何とか品物の名前を付ける）若し捕へ損じれば又元の席に歸つて始めから行ふのだが、盆廻しは又時々不意に「片付けツ」と云ふので、此時は圓のものは總立になつて、早く一列に眞直ぐに並ぶので、その列の最後になつたものは相當の所罰を蒙つた上、盆廻しとなつて又始めから行ふと云ふ様になる。

指環の行方

此は一寸道具が入用ですが、誰にでも又幾人でも出來て面白い遊戯です。

幾人でもよろしいから圓形に坐つて、細い丈夫な糸で輪を造ります。これは圓になつて居る人が皆で其糸へ兩

手を樂に掛けられる大きさにする、此糸へ前以て一つの指環なり窓掛に使ふ小さな鐶なりを通して置くのです。そして伴侶の一人は圓の中に立つて其指環が誰の手許にあるかを中てるので、又た圓のものは絶えず糸に通つて居る指環を右の手から左手へ、左手から隣の人の右手へと送るので、指環の廻つて來ないものも總て一樣に右手から左手へと恰も指環のある樣に動かして居ます。中に立つものは注意して誰れと指名したとき、其指名されたものは直ぐに兩手を開いて見せるので、中れば中の人と交代して起ち、中らなければ又、前の樣につゞけるので手を揃へて動かすと中々面白い、中には隣から指環が來ても知らないで送り損ずるなどの座興も出て來ます。これは又た

右か左かお隣か、指環轉々どの手
に御座る、

と調子づけて歌ひながら行ふのも一興です。

お盆へ風船

これには玩具店にある風船玉を用ゐます。先づ部屋の一方の隅へ盆なり籠なりを置いて、遊び手は其反對の隅に起ち、順番を定めて一人づゝ其風船を片手で衝くなり投げるなりして、其盆の上へ置く樣にするので、決して兩手を使つてはならないのです。置くべき番へ屆かなかつたり、行過ぎたりすれば仕直しもよろしいが、成るべく速かに僅かの回數で載せたものが勝利なのです。

風船レース

是も前と同じ風船玉を用ゐるのですが、其仕方は「卵子とスプーン」の競爭に似て居ます。併し行つて見ると卵子のよりは六ケ敷いので、風船を十分に膨らして大形の匙子の上に載せ一定の場處へ走り着くので、若し途中で落しても決して手で受けないで、一切匙子でする處に興味があります。若し廣い緣側などでゞも同時に行ふことが出來れば一層興味がありませう。英國では兩親や老人なども小供と一處に能く此遊びをしますが、匙子の代りに御飯杓子を使つても面白いでせう。

オーストリヤの子供の繪を見て

森谷延雄

子供の繪は面白いですねと云ふ事は良く聞く事ですが、子供の繪が帝展のだれ〱の繪よりも良いですね、と云ふ事は聞いた事はありません。良いとか惡いとかと云ふ眞面から子供の繪を批評せずにたゞ面白いとか面白くないとか云ふ玩弄的の立場のみで之れを批判する事はほんとに私には贊成出來ない事なのです。

大人の作つた作品ばかりが藝術品で小供の作つた作品が藝術品でないと云ふ理由が存在するなればいさ知らず、大人と小供と云ふ差別だけで其の作品を一段低い眼でしかも玩弄的に解釋する事は小供を大人が侮蔑し切つた事で實はつゝしまなければ成らない事なのです。小供は大人よりも書き方（技巧）が下手であるとか、其の作品に當り外れがある等と云ふ事を理由にしたり小供よりも大人が平均して智的に威いとか、『小供なんかに』など〻云ふ先入主からたゞ理もなく一段下手に眺める習慣は女性と男性の權威を區別して云々するのと一向變つた處がない。



十歳の子供の繪（第一圖）

◇技巧は一つの方便で藝術ではない、作品の當り外れは大人にもあり得る事で當り外れがあつたとて其の作品の價値には少しも疵が付かないのです。小供より大人が偉くても其れは書き手の話で其の作品の事ではないのはどなたでもお承認下されるでせう。



（第二圖）　十四歳の女兒の繪

と、かう考へると其の作品は立派に同じ藝術品として大人のそれと同等に論じ得、同等に權威を覇持すべきものであると信じない理には參りますまい。

ほんとに小供の繪は大人の繪と同樣に同じ立派な藝術品で、クレヨン畫の一枚は六枚屛風の一雙と藝術的價値を同じうすると考へて差支ありません。

◇日本の子供のクレヨン畫の内から立派な作品を撰び出す事が出來るやうに、それは他の彫刻にも詩にも立派なのがある事は改めて申上げる必要がありませんが。

外國の子供、特に私が見たものゝ内オーストリヤの小供の繪に面白くしかも立派な作品を見出す事の出來た過去をこゝに回想しその喜びを御わかち致し度いのです。

もう三四年前の事に成りますがロンドン市のナイトブリツヂ（サウスケンシントンの近く）で戰後のオーストリヤの子供を救濟する爲めの展覽會ですが、

ヴヰンの小學校の生徒が書いた畫ばかりでした、餘り立派なので初めはにわかに信じられなかつた程です。こゝに圖に示したものは其のほんの一部分ですが第一圖並に第二圖は前者が十才後者が十四才の小供(滿)が書いたのです、ヴヰン工藝美術學校のチゼツク教授の受持の女生徒です、其の配色とか構圖とかは一寸日本の生徒とは少しく異なつた點が見出されます、特に第二圖(水彩)は比常に立派な作で少しも非點を見出す事が出來ないのです。

小箪笥の前で朝子供が下着を付けてをる處です、赤い人形の、ベッドにかわゆい人形が寢てをる處から花瓶に花が盛られてをる邊は大變子供の氣持を表はし、大きく茶色の箪笥が水平に引かれた平行線で統一を保ち左足に履かせた靴の黑い色と靴下のさがつた處から右方の足と調子を破つた、氣のきゝ方、玩具の配置は子供の術とは思はれない位立派です、しかも其の手法に表はれた小供らしい感と其の材圖は大人の絶對に侵し能はざる程度の境地を確保しておるではありませんか。

第三、四圖は矢張り十四歳の女生徒であつたと記憶してをります、聖母マリヤを表はしたもので前者は木版印刷で大いさは一尺二三寸角です、聖母の頭部を頂點にした正三角形の構軸と天使の左右對照並に黑と白との量並に其の配分は之れ又立派な藝術品です。

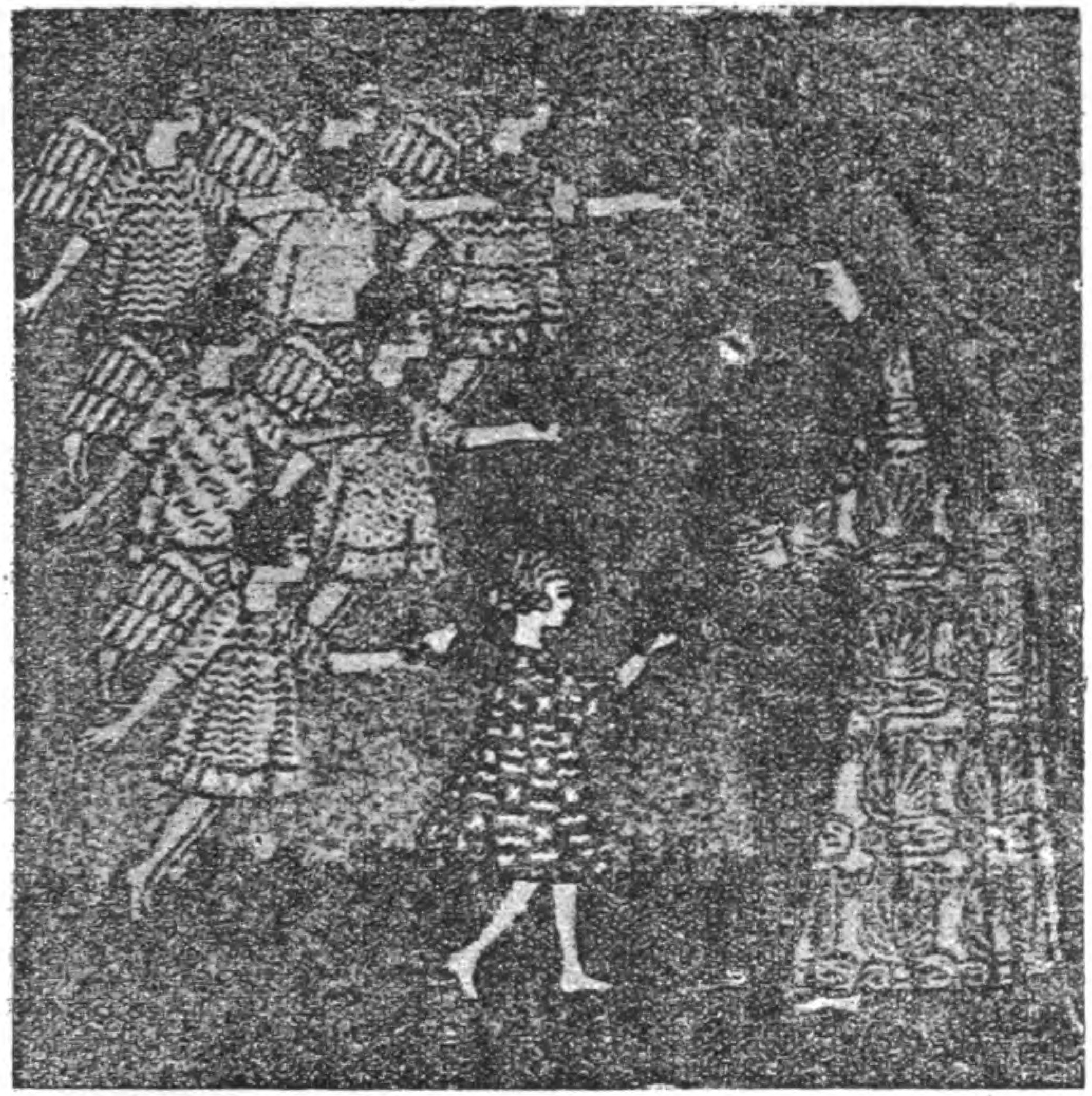
後者は豫め背景をガツシ(水性不透明繪具)で作つた上



(第三圖) 十四歳の女兒の繪

に色紙を切つて貼り付けたのです、そして丁寧に後から同じガツシで補筆したものでした。

クレヨン畫は記憶に殘つてをりませんがこの色紙を利用した模樣や、普通のペン先の五六倍の太さで墨一色で畫いたもの等に仲々良いものが見られました、クリスマスの晩に玩具を山程戴き度い希望や、人形と一共に野原で平和に寢てゐる圖、戰死者の墓に數名の天使が翼を休めて默禱してゐる處等は今も猶記憶に新たなものがあります



（第四圖）　十四歳の女兒の繪

◇

子供の圖を其の儘其の子供の手で木版を彫り、其の子の希望のまゝに印刷をする術と其れから生れ出る藝の子供に及ぼす教育的價値、其の畫いた繪に相應した木製の額緣を子供自身で製作したり、或は畫いた結果を他の工藝品等に結び付ける仕事が子供の頭腦に美の普遍性を理解せしめたりする價値は非常に大きい又必要な事ではないかと考へられずには居られません。

クレヨン、クレヨンとクレヨンに了らしめず、廣い材料とそして遍せない指導に依つて、より良い藝の理解と其の必要を說く事を敢て、學校と家庭の母人にお推め致します。

小供、小供、小供の繪には其の寫實技巧のプリミテイブから自ら過去の寫實即藝の繪畫の定義を離れ、其處に表現主義的意義を生み其の理由のもとに近時の流行を來してをると云ふ眞意をも付け加へておく必要があると存じます。

讀者欄

道を忘れた小雀

竹内たに子

一

道を忘れた小雀一人チッチ
右は谷川左は峠チッチ
赤い夕日の沈む頃チッチ
向ふに見えるは空ばかりチッチ
空にチラ〳〵星が出るチッチ

これは葛原𦱳先生の作であります。私は大變に此のうたが好きです。歌詞の方にやゝセンチメンタルな所がないではありませんが、梁田貞先生の作曲は殆んどそのセンチメンタルを消して快活な、子供らしいものにして居ます。

先日私は此のうたを何の躊躇もなく、今年五つになる長男に敎へました。彼は、「もしもし龜よ。」や、「お月さまほしさま。」の在來の童謡よりは大變に喜んでじきに覺えてしまひました。（私は彼が三ツの頃から、或は私がうたつたり、或はヴアイオリンでメロデーだけをきかせたり敎へたりして居ました。そしてそれが思つたよりも幼兒敎育にいゝ結果を殘して居るのも充分自信を持つて居ます。）やがて彼が大方覺えてしまつた時、「坊や、小雀は道を忘れてしまつてどうしたでせう？」と問ひました。夜でした。電燈の下でゝした。彼は僅かの間口をつぐんだまゝ考へて居ましたが、その表情は刻々に變つて來ました。そしてやがてとう〳〵泣き出しました。私は全く面喰ひました。何故泣き出したのかとそれも不思議でなりませんでした。勿論泣き出した彼にいくらその理由を尋ねたつて彼が答へる筈はありません。

その翌日私はもう一度昨夜のうたをうたつて彼にきかせ樣としました。が彼は私が、「道を忘れた。」とそれだけうたひ出した時、「母ちやん、もう嫌、そのうたは、——」と言つてにげ出しました。私は愈々彼の心地をはつきりと知ることが出來ました。彼には小雀の難儀が自分のことのやうに思はれたのでせう。同情のあまり到底歌ふに堪へられないのでせう。他の子供が泣くのをきいて泣き出したり、小犬が泣くのをきいて怖い表情に變つたりした彼ですから。（がこれは只だ私の長男に限つたことではなく、どの子供にも有りがちのことです。）

私はあのうたが大變好きでした。けれ共彼には堪へられないうたでした。

「大人は子供の成長したものではない。それは全々別ものだ、」

誰かの言葉がはつきり私には了解されました。そして今迄私の心のみによつて、大人の心のみによつて、子供を育てゝ來たことが取りかへしのつかないことに思はれて來まし

た。何と言ふ恐ろしいことでしたらう。私には母の尊稱は受けて居ても子供を理解して居なかつたのでした。

二

が、私は又考へました。

「私一人ぢやない。世の大方の母は大抵私のやうだ。」

それは決して負けおしみや辯解ではありません。我子の教育にあたつて、負けおしみや辯解を言つた所で何になりませう。

が更に次にはさう思ふことが正しければ正しい程私は恐ろしくなりました。世の殆んど總ての母親が私のやうであつたら、かうした兒童性の虐待も亦世の殆んど總てに存在して居ることになります。何と言ふ恐ろしいことでせう。

「子供は無邪氣だ。」「子供は邪がない。」「子供は天眞爛漫だ。」……かうした言葉は耳にたこがあたる程きいて居ます。若しそれが彼等の心からの叫びであつたならば、兒童性は彼等にも認められ、そして兒童性の虐待も行はれなかつた筈です。が兒童性は決して虐待されてゐなかつた。兒童性は充分認められ、そして育くまれて居たと誰が言ひ切り得るでせう。世の親たちが言つて居た、「子供は無邪氣だ。」……は總て嘘であつたのでした。心からの叫びではなかつたのでした。

兒童は空想の世界に遊んで居ます。そして自由の翼に乘つて飛んで居ます。彼等の生活は本能のみに支配されて居ます。それが子供です。花が散つては死を思ひ、行爲の裏には名譽と金とが必ず伴ふ大人の生活とは天地の違ひよりもまだ大きいものでありませう。

私は私の今迄の考へがあまりにも誤まつて居たのを恥かしく思はずには居られません。そしてその誤つた考から生れ出た方法が如何なる結果を生むかに考へ及ぶ時、恐ろしさに身ぶるひせずには居られません。

それについても思ひ出すのは、

「現在を以て、不確實の未來の犧牲となし、恐らくは享樂し能はざる將來の假想的幸福の準備として兒童を束縛し且つ是れを苦しめるが如き野蠻の教育法なり。」

と喝破したルソーの言葉であります。

三

何とよく私たち因襲的の考を持つて居る者に對する痛棒ではありませんか。私たちが子供に對する方法は總て此の野蠻たる教育法に外なりません。みんな私の行つて來た教育は、「恐らくは享樂し能はざる將來の假想的幸福の準備。」でありました。三つにもなると、もう「客があつたらいらつしやいを言ふんですよ。」と教へました。子供がまはらぬ舌をもつらせながら教へた通りにすると、「客は、坊つちやんはおりこうね―。」とほめてくれます。その賞讚の言葉にどれ程得意を感じたことでせう。子供は私を喜ばせる玩具ではなかつたでせうか? ほんとうに恥かしい私でした。

さうした大人にのみ必要な禮儀が子供にも無くてはならないものだとはどうしても考へられません。かうして私が施した教育はみんな子供の心を無視したものばかりでした。そして大人になつてからの準備ばかりでした。それも子供がよろこんでするものな

らばいゝけれ共、大して興味も持たないことでも私は注入して來ました

恐ろしい言葉ではありますが、又ルーソーばから言つて居るではありませんか。

「總ての事物は造物主の手より出づる時は善なれ共、人の手に於てことごとく墮落す。人は強ひて或土地に他の土地の產物を生ぜしめんとし、一の木に他の木の果物を實らせんとす。人は總てを畸型とし總てを怪物となし、一も自然のまゝなるを欲せず、」

これを要するにルーソーは放任主義を說いて居るのでありませう。總てを有りのまゝにおくと言ふのでせう。私は此の思想にも私の偏見を見せつけられるやうな強い痛棒を感じます。けれ共子供をその世界に自由に發育させると言ふのと放任しておくと言ふのとは、そこに少しの差異を認めずには居られません。彼等を自由に生活させると言ふのには少しも異存はありませんが、しかし放任しておくのには異存があります。それならば全然教育の必要はないと言ふことになりますから。或はこれは私の捕はれたる考へかも知れませんが母親がその子供に對して全々教育の必要はないとは考へられません。

ルーソーは私に大きな、大切なことを教へてくれました。けれ共私はルーソーの教育說なり人生觀なりをそのまゝ無條件で受けいれることは出來ません。

四

ルーソーの教育說は、その著エミールによつて知ることが出來ます。

「エミール」の中には、エミールが生れてから結婚するまでの間を五卷に分けて、その教育法を解いて居ます。以上述べて來た所によつて自然主義と個人主義とで一貫して居るのは言ふまでもありません。が書中彼ルーソーが直感、體驗を重んじて居るのは私が大いに教へられた所であります。直感と體驗、それによつて得たもの程正確で確實なものはありますまい。

私はこゝで、私の行ふべき教育を述べる時に到着しました。ルーソーが說いて居る通り先づ施されねばならないのは體育でありませう。それは決して兒童性を無視したものではあるまいと思ひます。彼等は活動を好むものですから。遊戲。それが幼年の仕事の總てであつていゝと思ひます、次には五感の修練、これもルーソーが言つて居ることであります。そのために唄ふことも踊ることも描くことも必要になつて來ます。只だ注意しなければならぬのは子供的であること、注入であつてはならぬことです。

是れだけで主としてその子供が小學校へ入るまでの教育は充分だと思ひます。その他のことは總て子供の要求に從ふ外はありますまい。そしてそれ等が大人になつてからの準備ではなく、子供自身現在の快樂でなければならないのは言ふまでもありません。

私はかうした考が空論に終つてはならないと、今その實行を急いで居ります。唱歌は子供の情操陶冶には最もいゝものであると信じて居ます。だからその材料の選擇に注意して居ります。子供の心に暗い影をなげるやうなものは、「小雀の唄」でこり〳〵致しました。そしてたへず私は子供のいゝお友達でありたいと心掛けて居ます。ルーソーの教育說に負ふ所が多かつたのでこれを書きました

新舊支那婦人界の近況

＝大家族主義より自由主義へ＝

宮野千代

直子様——

筆不性の私がいつまでも御無沙汰をして居りますので、さぞや放たれた鳥の様に故郷を忘れて了まつたのだと思召して居られるでせう。許して下さい、決して友を忘れ、故郷を忘れて居る譯ではありませんでしたが、もういつか北大連に來て四たび月がかはりました。

それに就いてお耳に入れたいお話も澤山ありますが、先づ第一信として、支那の女はどんなことをして一生を終るかに就いてお知らせする爲め、今中華民國人間に起つてゐる家庭問題を申上げませう。

其一つは蓄妾問題、今一つは結婚問題、此二問題は新しい教育を受けた所謂目覺めた青年男女の間に大きな渦巻をして流れてゐる二つの大きな思潮で、古い儒教主義に虐げられた人生觀を叩き壊して、自己に目覺めた人間的意義ある生活に入らうとする文化運動であります。

◇

第一に蓄妾問題から申しますと、支那人は妾を置くことを恥と思つてゐません。日本でも最近まではさうでしたが、支那の社會や家庭では道德が許してゐる立派な誇るべき事柄として居ります。此思想は儒教に起因して祖先崇拜に孫繁昌の大家族主義から出て居ります。論語にある『女、子なければ去る』といふ言葉は今に強い力をなして居ります。又男子正統主義ですから、何程女兒を澤山産んでも男兒が出來ねば何ともなりません。それで中華民國人は祖先の祭を盛大に行ふことを大きな名譽として、さうするには、何でも子孫を澤山作つて繁昌させねばならぬと言ふのです。斯ういふ理由から蓄妾が當然の事として是認されて居ります。

それでは妾になるには、どんな者が、どんな方法でなるかと申せば、それはやつぱり物質の缺乏者、貧乏人の娘が十二三歳から藝者に賣られ、客に見込まれて落籍されるものと、一つは桂庵のやうに姨太々＝妾と云ふことばです＝養成所があつて、それは大てい年取つた女がしてゐますが、其婆さんが見込ある貧乏人の娘を買つて行き、美しく磨き上げてそれぞれ姨太々に賣飛ばすのです。

今一つは直接談判で金持ちに見初められ、約束をきめて買はれて行きます。年頃は大てい十五歳から十六七八歳位まで、それから上は殆んどありません。蕾の花の年頃に連添ふ主人はと言へば大てい五十の坂を越えた六十前後の老人が普通です。祖父の樣な人に思想も合はず愛もなく身をまかす哀れな姨太々は

すべて賣買される商品で、人格などは絶對に認められて居りませんが、傳統的習慣に馴されて彼の女等は其處に何の不思議も抱きません。ですが此頃少し目覺めて來て『怎んなに澤山妾を置かれても不足は言はないから正夫人になりたい』など言つて居るのもあるさうです。蓄妾問題は是位にして、次に結婚問題に就いて申しませう。

◇

支那は度々申します通り儒家の敎によつて葬式と結婚を非常に盛にします。支那人は實によく働き、金儲けもしますが、それは結婚と葬式の爲めに働いて居ると言つてよい程です。そんな有樣ですから人生の一大事として結婚は實に盛大に行ひますが、其方法は實に人間の子を取扱つて居るとは思へないくらゐです。

先づ結婚に先立つて許婚をするのですが、七八歳で約束するのは遲い方で、普通四五歳から一二歳、もつと早いのは赤い鷄卵＝子供が產まれると七日以內に鷄卵を赤く染めて親族知人に送る風習があります＝を送つて後直ちに行はれるのもあります。甚だしいのになると『指腹』と云つて姙娠中にお腹の子供の婚約を定めて了ふ恐ろしく氣の早い親も珍しくあります。斯うして此の世の風にも觸れぬ內から定められた運命を持つて產れ出た女の兒は深窓の奧に育てられ、搖籃の時代は過ぎ、步み初めた幼兒も決して戶外には出されません、家族は致し方ありませんが、他の男と顏を合はせるやうなことは絶對にありません。けれども五つ六つの遊びたい盛りにふと行き逢ふ樣なことがあつてもそれが約婚の人である場合には、言葉もかけず挨拶もさせません、七つ八つにもなりましたら自分から面をそむけます。こんな年頃で無邪氣な幼兒が恥かしいと言ふ譯ではなく、さうした風習に染められて居るのでせうが、私たちにはまことに不思議に感ぜられます。

無邪氣に飛びはねて遊ぶことを止めるために七歳頃から纏足が初まります、足を小さくされて樂しい輕快な遊びも出來ず、可愛い蕾の幼兒は花ほころびて結婚の時期までを、成女のする樣な刺繡造花などの手藝、裁縫、彈琴、少し許りの漢文を敎へられて詩作などをする特志家もありますが、今日の自由敎育が本能に基づいて良習慣を築き上げて行かうとするやうな敎育思想は六神丸＝日本では輸入禁止になつてゐますが支那では有名な賣藥＝の粒程もありません。かうして幼い時からしひたげられて育ち十一歳位からそろそろ嫁入を初めて十七八歳位迄には全部行つてしまひますが、正夫人は嫁太々と遮つて大てい二三歳位年下か或は同年の男と結婚するのが普通です。

◇

さて盛な結婚式を舉げて太々（正夫人）になつてから如何するかと言ひますと、嫁入の際大てい侍女を連れて行きます。多いのは四五人もありますが、それらが自分の身の周りの事はしてくれます。洗濯、掃除は元より召使の仕事で、裁縫も裁縫師がします。料理は厨子といつて料理番がし、主人の世話は夫付きの召使がします。日本の樣に夫が命令的に太々の要事を申付けでもしようものなら、『私は貴郎の召使ではありません』

と直ぐ臥鐵砲が見舞はれます。總べてに家庭内では夫と同様の格式をもつてゐて、日本婦人のするやうな夫の世話などはしません。又一家の經濟は家長が持ち、子供は侍女が育てゝくれます。

　そんな女の仕事はないではなとかと言はれませう、實にさうです、何の責任もなければ任務もありません、只女が一生を通じての仕事は子供を生むだけです。此の大創造の爲めにすべての要求を許すといふ、實に女の大使命を認めた思想が昔は流れてゐたのかも知れませんが、現在では一般社會でも〻婦人自らも決してそんな理解や自覺をもつてゐる譯ではありません、只傳統的に、斯うして斯うあるのだといふだけですから、一家を統御して行く働きも、子供を教育する責任もなく、只樂しく遊んで暮せば宜いのです。或る意味の樂園と申せば、樂園でもありませうが。

◇

　安逸に消しむ時と日とを過すに打牌と云つて賭博があります。骨牌と云つて芝居見物があります。又お寺參りも彼の女達の行樂の一つです。

　此の三娛樂を簡單に説明致しますと、賭博は男女を問はず支那人の先天的嗜好で、其方法も中々進んで居り、種類も十七許りあります、法律的にも道德的にも決してそれを惡事と認めず、立派な交際の道具としておほびらで社交上に用ひられ、若しそれを知らないなどと云へば全く赤面の至りです。

　聽戯は支那人の芝居見物で、歌劇のやうに唱ふことが主ですからさう申しますがこれも盛んなもので、一寸人を饗應しても必ず芝居を見せます、大きな料理屋には必ず舞臺があつて宴會の後は芝居になります。それほど支那人は一般に芝居好で、これも日本の種思想の様に下等なことだなどとは思つてゐません。立派な淑女の娛樂です。

　寺參りも信心からとは違つて遊山的に出來てゐます。

　女はこんな遊びの外に彈琴、吟詩、簡單な囲碁などがあります。以前は喫煙といつて阿片を飲むことが大きな嗜好でありましたが今は禁ぜられてゐるので、刺繍造花裁縫などをする外は何時もかうして遊んで暮します。安逸に苦しむ様な生活をして表面から見れば支那婦人は世界一の幸福者ですが、それは人格を認められ又自己に生きた人間の幸福でなく、無智な玩弄物として又機械として取扱はれて居るうつろな幸福です。それを女は斯うしたものとして無智の諦めから傳統の檻に安住する正夫人や第二夫人第三婦人、第五第七甚だしきは三十人からの妾が同居して愛慾の爭鬪に瞋恚の焔を燃やし、多くの老若男女が滿たされざる或物を求めて淫蕩亂雜の風が吹き荒んでゐる支那の家庭は絶對秘密の迷宮で、目覺めた若い人々には牢獄にも見えませう。

◇

　斯ういふ無自覺な女の一生を悲しみ、人格を無視した結婚の弊を痛感した新しい人々の叫びは、戀愛中心の自由結婚であります。

　此頃支那新聞紙上には新舊思想の衝突から起る家庭の悲劇が毎日の様に出てゐます。其の著しい例の一つを擧いて見ますと、こゝ

に二人の男女がありました。男は北京大學生で女は女子高等師範の生徒でした、二人は想思の間柄で、結婚の許可を双方の父母に願ひ出ると、二人とも既にそれぞれ婚約の人があつて、それは絶對に許さるべくもありませんでした。遂に二人は各自の親の家に監禁せられましたが、怎うして道を開いたのか諜し合はせて家出をなし、墓地に行つて身體を結び合はせ縊死を遂げて居ました、之を知つた他の若い新しい男女は熱狂して、

『吾等の行くべき道はこれだ！　唯これのみだ…』と共鳴し讃美しました。そして北京大學の學生有志は二人の爲めに盛んな追悼會を行ひ、舊思想に向つて猛烈な反抗的氣勢を示しました。

こんな風に新しい人々には盛に自由結婚人格主義結婚を唱へられてゐますが、さて今日までのところ、斯うして舊思想に反逆した結果は大てい悲劇に終つてゐます。

兩親の許さない結婚をした人々の取るべき道は家を出るのですが、支那の風習として分家することは一家の不祥事として元より許されませんから、家出をしても生活の道が立ちません、之は日本などと國情が違つて就職の方法が父兄親族などの有力者の推選又は賄賂によつて出來るので、如何に本人に手腕があつても只それだけでは採用されません。籠から逃れ出た小鳥は直ちに斯ういふ社會組織の缺陷にぶつかつて餌をつひばむことが出來ません。此の點に打入つて舊思想は絶對權威を振はうとしますが、新しい人々は屈せず撓まず目覺ましい奮鬪を續けて居ます。

日本などにも前記の事柄に類した爭鬪は曾て存在し、現在も存在してゐますが、一般には舊思想の跋扈も支那程でないのと、社會組織が違つてゐてさう云ふ人でも救はれる道がある爲め現在の若い人々の樣に悲慘を極めた苦痛はありません。

そこで支那の新しい人々は文化運動の一つとして現在の社會組織を改造し、大家族主義の破壞に努めて居りますが、社會も家庭も總べて儒教から出てゐるので、これらの人々の猛々しい叫びは當然儒教排斥論になります。けれども支那から儒教を取り去れば、すべては無です。舊思想の人々から云へば暗黒の世界になるのですから舊い人々も必死になる筈です。こんな狀態で新舊思想の爭鬪は火花を散らした生々しい血を見る樣に益々はげしくなりつゝあります。若い人々は之と同時に蓄妾廢止妓女開放などの運動にも手をつけて目覺ましい奮鬪を續けて居ます。その實際の狀態に就ては、更に稿を改めてお知らせしたいと存じます。

編輯室より

讀者欄は各地方、各階級の婦人から隨意投稿を歡迎します。

それから本誌三月號に「農村の女性から都市の女性へ」の感想をお書きになつた河野久美子さん、御住所を至急お知らせ下さい。

臺所の科學

中村榮代

臺所の科學と云つても隨分廣汎に渉らねばならぬ問題ですが、玆では何處の家庭でも毎日主婦の手で繰返されてゐる煮物、燒物、蒸物、揚げ物などの調理上のことで、私達が毎日目に見ながらも一々の物理作用を理解しないために、經濟上にも大きな損害し、おまけに不味い料理を食べてゐるやうな愚かな眞似を少くするために、先づ一々の料理法と火力の關係について平易な家庭科學を話してみることにしました。先づ煮物の話から申上げませう。

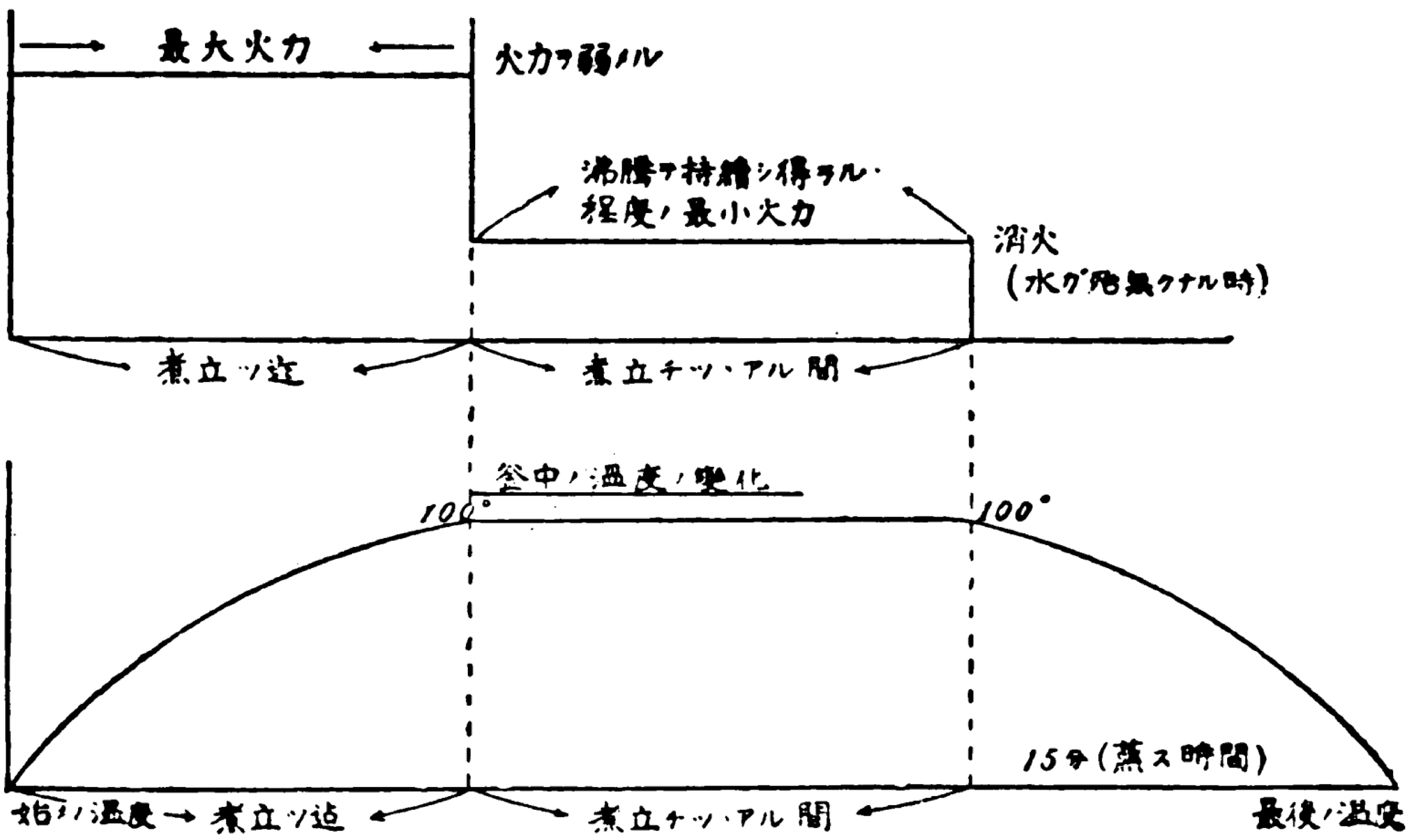
一　煮物について

水或は他の液體で物を煮ると云ふ事は加熱に依る液體の沸騰を利用することですが、

加熱される事に依つてだん／＼鍋の中の温度は上昇して、百度になつた時に所謂沸騰點に達します。（精密に云へば氣壓が七百六十粍の時に於て）

一度此の狀態になりましたらば周圍に放散される熱を補ふ程度に火力を弱くすべきものです。火を元の狀態でどん／＼燃して居つても、それは單に水分が蒸發する爲、卽ち湯氣となる爲の熱源となつて物を煮ると云ふ事の役目には少しも立ぬのであります。勿論汁を煮つめると云ふ時には別ですが此の注意を怠つて豆類を煮る時など幾度水をさし加へても軟くならぬと云ふ事を女中等が申しますが、火を強くして只水の蒸發を盛にしますと、その結果は水を早くなくなる割合に、豆は軟くならぬと云ふ事になるのは當然の話で、豆の合理的な煮方は始め百度になる迄は火力を最も強く致します。之れは熱量が無駄に放散する時間を少くする爲でありますが、一旦沸騰點に達した以上は、沸騰狀態が持續し得られる程度卽ち最小の火加減にして置きます。

火力の加減狀態



以上の理に依つて煮物をする時には、如何に火力を強くしても水分の有る間は決して百度以上になりませんから、此の意味で自然の恒温裝置を具したものとなり焦げると云ふ心配は無い事になりますこの應用でゆけば、「三度炊く飯も固く軟く」と皮肉られて居る御飯炊きも、ほゞ毎日同じ様な工合にゆくかと思はれます。先づ水加減は新米と舊米で幾分の差はありませうが、米一に對して水十二割と致します。

お釜を掛けたらば始めは火力を強くして、早く煮立つ狀態にして熱が外部に放散する時間を少くします。一度煮立つてからは其の狀態を持續し得られる程度に火力を弱め、殆ど水分がなくなつた頃からは煮ると云ふ事から燒くと云ふ手段に移るのでありますから、此の間が最も困難な時で、餘り早く火を引き過ぎては軟くなるし火力を元のまゝにして置く時は焦げてしまひますから此の間の呼吸をよく會得さへすればほゞ一定した御飯を炊く事が出來ると思ひます。上圖は火力と釜の中の温度變化の狀態を示したものであります。

二　蒸し物

茶椀蒸しをするとか、一寸子供に饅頭を蒸してやるとかする時、即ち蒸すと云ふのは料理法としては至極簡便で物理的には最も頭を使はぬ調理法かと思はれます。

蒸し器に入れた水が加熱され、漸次に温度が上昇して百度になり、其後は與へられた熱の爲に水は狀態變化を起して（即ち氣化して）湯氣となつて上に昇ります。此の昇つた湯

氣が材料に當つて其際に一グラムに就いて五百三十六カロリーの液化熱を放出しますが此の熱の爲に食品が煮えるので、換言すれば水蒸氣が液化する時に出す熱量を利用したのであります。

之れには火加減に依つて焦げると云ふ樣な心配は少しもなく出來上りも時間で豫定がつきますし、餘り仕損じのない料理法であります。

三　燒物

日本の在來の燒物は大方は片面宛熱する仕方であります。而もその材料の中に含まれて居る水分が熱せられてその熱をとられた水分に依つて食品が食せられる樣になるのであります。火にかけられた食品の表面は強く熱せられて水分は全部氣化して其有機物質が分解即ち焦げるといふ狀態になるのであります。例へば厚身の魚類等を燒く時、上面は空氣中に出て居りますから下面との温度の差はかなりに多く、下面は焦げる狀態にあつても尚上面には熱が傳はらぬ爲に生のまゝで居るのであります。

次にそれを裏がへして亦火に當るのですがその結果は表面はかなりに焦げる位になつて居ても中側が時々生である事はよく經驗いたす事でありますが、此の時新聞紙を一枚かぶせて外部に放散する熱を少くして燒くとその結果は案外によろしいのであります。此の例を見ても「テンピ」で物を燒く方が然料經濟上から見ても亦出來上りから見ても善い樣であります。此の料理法は火力に比例して温度が昇り從つて焦げ易いものであることに十分な注意を拂つて適當な火力を保たねばりません。

四　揚げ物について

揚げ物は前に述べた煮物とは大分其の趣が違つて居りまして、注意を要する點が燒物に似て居ります。

普通の料理書を見ると煮立つた油の中に投じ云々としてありますが、油の煮立つと云ふ言葉の意味が極めて曖昧だと思はれます。

油の沸騰點は油の種類に依つて多少の差はあつても、ほゞ三百度近くでありますが、それに食品を入れますと食品は見る間に所謂「狐色」を通りこして表面は黑焦げとなり而も中の方は未だ生のまゝで到底食膳に上す事の出來ぬものとなります。

通常水分の多いものは百八十度水分の少ないものは百二十度位の程度の油の中で揚げるのが適當の樣に思はれます。

食品を入れた時に「チユー」と泡を出して恰も沸騰したか

の様に思はれますのは食品中に含まれた水分が百度以上の油の中で急に氣化する爲であつてあれは決して油が煮立つのではありませぬ。

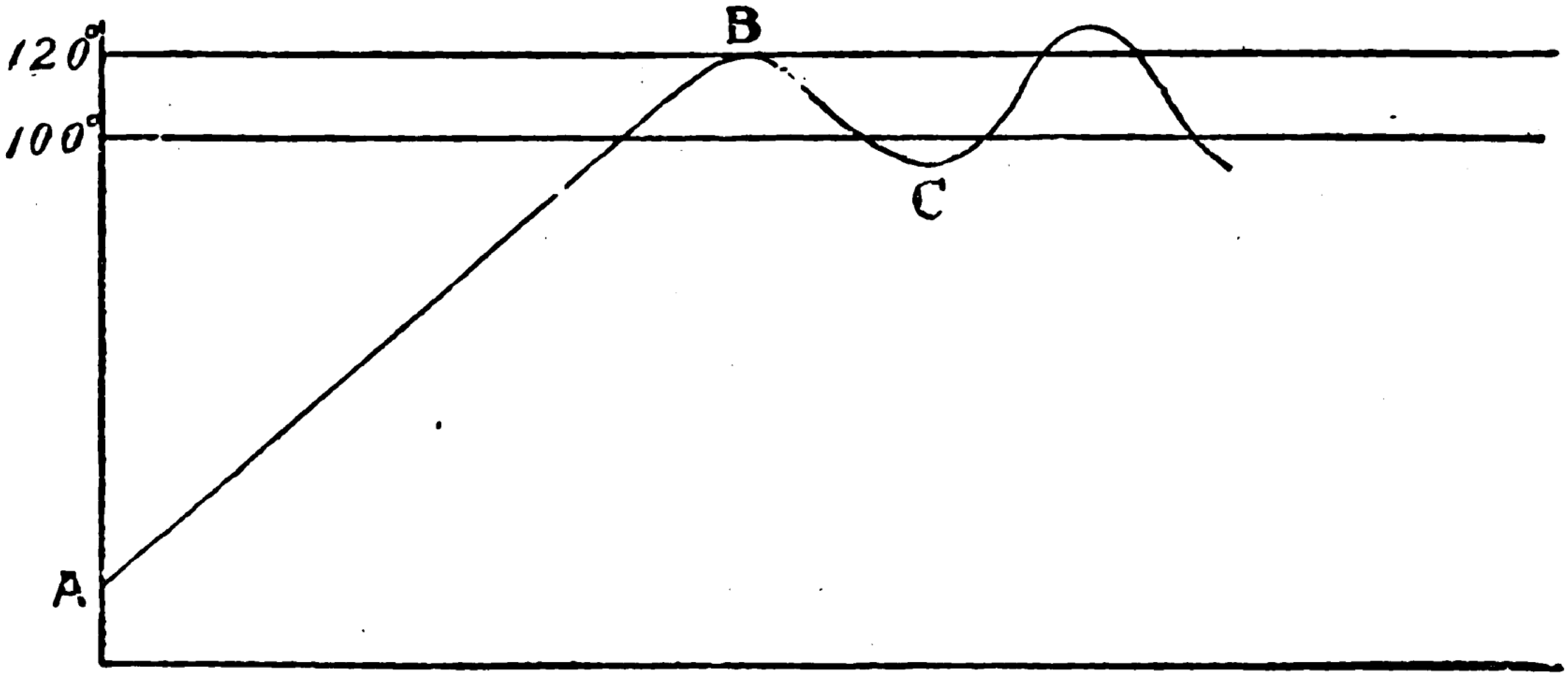
此の揚げ物の場合には恒温装置が附いて居りませんから出來上りを善くする爲め、必須條件である處の一定の温度を保つと云ふ事は大層困難であります。

油の温度は何に依つて高低するかと考へて見れば火加減に依る事は勿論入れる材料の分量と其の材料の含む水分の多少にも依ります。

何故なればそれに含まれた水分の蒸發氣化の爲に奪はれる熱の爲に、鍋の中の温度は思ひの外に降下しますから水分の多いものを特に多く入れた時には油の温度は食物が煮える温度よりもはるか以下の温度になりますから、此の低温の狀態が長く續きます事は云ふまでもなく出來上りの食品の味と體裁を惡くすることです。

如何にすれば合理的な揚げ方が出來るかと云へばなるべく一定の温度を保ちつゝ仕上る事に着目せねばならぬと思ひます。茲に油の温度の變化を圖示すれば次の樣であります。

Aは始めの油の温度を表します。油が加熱されて時間の經過と共に温度はほゞ直線的に上昇し水の沸騰點を通りこして百二十度位に達した時に材料を入れると、温度は降下してC



の如くなり材料を出すにつれて段々温度は上昇します。若し此の際油が餘り多くなくて入れる材料は多く、而も水分を含む事が多ければ多い程、此の上昇と下降とを表す波の高低卽ち温度の差が著しくなります。此の温度の變化を僅少にする事が此調理法の注意點ですが、その條件として

一、油を多く使用する事。

二、揚げる材料を加減して入れる事であります。要するに煮物は自然的に恒温装置の具備された料理法であ

つて出來上りが時間で豫定が出來るのに反して、揚げ物の方は時間と火加減との二つに關係したより複雜な二次函數的な料理法でありますから右の樣な理由で程よい揚げ物が出來にくい事になります。

五　雜の部

如何に善く鹽梅された調理もそれが熱過ぎたり冷えたりしてゐては折角の味も惡く　美しく料理されたものにも十分の價値がなくなります。適當な温度の物を食してこそ、より美味しく味はゝれるものであります。之れは其の時の氣候にも多少は關係しますが、私共の味覺に對して程よく感じられる温度は五十度位ですから、此の程度で汁物等の加減をして客膳に出せる事は主婦の一考を要する事で、煮立つたら直ちに盛つて出す主義よりも進歩した考へ方の樣に思はれます。

固く物を煮る時とか、軟かく煮上る時とかはそれ〲に煮方が違つて居りますが、軟かく煮やうとする物は何故始めから砂糖醬油の調味料を入れぬかと云へば、總て濃度の異る溶液が幕を隔てゝ有る時、其の幕を通して兩液が混合する時、どちらの液が多く幕を通過するかと云ふに濃厚部に向つて稀薄部から多く浸出すると云ふ事が物理的の現象（これを滲透といふ）だからです。それで豆を煮る時に始めから醬油を入れると豆の表皮を通して滲透作用が行はれ、その爲に「固い皺のよつた」煮豆が出來る譯であります。

亦よく青菜に鹽と云ひますが、之れもやはり青菜に含まれて居る水分と外部の食鹽水との間の滲透の結果内部の水分は外部に浸出する爲に水分を失つて、青菜はしなびた形になりますからで、漬物を漬ける時必ず鹽を用ひるのはこの作用を利用するので何程重い石を置いても少しも鹽を用ひぬ時は俗に云ふ「水がのる」といふ狀態にはならぬのであります。かく申しますと、鹽は只漬物の水出しの爲にのみ用ひられる樣ですが、今一つの用途は若し鹽がない時には微生物が發生することで、すべて食品を永く保存する爲に砂糖漬鹽漬にしますのは微生物の表皮の内外で前述のとほり滲透作用が起つた結果、微生物は水分を失つて生活し得られぬ狀態になるのでおそらく「ナメクジ」に鹽をふりかけた時と同樣の譯になるのでありませう。蕪のあちやら、其の他、刺身の「つま」の樣に切つた野菜を水中に入れるとピンと張りますが之れは内部に向けて外部の水分が入つたので鹽をふりかけた時とは反對の現象を呈します。

私共が、三度の食事をつくる臺所は、物理や化學の實驗室ですから、主婦が少し頭腦を働かせますと、余程面白い報告が精細に而も立派に出來上るものである事を考へたら、色々面白い實驗や研究が出來ると思ひます。



僻見

芥川龍之介

三　大久保湖州（上）

或秋の夜、僕は本郷の大學前の或古本屋を覗いて見た。すると店先の陳列臺に古い菊判の本が一冊、「大久保湖州著、家康と直弼、引ナシ金五十錢」と云ふ貼り札の帶をかけたまま、雜書の上に抛り出してあつた。僕はこの本の埃を拂ひ、ちよつと中をひろげて見た。中は本の名の示す通り、德川家康と井伊直弼とに關する史論を集めたものらしかつた。が、偶然開いた箇所は附錄に添へてある雜文だつた。「人の一生」——僕はこの雜文の一つにかう云ふ名のあるのを發見した。

人の一生

德川家康　——　大久保余所五郎

急ぐべからず。
心に望おこらば困窮したる時を思ひ出すべし。
怒は敵と思へ。
勝つ事ばかり知てまくる事をしらざれば害其
身に至る。
及ばざるは過ぎたるより勝れり。

後るべからず。
心に望失なば得意なりし時を思ひ出すべし
卑屈は敵と思へ。
負くる事に安んじて勝つ事を知らざれば損其
身に至る。
成すは成さざるより勝れり。

僕は思はず微笑した。この湖州大久保余所五郎なるものは征夷大將軍德川家康と處世訓の長短を比べてゐる。しかも彼の處生訓は不思議にも坊間に行はれる教科書の臭氣を帶びてゐない。何處か彼自身の面掞した人生の臭吹きを漂はせてゐる。「心に望失なば得意なりし時を思ひ出すべし。」――情熱に富んだ才人の面かげはかう云ふ一行にも見えるやうである。

僕は漫然とその次の「鎌倉雜筆」へ目を移した。漫然と――しかし僕の好奇心は忽ち近來にない刺戟を感じた。まづ僕を喜ばせたものは歷史家を評した數行である。

「若し徂徠にして白石の如く史を究めたらんには、其の史眼は必ず白石の上に出づべし。『南留別志』を一讀して知るべし。

一賴山陽を歷史家と念ふは非なり。日本政記の論文にも、取るに足らざる淺薄の見多し。」

次に興味を感じたのは半頁にも足りない史論である。

「大日本史の主旨は勤王に在りといふ。水戶黃門この書を思ひ立ちしは、伯夷傳を讀みて感ずる所ありてなりといふ。周の武王は時の強者なり。伯夷は時の強者を制し、名分を正さんとして用ゐられざりし男なり。黃門何とてさる支那の一不平黨に同感して、勤王の精神を現せる國史を編まんとはしけるぞ。幕府は時の強者なり。之を制して名分を正さんとしけるにや。されど德川は正に其の宗家なり。宗家の不利を顧みざりしにや。黃門は世に賢明の人なりと嘖々す。さる人にして、い

かで朝廷重くなれば徳川輕くなるの理見えずやあるべき。是に於て黄門の眞意は甚だ疑ふべし。不平黨に同意せし胸中穿鑿を要する所なり。時の將軍綱吉と黄門の不快なりしは、亦世に傳ふる所なり。得意なりしならんには、大日本史を編みしや否や、我れ識らず。美はしき表口上より、裏の淺見を惜しくこそ。

「家康の朝廷に對する精神は、敬して遠ざくるに在りしなり。信長秀吉等は皆朝廷を擔ぎて事を圖りしかど、家康にはさる事なし。關ヶ原大阪の軍にも、朝旨を受けて、王師皇軍などいふ體を裝はず。武家と武家との戰と做して、朝廷の力を假らず。是れ實に家康の深慮の存する所なり。徳川の末世に及びて、勤王を唱へし徒は、朝廷尊崇をもて東照宮の遺志なるが如く説きて、幕府を責めしかど、實を知らぬ者の迂説なりけり。朝廷に權力を持たせて、將軍政治の行はると思ふは笑ふべし。流石に新井白石は此の間の消息を解せしが如し。家康また至て公卿風を嫌ひし男なりけり。」

しかし最も愉快だつたのは鮮かに著者自身の性格を示したやはり數行の感想である。

「人三十にして老人にも少年にも交はるを得べし。

「我れ酒を飲まざれど。人に酒を呑(原)せて語るは面白し。

「始めて人を訪へば、知らぬ顔して室内の模樣を見屆け置くべし。爾後訪ふ毎に亦其の室内の變化に注目せよ。やがて主人の口には掩ひける性癖のをかしきふしを看出すべし。

「人物を知らんには、其の人の金のつかひやうと、妻に對する振舞との二つこそ尤も見まほしけれ。若し世に細君の自ら筆を染めて、細かに良人が日常の振舞を書き取れる日記と、金銀出納帳とだにあらば、之れに優る傳記の材料はなかるべし。

「世評に善くいはるる人も、實際はそれ程の大人物に非ず、惡くいはるる人も、亦それ程の惡人にあらず、古今皆然り、個人の貫目を量らんには、世評の封袋を除くことを忘るべからず。

「智慧できて、氣性の强くなりしものなり。弱くなりしものあり。
「成る可く勞力を節約して成るべく多く成功するの工夫を運らすべし。さりとて相場師に爲れと言ふには非ず。但し人事なべて多少投機の性質を帶ぶるものと念ふべし。
「愚人を相手に得々然たること能はざる政治家は、輿論政治の世に政治家たる資格なきものと知るべし」
男女とも尻つ尾さへぶら下げてゐなければ、一人前の人間だと考へるのは三千年來の誤謬である。一人前の人間となる爲には、まづ腦髓と稱へられる灰白色の塊にも一人前の皺襞を具へなければならぬ。この大久保湖州と云ふ書生は確かに孔雀や猿を脫した一人前の腦髓を所有してゐる。いや、一人前所ではないかも知れない。彼の文章は冷然とした中に不思議にも情熱を漲らせてゐる。天下にかう云ふ文章ほど、一人前以上の腦髓の所在を歷々と數へる指道標はない。のみならず――實價は五十錢である。僕は皺くちやになつた五十錢札を出し、青黑いクロオス表紙のついた「家康と直弼」を買ふことにした。

買つた後に開いて見ると、卷頭には近衞公の題字を始め、重野成齋、坪內逍遙、島田沼南、德富蘇峯、田口鼎軒等の序文だの、水谷不倒の「大久保湖州君小傳」だの、明治趣味の顋髯を生やした著者の寫眞だのもはひつてゐる。無名の書生だと思つた湖州は思ひの外知己に富んでゐたらしい。が、現代に生れた我々の湖州を知らぬことも亦事實である。すると諸名士の金玉の序文も「家康と直弼」を傳へることには失敗したと云はなければならぬ。これは讀者たる僕の勇氣を沮喪せしめるに足る發見である。才人だと思つた大久保湖州も或は大學の教授に多い、莊嚴なる阿呆の一人だつたかも知れない。僕は夜長の電燈の下にかう云ふ疑惑を抱きながら、まづ彼の大作にも家康篇を讀みはじめた。……

これはもう一昨年、――念の爲に斷つて置けば、大正十一年の秋のことである。爾來僕は何かの機會にこの忘れられた歷史家を紹介したいと思ひながら、とうとう今日に及んでしました。紹介したいと云ふ以上、湖州大久保余所五郎の才人

だつたことは云ふを待たない。いや、湖州は明治の生んだ、必しも多からざる才人中、最も特色のある一人である。諸君は勿論かう云ふ賛辭に懐疑的な微笑を浮べるであらう。諸君の確信する所によれば、古今の才人は一人殘らず諸君の愛顧を辱うしてゐる。況や最も特色のある才人などと云ふものの等閑に附せられてゐる筈はない。それは諸君の云ふ通りである。第一古今の才人は何も才人だつた故に諸君の御意にかなつたのではない。諸君の御意にかなつた故に才人になることも出來たのである。つまり才人を才人にするのは才人自身と云ふよりも諸君であると云はなければならぬ。諸君はまことにその點だけは神よりも全智全能である。如何なる才人も諸君の爲に門前拂ひを食はされたが最後、露命さへ繫げぬのに違ひない。この故に尾形乾山は蕭條たる陋巷に窮死した。この故に亦大久保湖州も明治三十四年出版、正價一圓二十錢の著書を、——しかも彼の唯一の著書を「引ナシ五十錢」に賣られてゐるのである。

　僕は湖州を才人だと云つた。が、諸君の微笑の前には少時この言葉を見合せても好い。その代りに僕は諸君の愛顧を辱うする光榮を得なかつた湖州の薄命を弔はなければならぬ。湖州もその後聞いた所によれば、少くとも識者の間には全然忘れられた次第ではない。しかし湖州の母校たる當年の早稻田專門學校——現在の早稻田大學は片上伸の如き、本間久雄の如き、或は又宮島新三郎の如き、有爲の批評家を世に出してゐる。けれども大久保湖州の名は未だ彼等の椽大の筆に一度たりと雖も上つたことはない。彼等は皆彼等の職に甚だ忠なる批評家である。或は聊か彼等の職に忠過ぎる憾みさへあるかも知れない。しかも湖州を逸してゐるのは怠慢の罪と云ふよりも、やはり我々と同じやうに無知の罪と云はなければならぬ。彼等は萬里の波濤を隔てた佛蘭西、英吉利、露西亞等の群小作家の名をも心得てゐる。が、彼等の先輩たる大才の名だけは心得てゐない。かう云ふ湖州を薄命と呼ぶのは必ずしも誇張とは咎め難いであらう。且又湖州は早稻田大學の前に銅像か何か建てられたとしても、依然たる薄命の歷史家である。成程「家康と直弼」は彼の面目を傳へるかも

知れない。しかし彼の畢生の事業は「井伊直弼傳」の大成である。彼はこの事業の爲に三十六年の心血を灑いだ。が、死は彼の命と共に「井伊直弼傳」をも奪ひ去つてしまつた。「こころざしなかばもとげぬ我身だにつひ行くべき道にゆきにけり」——水谷不倒の湖州君小傳によれば、死に臨んだ彼は滿腔の遺憾をかう云ふ一首に托したさうである。これをしも薄命と呼ばないとすれば、何ごとを薄命と呼ぶのであらう？　僕は少くとも小道に仆れた先達の薄命を弔はなければならぬ。（つゞく）

附記　僕偶微恙あり。この文を完結せしむること能はず。下半は六月號に掲載すべし。讀者幸ひに咎むること勿れ。



人間

森田草平

隨筆

隨筆といふものが近頃流行る。餘つ程流行ると見えて、私のやうな世に埋もれた人間の許まで持ち込まれた。何うした風の吹き廻しで、今頃そんな時代錯誤の代物が頭を持ち上げたのやら、又何うして私のやうな者が引つ張り出されるのやら、一寸合點の行かないやうな氣もするが、引請けた上は書かねばなるまい。いづれにしても書くことは書く。が、書く前に、一體隨筆とは何んなものか、何うしてこの頃復活して來たか、それからして一應考へてみたい。

どうも隨筆といふものは日本特有のものであると同じやうに、その隱居仕事の隨筆も——と極めてしまつては惡いかも知れんが、兎に角老人臭い氣のするだけは事實である——矢つ張り日本文學特有の一形式らしい。英吉利文學にエツセイといふものがあつて、あれも英吉利特有のものだと聞いてゐるが、隨筆はそれよりも自由自在で、一層かけかまひのないものらしい。それ程取り留めのない自由な形式ではあるが、これだけに又隨筆は隨筆としての何か特長がなければ納まるまい。それでなければ、初めから文學の形式として成り立たない譯である。で、先づ考へられるのは、隨筆は何を書いて

もいゝ、それだけに隨筆に筆を染めむ程の者は、第一に物識りでなくつちやならないと云ふことである。讀書の結果でもいゝ、或ひは世の中に永く顏を曝してゐて、所謂經驗なるものを積んだ結果でもいゝ、兎に角普通の人の知らないことを知つてゐる必要がある。第二には、自由な發表の形式だけに、作者の人となり、性格と云つたやうなものが、小說や戲曲よりも、より多く直接にあらはれる。恰度座談を聞いた方が演說を聞くよりも、より多くその人の風丰に接することが出來ると同じやうに。それだから隨筆を書くには、多少世の中の修養も積んで、一家の見識を具へてゐなければならない。從つて隨筆その者も、その中に筆者の人格が滲み出してゐるやうなものでなければ、本當の意味で好い隨筆とは云はれない。

　かう考へて來たら、もう書くのが可厭になつた。第一に、小生は讀書家ではない。何うしても生きて行く上に必要な書物だけを、それも多くは他人から借りて來て讀んで、それで間に合せようと云ふ男である。處が、隨筆家たる者は、不要な書物を讀んで、不必要な知識をうんとしこ溜てゐなければばならない。一口に云へば、本蟲でなければ、本當の好い隨筆家ではない。これで先づ落第である。尤も、四十餘年の間どうにかかうにか生きてゐて、浮世に面を曝して來た關係上、人の知らんでもいゝやうな、役にも立たない知識なら、今の若い人に較べては大分餘計に持ち合はせてゐるとも云へるこの間も學校の同僚で、若い法學士が日清戰爭を知らない、日露戰爭もうろ覺えだと云つたので、驚いたことがある。そこへ行くと、こちらは日清戰爭の成歡の驛から牙山が落ちて、松崎大尉が戰死して、始めて田舍でも號外といふものが出たことまで知つてゐる。日比谷公園が練兵場であつたことも知つて居れば、蕎麥のもりかけ一錢三厘であつたこともちやんと心得てゐる。この該博な知識を以てすれば、豈恐るゝに足らんやと思ふが、私はどうも昔から自分の記憶力に自信がないそれに自分に興味がないことはてんで注意をしない方の質であつたから、その方面の知識も一向該博とは云はれない。況して第二の資格たる一家の見識を立てゝ、讀過の際に人格的感化を與へるなぞと云ふことは、頭から思ひも及ばないことである。いや、人格的感化なぞはいらない、お前自身の性格がありの儘に出てゐりや、それで澤山ぢやと云はれるかも知れん。しかし、僕老いたりと雖も、まだ讀者の前で裸形踊りはしたくない。ぼろは隱して置きたい、餘計な耻ぢは搔きたくない。それにはやはり小說とか戲曲とか云ふやうな假面を

放つて出た方が都合がいゝ。たゞの讀者の前へでもさうである况んや女性の讀者をやと云ふ氣にもなる。いづれにしても、飛んだことを引け請けたものだ。

たゞこゝ迄考へて來て、一つ分つたことがある。それは今の作家連がどうして隨筆のやうなものを進んで書く氣にならなかつたかと云ふ、その原因若しくは動機である。つまりそれは作家連がそれ〳〵隨筆でも書く程度に老人になられたと云ふことに歸着するのではあるまいか。私は隨筆が流行ると聞いて、すぐに考へた。はゝあ、これは社會主義の議論もそろ〳〵下火になつたし、例の戀愛の人格化を說いて、女性を禮讃したり、煽動したりする作家や學者もだん〳〵凋落して來たので、そこで目先を變へるための雜誌社の政略だなと、が、それでは少し考へが足りなかつた。やはりこれはどうも作者の側でさう云ふ機運が向いて來たと見る方が、正鵠を得てゐる樣である。作者の側でさう云ふ機運が向いて來たと云ふのはそれだけ老人になられたと云ふことに外ならない。そこで十年も前から隱居してゐた私までも引つ張り出されるやうなことになつたのである。

自分のこと

からなると、私も自分のことが云ひたくなる。それにどうも自分のことを云ふのが一番當り觸りがなくていゝ。それだけ讀者には面白くないかも知れんが、そこは諦めて貰ふ外ない。

私は處女作「煤煙」に依つて所謂文壇の人にして貰つた。「煤煙」と云つたところで、今の若い人は多分知るまい。いや、今でも縮刷本がぽつ〳〵賣れてゐるとこから見れば、中には知つてゐてくれる人もあらう。が、大部分の人は知らないと見て置く方が間違ひがない。そこで改めて大きな顏をして云ふが、私は「煤煙」で文壇の人になつた。そして、懸値のない所、一夜にして有名になつた。英國のバイロン卿は「チャイルド・ハロルド」を書いて、夜寢て、朝起きてみたらもう有名になつてゐたと自分で云つてゐる。わが日本では、一夜にして有名になつた者は、その後續々とある。それ等の人々の名を並べて見ると、その中に列することはあんまり光榮でないことが明白になる位のものである。つまり日本はそれだけ物見高い國だと云ふことを證明するに過ぎない。それに私が有名になつたのは、一寸自分で云ふのが氣恥かしいやうな事情が伴つてゐた。同じ有名でも、英語のフエーマスの方でなくつて、ノートリアスの方だと思つて貰へばいゝ。

それだけに、私は自分が有名になつたことを一度も嬉しいとも有難いとも思つたことはない。いや、その時分は私も若かつただけに、滿更嬉しくないこともなかつたが、一種擽つたいやうな感じが伴はないで、心から嬉しいと思つたことがないだけは、敢てこゝに斷言することを憚らない。今ではもう初めて會つた人からたまに「御高名はかねて承知してゐますが」などと云はれると、擽つたい感じばかり先に立つて身顫ひが出る位のものである。

さうは云ふものゝ、私も「煤煙」だけは一生懸命に書いた。文字通り、生か死かの覺悟で書き終つた。それだけに、あんな物でも、當時の世間があれを一種の際物として見ないで――さう見られても仕方のない事情の下にあつたのである――一個の藝術品として見てくれたと云ふことは、今でもなほ私の感謝の念を斷たない所である。で、それはいゝ、それは大いに好かつたが、餘りに一生懸命になつて、これ一つ書けば後は死んでもいゝやうな了簡で書いたので、やう〳〵書き終つた時は、精も根も盡き果てゝ、疲勞困憊、もう何をする餘裕も餘力もなくなつてゐた。處で、世間といふものは同時に甚だ意地の悪いもので、その餘裕のない私を捕まへて、すぐに何か書けと云ふ。それが中央公論といふ大雜誌の形を取つてあらはれたのだから、私もその誘惑は一概に斥けることが出來なかつた。で、書くには書いたが、勿論力の入らない駄作である。それからも書くより外に喰つて行く道がないから、勞れた四肢に鞭打ち、何にも出ない腦漿を絞つて書きつゞけた。その中には一つ二つ自分の思ひ懸けないもので――それは實際自分では思ひ懸けなかつたものである。この事はこれから新に書き出さうとするやうな若い人達は牢記して置いて貰ひたい。世間といふものは實際自分の持つてゐる何を歡迎してくれるか分らない。事程左樣に、ひやうきんなものである――その自分の思ひ懸けないもので、一つ二つ世間で當つた物がないではなかつた。が、さうして三四年經つうちに、私は世間で可厭になるよりも、自分で自分が先に可厭になつた。それに私は生れつきの遲筆で、同じものを書くにも、他人の三倍四倍苦しまなければならない。これが作者としての生活には怖るしいハンディ、キャップである。そこで私は考へた。こりやこんな事をしてゐては、自分で自分の身を削るやうなものだ。縱しんば自分に何物かゞあるとしても、そんなものは永久出つこない。結局、何も書かずにしまふことになる。こゝは一つ世間から葬られる前に、自分で自分を葬つてやれ！と。その裏には、なに、文壇なぞ出ようと

思へば何時でも出られるんだと云ふやうな、大分世間を甘く見た、太い了簡も手傳つてゐた。

が、これが間違ひで、一旦店じまひをしたら、再び賣り出すことは初めて店開きをするよりも難かしい。なに、書けても書けなくつても、兎に角書いてさへ居れば、その間に目の出ることもある。現にさう云ふ實例を所謂老大家の間にいくらも見てゐるではないかと、友人からも云はれゝば、自分でも氣が附かんではなかつた。が、一旦思ひ立つたからには、そんな生温いことで思ひ返しもされない。それに、何よりも自信のないものを書きつゞけるのは可厭だといふ氣が先に立つて、ふつつり筆を執ることを斷念したのは――いや、斷念したのではない、一時休止したのは、恰度朔日の文藝欄を止めてから一兩年經つた後のことであつた。それでも止めてから兩三年の間は、たまには世間の雜誌社から何か書けと勸められることもあつた。が、それを斷つてゐるうちに、ぱつたりさう云ふ勸誘を受けなくなつた。つまり完全に世間から忘られたのである。書きたい人は他にいくらでもある。文壇の流行兒はその後續々と出る。して見れば、何もそんな書きたくない、お負けに人氣もない者に書いて貰ふ必要はない。書かせないのが當然である。當然でもあり、且はかねて自ら期したることでもありながら、さうなつて見ると、少し寂しい氣がしないではなかつた。が、一方に於ては、さうして擾々たる文壇の毀譽褒貶から懸け離れてゐると云ふことは、負け惜しみでも何でもない、本當に肩の荷でも卸したやうに、晴晴として、何とも云へん好い心持ちであつた。これは文壇生活をした覺えのある人なら、誰でも容易に想像されることであらう。で、私はたとひ今後創作に筆を染めることはあつても、この暢び〳〵した氣持ちだけは永久に失ひたくないと思つてゐる。つまり作はしても、文壇の人にはなりたくない。少し蟲の好い注文かも知らんが、自分の心懸け次第では出來んこともあるまい。

有名と無名

無名であることの樂しみ――それは有名であつた者のみが知る境地であるとも云ひますかな。兎に角、一度金持ちになつて見んければ、貧乏の樂しみはよく分るまい。私は變な間違ひから有名にして貰つた。そして すぐに又無名にされた。それだけに、云ふのは少々口はゞつたいが、有名であることの案外詰らないものだと云ふことも知つてゐる。少なくとも、有名といふことを鼻の先であしらふ位の度胸は今でも持

ち合せてゐる。が、最も好く知つたのは、無名であることの氣易さ、有難さである。つく／＼考へて見るに、有名であると云ふことはどうも人間らしくない、無名である方が餘つ程人間らしい氣がする。お釋迦さまでも、石川五右衛門でも、どつちもあんまり人間らしくないではないか。そこらの八百屋や牛乳屋の主人になつて、稼業に精出して、税金もちやん／＼納めて、妻子を可愛がつて、向う三軒兩隣の義理祝儀も滯りなく濟して、沈香も焚かねば屁もひらず、無名に生れて無名に死んで行く。この方がどの位人間らしいか知れたものでない。どうも近頃の人は、特に若い人はあまり有名病に罹り過ぎてるやうだ。少し無名の功徳を吹聽して、下劑でも服ませて、その熱を醒して上げるも徒爾ではあるまい。

しかし、お前は隨分いろんな眞似をして來たんだから、それでも可からうが、俺達はまだ一度も有名になつてゐないのだ。無名の有難さを味解するためにも、一度は有名になりたいものだと云ふやうな抗議が出るかも知れない。成程、御尤もだ。私もそれに對しては、それぢや御隨意に有名におなりなさいと云ふ外ない。新聞といふものの行き渡つた今日では、有名になることは何の造作もない、田子一民君が盛岡で立候補しただけで、まだ當選するかしないか分りもしないうちから、あれだけ有名になつたではないか。いや、立候補するには金子が入る。そんな金子を使はんでも、婦人の方が日比谷公園を尻をまくつて歩いただけでも、明くる朝はすぐ有名になる。つまり變つた事さへすりや、何でもいゝのだ。變つた事でさへあれば、それがたとひ何んな事であつても、後で飯の喰ひはぐりがないと云ふことも、これ亦ジャーナリズムの德か弊か知らないが、確かな事實である。或婦人が嫉妬のあまり愛する男を刺した。そして、監獄へ入れられた。女でそんな事になつたらもうお仕舞ひだらうと思ふと、豈計らんやだ。さう云ふ所へ打ち込んで、どうしてもこの女でなければならぬと云ふ青年があらはれた。それが豪農の子息と來てゐたから、その婦人は今では伉儷睦じく赤兒まで生んで、樂しい生活を送つてゐると聞く。眞個、世の中は皮肉なものである。いや、つい他人のことに口が滑つて、飛んだことをした。他人のことだと思つてるうちに、だん／＼自分の尻がむづ／＼して來るから叶はない。

が、それにしても、かう云ふ事だけは考へさせられる。死んだ漱石先生は、正當な勞役で得た金子と、株や何かで儲けた金子との間には、使用價値は違はんでも、せめて色分けなりとして貰ひたいと云つて居られた。世の中がかうなると、

同じ有名といふ中にも、同樣の色分けがして貰ひたくなる。尤も、そのために、私が第一の犧牲者になるのは考へ物だけれど――いや、それに附けても、無名で生きて行かれる人は羨ましい。

教師

で、話しは元へかへる。私が筆を執ることを止めて、ぶらぶらしてゐるうちに、恰度今から四箇年前、友人の關係で△△大學に拾ひ上げられて、英語の教師になつた。教師になつて、つくづく教師といふものは樂な職業だと思つた。第一、飜譯と違つて、誤譯指摘をされる恐れがない。たまに生徒から突込まれることがあつたら、あゝ、お前はなかなか偉い！と褒めて置けばいゝ。生徒は柔順なもので、間違へた奴から褒められても喜んでゐる。生徒の知らないうちに、こつちで氣が附いたら、次の時間に行つて訂正して置けば、それで濟む。後から訂正するのは一寸工合が好くないが、それも慣れれば、だんだん面の皮が厚くなる。何か新發見でもしたやうな顏をして、大威張りで訂正する。かうなるともう一人前の教師だ。さう思つて得意になつてゐたら、或日先輩の教師が――これは私よりも年少氣鋭の士であるが、教師としては私よりも先輩である。――その人が私に向つて、そんな後から訂正するやうぢや駄目だ。それはまだ新米の教師のすることで、一人前とは云はれない。後から訂正なんぞすりや、生徒はたゞ、あの教師は後から訂正したと云ふことを覺えてゐるばかりで、どこをどう訂正したなぞと云ふことは、決して覺えてゐるものぢやない。つまり教師の威嚴を損するに過ぎない行爲である。元來生徒といふものは、正しい事を教へたつて覺えるものぢやない、況んや間違つた事を教へたに於てをや。何んな事を教へたつて、結局無害無益である。生徒を損ふなんてことは到底あり得ないから、さう思はつしやいと云ふのが、その人の議論の要旨である。私もこの人の達觀には少なからず敬服した。成程、考へて見ると、自分も永年學生生活をしてゐた間には、隨分澤山の間違ひを教へられたに相違ない。しかもどこをどう損はれてゐると云ふやうな所も見當らない。こりや矢つ張り先輩の云ふことを服膺するに限るとは思つたが、根が氣の小さい正直者だけに、どうもその説

をその儘應用するだけの勇氣もないので、今でも時々教壇に立つて、自分の云つたことを自分で後から訂正してゐる。そんな位なら、前からもつと好く調べて行けば好ささう附かななものだが、そこは人間でな、その場にならんとどうも氣がい。一つは月給が安いからだと、内心では月給に罪を背負はせてゐる。

繰り返して云ふが、教師といふもの程好い職業はない。第一、休みが多くて、責任はない。責任は一時間々々に解除される。教へることだけ教へたら、後は覺えようが覺えまいが、それは生徒の責任である。覺えなかつたら、こつちはただ落第さへさせてやればいゝ。實際、大抵の意氣地なしにも出來る職業である。たゞ報酬の少ないだけは、他の官吏や會社員に對して割が惡いと思ふが、そんなに慾張つたところで仕方がない。まあ大抵の處であきらめて、正直に、勤勉に勤める外あるまい。かう見えても、私は學校にとつては忠實な教師である。あんまり自慢にもならんが、教師としては善良な教師だと自任してゐる。それで學校さへ置いてくれたら、死ぬまで教師は止めない了簡でゐるんだから好い氣なものである。

世間の變化

かうして私がぶら〳〵したり、教師をしたりして、世間から忘られて暮してゐる間に、世間でも文壇でも目覺しい變化を遂げた。實は最初からこれが云ひたかつたので書き出したやうなものである。尤も、目覺しい變化を遂げたと云つた處で、それは外形のことであつて内容ではない。内容まで變つたら、こつちは疾うの昔に置いて行かれて、時代後れの標本になつてゐる筈だが、そこ迄遠慮する氣はまだない。それにしても、外形上、何と云ふ目覺しい變化であらう！　恰度世界戰爭の始まる前から私は隱居したので、その間には社會主義の論議も盛に行はれて、それが一般の知識になつた。勞働問題も勃興した。親鸞上人も復活した。戀愛の人格化も説かれた。新人や流行兒がうよ〳〵と簇生した。その新人や流行兒の搖籃たる雜誌「改造」が生れて、天下に覇を稱した。丸ビルや東京會舘が出來たのも、その間のことである。物價が三倍以上に騰貴したのも、その間のことである。そして、最も私の眼を驚かしたのは、原稿料が暴騰して、一枚十五圓二十

聞と云ふやうな價値を呼ぶに到つたことゝ、書物の賣高が激增して、一寸名の出た本なら百版二百版が普通と云つたやうな、世界に類例のない現象を呈するに到つたことである。戰爭前までは、百版なぞと云ふ聲を聞いたのは、德富蘆花氏の「不如歸」に限られてゐた。そして、そんなに賣れる本は通俗的な讀物として、文壇では壇顧られなかつたものだ處が近頃は百版二百版と賣れる本でないと、相手にされないのだから驚く。眞個、文運の隆盛古今に匹なしとはこの事である。處で、私はまだ蘆花氏の「不如歸」を讀んだことがない。それが癖になつて、今でも百版二百版と聞くと、讀まない先から輕蔑する氣になつて、てんで手に取らない。惡い癖だが、どうも仕方がない。私が長い間引込んで平氣でゐられたのも一つはこの盛大な世間の勢ひに辟易して、泰然として尻餅を搗いてゐたのかも知れない。

昔、何かの會合の席上で堺枯川氏に會つたことがある。その時氏は私どもの顏を見廻して、「時の流れは不思議なものだ。自分が千葉の監獄に繋がれて、しばらく世間から隱れてゐる間に、新しい大家連がこんなに出た」と、例の皮肉な、しかも穩かな調子で云ひながら、憮然として居られた。聞いた私の方でも何とも云はれない妙な感じがしたことは勿論である。それから十年經つた。十年後の今日、私が同じやうな氣持ちを味はつて、同じやうなことは云はうとは、流石に知らなかつた。

—をはり—

創作欄



鳳凰天に搏つ

□

柳原白蓮

それから幾日、その後の幾月かは無事に過ぎ去つた。淑妃に就ての恐ろしい噂も二度や三度では無かつたけれども、とかく昔から奇しい傳説や陰氣な話は、古い歴史をもつ宮殿の中では大して珍らしくもないありきたりの事なので、これも唯一時の評判として過ぎ去つてしまつて、此頃では専ら御目出度い武昭儀の産屋入りの話が、そちらこちらで女達の噂の種を蒔いて居た。初夏の風が肌柔らかに吹く或る朝のこと、誕生の御子は玉のような王女であると、悦びの音づれはまづ産屋から廣い宮殿の隅々までも傳はり、やがては都の洛中洛外から遠く里人の耳から口に、口から耳にと廣がりゆくのであつた。

今しも產褥の中の嬰女即ち今の武佾儀は、靜かに目を閉ぢて居る。次の間から起る嬰女の聲は生の悅びを上げて、部屋の裡も何となく賑やかに、邊りに立ち働らいて居る侍女達の顏には得意の色が浮んで居た。折しも一人の侍女は武佾儀の側らに寄り添ひながら、靜かに彼女の目醒めを待つて居るのであつたが、やがて彼女がつぶらなる目を見開いたとき侍女は靜かに、

「佾儀樣！御目醒めで御座りまするか？お小さい王女樣は只今お湯を召しまして御座ります。昨日よりはまた一段とおみ大きくお成り遊ばしたと、御乳の人も皆さう申して居ります。お小さい王女樣は、若艸よりも御速やかに御成長遊ばします。佾儀樣！王女樣をこれへ御連れ申上げませうか？」

侍女の言葉に武佾儀はにつこりと笑顏を見せて、

「さう、そんなにおみ大きくお成りなのかへ？こゝへ御連れ申して下さい。わたしも見上げ度いから」

と侍女は次へと立ち去つた。それと入れちがひに他の侍女が入つて來て敬々しく、

「佾儀樣に申上げます。只今皇后樣が御產の御悅びに、且つ御誕生の王女樣に初の御對面の爲めにこれへ成らせられると、お報らせの者が參りまして御座りまする」

と云ひ終るとそのまゝ引き退がつてしまつた。侍女の姿が扉の外に消え去ると、武佾儀は何か一人考へに打ち沈む樣子に見えたが、それも束の間、やがてまたそこへさつきの侍女が此度は王女を抱いて入つて來た。

「佾儀樣！まあ御覽遊ばしませ。ほんに何とまあお可愛らしい御子樣で御座いませう。つひ今しがたまであんなにおむづかつてゞ御座いましたのに、もうこんなにすやすやとお眠り遊ばして……。おや！お笑ひ遊ばしましたよ。まだお生れ遊ばさぬ前の世の天國の夢でも御覽遊ばしてお出になるので御座いますよ。あれ！またお笑ひ遊ばして……。一寸御覽遊ばしませ」

と、武俠儀に顏を覗かせるように王女を抱いたまゝ側へ寄り添つて來た。武俠儀は王女の寢顏を見ながら、

「王女樣のお小さい御寢臺をわたしの側へ持つて來させて、それへお寢かし申して下さい。あの、それから、皇后樣がもうぢきにこゝへ入らせられるから、さうしたら御前達もお乳の人も誰も此の間には入つて來ないようにして……」

「はいかしこまりました。私共は畏れ多う御座いますから、召しますまで御遠慮申上げるで御座いませう」

「あゝさうしておくれ、わたしが呼ぶまでは誰も遠慮するようにつて、皆の者にもよくさう心得させて置くように」

「承りまして御座ります。お次の人達にも皆そう申し聞けまするで御座いませう」

侍女達は云ひ付けられた通りに、小さい寢臺を運んで來て、それに王女を寢かしつけてゐたが、やがて廊下の方の足音を聞きつけて、

「おや！もう皇后樣が御成りのようで御座います。それでは私共はお次に控へて居りますから、もしか御用の節はどうぞ御召しを……」

武俠儀のうなづくのを見て、皆の者は退出してしまつた。それと殆ど入れちがひに、にこ〳〵と機嫌のよい皇后が入つて來た。と見るなり少し身を起さうとする俠儀を皇后は手で押し止めながら、

「どうぞもう其まゝ、遠慮は入らぬ。まだ日も淺いから却つて迷惑になりはせぬかと思つたけれど、餘り見たいので、妾や！御目出度う！氣分は何う？どこも障りは無いかへ？」

なほ附添ひの者共にも何かのことを尋ねようとして邊りを見廻したが、誰も居ないので不思議そうな顏をした。武俠儀がそれと見て、

「お側に出られる身分の者では御座いませぬから、みんなお次へ御遠慮致させましたので御座います」

と云ふと皇后は、

「そんな遠慮は入らぬのにまあ」

と云ひながらそのことにはたいして氣を止めぬらしく、直ぐにもう王女の側に近寄つてそれを覗き込むのであつた。

「どれまあ！可愛らしいこと。わたしにも王女を持つのは初めて、どんなに嬉しいことか。ほんにこの御子は御丈夫そうだね。御上にも嘸かし御滿足であらう。もう御覽遊ばしたのかへ？」

「はい、御誕生間なしに。そして今日もこれから渡らせられる事になつて居りますが……」

「そう、では毎日見に御出になるのかへ？さぞ御悦びであらう。こんなに可愛らしい王女、わたしでさへもどんなに嬉しいかしれないもの」

「…………」

皇后はしみ〴〵とした言葉で、

「お前のおかげでわたしも段々と仕合せが向いて來たようだ。長年わたしをあれだけ苦しめぬいた淑妃にも、とう〳〵存分に恨らみを晴らすことが出來たし、これもみんなお前のおかげ、御上はもうとんとあの人の事はお忘れ遊ばしたと見えて、わたしにも御咎めどころか何も仰せにならない。そればかりではないのだよ。此頃では却つてそれは〳〵わたしにお優しくなつて、大事にかけて下さることさへあるのだよ。わたしは餘り仕合せが思つたよりも大きいので、これから先が寧そ恐ろしいと思ふ位なのだよ」

心も浮き〳〵として居る皇后は、つひ一人して立て續けに心の悦びを物語るのであつた。そして皇后はそれもこれも皆武侶儀のはからひ故だと、感謝の意を表されるのであるけれども、彼女には却つてそれが嫌やな腹立しいもの〻ように思へてならなかつた。その初め皇后が自分に打ち明けられた時には、「あんな不實な方は夫とも妻とも思つて居ない」と訴へて置きながら、憎かつた淑妃がこの世を去つた今となつては、もう其の時の恨らみも怒りも皆忘れてしまつて、どうやら

上の情けに縋つて居たいような氣になつて居る樣子、何と意くちのない女だらう。自分の目上にこんな意地も張りもない人があつたとて、たいした邪魔にはならぬようなもの〻、それでも自分はまづ誰よりも帝に愛されて居なければならないのだ。この事は帝は勿論皇后自身もすでに承知の筈なのだ。否、自分には愛されるといふことよりも却つてその一番高い地位が必要なのだ……と、武侶儀の胸の中には樣々な思ひが疾風のように暴れ狂ふのであつた。そして彼女の顏は段々と蒼ざめ、その美しい瞳は底の方に惡魔の姿でも潜んでゐはせぬかと思はれるまでに物凄く光つて來た。さつきから王女の方ばかりに氣を取られて居た皇后はふと武侶儀の唯ならぬこの樣子に氣が付いて、

「おや、お前たいそう顏色がよくない。氣分でも惡いのかへ？」

「いゝゑ御方樣！」

と武侶儀がそつと顏をそむけるのを、皇后は却つて遠慮がちなつゝましい樣子に見て取つて、

「お〻そう〳〵そなたはまだ血の氣が納まつて居らぬ。勞れてもゐやう。こんなに長居をして、わたしが惡かつた勘忍をおし。つひわたしも嬉しいものだから。それではまた來ます」

と云つて又王女の小さい寢臺の方に進みより、

「わたしの可愛い〻〳〵大事な王女！今日はもう歸ります。此度來た時にはお目々を開けてわたしを見て下さいね」

皇后は王女の顏をさもいとしさうに覗き込みながら、武侶儀にも優しく別れの言葉を投げられるのであつた。

「ではさやうなら。體を大事にしてね。無理をしないように」

と云ひ終ると皇后はいそ〳〵として靜かに元來た方へ出て行かれた。武侶儀は其の後影をじいつと見送つて居たが、なほじり〳〵と半身を起して皇后の姿の消え去つた方を見つめてゐた。と、彼女の胸の奧に恰も電光のように或恐ろしい企が閃めいた。「あの地位！お〻何物に賭けてもあの地位を……」彼女の目はやがて本能的に小さい寢臺に眠つて居る頑ない

王女の上に注がれた。すると何物かに戰いたように彼女の全身はわな〳〵と顫へ、その身體はまた床の上に打ち倒れてしまつた。彼女の頭は益々混亂して來たらしく顏の表情はいよ〳〵險惡に變つてしまつた。やがて又彼女は再び身を起しかけたけれども、またしてもよろ〳〵とそこに倒れてしまふのであつた。まだ產褥を離れ得ぬ體には力が全く拔けてしまつて居たのである。惡夢にでも襲はれたような寢苦しそうな息づかいを聞きつけて、隣室に控へて居た侍女はそつと樣子を窺ひに來たけれども、良く眠つてゐるらしく默つてゐる武侶儀の有樣を見て、今のは空耳であつたのかとでも思つたらしく、侍女は彼女の穩やかな眠りを醒ますまいと、足音をしのばせてつぎの間へと引き退がつてしまつた。その後はまた元の寂寞に返りはしたが、目に見えぬ惡魔の陰影は部屋の中に滿ち〳〵て來るように思はれた。やがて彼女がそつと見開らいた目はまるで狂人のように物凄く光つてゐるのであつた。そしてその蒼ざめた顏は恰も盜人のように邊りを見廻した。

…………

侍女達はおろ〳〵聲で言葉もしどろに打ち亂しながら、そこに這入つて來る人々の顏さへ見れば、代り〳〵に云ひわけばかりしてゐるのであつた。實に思ひもうけぬこの突然の出來事、それは小さい生れたばかりの王女がいつの間にか息絕えて居たのである。それを帝が入つて來られるまで誰も氣がつかずに居た。附人達のこの不調法は、何としても逃れられない罪である。しかも直ちに呼ばれた侍醫の申立てる處に依ると、確かに何者かの手で窒息せしめられたのだと。この驚くべき事件に逢遇して侍女等は、もしや自分等にあらぬ疑ひをかけられたなら何うしようかといふ怖ろしさと、事の餘り突然にして意外なのに、何れも失心したようになつてゐた。そしてその驚ろきと怒りに度を失ふ程いら〳〵してゐる帝の

訊問に代る〴〵答へ且つ哀訴するのであつた。
「いゝえ、こゝには誰もあやしい者は參りは致しませんでした」
「皇后樣が此度御誕生の王女樣に初の御對面の爲め入らせられるといふので……」
「私共は侶儀樣の御申付けで、御乳の人を初め皆一同御遠慮申上げてお次に控かへて居りましたので御座います」
「それがそも〴〵手ぬかりぢや。一人も王女と嬰の側に居らぬといふ法があるか、愚者奴！」
と帝にどなり付けられて、侍女達は怖ろしさに聲をふるはせながら、
「はい、侶儀樣が、お前達は皇后樣の御目通りに出られるような身分の者ではない、餘りに畏れ多いと……」
「何ぢやと、皇后の目通りに出るが畏れ多いと？　嬰だけの侍女ならしらず、王女の附人が何で目通りを許されぬ。無禮者奴が！嬰！そちは何でそのようなことを申付けたのぢや。これ共の申立ては本當か？」
と帝が武侶儀に尋ねられても、彼女はたゞひどい悲しみに泣き入つて、何の言葉も出し得ぬ樣子であつた。帝は言葉せわしく侍女達に、
「うん、それから如何致した？」
と問はれる。侍女達は恐れながら口ばやに申述べるのであつた。
「はい、それから間なしに皇后樣が成らせられました。皇后樣は丁度その時よく御眠りの王女樣を御覽遊ばしながら、侶儀樣ともお親しさうにお話を遊ばして御出のように見上げました」
「私共はお次に控へて居りましても、いつ何時御用があつて召されるかも存じませんので、此の御間裡の御樣子はよくよく氣をつけて居りましたので御座います」
「例へお次に居よと仰せられましても、決して〴〵氣をゆるしてなんぞは居ませんでした」

「其の時までは何の御變りもなく、御兩方樣共それは〳〵御機嫌で入らせられました」

「あの御樣子では其の御話の間も、皇后樣はお目を王女樣から御離しは遊ばさなかつたと存じ上げます。それは〳〵お可愛らしう思召す御樣子で御座いました」

「王女樣とてもその時、御安らかに御眠り遊ばしてお出になつたことは、もう確かな事なので御座います」

「それから間なしに、餘り長居は障りになるとて急いで御歸り遊ばしました」

「お別れの時も王女樣のお顏をしみ〴〵と御覗き遊ばしまして、此度來た時にはお目を開けてわたしの顏を見て下さい、などとそれは〳〵お優しい御言葉で御座いました。それも私共には、手にとるように聞えて居りましたので御座います」

「それから後は王女樣も侶儀樣もお靜かに御眠り遊ばした御樣子で御座いました。實は一度、私はこの御間を覗き見ましたけれども、折角の御安らかな御眠りを妨げまいと　そつと足音をしのばせてお次へ退がりました。それから皆のものにもさう申してあれに控かへて居りましたので御座ります。それにまあいつの間にこんな事が！私はもう何と申上げてよろしいやら」

この侍女は自分がお部屋を覗いたばかりに、いつそう身に降りかゝる災難がひどいのではないかと、その心配と怖ろしさとに誰よりも悲しがるのであつた。その時他の侍女がまた答へて、

「只今御上が成らせられますまで、皆が申し上げまする通りに、誰も他にこの御間に入つた者は御座いませんでした。それにまあ何とした！不思議なおそろしいこともあるもので御座りまする」

恐る〳〵泣きながら侍女達は口々に云ふのであつた。いつの間にか息絶えて、もう冷くなつてゐる小さい王女の側で、狂氣のようになつて皆を叱つてゐる[illegible]の荒々しい怒號と、しく〳〵泣き入つてゐる武侶儀と、餘りの驚愕と怖れとになす

處をしらず慄へてゐる侍女達と、これ等の凡ては只ならぬ光彩を見せてゐた。そしてこのまゝにはすまされない、何かもつと怖ろしい事の起る前の氣味惡るい豫感が誰もの胸に潮のように寄せて來た。音といふ音を殺した怖ろしい沈默は却つて大波の荒れ狂ふよりも強く怖ろしい響をなして、この陰氣な部屋中を逆卷き狂れてゐる。この時、ふと帝の頭を掠めたのは何ものであつたらう―

「うむ、わかつた、あの皇后が嫉妬のあまりにやつたのだな」

帝の怒號が侍臣等の耳に雷のやうに嚴令するのであつた。

「皇后を直ちに獄舍につなげ！」

「えゝつ、あの皇后樣を？」

「帝王の命令ぢや。彼女はもはや皇后ではないぞ。並の女、即ち王氏の女に過ぎない。早くせんか？何をぐづ／＼致して居るか？」

「はつ……」

ばた／＼と侍臣の幾人かが驅け出すと、混亂の渦は俄に部屋の外にあふれ出た。してこの恐ろしい暴風雨のやうな恐怖すべき禍ひの嵐は、どこまでも果てしなく廣がつてゆくのであつた。つい今しがたまで悦びに滿ちて居た產屋は、忽ち死の黑暗の中に沈んでしまつた。音もなくじめ／＼とした部屋の中は、時折女達のすゝり泣く聲にいやが上にも暗くされるのであつた。そこには此世に又と無いやうな重苦しい沈默が押しかぶさつて居た。御乳の人のわななく手に抱かれてゐる小さき亡き骸を、帝が「別室に連れて行け！」と目がほで指圖されたので、乳人は「心得ました」と立ち上がりはしたものゝ、その足どりは今にもよろめきさうに力がなかつた。その樣子に走り寄つた一人の侍女にたすけられてあちらへと行きかけた乳人は、も一度侶儀の側へ寄り添いながら小さい聲で耳のあたりに、

「佋儀樣！最後の御名殘を」

と叫やいて嬰兒を捧げて顏を見せやうとするのを、武佋儀は顏を背けながら「わたしはもう見ませぬ」といふかのやうに、一言も云はずただ手でこれを制した。王女を抱いた乳人はすゝり泣きに肩のあたりを波うたせながら、別室へと亡き骸をもつて行つた。と帝を始め皆のものもこの部屋を立ち去つてしまつた。それを見送つた佋儀の目には初めて悔恨の色があり〳〵と浮かんで居るのであつた。すると忽ち崩れるやうに床に打ち伏してしまつた彼女は、やがて廊下を物ものしく行きかふ短劍の音がふと耳に入ると、はつとして我にかへつたやうに、身を起しかけて其の物音にじつと聞き入るのであつた。今上げた彼女の顏にはもう新しい淚は湧いて居なかつた。荒々しい息づかいに少しわなないてゐる肩のあたりには黑髮がうね〳〵とからみついて、それが一本〳〵蛇のやうに動いたかと思はれた。ほんの少しの微笑のやうなものが唇のあたりに上つたかと思ふと、それはまたすぐに消えてしまつた。兵卒共の足音は段々と遠くに去つて行くけれども、王女の小さい寢臺ばかりは、そのままなほそこに淋しくとり殘されてあつた。

□

帝と褚遂良とはさつきから互ひに睨らみ合ふやうな姿で暫らくはどちらからも無言であつたが、やがて帝の方から今度はやゝ哀願的に言葉をかけられるのであつた。

「それでさつきからいふ通り、卿が先帝の遺詔をうけてわしの爲めに政を輔けてくれたその功績は長く忘れまい。だからわしとして今卿が贊成しない事を敢てするのは心苦しくてならないのだ。實は武佋儀を冊立て皇后にしたといふことは、もう既に許敬宗や李義府遂の了解を得てゐるのぢや」

「彼等の面々は何と申し上げたか存じませんが、私と致しましては陛下の萬々歲の後のことまで考へられますので、此

事ばかりはどうも御同意致し兼ねます。殊に先后王氏の横死に就いての色々の取り沙汰も聞き及んで居りますので、猶更以て……」

「今又その事を幾度繰り返して見ても何もならぬ詮議ぢや。それよりも今後のことを相談してゐるわしの頼みを聞き入れてもらへばそれでよいのぢや」

「陛下！長孫無忌にも此の事をお謀りになりましたので御座いますか？」

「うん彼にも一應は話して見たのぢやが」

「長孫無忌は何と申し上げましたか？」

「彼もその何ぢや、不賛成をとなへて動かぬのぢや」

褚遂良はさもこそといふやうにうなづいて見せた。帝は猶も熱心に、

「が、褚遂良！唯卿さへ承知をしてくれたなら、わしは假令其他の百人の重臣の反對も、意とする處ではない。何うか褚遂良！このことは曲げても聞き入れて貰ひ度いのだ」

褚遂良は押し默つて返事をしない。帝は猶も合點させようと、

「卿はまだ武の照女が本當の人となりを知らぬからぢや。彼は女としては智慧も優れてゐるし、相當に品格も備はつてゐる。婦人としては確かに秀でた處の多い人なのだから……。何度も繰り返していふようだが卿は彼女を餘りに知らな過ぎる」

帝の言葉を今まで默つてうつむきながら聞いて居た褚遂良は、初めて顔を上げた。そして決然とした聲で、

「陛下！彼女は神の智德を具へた惡魔で御座りまするぞ！」

「何？惡魔とな！もう一遍いふて見い！」

あまりの事だといふ風に、帝の面は見る〳〵忿怒の色を現はした。帝の猛々しい怒りに少しもひるむ氣色もなく褚遂良は勇敢に云ひ放つた。

「はい　申上げます。彼女は羊の衣を被た狼で御座りまするとー」

云ひ終つて矢庭に御階を駈け下りたかと思ふと、彼は忽ち階下に跪づき、額を自ら階段の處に強く打ち付けたので、見る間に額からは鮮血が迸つた。その拭ひもあへぬ血汐を浴びた褚遂良の顔が、さながら大山の如く帝の面前に立ち塞がつた時、それは例へようもなく物凄い光景を呈した。血を以つてしても諫めようとする褚遂良の強い意志の前には、さすがの帝も、王者の威令の打ち砕かれたかのように、たゞ呆然として佇み、暫らくは何の言葉さへも無かつた。それのみでは無い、褚遂良はこのとき手に持つて居た笏を思ひ切り強く階段に敲きつけた。その烈しい物音に侍臣等は、またしても手に汗を握り恐れ戦くのであつた。この事態容易ならぬ不安な有様の中に、皆の者はあだかも木偶のやうに突立つたまゝ固くなつてしまつて、誰一人何事もなし得なかつた。そして褚遂良の邊り憚からぬ大きな聲だけが凛々しく鳴り響くのであつた。

「陛下！私は今日只今限り、此の笏を返上致します。之れから都に用事の無くなりましたこの私は舊里に歸りまして老母を育ひませうと存じます。さらばこれでお暇を頂戴いたしまする。御免下さいませ」

と彼は一禮して力強く立ち上り、後をも見ずに立ち去らうとしたが、ふと踏み止まつてもう一度帝のゐます方をしみじみと見やり、龍顔をいとゞ懐しそうに見上げながら、此度は懇ろに口を開いた。

「どうか夏冬の暑さ寒さにも御體をいとはせられて……。こればかりが私の御願ひで御座りまする」

その言葉の終りには何うやら涙をのんだらしかつた。

「さればこれが永い御別れになろうも存じませぬ」

彼はやゝ暫らくは顔も得上げなかつたが、やう〳〵にして身を起し靜かに御前を去るのであつた。

「おゝ卿はもう行くのか？」

と思はず後を追ふように口走つた帝のお言葉が耳に入るなり褚遂良ははつとしてそこに平伏した。然しやがて彼は立ち上つて心強くも重い足を踏みしめ〳〵去つてしまつた。その如何にも打ちほれた褚遂良の後姿を、たゞ默然として見送る帝の面には、淋しい表情が浮んで居た。そして深い溜息と共に打ちうなだれた龍顔には涙さへ宿つて居るかと思はれるのであつた。やゝあつて帝は一人言のように、

「あゝ、わしは戀を征服することは出來たが、征服し得ない臣下の心を今は何うともすることも出來ない！」

帝の胸中を察して侍臣等は皆默々として誰ひとり顔を上げ得るものとては無かつた。そこへ一人の侍從が入つて來て、

「只今李勣が參內致しましたが、如何とりはからひませうか」

「おゝ、李勣が來たか。丁度よい處へ來てくれた。直ぐに通すがいゝ」

「かしこまりました」

間もなく入つて來た李勣は、帝を初め侍臣等の樣子を見ると常と違つて何となしに打ち濕つてゐる其場の樣子に怪訝な顔をしながら帝に、

「大家御顔色が御優れ遊ばさぬやうに見上げられますが、何うかなされましたか？」

「うん、わしは淋しいのだ」

と帝は一言云つたきり押し默つてしまはれるのを只ならぬと見てとつた李勣は、

「それはまた今宵に限つて何うしてゞ御座いまするか？近頃になく御元氣の無い」

と云ひかけて何とかして、帝の心を引き立たせようと考へて、

「それよりも陛下！幸ひ月もよろしう御座いますから、如何で御座いませう、ちと御庭でも御散策遊ばしながら、そのお淋しいわけでも承りませうでは御座いませぬか」

帝は自らも強いて氣を引き立てるやうに、

「うん、さうしようか」

と立ちかけて窓を仰ぎ見ながら、

「おゝよい月であつた。さつきからの事でこの明るい月の出さへも知らずに過して居た」

帝が階段を下りられると李勣も續いて下りる。すると猶續いて御供に從はうとする幾人かの人々に、帝が云ひ渡されたのであつた。

「他の者は誰も來ないがいゝ。供は李勣一人でよろしい」

と帝は皆を退け、李勣と共に月を眺めながら宛もなく歩いてゐられたが、やがてそこに置いてあつた一つの榻に帝が腰を下ろされると、李勣も歩みを止めて側に跪づきながら相對した。李勣は幸ひ誰も居らぬ此處で帝の心をよく伺つて見ようと、

「それでさつき承り度いと申上げましたことは一體何で御座いますか？この李勣にお聞かせ頂きましたなら、誠に有難いことに存じまする」

帝は一つ大きくうなづいて、さて語り出されるのであつた。

「わしは今先帝の寵臣の一人を失つてしまつた。それで淋しくてならないのだ。それは外でもない、卿も知つての通り先后王氏の後に武の娶女を納れて皇后にしようと思つたのぢや。その贊成を褚遂良に求めた處、彼は以ての外ぢやといつて何うしても聞き入れてくれない。彼は先后の罪は正しく冤罪であつて、それは何者かの企らむ處に相違ないと云つ

て動かぬのぢや。且つ武照儀は皇后とすべき價値のない女ぢやといふ。果ては彼女のことを惡魔だと罵るのでわしは堪り兼ねたのぢや。が、彼は先考の顧臣でもあり、その今日迄の功績に免じてわしは何うともよくし得なかつたのぢや。それに彼の方から鄕里に隱遁すると云つて、わしがまだ許すとも許さぬとも云はぬうちに去つてしまつたのぢや」

と云ひかけて帝はまたしても暗らい顔になられるのを李勣は笑ひにまぎらしながら、

「あはゝゝゝ何事かと思へば、そんなことで御座いましたか。あの一徹者のおやぢに何で陛下の思召が解りませう。體斯ういふ事を陛下が彼等にお謀りになるのが、そもそも間違つて居りは致しませんでしたか。此のことは云はゞ陛下の一家事に過ぎないので御座いませう。それを何も一々臣下に氣を兼ねて、御相談遊ばす必要は更に御座いますまい。唯君主たる陛下が「此度武照儀を冊立して皇后とする」と、斯う御布令になればそれでよろしいでは御座いませぬか。なあに、去る者は追はずで御座います。彼が如何に先帝の重臣であらうと、陛下の良臣はまだいくらでもあるので御座いますから、何もさう御心配なさるには及びませぬ」

帝は李勣の言葉にやゝ心を安んじたと見え、いくらか元氣らしくなつて、

「うむ、それもさうであつたな。そちの申す通り、わしが餘りに配慮に過ぎた點があつたかも知れない。併し褚遂良ばかりではない、長孫無忌も絶體にこの事に就いては、反對を唱へて居るのだから、あの二人があんな風だと、まだ他にも、皇后冊立に就いて不平の者があらうもしれぬ」

「そんな者共の申すことに依つて、陛下の御意志を曲げるわけには參りますまい」

「うん、さうぢやとも「武照儀を皇后として冊立する」とやがて全國中に布令させることにしよう」

「それがおよろしう御座います。如何で御座います、さうと定まりましたなら、早速この吉報を御自分でお知らせに御出になりましては？武照儀殿に」

「さうだ、わしは彼女を見れば凡てを忘れることが出來るのだ。古い馴染の臣下との別れの淋しさも、胸の痛みも、彼女の側へ行つたなら直ぐに癒されてしまふであらう。彼女の處にわしの幸福は待つてゐるのだから」

「左樣遊ばすがおよろしう御座います。侶儀殿もこの悦びの初便りを誰から聞かれるよりも、喜ばれるにちがひありません。では私があちらの御殿の入口まで御供を致しますから」

李勣は靜かに立ち上つて、敬々しく歩みを運ばうとすると、

「うん、ではさうしてくれ」

と帝も亦やをら榻を離れて歩き出された。やがて前栽の植込みの中から、夜目にもほの〴〵と白く浮き出でたように咲いてゐる名もしれぬ香りの高い花の木影をひとつ廻つたとき、丁度その時、後に誰か足音をしのぶ人のけはいがしたので、二人は少からず驚ろいた。此所は禁園の中とて、さしたる人の入り込みよう筈もないのだけれども、そもこれは何者の仕業であらう。今までの話を盜み聞くあやしい曲者か、但しはまた先后の徳を慕ふ何者かゞ隱れてゐたのではないかと、極くほんの僅の間ではあつたけれども、帝と李勣とは容易ならぬ思ひに胸をうたれて忽ち足を停めた。李勣は既に身構へをしたその手に早くも短劍をしつかりと握りしめてゐるのであつた。と、その曲者は初めて月光に面を見せて微笑した。これはまた思ひもかけぬ武侶儀その人であつたのである。帝は再び驚ろいて、かつ餘りの意外にいくらか腹立しさうに、

「おゝ誰かと思つたら曌であつたか。いつからわしらに從いてゐたのぢや？」

言葉の終らぬうちに、その美しい人はもう帝の側にすり寄つて居た。そして夜目にもくつきりと浮き出でた白い小さい指で空を指し示めしながら、

「天にはあれ！御覧遊ばしませ、あのように美しう銀河が流れて居りまする。あまりにすが〴〵しい夜の景色にあこが

れて、つひ今しがた……」

帝は何事でもなくてよかつたと、まづ安堵はされたものゝ、斯うした間違ひが、ともすれば不慮の災とならぬものでもないとの心遣ひから、武昭儀に懇ろにさとされるのであつた。

「斯うした美しい夜を、月に憧憬れて禁園を逍遥するそちのやうな人は、かりそめにも奇やしい者と間違はれぬように、前布令の童女に金鈴でも振らせて歩くがいゝ。その音を聞いたゞけでも、庭の木々の梢や、そちの足に觸れる草の數々、またそちの袂にまつはる花の匂ひも、みなその音を聞いてそちが近づいて來る光榮を待ち受けるであらう。第一足音をしのばせるなんぞと以ての外ぢや。それは惡い惡戯といふものぢや」

眞顔になつて云はれる帝の言葉を、武昭儀はいと無雜作に笑ひにまぎらしてしまつて、

「おほゝゝゝ私が足音をしのばせましたのは決して〳〵いたづらなんぞと、そんなわけでは御座いませぬ。御上、此所を御覽遊ばしませ。こんなに美しう葉末の露が數限りなく連なつて、しほらしや、小さい粒の一つ〳〵にも月の影を宿して居るでは御座いませぬか。もしやこれ等が私の足音に驚ろいて、つひうつかりと零れ落ちはしまいかと。それを思ふたからで御座いまする。聲ない木や草も魂はひとつ。大空にも思ひは通つて居りませうものを。はらり落つる花の涙のこの睦言がいとしうてなりませぬ。草むらの中の虫が聲立てゝ呼びかはす戀歌を、私の裳裾の衣摺れの音にも、もしや止めはしまいかとの心遣ひも女故。外に心あつての業では御座りませぬ。御上！」

と甘へるやうに云ひわけをする彼女の言葉に、帝はわけもなく心が解けて、

「うむ、何といふしほらしい優しいことをいふ女ぢやらう。そちの口から云へばすべてがふさはしい言葉となつてあらはれて來る。わしはそちを得てから、天地はいやまして廣く深くなつたように思はれる。その言葉は折ふしこのわしをして今まで知らなかつた詩の世界に遊ばしてくれるのぢや。そちのその寶石を聯らねたような言葉のひとくさりでも、

あのやかましやの褚遂良が解くことが出來たなら、まさかにあんな武骨なことはいふまいに。なう李勣！」

と初めて側の李勣を顧みて云はれると、彼は默つて「御意の通り」と小腰を折るのであつた。この李勣への言葉を武侶儀が聞きとがめて、

「褚遂良が何と申したので御座いまするか？御上！」

と尋ねるのを帝は聊か困り入つたように、

「うん……、何でも無いのぢや」

「いゝえ、そうでは御座いますまい。何と申たので御座いまするか？御上！何卒私に聞かせて頂き度う存じまする」

「何もさう氣にかける程のことでは無いのぢや」

彼女は何うしても聞かないでは置かぬといふような熱心さを見せて、

「さうお隱し遊ばすと、なほ更伺ひ度う存じまする」

帝はしかたなく、それでもいくらか口ごもりながら怖づ〳〵と、

「武の侶儀は……」

「はい、あの私は？」

「神の智徳を具へた惡魔ぢやと、そう申したのぢや」

と云ひながら帝は彼女の氣色を怖るゝかのように見守つた。武侶儀はことさらにやさしく、

「神の智徳を具へた惡魔で御座いますつて、この私を？私はこの言葉が氣に入りました、御上！」

「おゝ、そちが定めし怒るかと思つて、實は何もそちには云ふまいと思つてゐたのぢやが。おゝ、それはさうと、今わしはそちの處へ吉い報せを持つて行くところであつた」

「吉い報らせと仰せられますと？」

「いよ／＼そちはこの唐の國王が妻、即ち皇后なのぢや。追つて盛んな儀式をとり行なはねばならぬ。この李勣もよろこんで讃成をしてくれたのぢやぞ」

李勣は跪づいて、武佋儀に、

「略儀ながらこゝで御祝ひを申上げまする」

「ありがたう」

と武佋儀は李勣に禮を返して、帝に、

「天は與へらるべきものに對しては、その與ふべきものをあたへずには置きませぬ。もしもこの地位が眞實私のもので御座いましたなら、やがてそれは萬民の幸となり度いものと存じまする」

「おゝ、よく云つた。萬民あつての我々といふことを忘れてはならぬ」

涼しく照る月の光に浮び出でた帝と武佋儀と李勣と、この三人の姿は、いつしかそこに建てられた門の入口の所に近づいて居た。こゝより裡は男禁制の女ばかりの御殿である。そこに御出迎ひの侍女達に送られて帝が入つてしまはれると、武佋儀も、その側に平伏してゐる李勣に叮嚀に會釋を殘して静かに奥の方へと消え去るのであつた。官女達が手に／＼献げ持つ燭台の光りが廻廊をめぐつて、ひとつひとつ見えなくなるまで、李勣はひとり其處に跪いてゐた。

□

今日は今上高宗皇帝が新后則天武后と、鳳凰谷の御獵場に、車を並べて行幸あらせられるといふので、其の沿道の人民たちは、この華やかな行列を見やうと、朝早くから雲霞の如くに押しよせ、そこらあたりは立錐の餘地もないほど遠近の

人で埋まつてゐた。今しも長安の都から遙々と打ち續く玉のやうな大道は、塵ひとつないやうに掃き清められ、この御通路の警護に當る巡羅や、清めを司どる役人などは、あたりに群がる人民たちを傍若無人に叱咤して居た。その癇高い聲は靜粛を旨として立ち並んで居る郡衆を、いやが上に壓し、またその鋭く光つた眼は盗人か人殺しか、但しは掏摸かを見咎めるときのやうに、良民たちの擧動をひとつ〳〵睨みつけて行くのであつた。小羊の前の猛虎にも似た役人や巡羅の振舞は、自分等の役目に落度のないやうにと、我身可愛さからのことに違ひないとは知りながら、人民たちはそれに服從しないわけには行かなかつた。こんな面倒や恐ろしさを忍んでも猶物見高い群衆は、熱心に行列を待つて居た。そしてその待つ間の退屈さに、又しても役人の目をしのび耳を憚りながら、何かしら勝手なことをしやべり合つて居たが、初めのほどのこそ〳〵話もやがて段々と聲高になつて來て、

「何でも此度の新らしい皇后樣つていふのが大變な女だつていふことだよ。先の皇后樣と仲の惡かつた何とか云ふお妃を、甘く埒をあけてしまつて置いて、此度は皇后樣も殺してしまつたと云ふ噂だ」

「それはまあ、何とひどいやり方なんだらう。お妃と皇后樣のお二人を無いものにして、その後でまんまと自分が皇后の位に昇つたんだね」

「うん。それもさ、たゞの殺しやうぢやないといふことだ。何でも兩手兩足をちよん切つてしまつて酒甕の中に押し込み、『この婆ア骨まで醉ばらへ！』つて罵つたのださうな。惨たらしいことを平氣でやる實に怖ろしい女だね」

「それこそ人面獸心の夜叉なんだらう。怖ろしいことだ」

是等群衆の人々の噂は決して嘘ではなかつた。先の武昭儀嬰女は王女を生み、産後の肥立ちが順調に日を數へて、體が元の通りになると、未だ太陽の光りさへ知らずに亡くなつた我子がいとしく不憫でならなくなつた。悔恨によつて啄まれる彼女の胸は、間がな隙がな悲しい痛みを覺えるやうになつた。もうとりかへしのつかぬ悔いと、遣り場のない愛惜と

は、如何にまぎらさうとしても、まぎれよう筈が無かつた。帝からのある限りの慰めの言葉も、彼女の心の痛みを癒すことは到底出來なかつた。のみならず帝の數々の言葉の影からは、却つて皇后に對する嫉妬が湧き出づるのであつた。彼女は帝が先后を思ひ切りよく處分しないのが齒がゆくつてならなかつた。また死んだ兒に無益な死をさしてなるものかとの思ひもあつた。それからまた彼女は、常に自分の見界の中にある凡てのものを征服し盡さなければ止まぬといふ強い信念に燃えてゐたのであつて、それは決して名譽心などといふような小さい考へではなかつた。彼女は右の手で十の惡をすれば、左の手で百の善を行ふといふ人である。自分に依つて此の唐の國中の人々が多くの幸福を得、またそれが爲めに幾分の犧牲者を見るにしても、すべてが皆之れ自分自身の方寸から出たものでなければ、彼女の世の中は一つも面白くは無かつた。

「そりやお前さん！自分の生んだばかりの王女樣を、皇后樣が嫉妬の餘りに殺してしまつたんだといふ話だから、その復讐のためだらうよ」

とさつきの男は合槌をうつた。すると側らにさつきから默つて聞いて居た女が、

「だけど私の聞いた處では、此度の皇后樣はそれは〱お慈悲深い、そしてお悧巧な方だといふことですよ」

すると群衆の中の一人の老人が、

「いや、わしの承り及ぶ處によると、誠に以つて斯うしてお噂申上げることも畏れ多い次第ぢやがの。實はその何ぢや、珍らしい御馬鹿樣ぢやといふ評判ぢや」

と云ひながらその老人は目をぱちつかせた。若い男はそれを遮るように、

「いゝゑ、それは大違ひで、あの人は間拔けた良い頭の持ち主で、しかも非常な慘忍性を帶びた怖ろしい惡魔的の婦人だといふことだ」

是等の話を側で面白がつて聞いて居た若い娘が遂に笑ひ出して、

「まあ可笑しい、おほゝゝそれぢや何が何だかさつぱりわけが判らないぢやありませんか。悧巧で馬鹿で、偉くて頓馬で、善人で悪人のおほゝゝ、そんな人があるもんですか」

「さうだ若かすると一人で幾人もの性質を兼ねられたお方かもしれん」

と合槌をうつた男の言葉をうけてさつきの老人は云つた。

「とかく昔から、この世評といふものがみも〳〵ゑたいの知れないものと相場が定つたもので御座るて」

すると若い男はさも感心したやうに、

「或は夫れ等の世評が、すべて皆的中つてゐるのかも知れない。兎に角あの人は、不思議な謎の女だ。或は我々の目の前に現れた妖星かもしれない」

つびみのまた近くでは、是等の話とはまるでかけ離れたことを頻りと話合つてゐるひと群れがあつた。

「お前さんとこの今年の収穫は何うだつたかね」

と中年の女は近所の心易いおかみさんらしいのに話かけた。

「私んところなんさあ今年は陽氣が順調にいつたから、いつもよりはたんと収穫たんだけど、斯う歳ましに年貢が高くなつて來てはとてもやり切れやしない」

するとその側に居た男が突然横合から口を出して、

「わしの所もよ、お祖父の代にこしらへて置いてくれた穀倉ならんか、これからはどんな豊年が來たつて一杯に満される氣遣ひはありはしまいよ。此の調子で行つたならやがては一家眷族乾干の憂目を見ねばなるまい、はゝゝゝ」

「全くさ、何から何まで税金がかゝるんだからなあ、あの米を干す干物掛にまで税金がかゝるんだから驚ろくぢやない

か」

今度はその中の間の抜けたような若い息子が云つた。

「お上ぢや、わし等に飯を食ふなつちうんだらうか」

すると一人の婆さんが、常から誰も話相手になつてやり手のないこの馬鹿息子を勞はるように、

「なんぼ御上だつて、わし等が飯を食つて生きてゐる人間だつて位のことは知つてなさるだらうよ」

と云つてやると、群衆の中の若い娘のとんきような聲がした。

「もうお黙りよ、そんなことをいふのは、みんなおよしよ。誰が聞いて居るかしれやあしない。壁に耳ありといふから。そら！もう御行列が見え出したよ」

いよ／＼行列の先供がやつて來た。駱駝にのつてちりん／＼と鳴る鈴をつけて、いかめしい兜をかぶつた一隊が進んで來た。此の一隊の者は劍をつけたり、楯を持つたりして、勇ましい姿をしてゐるのであつた。それに續いた天子の御料の白馬には、金の鞍を置き、錦の布片を懸けて、幾多の武士たちがまるで主人にするように叮嚀に侍づいてゐた。そして馬の口をとる者、馬具を捧げてゆく者などが多勢その圍りを取り巻いて行つた。

「今行つた一組はありや何だい？」

「天子樣の御馬の係りのお役人たちさ。馬でも豪勢なものぢやないか。あの連中はみんな馬の世話をして御扶持を貰つてゐるのだよ」

「なんだ、馬の家來共か」

とひとりの若者が嘲んで吐き出すように云ふと、若い娘の三四人が口々に、

「まあ、何て奇麗だろう。あの御馬の立髪のところにつけてある緋房の絹糸は……」

「ほんとにね。あれだけの絹の重さがあつたら、私共の着物は何枚くらい織れようか！」

「私はそれよりも鞍の上のあの見事な錦の布片が欲しい。一生一度の嫁入りの晴れ着にだつてあんなものは着けられつこはないんだもの」

「私はも一度此の世に生れ變れるものなら、せめてあの馬になり度いの」

白や赤や紫や樣々な絹糸で飾り立てた見事な馬は、なほ數限りなく打ち續いた。また之れ等の馬に豐かに跨がつてゐる騎士の面々が着けた狩の裝束は、一層若い娘達の目を驚かすのであつた。

「おや！あの葦毛の駒に乘つてゐる人の着てゐる綠の綾は、私が織つたものぢやないかしら、貧しい家の暮しを助ける爲めに、日ごと夜ごとに休みなく稼いで居るわたしの仕事は、みんなあゝいふ殿樣たちの召料になるのだわ」

いつも手先が器用だとて界隈で評判されてゐる若い男は云つた。

「彼の大官の穿いてゐる靴は己れが仕事のあひ間〳〵に拵らへたものなんだ。おれはあの懷かしい紅蘭女に會うためには、あゝいふ靴を何足となく造らねばならない。もしやあの大官の身に付けてゐる丈のものを己れが持つ事が出來たなら、おれはあの女と一緒になることが出來るんだのに。同じ人間と生れながら、あの人たちと比べて何といふつまらない身の上だろう」

と、これを聞いてゐた老人は如何にもあはれみ深い目で彼を見守りながら、

「そんなことを考へてはよろしくないぞ。お前の手であの位の高い人達の身につくものを造らして貰ふことは寧ろ光榮としなければならんのじや」

と云はれて件の若者は、何故に自分の考へが惡いのか一向腑に落ちず、怪訝な顔つきに目を光らしてゐた。するともう一人の若者が、

「それどころではない。この己れのところでは、家内中當にしてゐた馬を賣つてしまつた。百姓をするため一番必要なあの馬を。食へなくなれば仕方がないからな。馬を賣るときは祖父さんも親父もみんなして泣いたよ。それからといふものは、馬の代りまでおれたちが働らいてゐるのだ。今己れの前を通つて行つた栗毛の奴を見ると、何だか賣つた馬そつくりで、堪らなく可愛そうで懐かしい氣がする……。そら嘶いたぜ」

その若者は自分の長く別れてゐた兄弟にでも面會したときのやうな懐しさにしみ〴〵と感じ入る樣子であつた。すると側に聞いてゐた他國者らしい男が、

「あんな人達に我々下々の苦しみが分るもんかね。わしは遠く江陵から送つて來る乳柑橘を、驛から驛に繋いである早馬に乘せて、最大速力で運ぶのを日々の仕事にしてゐるものなのだ。その果物が無事に長安の都に入つて、あの偉い方々の食卓に上つた時に、なほその風味が新らしく滿らかでなければならないのだ。わしは此の仕事をもう何年となく續けてゐるが、かんじんの乳柑橘といふものがどんな味のするものやら、まだかつて一粒も口に入れたことはないのだ。考へて見れば隨分みじめなものぢやないか。つく〴〵自分の愚さにあきれてしまふよ」

この他國者の言葉に小首を傾けながら耳をすましてゐた例の老人は、しかつめらしく口を開いて、

「わしどもは閒がな時がな紡いだり織つたり勞作をしたりしなければならぬ。それを本當に光榮だと思つてやつてゐるがいゝ。なぜならこの我々どもとは一生口をきくことさへ許されぬほど、位の高い偉い御方の爲めぢやから」

老人の言葉が終ると若者はまた言つた。

「だがお爺さん、なんぼ働らいたつて、あの人達はちつとも報ひてはくれないぜ」

そのとき後の方にゐた若い娘がのび上つて前の方の行列を見ながら突然叫んだ。

「あれ……、あのお嬢をもつてゐる御小姓の、まあ、何て美しいこと！」

娘は今行き過ぎる鹵簿の中の一人に目をとめてゐるのであつた。

「まあ、いやだ。この人は、あんな事をいつて……をかしいぢやないの？」

「だつて……」

思つたまゝを云ふ、無邪氣な娘同志の言葉を皆は笑ひながら面白がつて聞いて居た。

おそろしく見事な行列のひとつ〳〵は、沿道に堵列する人々の目を驚かすものばかりであつた。美しく飾られた前驅の車馬が終ると、今度は萬乘の鳳輦がいと嚴かに進み、その後には南國の古い七種の價高い香木から造られた華やかな七香車が續いた。それはまがひもなく則天武后その人の乘物であつた。

「御車の四方に廻らしたあの美しい布片の垂れ幔は、ありや何ていふものだらうねえ、お爺さん……」

と誰やらがきくと、物知りがほの老人は、

「あの垂れ絹かへ？あれは呉の國の碧瑣輕綃つていふ織物に、太秦國にある鬱金香つていふ珍らしい木の實からとれる香料で染め上げたものなんだよ。織り物もあのくらゐのものになると、黄金の延べ金と同じく、一寸四方がいくらといふ價の高いものになるんだ」

と敎へた。すると群衆の中で姿は見えねど、いと聲高に呼ばはるものがあつた。

「荊州の武氏の娘を乘せるのにはちと勿體ないね」

その言葉に喫驚したさつきの娘のひとりは、恐ろしさうに聲をふるはして、

「誰だね、そんな大それたことをいふのは？お止しつてばよ。そんな大きな聲を出してさ。誰かに聞えたら大變ぢやないかね」

するとその側に居たひとりの若者はその娘の耳に囁くように、

「嘘ぢやないよ。本當の話をしたんぢやないか」

「だつて、當節ぢや本當の話が一番怖いんだよ」

「全くさ、口にさへ税金のかゝるつていふ時代なんだから……。本當のことをいつても罪になるといふ變な世の中さ」

と側に居た他の男が云つた。それといふのは此の邊りで律氣で親孝行者と評判された或る若者が、ほんの鼻唄まじりに時代を諷した唄を歌つたのが、ふと役人の耳に入つたばかりに、すぐと何所にか連れて行かれてしまつたことがある。皆は今そのことを思ひ出して居るのであつた。

「彼人は本當に可愛そうなことをしたね。今の役人たちは唯罪人をこしらへさへすりや役目に忠實だなど—云はれて、上役から賞められるもんだから。その賞め料になる我々人民こそいゝ迷惑さ」

「お止しよ、もつと小さい聲で話しておくれつてば」

と若い娘は氣を揉んでそこらあたりを見廻した。そこを通る行列は、今しも華麗な皇后の玉輦を始め、數多の美しい宮女たちの乘物が過ぎ、その後には卿相百官の驕奢な乘物が長蛇のように打ち續いて行くところであつた。娘はふと何かに目をつけて。

「しいつ！みんなお默りよ。御行列の一番終ひの方の役人が一軒〳〵入つて何かしてゐるようだが、又何ぞ小言でも云つてるんぢや無からうか」

今役人が軒並に音づれてゐるのは、今度の新皇后則天武后の有難い思召を傳へて居るのであつた。といふのは家に七十歳以上の老人あるもの、また家貧しくして子供多くその養育に難儀するものには、追つて何分の補助を與へるといふ御達しであつた。それを聞き知つた群衆は、俄に聲高く賑ひ立つてゐた。

「結構なお話だね。年寄が家の寶だつていふことは、今初めて解つたよ」

「なんだこいつ奴！慾ばりだね」

「お蔭様で家も助かります、乳呑子があつて、働きには出られないし、ほんに〳〵難儀なこつた。よくこの下々の事情を御察し下されました。おゝ、有難い皇后様」

と遠く行列の行き過ぎてしまつた後を、伏し拜がんで居る年寄や子持女があるかとおもふと、こゝにはまたこの女達のよろこんでゐる有様を見て、口々に呼やき合つてゐる若い者の一群があつた。

「なんぼ下され物は澤山あつても、こう税金が高くちや何もなりはしない。結局少數の者はよろこんでも、大勢の者は苦しんでゐるんだからなあ」

「さうだとも、高い税金を取り立てゝ、その金で救濟など有難がらせをやつても、それは矢張人のふんどしで角力をとると云ふ類なんだからね」

「それに、此節のやうに口に税金をかけられちや尚更こまるよ。萬卷の書を焚いたり、儒者を坑にした昔の秦の時代よりはましだらうが、口に云ひ度いまゝを云はせないお上のやり方は全く無茶だよ。我々は頂戴物なんか少しも欲しくはない。唯この天與の自由をかへして頂けたらどんなに有難いかしれぬ」

「全くだね……………」

「然し此度の皇后様は大變御聰明な方だと聞いたが、人民がこんな束縛に苦しんで居ることをまだ御存じないのかね」

「我々も自然のまゝに、あの野山の小鳥のやうに、自由に饒舌られたらどんなによいであらう。云い度いことを云はせないから、不平の徒が蜂起するのだ。儒を坑にした秦は僅かに十數年で亡びたではないか」

「さうだとも……、不自由な思ひをさせて、人々の心を屈托させることほど危險なことはないのだから」

群衆の姿がいつしか何所へともなく薄らいだ頃、數多の群臣將士を召連れた美々しい行列は、やがて定めの獵場に着い

て、そこには處々に屯する幕屋が澤山建てられてあつた。それは丁度、戰場ならばさしづめ陣屋と云つた風な趣きに出來てゐた。帝が時折この大仕掛な獵を催されるといふのは、將士等のために戰の演習を兼ね行はれるのであつて、いつもならば婦女子の來べき處では無かつたけれども、武后が「勇ましい御獵の樣を是非とも見物したいから」との御願によつて、今度は特に皇后御同行といふことになつたのであつた。そして此所に帝と皇后との御駐輦は三週の長きに及んだ。平生は人ひとり通ることも無く、晝は伐木の音に暮れ、夜は猿や鹿の聲に更けて、鐘さへ響かぬ此の山里に、俄に不夜城の築かれて、往きかふ將士の顏も何となく勇ましく活氣に滿ちて居た。晝はひねもす狩り暮らし、夜に入るとあちこちの幕屋の中では、無邪氣な兵卒共の手柄話に上下こぞつてどよめくのであつた。今しも雜談にうち耽りながら、此の御獵場の出入口を守つて居る番卒共の目の前を、異樣な人影の通行するのを見とがめて、一人の士卒が、

「其所を通るものは誰か？名乘りを上げて通れ！」

と誰何した。するとその男は大きな德利をぶら下げて妙な足どりで歩いて行く。

「お前は誰だ！」

と兵卒は再び呼ばはると、その男は、

「おれか、おれを知らねえのか、あはゝゝゝゝ」

と如何にも無遠慮に高らかに笑ふのみであつた。士卒は聊か業を煮やし、篝火で透し見ながら一入强く誰何した。

「こら止れ！、何者だ！」

その男は止まつた。そしてまたから〳〵と笑ひながら云つた。

「おれか？おれはこの山の主よ」

「何だ？主だと！變なことをいふ奴だな」

「さうよ、今度お前んとこの親方が親規なかみさんをつれて、おれの山へ狩りに來たちうが、お前たちやその子分共か？」

「こら！何を失禮なことを申す。此處に行在所を設けて今狩を遊ばしてゐらせられるのは唐の國の王樣ぢや。いやしくも唐の國であるならば、山でも野でも皆この王樣が主でいらせられる」

「へえ……、なんぼ王樣だつて、この山やこの木や鳥や獸を造れやしまいし。おれの兄弟の猿や鹿をお前たちや捕りに來たんだな。そんなに生き物を殺すと罰が當るぞ！ほら向ふの谷で猿が啼いてらあ。お前たちを怨んでゐるんだ」

士卒は手に持つた鋒を差しつけて、

「そんな無禮なことを申すと、叩き殺すぞ！」

と呶鳴つた。おどかされた山男はわん／＼と泣き出した。これは馬鹿の優孟と呼ばれたこの界隈評判の男である。この山で生れて山で育ち、性來が愚な上に佝僂で跛者なのだ。番卒共もこの男が手離しで泣いてゐる樣子の餘りのをかしさに、つひ戯討つて見る氣になつて、

「あゝこれ／＼何もさう大の男が泣かなくともいゝではないか。譯けがわかればそれでいゝ」

「譯けはわからねえが、おれが何かいふとお前さん達ちやすぐ怒るだろう？わからねえことをいふお前さんたちにほんとうのことを聞かしてやれば、おれを叩き殺すといふでねえか」

この男は馬鹿だといふことが皆にわかつたので、番卒共はいゝかげんにあしらひながら、

「もういゝよ、お前は山猿の親分だろう。處でその手に下げてゐる德利は何だへ？」

「これかね、こりや山で猿がこしらへた酒さ。おれの山にやたんないゝものがあるんだぜ。ほしいか？」

「…………」

「腹がへりや木の實があるし、眠くなりやどこの岩の上でゝも寢る。渇けば谷川の水を汲んで飮む。斯うしておれはおれの山に住んでゐる……」

「もうわかつたよ。これ〳〵その酒はうまいかな？」

「人間のこしらへたのとは異ふよ。甘露の酒といふのがこれさ。たゞはやれないよ」

「馬鹿のくせにこいつ生意氣なことをいふ。このおれ樣たちを何と思つてゐるんだ。都から遙々お出遊ばした兵隊樣だぞ！」

「そうかあ？大して珍らしい顔もしてゐねえが」

「どうだ、お前その酒を己れたちにくれたら、何でもお前の珍らしいものを見せてやるがね。お前は向ふの幕屋の中に居る美しい女たちを見たくはないのか？。皇后樣のお附きの人が澤山ゐるよ。どうだ、こつそり拜がましてやろうか」

「うん、そらあ、見てえなあ。此の酒はみんなお前さんたちにやるよ。足りねばまたあしたもつて來てやらあ」

「そうか、それなら今日は之を置いて行け。そしてまたあした持て來てくれたらあの美しい官女を拜がましてやるから」

「きつとだね。ぢやこれを置いてゆくぜ」

と云ひ捨てゝ優悉の馬鹿は、跛者ひき〳〵暗闇の中に消えた。後には兵卒共の大きな笑ひ聲がした。やがて兵卒共が優悉の甘露の酒を汲みかはしながら、

「可愛さうに馬鹿を騙したりして、いゝのかへ？」

「いゝともさ、將を御する者は天子の事也。卒を御するは將の職なりさね、而してあの馬鹿を御するくらゐはおれの雜作もない仕事さ」

またしてもひとしきり高笑ひの聲が、木立のあちらこちらに反響した。

冬の冷たい風は、あるだけの木の葉を吹き散らしてしまつて、山は面瘠せ、森は凄まじく骨立つた中に、それでも晩近くなると、ねぐらから出て來る鳥の聲に、早くも狩する人々は幕屋を出て居た。則天皇后は多くの宮女たちを引き具して、兼ねて皇后の物見として造られた麗緑溪の小丘の幔屋へと、今日も見物に來られたのである。華々しい王者の容威は、こんな僻遠の山間までも及んで、そこには蟠龍の縫ひとりをした見事な幔幕が引き廻されて居た。そして皇后の後からは、大きな長春の模樣の浮き出した黄金の傘がさしかけられて、その兩側には陪觀を許された數多の宮女たちが、何づれも裝ひこらしてずらりと居並んで居るのであつた。明方の空はいつさう寒く、大空には段々とかき消えて行く數多の星の中に、唯一つ金色に光つた明星だけが、太陽のまだ昇らぬ前のあかつきの空を、ひとり勇敢に、かつ嚴に支配してゐるかのやうに瞬いて居た。

この丘の前方には、見渡す限り草深い野原が打ち披がつてゐた。そして其の右の方には黒く生い茂つた森がうち連り、その左手は低く谷の方へなだれ落ちてゐたのであつた。勢子共が狩り出した一匹の鹿は、今しも森の方からひた走りに走り出で、八方から霰のやうに射かける彈き弓の矢を浴びながら、荒れ狂つて居るのであつたが、とう〳〵射止められたものと見えて、やがて勢子共の勝鬨の聲が、野原から山へと湧き上がるやうに聞えて來た。すると丘の上の幔屋の方からも宮女達の盛んな拍手が送られるのであつた。やがて又新しい鹿や猪は何匹となく追出されて、その度ごとにいさましい勝鬨は、全山をゆるがせた。かうして御獵の興味は愈々深く、人々の熱狂が益々加はらうとする時、巨大な一匹の獅が傷を負ふて猛りながら、曠野の中をかすめて、皇后の御座所の方へと、まつしぐらに飛んで來た。宮女たちは一時に驚ろき騷ぎ立ち、數人の將士はそれ逃がしてはと懸命にその後を追ひかけた。皇后はあたりの騷がしさに時しも玉簾を掲げて幔屋の外へと歩み出られたのであつたが、その途端に何處からともなく飛んで來た一本の征矢が皇后の裳裾を射通した。

（次號につゞく）



三吉の鳶口（童話）

廣津和郎

一

見たことのない人は、誰でも屹度『それは嘘だらう』さう云ふに相違ありません。三吉の鳶口と云ふのは、それ程類のない、大きなものでした。柄は太い太い樫の木で、その長さは間違ひなく、三間はあつたでせう。そしてその柄の頭に、これも亦、とてつもなく長くて重たさうな金具が、いつもピカピカと磨きがかけられて、光つて居ました　ほんとに素晴しい鳶口でした。

三吉の村と云ふのは、三方高い山に圍まれた、谷底のやうなところにある小さな村でした。一筋の往還が三里も離れた隣町へ通じてゐなければ、誰もそんなところに村があらうとは氣がつかないやうな淋しい山里でしたけれども、冬が來ますと、月に一度、二タ月に一度と云ふやうに、火事が起りました。

スワ火事だツ！　と云ふと、三吉はその素晴しく大きな鳶口を提げて、飛び出して行きました。

『退いた！　退いた！　退いた！』

さう怒鳴りながら、火事場裝束に男ましく身を固めて、韋駄天のやうに、火事場に驅けつけるのでした。

『それッ、三吉が來た！』

『三吉、たのむぞ！』

村の人々は、三吉の身體に火が燃えつかないやうにと、ざあざあ頭から水を浴びせかけます。そこで三吉は、まるで氣が違つた馬車馬見たいに、火の中に飛び込んで行くのでした。

さて、火の中に飛び込んだ三吉は、例の蔦口を風車のやうに振りまはして、恐ろしい勢で燃えてゐる家を、片つ端から叩き壞します。ですから、火事は瞬く中に下火になつて、やがて消えてしまふのでした。

『どうだ、俺の村の三吉位立派な火消しは、近郷近在、何處を探したつてあるまい』

『ほんたうだ、あの三吉がゐるんで、俺達は枕を高くして眠れるのだ』

村の人々はさう云つて、寄ると障ると、三吉の自慢をしてゐました。

二

けれども、三吉は、どつちかと云ふとさう勉勉な男ではありませんでした。その證據は、自分が村の人々から可愛がられるのを好いことにして、商賣をするでもなく、野良に出て畑を耕すでもなく、毎日々々懷ろ手をして、のらりくらりと遊んで居りました。

或日のこと、三吉が緣側に腰をかけて、陽なたぼつこをしながら、例の蔦口を磨いてゐますと、そこに、隣町に用足しに行つて歸つて來た一人のお百姓が、

『今日は、三吉さん、ようお精が出ますね』と聲をかけました。

機嫌の好い三吉は、

『おや、今日は！　町では何か變つたことでもなかつたかねえ？』

『それがさ、今お前さんにその話をしようと思つて、寄つただがね。三吉さん、お前さんは自動ポンプと云ふものを見なすつたことがあるかね？』

お百姓は、三吉と並んで緣側に腰を下ろして、煙草に火を點けながら訪ねました。

『自働ポンプ？　いや、そんなものは見たことはねえな』と三吉は合點の行かない顏をして『それは何にするだね？』

『それでやつぱり火事を消すだよ』

『火事を？　ふん、そしてそれはどんな形をしてゐるだね？』

『とても、お前さん、見なさらん事には話が出來ねえだが……先づ早い話が汽車の機關車見たやうな恰好でな、ゴムの輪が兩側にくつついてゐて、それが線路もないのに、自由自在に走りまはるだから、初めて見るものは、膽を潰すか、腰を拔かすか、請合ひだ』

『お前も田舍者だなあ…』

その時三吉は、自分も田舍者の癖に、偉さうな顏をして、かう云ひました。

『自働ポンプだなんていふから解らないんだ、それは近頃流行るあの自働車と云ふんだよ。學校へ行くと、額になつて懸つてゐるぢやねえか』

『だからお前さんは氣が早いといふのはそこのことなんだよ。それは、その、今お前さんの云つた自働車には違ひねえが、お役人の話だと、それは人間を乘せる自働車でなくつて、火事を消す自働車だと云ふ話なんだ。――あの町の町長さんが

東京へ行つた時、非常に氣に入つて買つて來て、町の決議で買つたんださうだが、素晴らしく高えお金を取られたんだつてよ。——』

お百姓も負てはゐませんでした。

『火事を消す自働車だつて？』

『さうよ…』

『莫迦野郎…』と三吉は腹を立てゝ、怒鳴りました。『莫迦野郎！　そのお役人にさう云つて來な！　どんな種仕掛があるかしらねえが、自働車で火事が消せるなら、俺の村の火消しの三吉が、名代の筒口を叩き折つて、薪にくべて、燃やしてしまうつて、さう云つたとお役人に云つて來な！』

三

いつの間にか夏が過ぎ、秋も去つて、木枯の吹く寒い寒い冬が、三吉の村を訪れて來ました。冬は火事の季節です。ですから、三吉の書き入れ時です。

或夜、三吉が好い心持ちで寢てゐますと、

『三吉早く起きてくれ、早く起きてくれ！』と家の外で怒鳴るものがあります。

『火事だな！』

それを聞くと、三吉は飛び起きて、火事場に行く仕度をしながら、

『火事はどこだ？』

『火事は名主さんの家だ！』

『名主さんの家を燒いては、村の恥だ、早く起きて行つてくれ！』
外では大勢の人達が、頻りに三吉を呼び立てました。
そこで、三吉は例の戸口を肩に擔いで、勇ましく家を飛び出しました。
『退いた、退いた、退いた！』と怒鳴りながら……
何しろ田舍のことですから、同じ村と云つても、名主さんの家までは二十丁近くもありました。向うの空が眞赤に燃えてゐるのが、森陰に物凄く見えてゐます。三吉は韋駄天のやうに走り續けました。寒いのに汗が流れ、息がきれぎれになる程夢中になつて走り續けました。
ところが、三吉が漸くのことで、鎮守樣の前まで駈けて來た時でした。大きなギラギラ光る目玉を持つた怪物が、ガランガラン、シュッシュッシュッシュッと、物恐ろしい響きを立てながら、凄じい勢いで風を切つて、後から三吉を追ひ拔きました。
『アッ！』と云つて三吉は思はず立止まりました。と見る見る中に、怪物の姿は暗の中に消えて行つてしまひました。やがて三吉は氣を取り直して、再び駈け出しました。が、村一番の火消しの三吉が、はあはあと云ひながら火事場に駈けつけた時分には、肝心の火事はもうすつかり消えてしまつて、大勢集まつた人々が、みんな今の物凄い怪物の噂をしてゐました。
『あんな素晴しい機械を、一體、どこの誰が考へついただかな？』
『世の中も開けたもんだなあ』
『それはさうと、三吉はどうしただかなあ、姿も見せないが……』
『大方、途中で腰でも拔かしてるだらう』

三吉が例の大きな鳶口を肩にしながら、すごすごと引き返して行つた姿と云ふものは、ほんとうに見るも氣の毒の有様でした。たが、考へれば考へる程、三吉は殘念で殘念で堪りませんでした。どうかしてあの自働ポンプと云ふ怪物に勝つ方法はないかと、一晩中考へました。

『これは何よりも、俺の鳶口が大き過ぎるのが一番いけないんだ。こんなに重くつては早く駈けられないのも無理はない……』

やがて三吉はさう思ひつきました。そこで翌朝になると、長さ三間からあつた鳶口を、半分に切り落してしまひました。

四

それから半月ばかり經ちました。或晩、三吉は半鐘の音で眼を覺しました。けれども、いつもの通り三吉を呼び立てる人の聲が、ちつとも聞えませんでした。不思議にも思ひ、强腹にも思ひながら、三吉は短くなつた鳶口を提げて、火の手の揚つてゐる方角へ、一目散に走り出しました。

『もう誰にも負けはしない』

ところが、やつぱり駄目でした。と云ふのは、隣り町から地響を立てゝ走つて來た怪物に、お地藏樣の前のところで、三吉は物の見事に追ひ拔かれてしまひました。三吉は地團駄踏んで口惜しがりましたが、とても追つつくものではありませんでした。悄然として三吉は、力なく御地藏樣の前の枯草の上に腰をおろしてしまひました。

火事は、眞暗な空を焦さんばかりに燃え狂つて居りました。火の粉がかんな屑のやうに舞ひ上り、鎭守樣の鳩が、强い羽音を立てゝ、逃げまはつて居りました。三吉は氣が拔けたやうになつて、ぼんやり火事を眺めて居りましたが、しほしほど立上りました。見れば三體の御地藏樣が、同じやうな赤いよだれ掛をかけて、三吉の姿を見て笑つてゐました。三吉

は腹を立てて、

『この糞地藏め……』

と云つたかと思ふと、いきなりお地藏様を擲りつけました。けれども石のお地藏様は動きませんでした。同じやうににやにや三吉を笑つてゐるやうに見えました。

内に歸つて、三吉は床の中へもぐり込みましたが、なかなか眠ることが出來ません。いろいろに考へましたが、好い思案も浮んで來ません。それで結局、

『とに角、俺の鳶口をもつと小さな、もつと輕いものにしなければ、あの怪物と競爭しても勝てない！』

さう思ふより仕方がありませんでした。三吉は、最初の半分にした鳶口を更に、又半分しました。それでも肩に擔いで、あの自働ポンプと競走するには重荷過ぎるやうに思はれます。それで尙又それを半分にしました。そして暫く考へた末に、更に又それを半分にしました。さうして度々切り刻んだ揚句の果には、あの三間からあつた三吉の有名な大鳶口は、今や玩具のやうに小さな、可愛らしいものとなつてしまひました。それを腰にぶら下げて見て、

『これで好い、これで好い！』

三吉は内の中を駈けまはつて見ました。煙草入が腰にぶら下つてゐる程の重さしか感じられませんでした。

運よく、と云ふのも變ですが、それから五日目に、三吉の家から十丁ばかり離れた百姓家の藁小屋から火が出ました。喜び勇んだ三吉は『今度こそ負けるものか！』さう思つて、子供の玩具のやうな例の鳶口を腰にぶら下げて、我家を走り出ました。

が、まあ何と云ふ早いことでせう、火の手の揚るのを見て、直ぐ隣りの町から駈けつけた自働ポンプは、三吉がまだ三丁とは走らない中に、

『のろいのろい三吉さん、今晩もお先に失禮します』と云はんばかりに、ガランガラン、シュッシュッシュッシュッと云ふ例の凄じい音を立てながら、三吉の後から追ひ越して行きました。

三吉の失望落膽は目も當てられませんでした。情ない、恨めしい顔をしながら、火事場には行かずに、直ぐ内に引つ返して寢床にもぐり、頭から蒲團をかぶつてしまひました。三吉は腹も立ち、悲しくもなりましたが、併し村の人達の自分に對する噂を考へると、面目なくも恥しくも思はずにゐられませんでした。ほんたうに今まで三吉は冬になつて方々に火事が起ると、それを例の大鳶口で消すといふだけの事で、後の一年中を何もせずに、大手を振つて村の中を威張つて歩いてゐたのでした。それで誰ひとりとがめる者も責める者もありませんでした。實際『三吉がゐるから、俺達は枕を高くして安心して眠れるんだ……』と云つて皆は三吉に感謝してゐるのでした。

それだのに、あの自働ポンプと云ふ怪物が隣りの町に現はれて、火事と云ふとそれが飛んで來るやうになつてから、もう誰も三吉を顧みるものがありませんでした。三吉は今までのやうに懐ろ手をして、村を歩いてゐても、愛想の好いお辭儀をしてくれる者もありませんでした。

『又あののらくら者の穀潰しが歩いてゐやがる！』

さう云つたやうな心持が、自分を見る人々の眼付に光つてゐるのでした。

思へば、村の奴等も現金な奴等だ、今まであんなにチヤホヤしてゐた癖に、薄情にも今は誰も知らん顔をしてゐやがる！　さう思ふとむしやくしや腹が立つて來ましたが、併しあの怪物と競爭出來ない自分の不甲斐なさを思ふと、結局情ない氣になつてしまはずにゐられませんでした……

その翌日から、三吉の姿が、ふとその村から見えなくなつてしまひました。

『三吉の奴近頃見えないが、何處に行つたのだらう？』

『ああ、ほんたうだ、近頃ちつとも見えないが何處ぞ旅にでも行つたのか知ら？』

村の人達は互にそんな事を云ひ合ひました。けれども、誰も三吉の行方を知つてゐるものはありませんでした。

『多分自働ポンプと云ふ便利なものが出來たので、村に居堪らなくなつて、夜逃げをしたに相違ない！』

そんな事を物識り顔に云ふ男もありました。さうしてゐる中に、村の人達は三吉の事をすつかり忘れてしまひました。

五

それから五年程經つてからの事でした。その村の者達が十人程寄り集まつて、東京見物に出かけました。みんな脊中に風呂敷包を脊負つて、脚絆を穿いて、ぶら〳〵方々見物してゐました。電車、自働車の織るやうに走つてゐる町を、『それあぶない、ほれ、あぶない』と云つて、逃げまはりながら歩いて行くのですから、見物と云つても、なかなか暢氣なものではありませんでした。

上野から淺草に行つて、觀音樣の境内、仲見世の賑ひに吃驚して、それから雷門前まで來ると、何處かでチャンチャンと半鐘が鳴りました。

『火事だ、火事だ、わつ！』と云つて東京見物の村の連中は、背延びをしましたが、廣い東京では、何處に火事があるのか、見當がつきません。

その中に、ガランガラン、シュツシュツシュツシュツと云ふ例の自働ポンプが、藏前の方から走つて來ました。續いて又一台、それにつゞいて又一台——それはみんなが村で見たやうな小さなものではありませんでした。眞赤に塗つてある大きな〳〵自働ポンプで、兵隊さんのやうな服を着た人達が、その上に乘つてゐます。それがまるで疾風のやうに、砂煙を立てて走つて行きます。眼にも止らない早さです。

みんなはさう云ふ素晴らしい自動ポンプが、何台も續いて走つて行く壯觀を見た事がないものですから、すつかり膽を潰してしまつて、唯『あれよ、あれよ』と眼を見張るばかりでした。

丁度三台目の自動ポンプが、村の團隊の前を通つた時でした。

『三吉が、あれ、三吉が！』と見てゐた人が叫びました。

その聲に驚いて見ると、なるほど、あの三吉、村の三吉が、その自動ポンプの一番頂邊に、例の兵隊さん見たやうな服を着て、勇ましく乘つてゐました。眞直ぐに行手を睨むやうに見つめてゐる三吉の眼には、そこに生れ故郷の村の人々が立つてゐると云ふ事は映らない樣子でした。

『ああ、三吉だ！』

『ほんたうに三吉だ！』

さう云つてゐる中に、三吉を乘せたその自動ポンプは、砂煙を後に殘して、瞬く間に、向うの町角に消えて行つてしまひました。

みんなは呆氣に取られました。

『をい、三吉が腰にあの小さい鳶口をぶら下げてゐたのを見たかね？』と暫くして一人が云ひました。他の人達はそれに氣がつかなかつたと云ひました。

『それぢや氣のせゐだつたかな。――いや、確にぶら下げてゐたと思つたがな』とその男も十分な自信はないらしく、頻りと首を傾げてゐました。

人々は三吉が村から出ると、東京に出て來て、たうとうこんな風に出世したといふ事について語り合ひました。――村の人達から見ると、實際出世と見えるのでした――

だが、それは兎も角として、若し村の人の一人が云ふやうに、若し三吉が腰にあの鳶口をぶら下げてゐたのがほんたうだつたとしたら、それは多分、三吉が昔を忘れ兼ねて、今でもその鳶口を、自分のお守りとしてゐるのでせう。（終）

春の雪

相馬御風

○

もう二三日で彼岸だといふのに、昨日今日の寒さと雪の降りやうは、何といふことであらう。此の冬は年の暮から正月へかけて不思議に快晴の日が多く、氣温も高く、雪も降らなかつた。

「なんといふ暖かないゝお正月だらう。でも雪がないと何だか本當にお正月らしい氣持がしなくて物足りないね」かうした贅澤めいた言葉をすら私達が取交はしてゐたほどに、今年の正月は北國の正月らしくなかつた。「今年はもうこんな風にろく／＼雪が降らないで春になるのではなからうか」時に私達は又そんなに思つたりしたこともあつた。しかし、私達のさうした言葉を聞くことを、老人達はあざ笑ひでもするやうに云ふのであつた。

「そんな筈はありませんや。降るべき時に雪が降らぬと、いつまでも／＼春ぎたないものでね」

更に又彼等は云つた。

「昔から彼岸過ぎても七はだれつてことをいひますが、かういふ年はとかくそのやうになり勝ちなものでね。」

いかにもさうした老人達の言葉通りであつた。此の頃は何だか正月とは反對に、こんな風ではこれから又冬に逆戻りするのではないかといふ心細い氣持さへするのである。

それにしても、老人達が先頃口癖のやうに云ふ「春ぎたない」とか「七はだれ」とか云つたやうな言葉は、何といふ味はひの深いことであらう。暦の上ではすつかりもう春になつてゐながら、いつまでも〳〵寒さが薄らがない。雪が降る霰が降る。さうした有様を誰が云ひ出したともなく「春ぎたない」といふやうな短い言葉で現はし、それが又いつしか立派な成語となつてゐる。それから又彼岸過ぎになつても、まだ時々雪が降つたり雪が降つたりして、容易に春になり切らない。——それには更に「彼岸過ぎても七はだれ」といふ諺めいた通用語が出來てゐる。かうした言葉はその初め誰が云ひ出したかは知るよしもないが、いつとなしにその地方の通用語となつてゐる——その事が私達には今更の如く興味ふかく感じられるのである。

わが國の上古人の間には言葉の神秘性を現はす爲めに「言靈」といふやうな言葉があつたが、まつたく言語の生成といふ事には底の知れない微妙さがある。わが國上代人の好んで用ゐたかの枕詞といふ一種特別な言葉の使用法の如きも、それがどうして生れたか、何人がそれを最初に用ゐたか、どうしてそれが廣く用ゐられるやうになつたか、といふやうな事を考へると、そこには果しない興味が湧くのを覺える。「妻」には「わか草」、「うき寢」には「水鳥の」、「黑き」には「ぬば玉の」、「ひとり」には「かしのみや」、「みち」には「玉ぼこの」、「みだれ」には「ときぎぬの」、「長き」には「菅の根の」といふやうに、或語を言ひ出さうとする時に調べをとゝのへるべくその上に被らせて用ゐる一定の語がかうしてちやんと出來上るまでには、どんなに微妙な經過があつたことであらう。そんな事まで今更のやうに思ひ合はされるのである。

○

それはさうと、今年はまあ何といふ「春ぎたない」ことであらう。この樣子では四月になつても、雪のふる日があるのかも知れない。そんな事を思ふと、たまらなく心細い氣もする。しかし流石に彼岸に近いだけあつて、雪にうもれながらもどの木の枝を見てもいつとなしに芽がふくらんでゐる。梅の蕾などもすつかりもう色を見せてゐる。川の縁などを通ると猫柳の花がいつの間にか銀色に光つてゐる。庭隅に積み重ねた葉などをのけて見ると、その下にはもう鮮やかな色の草の芽が一面に伸び出てゐる。それらを見ると、

今更に春を忘るゝ花もあらじ安く待ちつゝ今日もくらさん

といふ西行の歌が、おのづと思ひ出されたりするのであつた。それと同時に、自然の生命の靜かさといふことに對して、私達は今更のやうな驚異をも感じないではゐられぬのであつた。一見何の活動もないやうな雪にうづもれた地上にも、かうして自然の生命は一瞬の休みもなしに靜かな、しかし此上なく根强い活動をつゞけてゐる。待つても待たなくても春はもうぢきやつて來るのだ。

○

ツルゲーネフだつたかの作の中に、柏の木といふものは新らしい芽が出なければ古い葉が落ちないといふやうな事が書いてあつた。それを讀んで以來私は每年早春の季節になると、乾からびた大きな葉をしふねく着けてゐる柏の樹に、注意するやうになつた。そして

新らしき芽ぶきを待ちし柏木の枯葉もいつか散りにけるかも

新らしき芽ぶきを待ちてちるといふ柏の枯葉見ればいとしも、

いつぞやこんな歌をよんだことさへあつた。

つひ此の間も私はある家の前庭に立つてゐる一本の大きな柏の木を見ながら、人々とその樹のさうした特性について語り合つた。深く積つた雪の中では、とりわけ木々の姿が目につくものである。常盤樹の緑の色も、雪中見ると格別の趣がある。葉の落ちつくしたさまざまな樹の幹と枝との面白味も雪の中で眺めると一層深く感じられる。が、さうした中にあつて、とりわけ私の目を惹くのは、あの澤山の大きな枯葉をしつかりと枝につけたまゝ立つてゐる柏の樹である。その重なり合つて枝にしがみついてゐる柏の枯葉が、寒い風に吹かれて、鳴つてゐる一種異様な音も、私には何となく深いさびしさを誘つてゐるやうに聞える。

「柏の木だけはなぜあんなに冬になつても葉を落さないのだらう。」一人が云つた。

「冬中ひどい風に揉まれながらあんな風に落ちないところを見ると、よほどしつかり喰付いてゐるものと見えるねえ。」他の一人が云つた。

「さうだ、風どころか人間の手でもぎ取らうとしたつて容易に離れないほど、かたく喰付いてるよ。」更に他の一人が云つた。

「ところがね、それほどしふねく喰付いてゐるあの枯葉も、春になつて新らしい芽が出て來ると、いつの間にか散つてしまふんだからね。自然の作用つて全く不思議なもんだよ。」

こんなことを云つたものもあつた。

ところがかうして他の樹々に交らずに雪の中でも枯葉を落さずにゐる柏の樹を見ると、不思議に心をひきつけられるが、それでゐて春になつて新芽の伸び出るのを待つてその枯葉を落す折の柏の木の風情を誰一人私達の間で注意して來たものがない。

「さうはいふものゝ誰か柏の枯葉の散るところを注意して見たものがあるまい。」その折もこんなことを一人が云ひ出した

ので、私達は皆一緒に大笑したのであつた。それほど柏の木の枯葉が落ちて新芽の出るのは、人目に立たないことなのである。まつたく文字通りに「いつしかに」である。

だが、これは柏の樹の枯葉の散るのについてばかりでなく、總じて自然界に於ける生命の活動や季節の推移には、この「いつしかに」が多い。随つて自然界の推移の形容詞には此の「いつしかに」といふ言葉が最もふさはしい。自然界の推移どころか、此の私自身の生涯すら顧みれば凡ては此の「いつしかに」で云ひ盡され得るやうな氣さへするのである。

○

私の家の裏畑には父の死を紀念するために私みづから植ゑた桐の木が、すく〳〵と群り立つてゐる。勢よく眞直に伸びた其の幹、思ふさまひろがつた其の枝――葉を落して裸になつた桐の木の姿は、いかにも氣持のよいものである。しかも今日此頃眞白に積つた雪の中でそれを見るのは、一層快い。僅十本ほどの木ではあるが、それでも自分の手で植ゑもし育てもしたのが、かうして一本も枯れずにすく〳〵と元氣よく伸びて來たことを思ふと、たまらなく嬉しくもあり、懐かしくもある。苗木屋から買つて來た僅に二寸ほどの太さのを植ゑてから、まだ漸く足掛七年しかたゝないのであるが、幹の太さはもう一尺以上になり、高さは家の屋根を越さうとするまでになつてゐる。これも全く「いつしかに」である。

ちゝのみの父のかたみの裏畑に霜月われは桐苗を植う

桐苗を植うとわが掘る畑の土はさく〳〵として音のよろしき

ましろなるをちの山なみ眺めつゝ桐苗を植う朝のはたけに

あの折こんな歌をよんだことなども、今更のやうにおもひ出される。

時々私はその裏畑に出て、桐の木の幹を掌で撫でゝ見たりした。そしてその度に私にかうひとりごたずにはゐられなかつた。

「いつの間にかよくもこんなに大きくなつたものだ。

いかにも私はその木を植ゑるために聊かの力を費しもし、またそれを育てるために多少の面倒も見てやつた。しかし、此等の木のかくまでに伸び且ふとつた活動には、私の費した勞力や心づかひなどは、與ふるところ極めて微々たるものに過ぎなかつた。しかも、私は彼等の成長について、いやそれどころか彼等の存在そのものをすらも、大概の時間を全く忘れて過ごして來た。今私が彼等を育てたものは自分であると思つたことが、餘りに甚だしい潜越であつたと自ら恥ぢずには居られぬほど、それほど私は彼等については無頓着であつた。

それにもかゝはらず、彼等は伸びた。それにもかゝはらず彼等は肥つた。凡ては「いつしかに」の働きの結果である。かう思ふと、私は今更のやうに其の所謂「いつしかに」の活動の偉大に驚かずには居られぬのである。

子が生れる、育つ、そしていつの間にか成長する。毎日傍で見てゐる自分の子どもたちの存在と成長とに對してすら、私達は時々大きな驚きを感じさせられる。矢張「いつしかに」働いてゐる力の偉大に對する驚異である。しかも、多くの場合私達はその偉大な力の働きを忘れてゐる。そして自分達の小さなはからひ、こざかしい思はく——さうしたものにばかりこびりついて、一面に於て自分といふものをあまりに誇大視しながら、他面に於てあまりにせゝこましく自らを苦めてゐる。

今更に春を忘るゝ花もあらじ安く待ちつゝ今日もくらさん

かうした境地にのみ安住出來ないにしても、せめては今少し私達は「いつしかに」の偉大さに信頼することが出來ないものだらうか。

○

今日はまたとりはけひどい吹雪だ。大寒の頃にふさはしいやうなすさまじい西北の風が絶え間なしに雪を吹き捲つてゐる。波の地響が家をゆるがしつゞけてゐる。彼岸の入りはもう明日に迫つてゐるのに。これはまた何としたことだ。

それにしても、見るかぎり大地を蔽うてゐる深い雪の下では、着々として草の芽が頭をのぞかせる準備をしてゐるのであらう。暴風に吹きさらされ、絶えず雪や霰をふきつけられながらも、木と云ふ木の芽は刻一刻にふくらみつゝあるのであらう。そのあせらず、無理をしない靜かな生命の活動——それを思ふと、何といふことなしに私の心も落ちついて來るやうな氣がする。

　春よ來い、
　早く來い、
あるきはじめた
みいちやんが、
赤い鼻緒の
チヨヂヨはいて、
おんもへ出たいと
待つてゐる。

子どもたちの歌つてゐるこんな歌の文句を聞くにつけても、雪の中ながら春がもうすぐそこに來てゐるやうにさへ感じられる。

待つてゐる者にも、待つてゐない者にも、春はひとしくやつて來る。子どもたちは「春よ來い、早く來い……」といふ歌をうたひながらも、雪が降れば雪をよろこび、霰が降れば霰を樂んでゐる。春が來れば、彼等は更に私達にはとてもわからない大きな歡びを得るのであらう。やはり幼な兒の心は尊い。

子供といへば――此の地方の子供たちは、春が來て雪が消えると毎年きまつて縄飛びを初める。それにつゞいて獨樂を廻し、凧を揚げる。久しく雪に蔽はれてゐた大地が、いよ〳〵再び現はれる。その久しぶりで現れた大地を踏む快さは、雪國に住んでゐる者でなくては味へない快さである。たゞ無暗と歩いたり、走つたりして見るだけでも、それはたまらなく快いものである。子どもたちが久しぶりで現れた大地の上で、先づ縄飛びをし獨樂を廻すのも、やはり何よりも大地そのものゝ懐かしさに引かされるからであらう。しかもそれと同時に彼等はながい間頭の上を低く蔽うてゐた灰色の雪雲の代りに、はてしもなく晴れ渡つた青空を見る。久しぶりで踏む大地の懐しさと同じく、久しぶりで仰ぐ青空の懐しさは、ながい陰欝な冬を持つ北國の住民でなければ味へない心持である。子どもたちが久しぶりで仰ぐことの出來た大空に向つて、先づ以て凧を揚げにかゝるのも、要は心ゆくばかり青空そのものと親しみたいからであらう。

やはり幼な兒の心は尊い。

○

そんな事を思ふと、すぐに聯想されるのは子どもたちと遊び戯れることを最上の樂しみとしてゐたかの良寛和尚の生活である。

こどもらと手たづさはりて春のぬにわかなをつめば樂しくあるかも
いざ子ども山邊にゆかむさくら見にあすともいはゞちりもこそせめ

霞立つながき春日にこどもらとあそぶ春日はたのしくあるかな
こどもらと手まりつきつゝこの里に遊ぶ春日はくれずともよし
この宮の森のこしたに子どもらと手まりつきつゝくらしぬるかな

と歌ひ

冬ごもり春さり來れば飯乞ふと、草のいほりを立ち出で、里にいゆけば玉桙の、みちのちまたに子どもらが、今は春べと手まりつく、ひふみよいむな、汝がつけばあはうたひ、あがつけば汝はうたひ、つきてうたひて霞立つ、長き春日をくらしつるかも

かすみ立つながき春日を子どもらと手まりつきつゝけふもくらしつ

と歌ひ、更に

裙子短今褊衫長、　騰々兀々只麼過、
陌上兒童忽見我、　拍子齊唱放毬歌。

×

十字街頭乞食了、　八幡宮邊方徘徊、
兒童相見共相語、　去年癡僧今又來。

×

也與兒童鬪百草、　鬪去鬪來轉風流、
日暮寥々人歸後、　一輪明月凌素秋。

などゝ吟じた良寛その人の心もちは何といふ尊さを持つてゐることであらう。

○

子どもと共に遊ぶ——それは決して馬鹿げたことなどではない。むしろそれは此上なく尊い心の現れである。私達はみづから省みてさうした尊い心のあまりに缺けてゐることを恥ぢないでは居られぬのである。

つい先頃も何かの話のつひでに、或忙職に就いてゐる人がいかにもしみじみとこんなことを云つてゐたのを聞いた。

「私達のやうに仕事にあくせくしてゐる者は、どうも家族と本當に溶け合ふ時間がなくて困ります。せめて自分の子どもたちとだけでも本當に溶け合つて樂しむ時間をもつとほしいと思ひますが、兎角それが得られないのです。時々さうした氣持が心の底から湧き起るやうなことがあつても、つひ私達は「物」を與へることによつて胡魔化して過ぎようとする場合が多いのです。兩親に對しても、妻に對しても、子どもたちに對しても、或はその他の親しい人々に對しても、兎角私達は何等かの「物」を與へることによつて相手をよろこばせて、それで本當の愛の要求を胡魔化して濟さうとする淺ましい心があつて困ります。

本當の愛は「物」を與へられた歡びや、「物」を與へてよろこばれることから得る得意感などであつてはならないと思ひます。なぜ私たちは自分の子どもたちとだけでも本當に溶け合ひ、本當に樂しむやうな心を、せめて時々でも持つことが出來ないのでせう。「物」によつて愛を代表させようとしては、かへつて「物」によつて本當の心と心との融合を妨げられつゝあるのでせう。」

此の話を聞いて、私ははつとしたのであつた。さうした淺ましい心を私もあまりに多くの場合持ちすぎてゐるからだ。いや私ばかりでなく世の中の人の大概はそれだ。

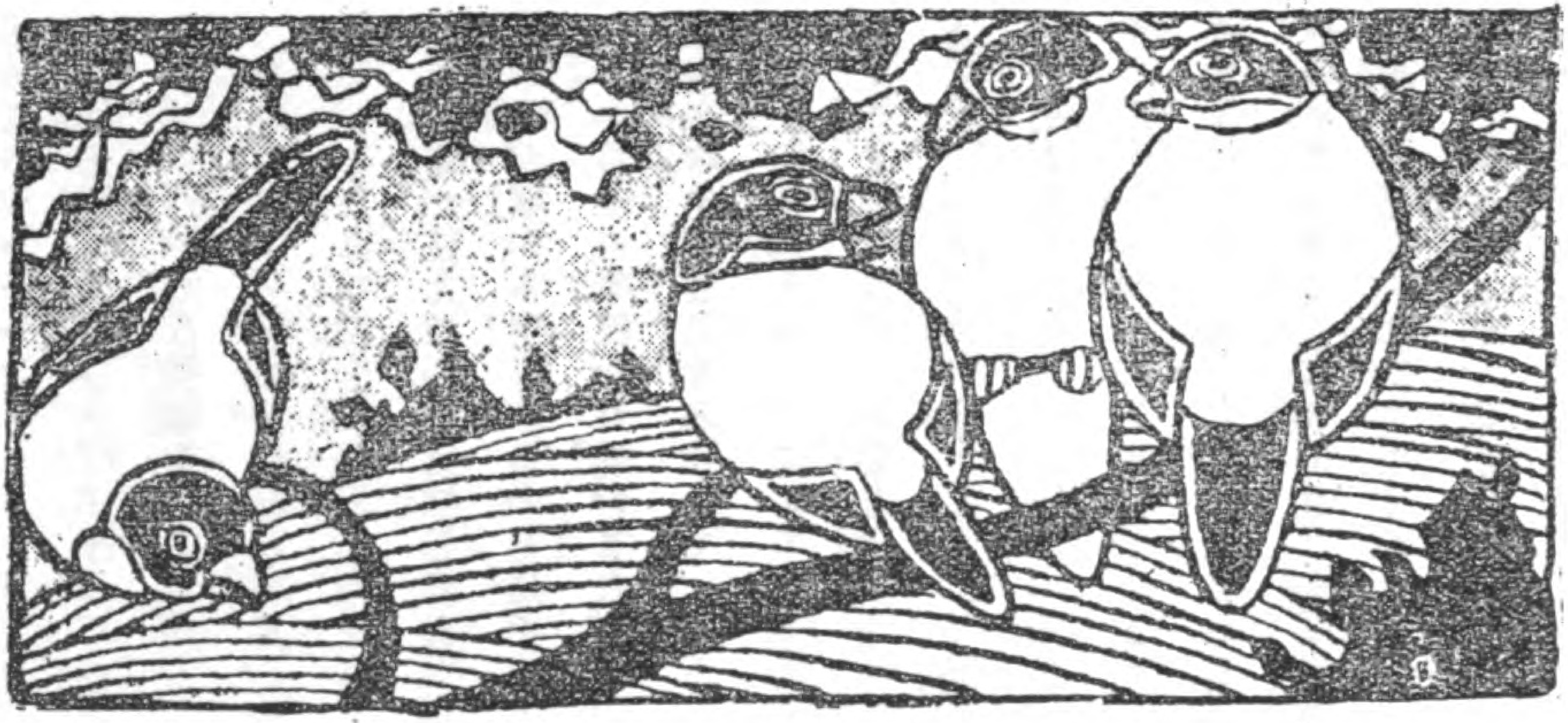
良寛和尚が到るところでこどもたちの最も親しい友人となり得たのは、決して彼が子どもたちに與へた「物」のおかげではなかつたにちがひない。しかし、私たちは自分の子どもに對してすら、何かしら「物」を與へることによつて彼等の歡心を買はうとする場合が多いのだ。子どもたちが私に求めて居るもの――眞に求めてゐるものは、決して「物」ではない筈だ。しかも、私達は彼等の本當に求めてゐるものを、「物」によつて胡魔化さうとしてゐる場合があまりに多いのだ。これは單に子どもに對してのみではない。あらゆる人に對してさうだ。人間同志がお互に求め合つてゐる心は、決して乞食の心ではない。しかるに、なぜ私達はお互に乞食に對するやうな心もちで相對さねばならぬのか。

○

つい今し方まで「春よこい、はやくこい」といふ歌をしきりに歌つてゐた子どもたちは、一しきりすさまじい音を立てて霰が降つて來たのに急に氣を變へて、こんどはこんな歌をうたひ出した。

あられがピョンピョン
とびつくら
高い屋根から
とびつくら

そしてガラス窓をすかしてたまらなく面白さうに霰の降るのを眺めてゐる。どれ、私もこんなことを書くのをやめて、彼等の仲間になつて一緒に霰の歌でも歌ふことにしよう。（三月十七日）



悲しき癩病者との對話

グザヴィエ・ド・メストル作
田沼利男譯

あゝ、しばし思ひをひそめよ、かの快樂と權勢と豐富とに取繞らるゝ人々のその放肆なる誇りなるものを。あゝ、しばし思ひをひそめよ――よし世人が舞ひ狂ふとも、いかに多くの彼等が苦めるか、いかに多くの彼等が悲歎の苦き盃を干すか。いかに多くの彼等が劇しき貧苦の數々によりて身をふるはすか。（トムスン四季の歌『冬』

オスト市（譯者註、アルプス山中のオスト谷にある小都會、現今の人口七八〇〇、オスト谷はボー川の支流たるドアール川によつて作られてゐる。）の南部は今では殆ど人家を見ず、こゝがその昔繁華した都會かと思はれるほど荒涼たるものである。現今、そこには幾つかの畑と、青草の生へた牧場とが見られるが、それらの牧場の一方の端は、ローマ人がこの都市の外廓として築いた古代の城壁によつて限られ、他の端は二三の庭園によつて境されてゐる。かういふ淋しい場所ではあるが、それでも旅人の興味をひくことは出來る。市の門の近くに、一つの古い城跡が見えるが、これは言ひ傳へによれば、十五世紀の昔、ルネ・ド・シャラン伯爵が嫉妬のあまり

ン、即ち餓ゑの叫びと呼ぶやうになつたのである。眞疑はずゐぶん疑はしいが、この逸話を眞實と思ふほど感じ深い人ならば、このやうな廢墟を見ても懷古の情に堪へぬものがあるであらう。

少し離れて、約百歩ほどの所に、一つの塔がある。形は正方形で、古代の城壁にくツつけて、大理石を以て建てられてある。もとは城壁も大理石で包まれてゐたのだが、今は無い。この塔の名は『恐れの塔』と云ふ。土地の人は長い間こゝには幽靈が住んでゐると信じてゐたからで、今でもオスト市のお婆さんたちは、暗い晩にランプを手に持つた脊の高い白衣の女が塔から出て來るのを見た、といふ事をよく覺えてゐて話す。

今から十五年ばかり前のこと、この塔は政府の命令によつて修繕を加へられ、柵をめぐらされた。それはこゝへ一人の癩病患者を住まはせるためで、かうして社會から全く隔離した上で、病人の悲しい境遇に於て、受けられるだけの凡ての生活上の幸福を與へてやらうとしたのである。サン・モリスの慈惠病院が食料を給することになり、二三の家具と柵内の野菜畑を耕すために必要な道具とは病人に與へられた。かうして病人は長い間ただ一人でこゝに住んでゐた。顔を見る人とては、時々宗教の助けを持つて訪れる司祭と、病院から一週に一回食料を持つて來る男だけであつた。

一七九七年のアルプス戰爭の際に、オスト市に來た一人の陸軍將校が、或る日偶然この癩病者の畑のそばを通りかゝつた。戸が半分開いてゐるので、ふと好奇心に誘はれて中へ入つた。入つて見ると、質素な着物を着た一人の男が、樹に寄りかゝつて深い瞑想に耽つてゐるらしかつた。

入つて來た足音を聞いて、隠者は振向きもせず、こちらを見やうともせず、悲しい聲で叫んだ。

『誰です？　何の御用ですか？』

『あ、御免下さい。畑があんまり綺麗なもんですから、つい……。何、別にお邪魔はしない積りです。』

『來ちやいけません、來ちやいけません。』と男は手で制した。

『わたしは癩病患者です……』

『あなたが癩病患者であらうと何であらうと、逃げはしません。わたしは不幸な人を見て逃げたことは一ぺんもないんですから――。しかし、わたしがゐてお邪魔なら、行きます。』

『ぢや、どうぞいらしつて下さい』と云ひながら、癩病患者は急に軍人のゐる方へ顏を向けて、『この顏を見た上で、ゐる勇氣がおありなら――。』

將校は思はずゾッとして突立つた。病のためにその男の顏は全く頽れてゐたのである。

が、暫くして將校は語を次いだ。

『をりませう、あなたがさう云つて下さるなら喜んでをりませう。わたしは偶然にこゝへ來たんですが、今は興味に引き止められて去り兼ねます。』

癩病患者『興味に！……わたしはたゞ人の憐れを引いただけです。』

將校『さういふあなたを少しでも慰めることが出來たら、わたしは幸ひだと思ひます。』

癩病者『いや、かうして人の顏を見るだけでも、わたしにとつては大きな慰めです。人の聲はわたしのところから逃げ去るやうに思はれます。

將校『ぢやア暫くあなたとお話しながら、お住居を見せてくれませんか？』

癩病者『ようございますとも、では御案内いたしませう。（と云ひながら、癩病者は大きな中折帽を被つたが、帽子の縁がその顏を隱してしまつた。）こゝから南の方へ向つて參りませう。小さな花壇を作つてをりますが、多分あなたにお氣に入るでせう。かなり珍らしいものもあります。アルプスで繁茂してゐる野生の草花の種をみんな集めて來て、かうしてこ

こへ蒔いて丹精して、澤山殖えるやうに、花も綺麗になるやうにと骨折つてゐます。』

將校『なるほど、これなんかわたしには全く初めてです。』

癩病者『一寸、この薔薇を御覧なさい。刺の無い薔薇です。アルプスもよほど高い所へ行かないとありません。でももうこの特徴をなくして來ました。栽培して数が殖えれば殖えるほど段々に刺を出して來ます。』

將校『恩知らずの象徴になりますね。』

癩病者『お氣に入つたのがあつたら、安心して取つて下さい。お持ちになつても少しも危險なことはありません。わたしは種を蒔いて朝晩水をかけてやつて眺めて樂しんでゐますが、決して手を觸れません。』

將校『どうしてです?』

癩病者『病毒に汚れるといけませんからね。さうなるともう人にやれませんから。』

將校『誰にやるお積りなんです?』

癩病者『病院から食料を持つて來てくれる人たちは平氣でこれを取つて花束を拵へます。町の子供も時々やつて來ます。門のところまで來ると、わたしは直ぐに塔へ上つてしまひます。わたしの顔を見て怖がつたり、又わたしの病氣が傳染りでもするといけないと思ふからです。窓から見てゐると、さんざ遊んだりふざけたりして、終ひに花を取つて行きます。それでも歸る時には、みんなわたしの方を向いて、笑ひながら「癩病やみの叔父さん、さよなら」と云ひますが、一寸嬉しい氣もします。』

將校『ずゐぶん色んなものを集めましたねえ。葡萄だの何だの、實のなる樹もだいぶありますね。』

癩病者『樹はまだみんな若いです。自分で植ゑたんですからね。この葡萄もやつぱりさうですが、そら、城壁の上まで行つてるでせう。このくらゐ大きくなると、一寸した散歩場が出來ます。こゝがわたしの一番好きな場所なのです。……

この石の上をずうッと上つてゐらつしやい。これはわたしの拵へた石段です。さ、この城壁に凭ッかゝりなさい。』

將校『なるほど、こりやア好い場所ですねえ！　隱者の瞑想には恰好ぢやありませんか！』

癩病者『えゝ、わたしは大好きです。こゝから野原や、畑で働いてゐる人たちを眺めるのです。牧場にあるものもみんな手に取るやうに見えますが、わたしの方は誰からも見られません。』

將校『こゝにゐると全く靜寂といふ感じが味はへますね！　町の中にゐながら、まるで砂漠の中にでもゐるやうな氣がしますよ。』

癩病者『靜寂といふものは森の中や岩石の間にばかりあるものとは限りません。世に見捨てられた不幸な者は何處にゐても靜寂です。』

將校『一體どういふ風にしてあなたはこゝへ住むやうになつたんですか？　あなたはこの國で生れたんですか？』

癩病者『わたしは海岸で、オネーイ公國で生れたのです。こゝへ住むやうになつてから、まだ十五年にしかなりません。わたしの身の上話といつたところで、災難や不幸の外にお話しする事もない單調なものです。』

將校『何時もお一人でゐたんですか？』

癩病者『兩親は子供の時亡くなりましたから顏はちつとも覺へてゐません。妹が一人生き殘つてゐましたが、それも二年ばかり前に死にました。友だちは一人もありません。』

將校『まア、お氣の毒な！』

癩病者『これが神の御攝理です。』

將校『お名前は何と仰しやるんですか？』

癩病者『あ！　わたしの名ですか、わたしの名は恐ろしい名です、「癩病やみ」といふ名です！　先祖から讓り受けた名

や、生れた日に宗教によつて與へられた名は、誰一人としてこの世に知る者はないのです。……「癩病やみ」――と云ふのが、わたしが世の人々から與へられた、たつた一つの名前です。わたしが誰であるか、永久に知らないでゐるやうに、わたしは願つてゐます。』

將校『その、二年前に亡くなつたといふ妹さんは、あなたと一しよに住んでいらしたんですか？』

癩病者『妹は、今あなたが御覧になつてゐるこの住居に、五年間わたしと一しよに暮しました。わたしと同じやうに不幸だつた妹はわたしと共に苦しみを分け合ひ、わたしもまた、妹の苦しみを和げてやらうと努めたのです。』

將校は『こんなに甚だしい孤獨生活をしながら、あなたは今一體何をして日を送つていらつしやるんですか？』

癩病者『さア、わたしのやうな隱者の生活をお話したところで、社會生活の中に華かな幸福を得てゐる人々には、全く單調で詰らないでせう。』

將校『あゝ、あなたはこの世間をあまり知つていらつしやらないですね。世間はたゞの一度もわたしに幸福を與へてくれたことはありません。わたしは加自ら好んで隱遁生活をするくらゐです。あなたの考へとわたしの考へとの間には、多分あなたが思つてらつしやるよりももつと多くの共通な點があるでせう。ですが、白狀しますが、この隱遁生活が永久に續くものとしたら、わたしは恐ろしいです。その觀念を得るのに一寸困難を感じます。』

癩病者『自分の部屋を愛する者はそこに平和を見出すであらう――と「基督の模倣」は我々に敎へてゐますがわたしも、近頃ではこの言葉の眞理をしみ〴〵と感じるやうになつて、非常に慰められてゐます。孤獨の感じは仕事によつて和げられるものです。ですから、まだ働くことの出來る人間は、全くの不幸な人間では決してありません。わたしが何よりの證據です。陽氣の好い時季には、畑を耕したり、花壇の手入れをしたりして、相當な仕事になります。冬は籠を拵へたり、筵を編んだりして暮します。わたしは自分で着物も作るし、病院から持つて來る食料品で、毎日の食物も自分で調理

します。仕事をした殘りの時間は祈りをして過ごします。かうして一年經つてしまふのですが、經つて見ると、何だかずゐぶん年が短かゝつたやうな氣がします。』

將校『どんなに長いことだらうと思はれますがね。』

癩病者『病氣や悲しい事などがあると時間が長いやうに思はれますが、時は常も同じ速さで過ぎて行くのです。それに、不幸のどん底にある者には、一般の人が知ることの出來ない或る樂しみがあります。あなたが聞いたら、さぞ變に思ひなさるでせうが、それは自分が生存して、さうして呼吸をしてゐるといふ樂しみです。わたしは陽氣の好い時には、殆んど一日の大部分、この城壁の上にぢつと坐つて、新鮮な空氣を吸ひ、自然の美を樂しみながら、時を過します。その時はわたしの頭の中は全くぼんやりとして取りとめのないものになり、胸のうちには悲しさが湧いて來ますが、さうかと云つて悲しさに堪えないといふほどではないです。わたしは別に何處といふこともなく、足もとの野原や、わたしたちを取りまいてゐるあの岩石などを眺めます。かういふ色々の景色はもうすツかりわたしの記憶のうちに刻み込まれてしまつて、云はゞわたしの身體の一部をなしてゐると云つてもいゝくらゐなものです。まるで友だちにでも會ふやうに、每日眺めて喜んでゐます。』

將校『わたしも屢それと同じやうな事を感じます。悲しみに胸が一ぱいになつてどうにも仕樣がない時、と云つて、他の人間からは慰めを得られない時、わたしは自然の風光に接して、それから慰安を求めます。さういふ場合には却つて岩石や樹木などが、自分の心の欲するものを與へてくれるので、わたしはかういふ物に親しみを持つんですが、神に創造られたものは凡て神が自分に與へてくれた友であるといふやうな感じがします。』

癩病者『さう仰しやつて下さると、わたしは自分の心持ちを說明するのが大へん樂です。實際、わたしは自分が每日見、さうして我が終生の伴侶とも云ふべき、これらの自然物を愛してゐます。ですから、每日、日が暮れて塔の中へ引込

む前に、ルイトールの氷河や、サン・ベルナール山のあの薄暗い森林や、それから又、レーム谷の上に屹然と聳えてゐるあの奇妙な峯々に向つて挨拶をします。神の力といふものは、一匹の蟻が創造られてゐるといふ事のうちにも、又全宇宙の創造といふ事のうちにも、同じやうに見られるものではありますが、山岳の偉大な光景はわたしの感覺に一層強い感銘を與へます。あの、永遠の氷に覆はれた、巨大な山塊を見ては、どうしても宗教的な驚異の感に打たれないではゐられません。しかし、自分の周圍を取卷いてゐる、この廣大な自然の畫幅のうちにも、特にわたしの氣に入つた景色があります。そら、あの、シャルヴァンソッドの頂上を御覽なさい。隱者の庵が見えるでせう？　あれなどもその一つです。荒れ野原の近くで、林の中に、たつた一つぽつんと建つてゐますが、一番最後まで夕日を受けてゐます。あそこへ行つたことは一遍もないですが、あれを見てゐると、不思議に嬉しさが込みあげて來ます。日が暮れると、畑の中に坐つて、ぢつとあの庵を眺めながら、想像に耽るのです。あれはもうわたしにとつて一種の所有物のやうになつてしまひました。以前、わたしがもつと幸福だつた時に、あすこに住んでゐたやうな氣がしてなりませんが、これは、今でこそ追憶することは出來ないが、漠然とした無意識的の記憶によつてそれが分るのかも知れない、と思つたりします。わたしは殊に地平線上で空と一しよになつてゐる遠い山々を眺めるのが好きです。これからやつて來る未來の時と同じやうに、遠い遠い隔たりは、わたしの心のうちに希望の感情を起させます。わたしには、遙か彼方に一つの土地があつて、未來の或る時期に、自分はそこで終に日頃望んでゐた幸福を味はうことが出來るのかも知れない、といふやうな氣がしてなりません。魂の底に隱れてゐる本能が、何時も、この幸福といふものを得られるやうにわたしに思はせるのです。』

將校『あなたのやうに烈しい想像力を持つてゐては、かうして自己の運命に服從し、絶望に陷らないやうにするには、ずゐぶん努力が要つたことでせうね。』

癩病者『常も自己の運命に服從してゐたやうに思はれては、少し困ります。わたしはまだ、さる隱者の到達したやう

な、あの獻身の境地には達してゐません。凡ての人間的愛情を犧牲にするといふ事はまだ成就されてゐないです。わたしの心中には絶えず鬪爭が行はれてゐます。力強い宗教の助けさへ、この想像の奔流を堰き止められないことが間々あります。その奔流はわたしを無理に押し流して、取りとめのない慾望の大海へ追ひやるのです。それらの慾望は皆、自分の少しも知らないこの人間社會に自分の心を向かはせようとするのです。わたしはこの人間社會を知らないながらに、想像によつて腦裡に寫された、まぼろしのやうな社會の映像のために始終苦しめられてゐるのです。』

將校『若しわたしの心の内をあなたに讀んで戴いて、わたしがこの人間社會について抱いてゐる觀念をあなたに知らせることが出來たら、あなたのあらゆる慾望、あらゆる悲しみは立ちどころに消えてしまふでせう。』

癩病者『二三の書物によつて、人間性の邪惡、人類一般に避けることの出來ない不幸などを知りましたが、やつぱり駄目です。わたしの心はそれを信じようとはしないのです。わたしの頭に浮んで來るのは常も、眞面目な、行ひの正しい家人の仲間とか、よく似合つた夫婦とかです。健康と、若さと、財產と三拍子揃つて、この上ない幸福を受けてゐるさういふ夫婦が、二人連れ立つて、暖い日を浴びながら、木立の中をそゞろ歩きしてゐる有樣をわたしは眼の前に浮べます。さうすると、その木立ちはわたしに影を貸してくれるものよりも一きは靑くて美しいやうに思はれ、二人を照らす陽は自分を照らす陽よりも一層輝かしいやうに思はれて、自分の運命が憐れむべきものであればあるほど、彼等の運命は一層羨望に價するもののやうに思はれるのです。春の初めに、ピエモンの風がこの谷に吹き込むと、その氣持ちのいゝ暖かさが身にしみて、思はずわたしは身震ひがします。享樂することが出來るのに自分には許されない或る無限の福樂と云つたやうなものを感じて、何とも云はれない氣持ちがします。さういふ時、わたしは部屋を拔け出して、野原を彷徨ひながら、一層自由に呼吸をします。心では逢ひたい〳〵と思つてゐるその人間に見られることを避けながら、まるで野獸か何ぞのやうに、小山の上に登つて、木の茂みの間に身を隱して、オストの町を眺めるのです。わたしがこゝにゐるといふ事さへ

もよく知らない町の人々を遠くから眺めて、自分にもその幸福の分け前をくれと、わたしは手を差しのべます。また、恥はづかしい話ですが、夢中になつて森の樹に抱きついて、どうぞこれに生命を與へて自分の友としてくれと神に願つた事も幾度かあります。けれども樹は無言です。幹は冷たく、わたしを斥けようとします。鼓動を打つて燃えてゐるわたしの心とは少しも通ずる所がありません。がつかり疲れて、この生活に厭き厭きして、わたしは再び足を引きずつて隠れ家へ歸るのです。さうしてこの悩みを神に打明け、暫く祈ると、どうにか少しは心が鎮まります。』

將校『あなたはさうして一時に肉體と精神と兩方の苦痛を受けていらつしやるんですね。』

癩病者『肉體の苦痛は精神の苦痛に比べればそれほどではありません。』

將校『では、時には痛みが止むことがあるんですか？』

癩病者『毎月、月の運行に從つて、痛みは增したり減つたりします。月が出て來ると痛みは酷くなり、それからまた段段に少くなつて、病氣の性質が變つたかと思はれるやうです。皮膚は乾いて白くなり、痛みは殆どなくなります。が、しかし、あの恐ろしい不眠といふものがなかつたら、何時だつて病氣は堪へられるでせう。』

將校『え！　眠られない事もあるんですか！』

癩病者『あゝ！　とてもあなた方には想像できないでせう！　夜中眼をつぶることが出來ずに、恐ろしい現在の境遇と望みのない未來とを見せつけられ、悶えに悶えて明かすその一夜は、どんなに長く、悲しいことでせう！　誰にも分りはしません！　夜が更けて行くにつれて、不安は段々に增して、夜明け近くなる頃には、もう何が何だか分らなくなつてしまふほど頭の中が混亂してしまひます。さうして、この時にだけしか感じない一種異様の感覺が起つて來ます。或る時は、不可抗の力が自分を引きずつて底知れぬ淵へ落し込むやうに思はれ、或る時は、眼の前に黒い點がいくつも見え、それをよく見ようと思つてゐると、忽ち電光の如く飛びちがひ、自分の方へ近よるかと思ふ間に山のやうに大きくなつて、

その重みでわたしの身體を押しつけます。また或る時は、自分の周圍から、まるで水が漲るやうに、雲が湧きあがつて、忽ちあたり一面に擴がつて、それがわたしを呑まふとします。堪らなくなつて、床の上に起きあがらうとすると、どうでせう、まるで眼に見えぬ鎖でゝも繋がれたやうな氣がして、どうにも身動きが出來ないのです。あなたは夢だとお思ひになるでせうが、夢ぢやないです、わたしは全く眼を覺ましてゐるんですからね。わたしは何時もかういふ同じ物ばかり見るんですが、これはもう他の何よりも恐ろしく感じます。』

將校『眠られない時には熱があるんでせう。さうして、その熱のためにきつとそんな精神狀態になるんでせう。』

癩病者『あ！ 熱のためだと仰しやるんですか？ ほんとにさうなら、どんなにいゝでせう！ わたしは今まで、これが氣狂ひになる前兆ぢやないかと思つて心配してたんです。實際、ずゐぶんそれで心配してたんですよ。どうぞこれが熱のためであつてくれゝばいゝと心から思ひます！』

將校『あなたのお話には全く心をひかれます。實際、かうしてあなたからお話を伺はなければ、このやうな境遇があるといふ事には全く考へ及ばなかつたでせう。けれども、妹さんがいらしつた頃は、今よりは悲しみも少かつたでせう。』

癩病者『妹の死によつてわたしはどれほどのものを失つたか、それは神の外に誰も知る者はないでせう。――こんなにわたしのそばへ寄つていゝですか？ こゝへおかけなさい、この石の上へ。わたしはその木の後へ行きませう、さうして顏を見ないで話をしませう。』

將校『何故です？ そんな方へ行かないで、もつとこちらへお寄んなさい。（と云ひながら、旅人は無意識的の動作をしたので、癩病者は急いで引込めた。）

癩病者『まア、無謀な！ わたしの手なんぞ取らうとして！』

將校『なに、わたしは喜んであなたの手を握りますよ。』

癩病者『あゝあなたと握手する事が出來たらこれが初めてでせう。わたしは誰からも手を握られたことはないんですから。』
將校『え！あの妹さんの外にあなたと同じ病氣にかゝつてゐる人と交はつたことはないんですか？　さういふ人から懐しく思はれたことは一遍もないんですか？』
癩病者『人類一般には幸福な事で、わたしと同じ病氣を病む者は、もうこの世に一人もありません。』
將校『あゝ、ぞッとしますよ！』
癩病者『あゝ御免なさい、不幸な人間はそれを人に話すのが好きですからねえ、あなたもよく知つてらつしやるでせうが。』
將校『どうぞ、どうぞ澤山話して下さい。前には妹さんが一しよにいらしつてあなたと共に苦しみを分け合つたと仰しやつたが……』
癩病者『わたしは妹があるためにまだいくらか他の人間と關係を保つてゐたのです！　が、その關係もなくなつて、今ではこの廣い世界にたゞ一人、ぽつんと取殘されてしまひました。妹の靈魂は實際天國の福樂を受けるにふさはしいもので、わたしは彼女が死んでからは厭氣が滅入りさうになるのですが、その都度彼女の事を思ひ出すと、勇氣が出て來ます。しかし、普通の病氣でしたら、不幸な者同志は互ひに慰め合つて實に親密に暮すのでせうが、何しろ病氣が病氣ですから、わたしたちはかう云ふ慰安を得ることは出來ませんでした。一しよに神に祈る時でさへも、病氣の樣子を見て心が散るといけないと思ひましたから互ひに顔を見ることを避けて、わたしたち二人はたゞ天を仰いで視線を合はせるに過ぎなかつたのです。祈りがすむと、妹は大がい自分の部屋へ引込むか、畑の向ふにある榛の木立の中へ入つて行きました。わたしたちは殆ど何時も別れて暮してゐたのです。』

將校『しかし、どうして自らそんな酷い拘束を加へたんです？』

癩病者『妹がこの病氣にかゝつて――わたしの家族はみんなこれでやられたのですが――さうして わたしと一しよの所に住まうと思つて、こゝへ來た時、わたしたちはそれまでまだ一遍も顔を合はせたことはなかつたのです。ですから、初めてわたしを見た時の驚きと云つたら、それは非常なものでした。それでわたしは妹を悲しませないやうに、又それよりも、そばへ寄つて妹の病氣を重くしては大變だと思ひましたから、仕方がなくこんな悲しい生活方法を取るやうにしたのです。妹は肺だけ侵されてゐたので、わたしは事によつたら治るかも知れないと、いくらか望みをかけてゐたのです。それ、そこに四目垣の跡が見えるでせう。今はうッちやらかしてありますが、あの頃はホップの生垣にして、ずゐぶん丹精しました。丁度畑を二つに仕切つてゐて、わたしは垣根の兩側に一寸した小路を拵へて、二人でそこを歩きながら話などしても顔も見えず、又あまり近寄り過ぎることもないやうにしたのです。』

將校『たつた一つしかない樂しみも、そんなものであつて見れば 却つてない方がいゝやうなもんぢやありませんか？』

癩病者『けれども、その時は兎に角わたしは獨りではなかつたのです。妹がゐるので、この住家も何となく陽氣でした。淋しい中に妹の足音が聞えて來ました。夜が明けて、わたしが祈りをしにこの樹の下へ來ると、塔の戸が靜かに開いて、妹の聲が何時しかわたしの聲と交さつてゐました。夕方、畑に水をやつてゐると、妹はよく夕日を浴びてこの邊を、今わたしたちのゐるこのあたりを、散歩してゐることがありました。花壇の花の上を妹の影がちら〳〵してゐるのが今でも見えるやうです。妹の姿を見ない時でも、路を歩けば彼女が摘つた花が落ちてゐるとか、通りがかりに捨てて行つた木の枝が落ちてゐるとかして、何處へ行つても妹がゐるといふ事が感じられたのです。けれども今は……わたしは獨りぼつちになつてしまひました。わたしの周圍にはもう活動もなければ生命もありません。妹が氣に入りの木立へ行く路はもう草で隱れてしまひました。わたしのことで氣を使つてゐるやうには見えませんでしたが、始終わたしを避

ばせようと心がけてゐたのです。夕方、自分の部屋へ歸つて見ると、新しい花をさした花瓶がおいてあるので、びつくりしたこともありました。又、時には自分で丹精して作つた立派な果物などを持つて來てくれたこともあります。わたしはその贈物の返禮をすることは憚つてしませんでしたし、もう決して自分の部屋へ入つてくれるなとも云ひました。けれども、誰が兄妹の愛情を抑止めることが出來るでせう。妹がどんなにわたしを愛してゐたかは、このお話だけすればよくお分りになるでせう。――或る晩、わたしは恐ろしい苦痛に惱まされて、部屋の中を大股に歩き廻つてゐましたが、眞夜中頃になつて、一寸休まうと思つて椅子に腰かけたのです。すると口のところで微かな物音が聞えました。何だらうと思つて、近寄つて耳を澄すと、どうです！妹が戸口の外で祈つてゐるぢやありませんか！妹はわたしの呻き聲を聞きつけて來てくれたんですが、邪魔をするといけないと思つて、中へは入らずに、戸の外にゐて、場合によつては直ぐわたしを助けられるやうにしてゐたのです。妹は低い聲でミゼレレを唱へてゐました。わたしは戸口のそばに跪づいて、そのまゝ心の中で妹の祈りに和きましたが、眼は涙で一ぱいです。こんないぢらしい愛情を見て、誰が感動しない者があるでせう！妹の祈りが終つたと思ふ頃、わたしは低い聲で、「もうお歸り、少し良くなつたやうだ。お前のその心掛けに報酬を下さるやうに、神樣にお願ひしよう。」と云つてやりました。妹は默つて部屋へ歸りましたが、祈りは聽き容れられたのでせう、わたしはそれから數時間安らかな眠りをすることが出來ました。』

將校『妹さんが亡くなられた當座はどんなに寂しい事でしたらう！』

癩病者『それから長いこと、氣が拔けたやうになつて、自分の不幸がどれほどのものであるかといふ事が、自分ながら分りませんでした。やうやく我に返つて、自分の境遇を見分けられるやうになつた時分には、氣が狂れさうになりました。この時分の事はわたしにとつては永久に二つの悲しい思ひ出を殘すでせう。一つはわたしの一番大きな不幸、も一つはその不幸によつて生れようとした恐ろしい罪です。』

將校『罪！　あなたが罪を犯さうとは思はれませんがね。』

癩病者『でも、全くの事實なんです。あの時分の事をお話しすると、大變あなたの信用を失くしてしまふに違ひないですが、わたしは自分を眞價以上に見せたくはありませんからありのまゝにお話します。どうぞわたしを憐れんでやつて下さい。――その時分もう幾度か、自ら生命を斷つてこの堪へがたい生活から逃れやうとする考へが頭に浮んだのですが、その都度神を恐れる心がそれを妨げてゐたのです。ところがその時ごく詰らない、見かけは大して自分を惱ますとも見えなかつた事件のために、わたしは永久に身を滅さうとしたのです。妹が死んでから、又一つの悲しい事が起りました。數年前から一匹の小犬がわたしたちの住家へ來るやうになつて、妹はそれを大變可愛がつてゐました。で、實際、妹が死んでからといふものは、この小犬が自分にとつてほんとうの慰めとなつてゐたのです。

　この犬がわたしたちの住家へ入り込んで來たのは、醜ない犬だつたからでせう。みんなから足蹴にされてゐたのですが、それでも癩病やみの家にとつては一つの寶です。この友をわたしたちに與へて下さつた神の惠みを感謝するために、妹はそれに奇蹟といふ名をつけました。この名を思ふと、その醜くさや、何時も變らぬその快活さと對照されて、わたしたちは思はず微笑むことがよくありました。出來るだけは用心しておいても、時々外へ拔け出して困りましたが、しかし、わたしは別にそれが人に害を與へるとは思はなかつたのです。ところが、町の人はそれを見て驚いて、わたしの病氣の種を蒔くものと思つたのです。で、みんなで相談して司令官に訴へたもんですから、司令官は直ぐに犬を殺せと命じて二三の兵士をよこしたのです。兵士たちは町の人と一しよにわたしの住居へやつて來て、わたしの見てゐる前で犬の頸に繩をつけて引きずつて行きました。畑の入口のところまで引きずられて行つた時、わたしはもう一ぺん見ないではゐられませんでした。すると、犬の方ではこちらを振向いて助けを求めるやうな振をするのですが、わたしにはどうにもなりません。ドアール川へ投げ入れて殺してしまふ筈でしたが、外に待つてゐた町の奴等は出て來るや否や石をぶつけて殺して

しまひました。その啼き聲を聞いてから、部屋へ歸りましたが、膝が震へて立つてゐられないで、寢床の上にがツくり倒れてしまひました。その時の氣持は何と云つたらいゝか分りません。嚴しいには相違ないが、兎に角正當なこの命令が、わたしに全く無益で、殘酷な命令のやうにしか思へませんでした。今考へて見ればその時の自分の氣持が恥しいですが、それでもあの事を思ひ出すと、今でもやつぱり落ついてゐられないほどです。それから終日悶えどほしに悶えてゐました。生命のあるものはもうこれだけといふ、その最後のものを奪はれたのですから、わたしはいくら悲しんでも悲しみ足りなかつたのです。さうして、この新たな悲しみのために今までどうにか塞がつてゐた心の傷口がこの時すつかり開いてしまつたのです。

そんな風にして一日過ごして、日の暮れる頃、わたしはこゝへ來て、今あなたのいらつしやるこの石の上へ腰かけて、自分の悲しい運命といふものを考へてゐました。暫らくさうしてゐると、あすこの、あの垣根の向ふに榛の木が二本も見えるでせう？あすこのところに若い夫婦の者が見えたのです。つい近頃結婚したばかりでしたが、二人は牧場を横切つて小道について此方へ向つて來て．わたしのゐる近くを通り過ぎて行きました。二人の美しい顏の上には何とも云へない、落ちついた、安らかな容子が表はれてゐて、二人の幸福がいかにも確かであるといふ事を思はせてゐました。二人は互ひに腕を組んで緩かに歩を運んでゐましたが、突然立ち止りました。見ると若い妻は夫の胸に顏を押しつけました。さうして夫は夢中に妻を抱きしめたのです。わたしの心は何かに抑へつけられたやうになつてしまひました。恥かしい話ですが、羨望といふものが初めてわたしの心に入り込んだのです。今まで決してこれほど強く幸福といふものゝ貌がわたしの眼に現れたことはありません。牧場の端れまで二人の姿を見送つて、丁度樹の中に隱れて見えなくなつてしまはうとした時、喜び叫ぶ聲がわたしの耳を打ちました。それは家族の者がみんなして二人を探しに來たので、老人も女も子供も二人を取巻いてゐました。嬉しさうに話をする聲が、わたしのところまでぼんやりとして聞えて來ます。樹の間からは賑やか

な着物の色がちら〳〵見えて、この一群の人々は幸福の雲に包まれてゐるやうに見えました。わたしはもう我慢が出來ません。地獄の苦しみが心の中に入つてしまつたのです。わたしは顏をそむけて、いきなり自分の部屋へ駈け込みました。が、その部屋は、何といふ寂しい、陰氣な、恐ろしい場所に思はれたでせう！　あゝ、こゝなんだ、こゝが俺の永久に住む所なんだ。俺はこゝで哀れな生活を續けながら、遲い遲い俺の最期を待つてるんだ！　無限の神は幸福を撒き散らした、息する凡てのものゝ上に惜しみなく撒き散らした。それだのに、あゝ、俺だけ、俺一人！　友もなく、妻もなく……

あゝ！　何といふ恐ろしい運命なんだらう！

　と樣々な悲しい思に驅られて、わたしは我々を慰めてくれる神のあることを忘れてしまひました。自分自身のあることも忘れてしまつたのです。何故自分の眼は光を見ることを許されたのだらう？　何故自然は自分のみを虐げるのだらう？相續權を剝がれた子のやうに、自分は眼の前に人間社會の美しい寶を見せつけられながら、天は自分にのみその分け前を與へてくれないのだ。さうだ！　とわたしはあまりの腹立たしさに大きな聲で怒鳴りました。さうだ、俺にはこの世界に決して幸福といふものはないんだ、死なう！　俺はもう長い間腐つた肉體をもつて地上を汚して來た。だから俺の住んでゐた跡がすつかり消えてしまふやうに地の中に呑まれてしまひたい！　わたしは段々に烈しく逆上して來て、終に我と我が身を滅ぼさうといふ考へが頭の中をすつかり占めるやうになつてしまつたのです。で、とう〳〵自分の住家に火をつけて、我が身體と共に、自分のゐた事を人の記憶に殘すやうなものは凡て灰にしてしまはう、といふ決心をしました。わたしは猛り狂つて野原へ飛び出して、暗闇の中を暫くの間自分の家の周圍をうろついてゐましたが、抑へつけられた胸からは我知らず呻き聲が漏れて、それが夜の靜けさの中に通つて、我ながらその聲の物凄いのに驚かされました。益々腹立たしくなつて、憐れな奴！　憐れな奴！　と大聲に喚きながら家へ入りましたが、まるで何もかもわたしを破滅に導かうとするやうに、丁度塔の入口まで來た時、ブラマファンの城跡の中からはツきりとした谺になつて「憐れな奴！」と響いて

來たちやありませんか！　わたしはゾッとして戸口のところに立ち竦んでしまひました。それから長いこと經つて、山の方の弱い谺が「憐れな奴！」と繰返しました。

いよ〳〵住居に火をつけようと決心して片手にランプを持ち、片手に葡萄の蔓や枯枝などを摑んで、一番下の部屋へ下りて行きました。それは妹の寢起きしてゐた部屋で、わたしは妹が死んでからまだ一遍も入つたことがなかつたのです。で、肱掛け椅子などもわたしが最後に妹をそこから起してやつた時のまゝになつてゐました。妹のしてゐたヴェール、二三の衣類が部屋の中に散らかつてゐるのを見た時、わたしは恐ろしくなつてさツと身顫ひしました。「兄さん、わたしは死んでも決して兄さんを見捨てるんぢやありません。兄さんが苦しみに遇ふ時には何時でも助けに來てあげます。」と云つた妹の言葉が頭にはツきりと浮んだのです。ランプをテーブルの上におくと、妹がいつも頸にかけてゐた十字架の紐が眼につきました。十字架は、妹の聖書の中に挾んであつたのです。わたしはそれを見ると、聖なる恐れに滿ちて、思はず後へ退きました。今の今まで自ら陷入れようとしてゐたその淵がどれほど深いものであるか、わたしは急に眼が醒めたやうになつて、まざ〳〵とそれを見つめることが出來たのです。顫へながら聖書に近づいて「これだ！　これだ！　これこそ妹が約束してくれた助けだ！」と云ひながら、挾んである十字架を取らうとすると、そこには妹がわたしのために殘して行つてくれた書置きがありました。今まで苦痛のために堰き止められてゐた涙は瀧のやうに流れて、凡ての忌はしい計畫は忽ち消え去つてしまひました。わたしは長い間この手紙を讀み得ないで、しつかり胸に押しつけてゐました。それから、跪いて神の慈悲を乞ひながら手紙を開いて、啜り泣きをしながら讀みましたが、その言葉は永久にわたしの心の中に刻まれてゐるでせう。手紙にはかう書いてあるのです。

『兄さん、わたしは直きにお別れしなければなりませんが、決して兄さんを見捨てるのではありません。わたしは天國へ行けるだらうと思ひますが、そこから兄さんを護つてゐる積りです。神樣の思召によつてわたしたち二人があの世で

一しよになるまで、どうか兄さんがこの世の苦艱に甘んじて堪へられるやうに勇氣を與へて下さいと、神樣にお願ひしませう。後の世で再び一しよになつた時は、もう兄さんのそばへ寄つてはならないといふやうな事もなく、わたしたちの仲を隔てるものもなく、わたしは心にありつたけの愛情を兄さんに見せることが出來るでせう。わたしが生涯身につけてゐた十字架を兄さんに殘します。悲しい事や辛い事があつた時、わたしは幾度もこの十字架に慰められました。又わたしの涙を見て知つてゐるのはたゞこの十字架ばかりです。これを見たら、わたしの最後の願ひは兄さんが立派な基督信者として生き、さうして死ねるやうに、といふ事であつたのを思ひ出して下さい。』

あゝ、この手紙！　この手紙は決してわたしの身體から離れないでせう。死ねば墓場へ持つて行きます。自分の罪のために永久に閉されようとした天國の扉を開いてくれるのはこの手紙です。

手紙を讀み終つたわたしは、あまり烈しい感動を受けたために、氣が遠くなるやうに感じました。眼の前に何だか雲のやうな物がかぶさつたやうで、暫くの間は自分の病氣の事も忘れてしまふし、自分が存在してゐるといふ感じさへありませんでした。やうやく我に返つた時はもう夜も大分更けてゐて、頭の中がはつきりとして來るにつれて、何とも云へない安らかな感じを覺えるのでした。宵のうちに起つた事はみんな夢のやうに思はれました。わたしは眞先に天を仰いで、最も大いなる不幸に陷らうとしてゐた自分をなほ救つてくれた神の慈悲に感謝しました。この時ほど大空が淸らかにわたしの眼に映つたことはありません。一つの星が部屋の窓の上に光つてゐました。わたしはその星を見つめながら、長い間、神がなほ自分にこの星を見る喜びを與へてくれた事を感謝してゐました。さうして、その星の光の一條が、この癩病を病む人間の悲しい住家にも送られてゐることを思つて、密かな慰めを感じたのです。

わたしはずつと落ちついて自分の部屋へ歸りました。それから夜明までヨブの書を讀んで時を過ごしましたが、それによつて得た聖なる感激はわたしの心に執拗く附纏つてゐた忌はしい考へを悉く散らしてしまひました。妹がゐた時分

は一度もこんな恐ろしい思ひをしたことはありません。妹が自分のそばにゐるなと思つたゞけで、落ちつくことも出來ましたし、又妹はどんなに自分を愛してゐてくれるだらうと考へたゞけで、慰められもすれば、艱難に堪へる勇氣も湧いて來たのです。

あゝ！　あなただけは決して、このわたしのやうに、獨り暮しをすることがないやうにさせたいと思ひます。わたしの妹、不遇の道連れたるわたしの妹はもうゐません。けれども天はこの辛い生活に甘んじて堪へるだけの力をわたしに與へてくれるでせう。心の底から誠實な祈りを捧げてゐるのですから、きつと與へてくれるでせう。』

將校『妹さんはお亡くなりなすつた時は幾つでした？』

癩病者『やつと二十五になつたかならないかでした。尤も、始終病氣の苦しみがあつたから、年よりは老けて見えました。病氣が病氣でしたから、顔の相も大分變つてしまひましたが、血色さへよかつたら、まだ綺麗だつたでせう。何しろ、恐ろしいほど蒼白くて、まるで生ける屍と云つてもいゝくらいで、わたしは妹の顔を見る度に溜息が出ました。』

將校『ずゐぶん若くつてお亡くなりなすつたんですね。』

癩病者『虚弱い體質でしたから、あんなに色々の病氣を一遍に煩つたので、身體がもたなかつたのでせう。暫く前から、妹はどうしても死ぬといふ事に氣がついてゐましたが、早く死んでくれた方がいゝと、わたしは心の中で願はなければならないのでした。日毎に窶れて行くのを見ながら、妹ももう直きに苦しみを終る時が來るのだと思つて、悲しい喜びを感じてゐました。もう一と月ほど前から身體はめつきり弱つて、何回となく氣絶して、時々刻々に死が迫つて來るのを思はせるといふ時分でした。或る晩、丁度八月の初め頃でした、妹の樣子があまり打萎れてゐるやうに見えるので、わたしはそばに附きツきりにしてゐました。妹は四五日前からもう寢床の上にはゐられないで、肱掛椅子に凭つてゐましたから、わたしもそのすぐそばに椅子を持つて來て、眞暗な中でわたしたちは最後に言葉を交したのです。何とも云へな

い胸騷ぎがして、わたしは止め度なく涙を流してゐました。妹はそれを知つて、「兄さん、何故泣いてゐるんです？　何故そんなに悲しんでゐるんです？　わたしは死んでも決して兄さんを捨てゝ行くんぢやありません、兄さんが苦しい時には何時でも來て助けてあげます。」と云つたのです。

少し經つて妹は榛の木立ちの中でお祈りをしたいから外へ連れ出してくれと云ひました。陽氣の好い時には殆ど何日、妹はこの榛の木立ちの中で暮してゐたのです。空を見ながら死にたい、と云ひましたが、わたしは彼女の最期がそんなに近づいてゐるとは思ひませんでした。で、兩手で抱きあげようとすると、「肩だけ貸して下さい　まだ歩く力はあるでせう。」と云ひました。そこで、ゆつくりと木立ちの中まで連れて行つて豫て妹がそこへ集めておいた枯葉で蒲團を拵へてやつて、その上へ坐らせました。それから、夜露がかゝらないやうにヴェールを被せてやつて、わたしもそのわきに坐りましたが、妹はたゞ一人で最後の瞑想をしたいと云ふので、妹の姿が見えるやうな所へ離れてゐました。時々ヴェールがあがつて妹の白い手が天に向ふのが見えました。わたしが木立ちの方へ近寄つて行くと、水が欲しいと云ひましたから、妹のコップに入れて持つて行きましたが、たゞ唇を濕したゞけで飲めません。「最期が近づいたやうです。」と妹は顏をそむけてから云ひました。「この渇きは直きに永久に醫やされるでせう。兄さん、手傳つて下さい、この希望の峠を越えるのは大變です。どうぞ手傳つて。臨終の祈りをして下さい。」これが妹の最後の言葉でした。わたしは自分の胸に妹の頭を抱きかゝへて、臨終の祈りを唱へました。この肉體を我が手に殘して永遠の生命に行け、とわたしは妹に云つてやりました。三時間ばかりの間かうして妹を支へてゐましたが、終に自然の最後の戰ひは終つて、妹の靈魂は靜かに地を離れてしまひました。」

癩病者は話し終つて兩手に顏を埋めた。旅人はあまりの悲痛に聲が出なかつた。

二人とも暫く默つてゐたが、やがて癩病者は立上つた。

『旅のかた、悲しい事や辛い事に出逢つて氣を落しさうになつたら、どうぞオスト市の[illegible]の事を思ひ出して下さい。あなたが今日わたしを訪ねて下すつた事は決して無駄にはならないでせう。』

二人は一しよに畑の入口の方へ歩いて行つた。出ようとする時、將校は右の手に手袋を嵌めて、

『あなたは誰の手も握つたことがないと仰しやつたが、どうぞわたしの手を握つてはくれませんか？　わたしはあなたの運命に深く同情する者として、握手を求めるんですが。』

癩病者は一種の恐れと共に二三歩後へ退いた。さうして、手を擧げて天を仰ぎながら、叫んだ。

『至善なる神よ、この同情深き男に主の祝福を下し給へ！』

『では、どうぞもう一つのお願ひを聽いて下さいませんか。』と將校は語を次いで、『わたしは直きに此處を立ちますが、これからかなり長い間あなたとはお會ひすることが出來ないだらうと思ひます。で、必要な豫防をして、時々手紙の交換をしたいと思ふんですが、どうでせう？　あなたにとつては氣晴しになるだらうし、わたしにとつては非常に樂みです。』

癩病者は暫し考へてゐたが、やがて、

『幻影を求めたところで、それが何になりませう。わたしは自分自身を仲間とし、神の外に友を求めてはならないのです。わたしたちは何れ神のうちに於いて又會ふことが出來るでせう。では、御免下さい。どうぞ幸福でゐて下さい……では、永久にお別れします！』

旅人は外に出た。癩病者は戸を閉めて閂をかけた。

ぎりしや小唄

女詩人サツフオの詩、其他

山村暮鳥

ある童子にとて

何といふきやしやな腿だろ
何といふ腿の肉だろ
しんじつ
この樽底はたたかせるのはお前だ

おらんだぜり

此の額、このめの上を
おらんだ芹でまいとくれ
デイ・オニサスの
まつりだ

まつりだ

つはもの

なみだもつ鉾の穂先
その崇高さにひかる鉾の穂

花環のうた

男子といふ男子のつむりは飾られました
三つの花環でかざられました
そのうちの二つは薔薇
さて、も一つはなんでせう
それはそれはめづらしい埃及の紙草編んだものでした

としはとつても

としはとつても
わしや女子
嘘ぢやない
赤い袖見りやふりかへる

さかづきの歌

なみなみと注いだ盃
わしやまちませう
頸の白いエルキションがのむといはねば呑むといふまで

大杯の歌

をなご、しなよくつぎ廻る
三ツ組大杯でつぎまはる

戀の辭

エロスは鍛工が大好きぢや
大きな鐵槌ふりあげた
とつてんかん、とつてんかんかん
わしもまたぞろ
冬の責苦のそのなかへ
何の、はかない身を投げよ

骰子の歌

骰子はのう
狂氣かよ
亂心かよ
いつもそれで
あひてはこわいエロスどの

葦

わたしや消魂げて楯なげだした
ほんに川邊の葦だつた

踊り

月もまんまる、そなたの踊り

ちらり目と目がゆきあふた

つばめ

かはいや燕、そのこゑを
けふもひねもす跳ねかへせ
柳の葉かげで
よう、はねかへせ

洗濯女

わしは河からあがつてきた
わしのもつてゐるものみやれ
なにからなにまで
さて、みんな綺麗ぢや、雪のやうぢや

ある時

枕はづしてよう寝る人てっ
鍵や門、なんになろ

ある時

いつそ死なうか
ああ、死にとないとて
ほかに善い道やみつからず
こんな苦労をのがれるためぢや
つよく、つよく
生きてみせよう

ある時

濡衣を着せられたばかりか
それでもたりず
べつたりと
ぬられた顔のこの泥

鏡をのぞいて

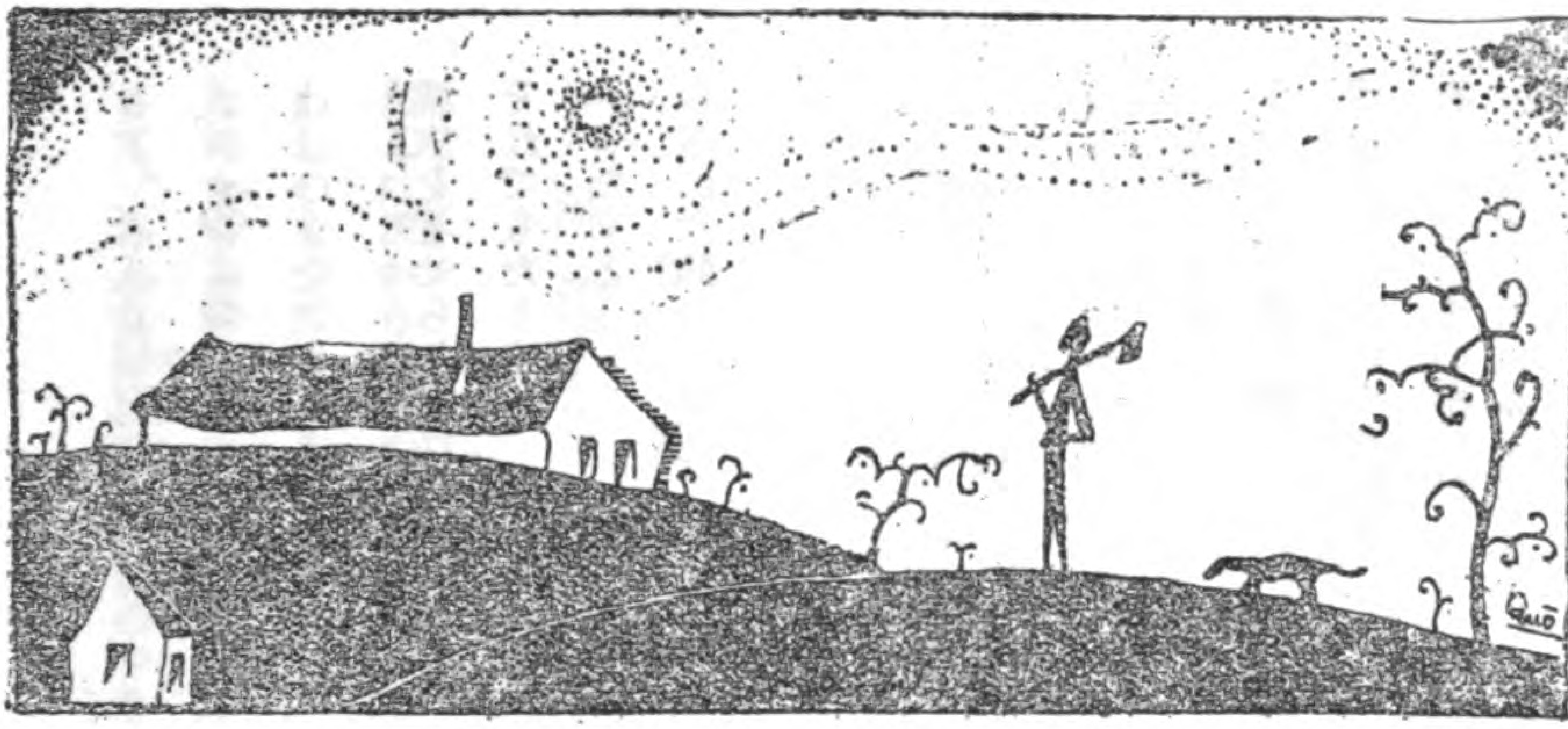
いまのいままで
うつくしい濃い蒿色のつむりとばかりおもつてゐた
ばらばらとかかつた粉雪
ああいつのまの粉雪か

銘

おそろしい勇者のアガソンは
おのが市アブデラのために倒れた
その屍骸の焼かれるのをみて
ひとびとは顔をかくして泣いた
怖しいたたかひの渦巻きのその中で
血しほに渇いたアレスの手にかかつていのちをすてたものに
まだ彼のやうな若者はひとりもなかつた

輓歌

あのスラシアンのをなごをば
またと見ることもなからう



出世五人男

（長篇小説）

宇野浩二

初のうち、ほんの一二度の間こそ、赤木は光子を見ると入井の花子を思ひ出して、といふよりも花子そのものと會つてゐるやうなつもりで、うつかり入井時代の話――厨戸のことや、己のことなどを話題に上して、その度毎に光子につんと不機嫌な顔をされるので、あわてゝそれを引込めては、どうもをかしいぞ、どうもこの人が花子の外のものとは思はれないが、然し何か事情があるんだらう、それにしても……などと混亂した思に惱まされたが、やがて彼はいつとなく花子のことなど聯想しなくなつた。無理からぬことで、それは近頃田川の家で初對面して、それが緣で彼の下宿へ尋ねて來て、それから工藤と一緒に芝居の稽古をするやうになつて、急に親密を度を加へた光子といふものゝ影が次第に彼の頭の中に濃くなつて來ると共に、三年も前に住んだことのある下宿屋で時々顔を見合はしたといふに過ぎない、碌に口もきいたことのない花子の記憶など、いつとなく薄れてしまふのは當然のこ

とに違ひなかつた。

それは赤木にとつても、決して回想して誇るべき時代ではなかつた、そしてそれが彼女との交渉を深めるのに役立つどころか、彼女が果して花子であるかどうか、それは刑より外に知るものはないとして、その話を持出すと彼女が忽ち顔色を變らすと思はれたので、敏感な阿珂丸はその後は決してその點に觸れないことに決心したのである。唯、一度、彼のところへ時々現れる厨戸夏生が、初めて光子と彼の部屋で顔を合はした時、同じやうな氣まづい場面をくり返したことがあつた。もつとも、阿珂丸はさういふ事の起るのを恐れて、その以前に一二度夏生にそれとなく注意はしておいたのであつた。

「ね、厨戸君、」と彼はいつた。「いつか君に話した入井の花子さんに似た女といふ人ね、この頃芝居の用事で時々僕のとこへ來るんだが、どうも人違ひらしいんだよ。似てるといつても、それやまつたくよく似てゐるんだ。似てゐるといふよりかも、どうも、その、やつぱり同じ人としか思へない程似てゐるんだがね、尋ねると全然知らないといふんだ。そして、あんまり尋ねると、終ひには怒つた顔をするんだ。だから、やつぱりどうも人違ひらしいんだ、世の中にはあんなによく似た人がゐるもんかね。だから、ね、君、もし今度君が會つて、おや、花子さんだなと思つても、決して君、向うから何とかいひ出さない限りは、花子さんぢやありませんかなんていつちやあいけないよ、機嫌を惡くするから。今、あの人の機嫌を惡くすると、僕より、工藤君が困るから、ね、承知してゝくれ給へ。」

斯ういひながらも、やつぱり阿珂丸の心の中は平かではなかつた。何故といつて、さういふ風に話してゐると、彼は又新たに、どういふ譯で彼女は花子であることを否定するのだらう、確に花子に違ひないのだが、といふ考が蘇生つて來るからであつた。然し、と彼は考へた、——結局、彼女が花子であることを拒んでくれた方が、その方が厨戸より彼の方に彼女との交渉がより深くなる譯である、さうだ、入井とか、花子とか、厨戸とか、輕子とか、さては己とかいふ樣々の

幽靈を彼女が脊負つてゐない方が、そして新しい光子として彼等の前に現れたものとすれば、田川は別として、彼女の先優權は即赤木の手に落ちる譯だから……

それで、彼は最も安心な方法として、なるべく厨戸と光子とを會はさないようにと心がけて、彼女は大抵午後に來ることになつてゐたので、夏生には「僕はこの頃、午後は大抵外出するから、午前に來給へね、午後だと留守にするといけないから。」といつておいた。が、いつてから少し氣がとがめたので、「夜なら屹度ゐるよ。」と附け足した。

何故といつて、厨戸はその時分はもう遞信省の通信何とか事務員の職を止めて、謂はゞ浪人の身分であつた、だから、二日も三日もつゞけて赤木を尋ねて來るやうなことがあつた。が、正直者の彼は、阿珂丸から遊びに來るのは午前か夜にしてくれ給へといはれると、決してそれに反いたことはなかつた。ところが、或日の午前十時頃であつた、丁度厨戸が遊びに來てゐたところへ、ひよつこり光子が姿を現はして、赤木を驚かした、それはもう阿珂丸にしても、厨戸と光子とが顏は合はすことの心配など忘れてゐた時分だつたから。餘り突然のことだつたので、赤木は彼と彼女とを會はさないで、厨戸が歸るまで光子を工藤の方へやつておくなどゝといふ餘裕さへ持たなかつた。「赤木さん。」と扉の外で光子は聲をかけて「どなた？」と内から阿珂丸があわてた聲で返事をしたと同時に、扉を開けて、部屋の中へ足を踏み入れた。厨戸が振りかへつた。光子も客の方に目をそゝいだ。

「あゝ、は、は、は、花子さん！」と厨戸は吃りながら叫んで、驚きのあまり、どういふつもりでだか、すつくと立上つた。

「まあ！」と光子も思はず驚きの叫び聲を上げた。が、幸と、それは厨戸の吃り聲に消されて聞えなかつた。然し、そんなに彼女が狼狽した様子を、赤木は、――彼が以前田川の家で彼女に會つた時も、そのあわてた表情はこの時の十分の一にも當らなかつた、――初めて見た。彼は光子が驚いた様子に又驚いた、一體どうなるだらう、と驚いた。

「厨戸君、花子さんぢやないよ、」と赤木はたまり兼ねて、傍からいつた。「花子さんに似てるけれど、花子さんぢやないんだよ。君、あわてちやいけないよ。」

「まあ、吃驚しましたわ、」とその時光子もやつと氣を取り直したらしく、稍々落着いた様子でいつた。それから、赤木の傍へ來て「あの、昨日田川さんが來なくつて？」と何か意味あるらしく、抑へた聲で聞いた。

「いゝえ、」と赤木は答へながら、未だ先のまゝでぼんやり突つ立つてゐる厨戸の方を見て、「厨戸君、どうしたんだ。坐り給へ。をかしな男だな、人違ひだといふのに。……第一失敬だよ、迄いつ迄もそんな……」

「そ、そ、そ、そんな事はない。は、は、は、花子さん、」と厨戸はその場にぐずぐずに坐りながら、赤木の方を見ないで、光子の顔を穴のあく程見詰めながら「は、は、は、花子さん、ぼ、ぼ、僕を忘れないでせう……？」そして、彼はその黒い、大きな四角な顔の中にある、不似合な小さな、然し柔和な目からしみ出すやうに涙の玉を滴たらした。……

「は、は、花子さん、僕は今はもうあ、あ、あんたのことは、な、な、何とも思つてゐません。だ、だ、だから、は、白状して下さい、ね。あ、あ、あんたは、は、花子さんでせう。……か、輕子から、あ、あんたのところへ、な、何かたよりがありますか。い、今どこにゐるか、し、知りませんか？」

それを傍から聞いてゐた阿珂丸は、これは大變なことになつてしまつたと心配した。が、それよりも何よりも、彼は厨戸の今の白にひどく感動させられてしまつた。輕子といふものが、どんな魅力ある女性であつたか、彼は見たことがないから知らないが、この大砲のやうに心なしに見える男が、その女のことを今だにこんなにまで忘れずにゐるといふことは、まつたく驚くべきことに相違なかつた。それから思ふと、自分や、こゝにゐる光子やらは、何といふ輕薄な人間どもだらう。彼はどんなに輕薄な者でも、他人の眞心のこんな爆發には動かされぬ譯には行かない、屹度、こゝで光子は、たとへ厨戸の望んでゐる輕子の消息を傳へることは出來ないとしても、彼女自身が花子であることを自白するだらうと豫期し

た。が、その豫期は見事に反した。

「存じません、わたし、」と光子は冷たい、きつぱりした聲で答へた。そして、彼女は阿珂丸の方に向つて、(何といふ彼を見た彼女の目の冷たさよ！)「赤木さん、どなた？　この方？」と聞いた。

「厨戸夏生君です、」と赤木はそこで止むを得なさゝうに紹介の言葉をいつた。

「わたし、大江光子と申します。……」と光子は厨戸の方に向つて、わざとらしく自分を紹介していつた。

が、厨戸はそれに對して澁々のやうに頭を下げただけで　何にも答へないで、唯著しく唇を顫はせてゐた。

「厨戸君、僕も初間違つたくらゐなんだよ、」と赤木は取りなすやうにいつた。「だけど、花子さんぢやないんだよ。」

けれども、厨戸は矢張り答へないで、目を落として、どこか疊の上の一點を見詰めてゐる切りだつた。——

だが、さういふ緊張した場面だつても、過去つて見ると、水の上に殘された泡のやうなものであつた。そして、古い泡は後から後からと生じる別の新しい泥の爲にその存在を消滅してしまふだらう。赤木にしてもその事件のあつた當座は、光子と向ひ合つて坐つてゐる時とか、又は一人でゐる時にでも、時々その思出の爲に何分間か物思ひに殘されることがあつた。して見ると、彼よりも一層、厨戸夏生は何日かの間は寢られぬ程に煩悶したことに違ひない。だが、結局、「おゝ、あなたは花子さん！」と叫んで心臟を波打たすものがあつても、「いゝえ、わたしは光子です、」といひ切つてしまふ程、それが出來る程、所謂心臟の强い者の勝利に違ひないのだ。

だから、その後も、時々阿珂丸の部屋で厨戸と光子と顔を合はしたことはあつた。が、彼等はいつかの日、その同じ部屋で阿珂丸に紹介されて知り合つた仲として交際するのに過ぎなかつた。すると、光子が入井の花子とは別のものとして、彼女のことを考へるやうになると共に、そんなら彼女はどうして田川と知るやうになつたか、田川と知つた時彼女はどういふ生活をしてゐたか、彼女は今どういふ生活をしてゐるか、どこのどういふ家に住んでゐるか、といふ疑問が赤木

阿珂丸の頭の中に、夏雲のやうに湧き出して來た。

が、彼女はそれ等の質問のどの一つにも答へなかつた。それどころか、阿珂丸が彼一流のどんな圓滑な、遠廻しな言葉を案出して尋ねても、彼女は忽ち機嫌をそこねて、彼の問を反ね返した。そして彼女はいつの時でも言つた、否、いひはしなかつたが、斯う言ふやうに見えた。——私がどういふ腹から生れたか、どういふ家に住んで來たか、そんな事が私たちの交際の上にどんな參考になるのですか？　私はたゞ私であればいゝではありませんか、あなたの前に坐つてゐる時の私、あなたと大屋根の上で芝居の稽古をしてゐる時の私、それ以上、或はそれ以外のどんな私があなたに必要ですか？——なる程、さういはれて見ると、そんなものかも知れない、さうだ、そんな風に穿鑿して行つたら、彼女の父が誰であるか、父の父が誰であるか、先祖がどこに住んで、何をしてゐたかといふやうなこと迄、探索しなければならない。成る程、それは無駄だ、」と阿珂丸は無理に呑み込むやうに考へた。

そして、實際はさう考へる迄もなく、彼はあるがまゝの彼女に滿足してゐたのであつた。滿足——そして、おゝ、いつの間にか戀してさへもゐたのであつた。ところが、生憎にも、彼は彼のあらゆる臆病な性質のうちでも、殊に戀愛に臆病であつた。彼はこれ迄の彼の戀愛的な經驗を調べて見ても、彼の方から積極的に乘出したことは一度もなかつた。彼は十人の女に十度戀心を覺えた、すると、そのうちの五人は向うからも彼に戀を感じた、そして初めて手紙を出すとか、手を觸るとか、それらしい心持を言ひ現すとかするのは女の方であつた、そして彼等は戀に陷ちた、だから、さうしない女は、卽ち男の方から仕掛けるのを待つ女は、彼には到底緣がなかつた。そこで、彼は光子に對してどう考へたらいゝのだらう？　彼は光子が花子と同じ女であるかないかとか、又いつかの厨戸と彼女と會つた時の花火のやうな事件とかは、すぐにわすれてしまつたが、あのいつか澁谷の田川の家で彼女に初めて會つた晩に、田川の隙をうかゞつて、彼女が兎のやうな早さで彼の口に飛びついて印づけた接吻の記憶を、一日に三度以上くり返して味つた。で、彼は彼女がもう一歩進んで來

るのを待つてゐた。そして、恐らく待つてゐるやうな態度をさへ見せた。が、何といふ謎の女だらう。彼女は彼がそんなに思ひ出しては味つてゐる事を、殆ど忘れてしまつたのではないかと思はれるやうに見えた。まさか、その事を聞く譯には行かなかつたが、若し尋ねたとしたなら、「まあ！ それは夢の話？……わたし、未だ生れてから接吻といふものはしたこともありませんわ、仕方さへ知らないわ、」と、彼女は彼女の花子であることを否定したやうに、けろりとして斯う答へるに違ひない。阿珂丸は煩悶した。彼は又斯うも考へた。田川の家で會つた時は、彼女も突然のことに驚いて咄嗟の思ひつきで、彼女が花子であることを口止めする爲に、例へば男なら力一ぱい肩を叩くとか、氣合ひを掛けるとかいふつもりで、あんな接吻をしたのであらうか。だが、やつぱり接吻はをかしい。して見ると……そして今では接吻のせの字も口にしないところから察しると、彼女は花子の自分を否定するやうに、あの時の接吻をもそ知らぬ振に忘れてしまつて、今は別のことを考へてゐるのであらうか。今は赤木など眼中になくて、もつと華やかなもの、もつと高いものを目指してゐるのであらうか。

さうして、彼女がそのまゝ次第に熱がさめるやうに、彼に冷淡な振をしつゞけるのなら、それでもよかつたのだ。ところが、赤木が彼女について思を惱ますことの止みかゝる時分になると、ひよい〱と彼女は妙な、思はせぶりな口をきくのである。「この間、田川さんに會つたのよ。あの人も變に男らしくないところがあるわね。相變らず赤木君のとこへ行つてるかと聞いてね、それはいゝのよ、どうだ赤木さんは、どこか好いたらしいところのある人だね、君はどう思ふつていふの。だから、わたし、大好きよ、といつておいたわ、御免なさいね。」又、「赤木さん、あんたは屹度わたしのやうな女は嫌ひね？ だけど、わたしはあんたのやうな、どういふんでせう、音無しいやうな、音無しくないやうな、だけどよく見ると、やつぱり音無しいやうな方が好きだわ。」又、「赤木さん、わたしね、あんたにだけ、外の人にいつちやあ厭よ、あんたにだけお話したいことがあるの。だけど、口ではいへないわ、手紙に書いて出すわ、よくつて、讀んでくれる？」――こ

の時は、四五日の間といふもの、玄關に郵便屋の氣配がすると、そこから可成り隔たつてゐる二階の部屋にも拘らず、彼はそれに聞耳を立てゝ、もしや光子からの手紙が來はしないかと心待ちに待つた。その癖、彼女は相變らず毎日の午後三時頃になると、芝居の稽古の爲に、蓬萊館に姿を現しはしたのだが。しかし、顏を合はすと、彼は手紙に就いては彼女に何にも聞かなかつた。が、到頭五日目だつたかに、「光子さん、いつか僕に手紙をくれるといつてたの、どうしたの？」と幾分顏を赤くして聞いたところが、光子は半分忘れてゐたやうな樣子で、「あゝ、手紙？　あれもう止めにしたわ、」といつた。

　これは阿珂丸をまるで意地の惡い熱病に罹つたやうな狀態においた。考へて見ると、――考へて見るまでもなく、最早や卒業試驗も間近に迫つてゐた。だが、彼は勉强する氣どころか、何を、どんな科目が試驗にあるかさへ知らない狀態にあつた。その前の年の試驗の時には、未だ押入の隅に塵をかぶつてゐる幾冊かの敎科書を持つてゐたので、彼はそれを拾ひ讀みすることに依つて、どうやら斯うやら試驗を通過して來たが、この年は彼は新しい學年が初まつてから、ざつと一年の間に五度ほど學校に顏出しゝたに過ぎなかつたので、彼はまつたくそれの見當さへつかなかつた。一度誰か同級の者を訪問して、樣子を聞いて見ようかとは思つた。が、それも時々通り雲のやうにふと思ひ出すだけで、未だ一度もその爲に尻を持上げるまでの氣持に至つたことはなかつた。あんな學校の免狀など、さて貰つたところが何のたしにもならないといふことを考へた。そればかりではない、試驗を受けるには半年の間溜まつてゐる授業料を支拂はなければならない、これ迄なしくづしに使つてしまつたそれを、どんな風にしてこしらへたらいゝだらう。おゝ、さうだ、授業料どころか、今彼は出來るだけの口實を作つて、親類の保護者から少しばかり纏つた金を取り出さうと計畫してゐるのだが、それはそれでもつと緊急な使ひ道があるからであつた。それにさへ不足を感じてゐるのに、どうしてその上半年分の授業料などを……。そんなことを考へ出して來ると、彼は無限の糸を繰つてゐるやうな悶かしさに落ち込んだ。あゝ、あゝ、と彼は

腹の中ががらん洞になるやうな欠伸と共に、それ等の暗黒な思案を投げ打つと共に、おゝ、さうだ、もうかれこれ光子の來る時分だと思つた。すると、彼の心は一瞬間明るくなつた。――

ところで、厨戸と光子とが初めて會つた日から一ケ月程後のことであつた。夜の八時頃、車屋の使が來て、これを置いて行つたといつて、女中が赤木の部屋に一通の手紙をとゞけて來た。阿珂丸はそんな時間にも拘らず、例の押入の床の中に潜り込んで、それの開けてある戸口から射す光線で、古雜誌か何かを讀んでゐた。手紙を受取つて、不思議さうに封筒の表を調べて見たが、筆蹟にも覺えがない上に、差出人の名前が書いてなかつた。が、確に赤木阿珂丸君と宛名してあるので、（光子がわざと男の筆蹟を借りて、君などと男らしくやつたのではないか、と彼は一瞬間思つて、ちよつと胸を躍らしながら、）開封して見た。

それは意外にも田川大次郎からであつた。「甚だ突然ですが、急に少し用談がありますので、靖國神社の大村銅像のところ迄來てくれませんか。僕、そこに待つてゐますから、」と鉛筆の走り書で認められてあつた。讀み終ると、元より氣の弱い阿珂丸のことで、忽ち胸の動悸の高まるのを覺えた。これは確に決鬪狀か、それに近いものに違ひない、無論、光子に關しての。あの善良であるだけ、それだけ一本氣な、完全に九州人型の、感動的な田川のことであるから、無論、それは十分あり得ることに違ひなかつた。さうでなくて、別に大した不始末をして出た譯でもないこの下宿へ、而もわざ〳〵澁谷から、目と鼻の、一丁と離れてゐない靖國神社まで來てゐながら、車屋に使をさして、自分で出かけて來ないなどといふのは、ただ事ではない、と赤木は考へた。が、この際、出て行かぬ譯には行かなかつた。

彼はいつ誰から聞いたともなしに、人と喧嘩をする場合には、懐とか、背中とかに本を挾んでおくことは、最も目につかない護身法で、それに依つて相手の傘はいふ迄もなく、刃物や、彈丸さへも輕く受けることが出來るといふ話を思ひ出したので、早速その邊に散らばつてゐた書物を手當り次第に懐や背中に挾み入れた。餘り入れ過ぎて着物がだぶ〳〵

するので、帯を締め直さうとすると、折角挾んだ本が一時に滑り落ちたり、餘りきつちりと詰め過ぎて帯を堅く締めた爲に、身體が一寸も屈まなかつたり、それに二十分以上かゝつて、やつと甲裝を了へてからも、彼は未だ三十分以上部屋の中を彼方此方と檻の中の動物のやうに歩き廻つた。坐らうと思つても、それ等の書物の甲の爲に、坐る譯に行かなかつた。彼は念の爲に、工藤に書置をしておかうかとも思つた。工藤は最近、例の演藝學校のごた〳〵が一層急になつて來たと見えて、昨日も今日もいつもの物干臺の稽古にも顏を出さなかつたばかりか、夜も一時頃に歸つて來たり、到頭歸つて來なかつたりするやうなことがあつたりした。こんな時せめて彼でもゐてくれたら、と赤木は思ひながら、結局誰にも書置の手紙を認めないで、玄關を出る時、夢中で、女中にも斷らないで、ステッキ挿にあつた誰の杖だか、一番粗末で、一番丈夫さうなのを拔いて、坂を上へと上つて行つた。

　時間は未だそんなに遲くはなかつたが、馬場の境内には稀にしか黒い人影が見られなかつた。そして、それ等は大抵二人連であつた。阿珂丸はふと今彼を待つてゐるものが、田川でなくて光子だつたら、どんなに幸福だらうと思つた。が、稀に一人で歩いてゐる者の影を見ると、彼ははつとして、これから三十分後にはどんな事が起つてゐるだらう、と考へてぞつとした。行手の大村益次郎の銅像の眞黒な影が、何かの運命を暗示するもののやうに思はれて、彼は思はず步みをゆるめた。彼はうか〳〵歩いてゐると、突然どこかから田川大次郎が飛び掛つて來はしないかといふやうな恐怖に襲はれた。

が、豫想の反對だつた。彼が銅像の五六間手前に來た時、それ迄そこにあつた戰利品の大砲を利用してあるベンチに腰かけてゐたらしい、田川に外ならぬ長髪の大男が、すつと彼の方に向つて立上つた。が、その男は飛びかゝつて來るどころか、不斷なら「よおつ！」と大きな聲で叫ぶところを、無言のまゝ、しを〳〵とした恰好で近寄つて來た。

「田川君ですか。」と赤木の方から先に聲をかけた。

「おゝ、赤木さん。今晩は。」と田川は元氣のない聲でいつた。

赤木はしかし未だ油斷がならないやうな氣がしたので、相手から一間ほど離れたところで立ち止まつた。

「あの、この邊をぶら〱散歩しながら話をしてくれませんか、」と田川は矢張り沈んだ聲でいつた。

「えゝ、さうしませう、」と赤木は相手の悄然とした樣子に次第に安心を覺えながらいつた。

どちらがどちらを導くともなしに、二人は二三尺の間隔をとつて、大村益次郎の銅像を一周半ほどしたが、その間に到頭どちらからも物をいひかけなかつたが、やがて、

「さうだ、やつぱりこれは腰かけて話しませう、」と田川が口をきつた。そして、二人はそこの大砲のベンチに、やつぱり二三尺の間隔をおいて、並んで腰かけた。彼等が向つてゐる方角には、馬場の境内を越えて、電車通があつて、その向うには濠と城とがあつた。

「君の用事といふのは何ですか？」と餘り相手が默つてゐるので、赤木の方から催促した。

「今、それをいひます」と田川は到頭決心したやうに口をきつた。「それは大江光子孃のことです。………」

「光子さんがどうかしましたか？」と赤木はわざと落着いた調子で聞きかへした。

「彼女のことに就いて、僕はあなたに聞きたいのです。」田川の言葉が急に嚴格な調子に響き出したので、赤木は思はずぎくりとして、油斷なく身構へをした。田川は言葉をつゞけた。「あなたは彼女を愛してゐますか？」

「なアんだ！」と赤木はほつとしたので、急に餘裕のある皮肉な氣持になつて、「それや愛してゐますよ、」と答へた。

「本當に愛してゐますか？」と田川は力をこめた調子で聞きかへした。

「それや……」といつて、赤木は再びぎよつとしたが、何か適當な言葉に言ひ代へようとしてゐる間もなく、

「分りました。有難う。それで僕も安心しました、」と田川は突然立上つて叫んだ。赤木は吃驚して、相手の言葉が分らないまゝに、立上つた。その時やはりその邊を散歩してゐたらしい一人の老人が、田川の方の側のベンチの端に腰を下ろし

た。すると、田川はその老人に向つて、
「お爺さん、誠に失禮ですが、僕たちは今大問題に就いて話し合つてゐるんですから、誠に失禮ですが、どこか外のベンチに行つてくれませんか、」といつた。その言葉の調子に、やつと不斷の彼らしい調子が聞かれたので、赤木は一方に可笑しさを忍びながらも、安心な氣になつた。老人は不思議さうに田川を見上げながら、默つてベンチを去つて行つた。
「赤木君、それで僕は安心しました、」と田川はつゞけた。「赤木君、手を下さい。」
赤木は又ちよつとぎくりとしたが、それは田川が握手を求めてゐるのだと分つたので、直にためらはずに手を出した。すると、田川は力をこめて赤木の手を握つてから、「掛けませう、そして、もう少し僕の話を聞いて下さい、」といつた。
「僕はいひますが、」と田川は始めた。「僕は光子さんを愛してゐたのです。だが、近頃だん〳〵彼女が僕の心から離れて行つたのを知つたのです。赤木君、君は自分の愛するものが、自分から離れて行く淋しい心持を經驗したことがありますか？……」
「……」赤木は答へるところを知らなかつた。が、丁度その時濠の向ふの城の聯隊から、兵隊の吹く喇叭の音が響いて來た。それがこの際田川の言葉に、最も適當した伴奏をなすやうに聞き做された。
「それから、」と田川は喇叭の音などには注意しないで進めた。「僕は或時光子さんに、君は赤木君を愛してゐるのではないかと聞いたのです。そしたら、彼女はあの方は面白い方だからといひました。」
絶えず聞えて來る兵隊の喇叭は、多分古參の喇叭手が、新米の見習喇叭卒たちに稽古をつけてゐるものらしかつた。だから、嚠喨たる音の次に、幾つかの亂雜な音が伴ひ、又冴へ渡つた一節が聞え、つゞけてそれを眞似したしどろもどろの幾つかの音が響くのだつた。
「あの方は面白い方だから、斯う彼女はいふんでせう。それを聞いて、僕は思つたのです。失敬だが、思つたのです。そ

れは君が彼女に飜弄されてゐるんぢやないか、と。實際、さう思つたのです。で、現に僕がさういつて彼女に聞くと、彼女はそんなことはどうだつていゝといふんでせう。しかし、僕はその點眞面目に心配したのです。心配したんですよ、彼女の幸福の爲に。赤木君、君はさう思ひませんか。……」

——……」やつぱり赤木は答へるところを知らなかつた。彼は田川の言葉と喇叭の音とを半分半分聞いてゐた。

「僕はしかし安心しました、君の言葉を聞いて安心しました、」と田川はどこか力のない聲でいつた。「僕は唯彼女の幸福を祈るだけなんです。だから、君が彼女を飜弄するのでなく、心から彼女を愛するといふのなら、僕は、僕は安心して君に彼女をさゝげます。赤木君、その代り頼みますぞ。僕のこの犧牲的精神を察してくれ給へ、それも唯彼女の幸福の爲です。赤木君、引受けてくれ給へ！」

　赤木は吃驚してしまつた。これは大變なことになつたと思つた。

「え〻、そ、それは、君のいふことは分つてゐますが、然し若し……」彼は、若し彼女が自分にそむいて何處かへ行つたら、そしたらどうなるのですか　あ〻、それどころか、自分はうつかり相手の言葉に釣られて彼女を愛してゐるなどといつてしまつたが、果して彼女の方では自分を愛してゐるだらうか？（神よ　助け給へ！）田川君、そ、そんな事をいつたつて、僕は君のやうに、僕の次に彼女の幸福の責任を誰に持つて行くことも出來ない　——斯ういひたかつた。しかし、彼にはそれもいへなかつた。

　二人は突然沈默に陷つてしまつた。もうその時にはいつの間にか城の聯隊の喇叭の音も止んでゐた。二人は長い間默つてゐた。だが、やがて赤木が口を切つた。

「田川君、」と彼はいつた。「それにしても、君はどういふ風にして光子さんと知り合ひになつたのですか　一體、光子さんといふ人はどういふ素性の人ですか？」

「いや、それはいけない！」と田川は忽ち不斷の大きな聲になつて、變に大仰な身振をしながらいつた。「それはいへない光子さんの爲に、又僕の爲に。それは聞くことを止めてくれ給へ。」

赤木は甚不滿であつたが、「……ぢやあ、君と光子さんとはどの位の程度に親密だつたんですか　それは話してもらへるでせう。」といふと

「それはいふ迄もないぢやありませんか、」と田川は答へた。「最上の、心からの親密な交際です。僕は僕自身よりも彼女を愛してゐました、そして恐らく彼女もです、」といつて、ちよつと言葉を切つてから、如何にもこの男らしく後の言葉を悲しさうに斯う附け加へた。「いや、彼女も、だつたんです。それが……いや　赤木君、僕は今となつては、君に少しも敵愾心を持つてはゐません。赤木君、もう一度握手しませう。そしてさよならしませう。」といつて立上つた。赤木もそれに應じて立上つた。

その時までは、赤木阿珂丸は、何といふことなく心持が緊張してゐたので夢中だつたが、澁谷に歸る田川を九段上の電車停留所に見送つて、やがて一人でぶら〳〵と濠端の道を阪の上の方に歩いて來かゝつた時には、急に憑き物に放たれたやうに、ぽかんとしてしまつた。一體、今何が起つたのだ？　と彼は反省した。俺が光子とどうしたといふのだ？　そして光子と田川とがどうしたといふのだ？　何が光子の幸福の爲だ？　わツハツハツハツと彼はそこで力一ぱい、東京中に響くやうな聲で笑ひ出したい氣持になつた。彼は今先まで頻りに喇叭の稽古をしてゐた、濠の向ふの城の土手を眺めながら、喇叭吹け、喇叭吹け！　と思つた。そして彼も亦あの高い所に上つて、彼の笑ひ聲を喇叭に吹き込んで、四方八方に響かしたいと思つた。が、又ふと目を廻して、五番町から半藏門につゞいてゐる暗い濠端を、それだけが變に明るくて、小さくて、玩具のやうに見える電車の走つてゐる景色を眺めてゐると、今頃あの電車の中で、あの大男の九州男子の田川大次郎も亦、腹の中に急に風穴が開いたやうな空虛を感じてゐることだらうと思ふと、わーつと叫んで、今度は東京中に

響けるやうな泣聲で泣き出したいと思つた。おゝ、それにしても光子！ 彼女は俺に、友達以上の好意を感じてゐるのだらうか。さうでなくて、兎のやうな接吻も、時々阿珂丸を好きだといふことも、悉く彼女の氣まぐれの出鱈目だとしたら……？

　そして、その證據をそんなに早く見せつけられやうとは、さすがの阿珂丸も豫期しなかつた。といふのは、彼は川上某、品川某といふ二個の銅像の並んでゐる前を通つて、阪の上の、下町を見下ろす臺の方に向つて、彼も亦そこの柵にもたれて、せめて溜息でもを、大きな場所に向つて吐かう思つて歩いて行つた。「鐘一つ賣れぬ日はなし江戸の町」か、さすがに東京は廣いといへる、こんな夜更に、そんな町を見下ろす臺の端の、柵に寄りかゝつてゐる閑人が、彼方に一人、此方に一人と、十人近く立つてゐた。阿珂丸はその柵の一二間手前に來た時、目の前に二人の男女が、向う向きに町の方を見下ろしながら、戀愛をさゝやいてゐるらしい姿に、はつとして立止まつた。それの女の方が、現に今の今まで、それが目の前にゐなくても、彼の頭の中一ぱいに姿を現はして、彼の思を惱ましてゐた光子その人にそつくりであつたから。阿珂丸は激しく身體の顫へるのを覺えながら、そつと二三歩後退りして、夜の大空を背景にした女の影像を透かして見た。それから又二三歩左に寄つて、又思はず二三歩前の方に進んで、終には大膽に一間程離れたところの柵の傍まで行つて、そこに寄り掛つてゐる一人の男を楯にして、その女を調べて見た。が到頭疑ひの餘地さへ殘されなかつた。何故といつて、彼等の會話をさへ、彼は聞きとることが出來たから。

「工藤さんだつてをかしいのよ、時々變なことをいふのよ、」と女がいつた。

「をかしくつたつて、君さへしつかりしてればいゝぢやないか？」斯ういふ男の聲も確に阿珂丸には聞覺えのあるものだつた。

「それや、わたし何とも思つてやしませんわ。わたし、そんなに浮氣者に見えて？」

「また本當にさうに違ひなささうぢやないか。工藤の方は安心してゐるが、赤木の方はどうも少し安心出來ないところがあるね。」

「まあ、いやだ、あんな人！」と光子はいつた。「だけど、あの人は確に頭はいゝ人ね、何でもよく知つてるわ。あんな人がえらくなる人かも知れないわ。」

「どうだか。僕も昔はあの男に一ぱい喰はされてゐた方だが、君も今かゝつてゐる最中と見えるね。なアに、あゝいふ男は一生あんな風だよ。一生惜しい惜しい、何か出來る男だと思はれながら、一生何にもしないで死んでしまふ男といふものはあるよ。そんな男はつまり結局何にも出來ない男なんだよ。どうも、やつぱり賞めるところを見ると、少し臭いね。」

「大丈夫よ、たゞの友達よ。あんたがいけないといふなら、いつだつて友達も止めてもいゝわ。だけど、工藤さんの方がわたし恐いの。それでなくても、あんたとのことを幾分か勘づいてゐると見えて、此頃あの人少し變よ。」

「なアに、そんな事は心配しなくてもいゝ。どうせ今度の芝居が出來たつて、役割を定めるのには僕が主になつてやるんだから、いゝ役を振つてやるよ。」

「さう、本當？ わたし、さうしてちやんといゝ女優になつたら、家からお金が幾らでももらへることがあるの。そしたら、あんたを養つてあげるわ。」

おゝ、何といふ機敏な男女たちだらう！ そして、その男といふのは、反子牛四郎の外の者ではなかつた。彼等はいつの間にそんなに親密になり、いつの間にこんな會話をするやうになつたのだらう。おゝ、それから思ふと、哀れなる田川大次郎は、汽車に乘つて走る者を、馬車で追駈けてゐるやうなものに違ひない。

赤木阿珂丸は熱病に罹つたやうにがた／＼震へながら、そして彼の方が人目を憚る泥棒でもあるかの樣に、そつと柵の傍を離れた。彼はそれから蓬萊館までの二町足らずの道を、熱にでもおかされてゐるやうに、次のやうな無數の獨言をい

ひながら歩いた。――おゝ、たゞの友達か、たゞの。……そしておゝ、工藤久太郎、お前もか。――ジュリアス・シイザアの白ぢやないが、カシアス、お前もか。（こゝのところを、彼は思はず市川左團次張りの聲色で叫んだ。）――俺はもう彼等が芝居を始めたところが、這入つてやるものか。俺は恥を知つてゐる男だぞ！　俺はもう役者は止めだ。といつて……畫も厭だ。やつぱり文學かな。文學で。勝手な熱を吹くのが一番だ。そして押入の中で。さうだ、あそこが一番太平だ。ところで、あの女に家があるつて……？――女優になつたらその家から幾らかお金がもらへるつて。何だか、分るもんか。狐め！　それにしても田川大次郎、おゝ、彼女の幸福の爲に、か。彼女は彼女の幸福を汽車か飛行機に乘つて追廻してゐるんだよ、そして彼女は田川のやうにどんな事だつて責任なんて野暮なことはいはないぞ。それを田川は彼女の幸福の爲に、か。そして馬車で走つてゐるのだ。ガタ馬車で。馬鹿、馬鹿、工藤よ、田川よ、そして赤木阿珂丸よ！……――

―（以下次號）―



少年

佐藤春夫

「ねえあしたの日曜には」と房子が言つた「雲雀が丘へ行きませうよ。ねえ、行男さん」

「うん。行かう――何處へでも行かう。雲雀が丘つて何處？」行男が尋ねた。

「坊主山のことよ！」

「坊主山のこと！　なんだ！なぜ、雲雀が丘などといふの？」

「……等さんの眞似よ」

「ふん！」

「――等さん。あなたも行きませうね」

「僕？」等の答である「僕はいやだ！」

「どうしてさ。」

「でも。――僕はあしたはひとりで遊ぶことがあるんだ！」
「そんなことを言はずに行らつしやよ。――みんなで遊ぶ方が面白いことよ」
等はもう答へないで何か本を讀んでゐるやうだつた。

芳子は十六である。
行男は十七である。
等は十五である。
芳子は、明日の散歩をまづ行男に誘つた。それが第一に等には氣に入らなかつた。
「ふん」と言つた行男の一語が等の自尊心を傷つけた。
ふと思ひ出されたやうに序に誘はれた等は、きつぱりと斷つてしまつて、胸がすつとした。房子がきげんをとる時に、本を見てゐて答へなかつたのはなほへんに愉快だつた。だが、等は本など讀んでゐるのではない。――房子に返事しなかつたすぐあとから、等は直ぐに、明日の散歩に一緒に行けない自分を悲しんでゐる。でも、今更になつて『ぢや行かう』とさつぱり言へない等であつた。
明日は雨がふればいゝ。ざんざ降りにふればいゝ。
芳子と行男と、それに芳子の姉さんと三人は、海の事や、舟の事や、それから行男は舟乗りから聞いたといふ話をしてゐる　房子は、等が仲間へ這入らないことの心持がうすく解らないじやない。芳子は等より行男が好きなのぢやない。それだのに、つい、何の氣もなしにあの時は等をちよつと後廻しにしてゐたのであつた。――かと言つて、芳子は行男がきらいぢやなし。――拗ねてゐる時の等よりは快活な行男の方が芳子には好きだ、だが等はさびしいだらうと思つて、芳子

は時々、等の方を見る。等は芳子の大きな瞳が自分にちらちらとそそがれることを氣がつく。だが、そんな事がなんだ。」

明日雨になれ……明日雨になれ……

いつもなら十一時が過ぎて、うちから使が來なけや歸らない等である。それだのに、しかも土曜日に、等は十時にもならないうちに、ひとりで房子のうちを出てしまつた。等はしばらく、芳子の家の門の前に佇んでゐた。——皆の笑ひ聲がそこまで洩れて來る。

空を見ると、雨どころか、星が無數にキラ〳〵とかがやいてゐる。

等は用もない町をぐるぐると三十分ほど歩いた。もう一度、芳子の家の前へ來た。笑ひ聲がまだ聞こえて來るやうな氣がした。——尤も、氣がするだけで、はつきりとはわからない。

等はその人どほりのない町の上に落ちてゐた手ごろの石を一つ拾つて、力まかせにそいつを芳子の家の上に旋つてゐる星を目がけて投げつけた。石は舞ひ上つて暗のなかへ消えて行つた。——いづれは芳子の家の屋根を高く越えて、向うの土堤のうしろにあるお濠の中へでも、ぢやぶん！と落ちたのであらう。

等は、お濠の暗いさびしい土堤の方へまはつて行つた。石はやつぱり水のなかへ落ちたと見えて、暗い水の面はゆらゆらと揺れてゐた。それを見ながら少年は、そのさびしい草の徑を自分の家の裏門の方へ歩いて行つた。

蛙がやかましく鳴き立ててゐた。

いつもの日曜なら朝から芳子の家へ出かけるところなのだが、等は今日は裏門のところで水彩畫を描くことにした。濠の水があつて、小さな竹藪があつて、遲咲きの八重櫻が一本ある。草の萠え出た土堤の上の小徑、そこを辿つて行けば芳子の家へ行ける――昨夜、等の歩いた道である。畫面には水を澤山とり入れて、小徑を少しばかり、それから竹藪と櫻との向ふに芳子の家の屋根が見える――君が家のいとあはれなる屋根の草そのくさよりもあはれなる戀。等は口ずさんでみて、さういふ歌を自分もよめるといゝと思つてゐる。櫻といふ花は美しいと人はいふけれども、その暗いやうな赤いやうな白いやうな色は、たゞ美しいだけではなくどちらかといへば陰氣なものだ。それにしてもそのやうな思ふとほりの色が等には描けない。描いてゐるうちに櫻の色も、竹の色も、水も――全體の構圖ももう我慢が出來ないほどつまらなくなつて來た。等はそいつを赤い色でべた〲と塗り消してしまつて、それから八ツ切りの畫學紙を繪筆の軸で突きやぶつた。

やつとのことで午後になつた。

等はひとりで城山へ登つた――これは昨夜眠るときから考へて置いたことであつた。古い城あとのある山は等の家のすぐ横から登れる。そこへ登れば、城下の町の全景も、その町のわきを流れる大きな川も、目をさへぎるものもない太平洋も、それから南の方を見ると、町の人々が坊主山と呼んでゐる小さな丘も勿論見える。そこは春になると町の人々が――ことに子供達が喜んで遊び場にするところである。等はそこのことを歌につくつて、校友會の雜誌へ出したことがある。坊主山では歌にならないから、勝手に名をつけた、初めはその丘の形から瓢が丘と言つてみたが、あまり理屈つぽい命名だつたので、雲雀が丘といふことにしたのだ。まつたく、これならばよくあの丘

の氣持が出てゐるのだ——と等は思つてゐる。芳子たちは今日はそこへ散歩に行つゐてる。昨夜の約束できつとおひるから出かけたに違ひない。

ほんとうにいゝ天氣だ。野原で遊ぶにはお誂へ向きの天氣だ。天は芳子と行男とに惠みを與へてゐる——そんなことを等は城山へ登りながら考へた。

等の登つて行く足もとに、徑の傍に色の褪せた白茶けた菫がところどころに咲いてゐる。

このいゝお天氣にやつぱり、この城山へも散歩に來た人があると見えて、上の方で人聲がしてゐる。

城山の頂きには、眺望のいゝのを利用して、物見の櫓がある。むかしからあるのではない。つひ近ごろ誰かが立てたのだ。ペンキ塗りの櫓で、その横腹には四面とも賣藥やら足袋やらの廣告がある。その櫓の上に、どこから持つて來たのだか三本足のある大きな望遠鏡がある。五錢出すと十分間その望遠鏡をのぞかせる。その櫓の下には、弓のやうに腰の曲つた婆さんがゐて——あの婆さんはあんな體で、よちよちここへ登つてくるのはさぞ大變だらう——その婆さんが、櫓の番をしてゐる。

「お婆さん」と等は、その婆さんに言つた「これだけ出すからね、僕にはゆつくり見せておくれよ」

「へい、へい」婆さんは手のひらの上へ置かれた二十錢銀貨と等の顏とを見くらべてから、その櫓の階段の上り口にある古い上草履をそろへた。

望遠鏡は、はじめは海の方へ向けられてあつた。等の前にそれを覗いた人が海を見たのであらう。さつき見たのだか、昨日だか、それとも一週間も前だか知らない。――ともかくもそこらは塵だらけだつた。人の足あともなかつたから、めつたにこんなところへ登る人は無いのだらう。で等は飛白の着物の袖口でそのレンズを拭いた。曇つてゐてはよく見えないと思つたので。それからレンズが向いてゐるままの方向でちよつと覗いてゐた。海と空とのほかにはその中には何もなかつた。ただ水が手にとるやうに近く動いてゐた。それはしばらく見てゐたら船暈を感じさせるだらうと思へるやうな氣持だつた。――このペンキのにほひのするこんな高いところで、こんなに活動的な海面を見ることは。――それに等の見たいのはそんな水などの景色ではなかつた。

等は東の方に向けられてあつたそのレンズの口を四分の一だけくるくるとまわした――南の方へ。その方向の方に、あの雲雀が丘がある。

――あまり上を向きすぎてゐて丘の向ふの杉山の杉のてつぺんと横雲とだけしか見えない。

――あまり下向いてしまつた。田の畔道と蓮華草の畑としか見えない。牛がつないである。牛が啼いてゐる。――そのなき聲も何だかここまでひびいて來るやうな氣がする。――これは望遠鏡のせいではない。あまりあたりがのどかだからである。

――もう少しレンズを上向きにした。うまく丘がまるいレンズの世界の中心になつた。何倍に見えるのだか知らない。そこにうごめいてゐる人間が手にとるやうにはつきりと見える。十五人やそこらの人がゐる。

ゐる！

ゐる！　十五人もゐるやうな小供たちとは少しはなれて、五六人集つてゐるところに、――その五六人といふのは、芳子と、行男と、芳子の姉さんと、芳子の姉さんの子供がふたりだ。みんな草の上に座つてゐる。行男と子供達とは臥ころ

んでゐる。——いや、子供たちは立ち上つた。ふたりの男の子はおつ駈けまはし合つてゐる。行男も起きて來た。芳子も立つた。——鬼ごつこだ！　鬼ごつこを初めたのだ。

芳子と行男とふたりだけではなく、そんなに大勢づれであつたのは、等にとつて好かつた。が、この鬼ごつこの遊びは行男が芳子を追つかける！　芳子が行男を追つかける！　ふたりがぐる〳〵とまはる。子供たちは時々思ひ出されて鬼にしてもらふ。——姉さんはさつきから足を投げ出して坐つたままでそれを見てゐる。

行男が追つかける。芳子がにげる。

芳子がつかまつて、今度は行男が逃げる。

丘の頂の盆地だけでは狹くなつて行男は丘の腹を思ひきつた勢で走り下りる。芳子はそれは到底つかまへられさうにもない、やつぱり丘腹を走り下りる。芳子の淡紅色の巾廣なリボンのふわ〳〵とゆれる。と、芳子の頭から、ギラリと光つて落ちたものがある。芳子は氣づかずに走つてゐる。

芳子の頭から落ちたものを誰も氣がつかない。きつとあれは芳子の櫛に違ひない！　月形をした白いセルロイドの束髮の櫛！

さうして、それが落ちたことを、芳子自身もほかの誰も氣がつかない——皆は、もうくたびれて、またもとの丘の盆地へ來て、車座になつてゐる。

——等の頭には、ふと一つの思ひつきが浮んだ。その思ひつきが等をひどく滿足させた。——等は、それを思ひつくといきなり、望遠鏡から目を放した。——が、氣がついてもう一ぺん、そこへ目を當てた。それから櫛の落ちてゐるあたりの見當を、ちやんと見定めた。——丘の芝草が少しばかり禿げてゐるところの直ぐそばにそれはある。

等は大急ぎで階段を下りた。

婆さんが何か言ひかけたが、等は聞かうとはしなかつた。
等は山を急いで下りた…………

それから三十分も經たないうちだつた。
等は丘の上の仲間が車座になつてゐるうしろへ、不意に現れた。
等はそつと芳子の頭を見た。――櫛はなかつた。
「あら！」芳子は等がそこに來たことを見ると聲を上げた。喜んだのだ。特別に大きなくつきりした目を瞬いて等を見上げながら、その目で笑つて「今時分！　なぜもつと早くいらつしやらないの！　ねえ、そら――私の言つたとほりでせう」芳子は姉の方をふりかへつて言つた「等さんはきつと來るといつて、私さつきからさう言つてゐたところよ。賭をしたの。でも、わたしもう少しで負けるところだつたわ。もう十分もすれや、私たち、歸つてしまつてゐたわよ！」
はしやいでひとりでしやべる芳子に、等は何も言はなかつた。ただいかにもうれしさうに芳子を見て笑つた。――それから外の人間を殷目にかけるやうに一瞥した。
等は何も言はなかつた。ただ、さつき城山の上で見きはめて置いたあの櫛のありかに目をやつた。――たしかに、そこに白いものが、櫛の一部分がこゝからでも見える。等は默つてつかつかとその方へ歩き出した。それから言つた――
「芳ちやん。ちよつとここまでおいでなさい。――用があるんだから」
「どへこ？」
「僕の來るところへ！」

等のひどく眞面目な調子が芳子にも他の人々にも妙であつたらしい。が、芳子は立つて歩き出した。

等は、芳子が彼について來て、彼が落ちてる櫛を指ざしたら、どんな顔をして、來るといきなりそんなものを見つけ出した等に就て、どんなに愕ろき不思議がるだらう？　それから、本當にそれを發見した筋道を話したら、芳子は何と思ふだらう！　と思ふと等は、どうしてだかそれからうれしくて仕方がなかつた。

等はそこでほがらかに口笛を吹き始めた。

女性改造定價表

册數	壹册	六册	十二册
定價	五十錢	參圓	六圓
郵稅	壹錢五厘	郵稅共	郵稅共

註文の注意

◇増大號其他定價變更に依る前金拂込み不足は不足金の拂込みを待つて發送す

◇註文は凡て前金とす

◇前金切れの際は發送を停止す

◇外國發送の註文は壹部郵稅實費を申受く（但し支那を除く）

◇見本は發送せす

◇郵便切手代用は壹割增のこと

◇拂込みは振替によらるるが最も便利なり

本誌廣告料 一頁 一等百圓 二等七拾圓

⊙本社廣告取次所 博報堂 弘盛舍 日本電報通信社

大正十三年四月十三日印刷納本
大正十三年五月一日發行

（五月號特價七十錢）

編輯兼發行印刷者 東京市芝區愛宕下町一ノ一 平田貫一郎

印刷所 東京市牛込區加賀町一ノ一二 株式會社秀英舍

發行所 東京市芝區愛宕下町一ノ一 改造社
電話高輪四九九三
振替東京八四〇二

倉田百三著

超克

第四十版

此の書は、ソクラテス的勇氣、卽ち合理的實行意志を以て、自分の內なる「賤民」を征服せんとする思索的努力を跡づけたものである。「轉身」の序文に約束した、自己超克の成績を幾分擧げ得たかと思ふ。自分は、惡の魅力から脫し切る爲に、善と福との嚴密なる一致の觀念に到達した。又善を盡く、且つ其の度に從つて生かさんと努力して、基督敎主義と、希臘主義との調和の手がかりがついたやうな氣がする女性美に就いても其の美を盡く、且つ其の度に從つて生かさん事を努めた。此の書は、自分の此れ迄の論文集の中浮いた點の最も拗いものとして、自分を顧みて下さる人々に、讀んでいたゞくのに氣持がいい。（著　者）

定價貳圓貳拾錢

送料十九錢

四六判上製

東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

大正十三年五月一日發行（毎月一日一回）
大正十一年九月十三日第三種郵便物認可
大正十三年四月十三日印刷納本
五月號
定價七拾錢（送料二錢）



復刻版 女性改造〔戦前編〕第3回配本（第7巻～第9巻・別冊1）

2008年6月25日 発行

揃定価（本体60,000円＋税）

発行者 船橋 治
発行所 不二出版
東京都文京区向丘1-2-12
☎03（3812）4433
印刷所 三進社
製本所 青木製本

乱丁・落丁はお取り替えいたします。

ISBN978-4-8350-6079-8（全4冊 分売不可 セットコード ISBN978-4-8350-6076-7）